飯山市埋蔵文化財調査報告書　第19集

小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡

1989

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告書　第19集

小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡

1989

飯山市教育委員会

日焼遺跡　先土器時代の石器 1（黒曜石）

日焼遺跡　先土器時代の石器 2（安山岩）（安山岩・頁岩）

大倉崎館跡　瓦質火炉

大倉崎館跡　陶磁器類

序

飯山市教育委員会
教育長　浦　野　昌　夫

飯山市は長野県の北端に位置し、奥信濃の産業・経済の中心地であります。古くは、上杉謙信方に属し、その後飯山藩の城下町として発展してきました。また、この地域は原始～古代・中世にいたる埋蔵文化財の宝庫でもあります。

今回の一般国道117号線小沼湯滝バイパス建設に伴う調査は、飯山市で最も遺跡群の密集する地域のひとつであります。酷暑続く7月より雪の降り積もる11月までの長きにわたる調査によって、1万数千年前の先土器時代から5百年前の中世に至るまでの貴重な遺構・遺物が発見されました。

飯山市教育委員会は、この貴重な文化財を大切にし、永く後世に残していきたいと考えています。

この緊急発掘調査に協力してくださった飯山建設事務所及び地元関係者や多くの方々の御厚意に対し心から御礼申し上げます。

この報告書が郷土の歴史解明と明日の生活の糧として活用されることを念願するものであります。

平成元年3月1日

例　　言

1　本書は長野県飯山市に所在する日焼遺跡（大字瑞穂豊字南原）、南原遺跡（字南原）、屋株遺跡（大字瑞穂字北原）、大倉崎館跡（大字常盤字外和柳）の発掘調査報告書である。

2　調査は、一般国道117号線の小沼湯滝バイパスの建設にともない、飯山市教育委員会が飯山建設事務所の依頼により実施したものである。

3　発掘調査は飯山市教育委員会が主体となり、昭和63年度の単年度事業として実施したものである。調査体制は、第Ⅰ章に記したとおりである。

4　本書の作成は、時間の関係上各遺跡毎に分担して行ったもので、調査員の間で充分な討議に基づいていない。したがって、全体を通して一貫した記述になっていない面もあるが御容赦頂きたい。

なお、各遺跡整理担当者は第Ⅰ章に掲げた。

5　日焼遺跡のテフラ分析については、群馬大学講師早津賢二氏・日本考古学協会員小島正巳氏に依頼し、執筆をいただいた。

6　日焼遺跡出土黒曜石の分析については、立教大学教授鈴木正男氏に依頼し、執筆をいただいた。

7　発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から貴重な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。
（敬称略　五十音順）

太田文雄　大原正義　金井喜久一郎　河内八郎　中島英子　中島庄一　広瀬昭弘　松沢芳宏　水野和雄　宮下健司

小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡

目　　次

巻頭図版 (1)(2)(3)(4)

序

例　言

第Ⅰ章　序　説 …… 望月 … 1

1　調査に至る経過 …… 3

2　調査と整理 …… 4

A　発掘作業 …… 4

B　整理作業と報告書の作成 …… 6

第Ⅱ章　遺跡群の位置と環境 …… 7

1　遺跡群の位置と地理的環境 …… 9

A　遺跡群の位置 …… 高橋 … 9

B　遺跡群の範囲と現況 …… 11

1）日焼遺跡 …… 望月 … 11

2）南原遺跡 …… 高沢 … 15

3）屋株遺跡 …… 15

2　周辺の考古学的環境 …… 15

A　飯山地方の先土器時代 …… 15

1）研 究 史 …… 高橋 … 15

2）遺跡概略 …… 望月 … 17

B　周辺の遺跡 …… 高橋 … 21

1）先土器時代 …… 21

2）縄文時代 …… 21

3）弥生時代 …… 23

4）古墳時代 …… 23

5）奈良・平安時代 …… 24

3　周辺の歴史的環境 …… 高沢 … 24

第Ⅲ章　日焼遺跡の調査 …… 29

1　調査の概要と経過 …… 31

A　調査方法 …… 常盤井 … 31

1）調査方法 …… 31

2）調査区の設定 …… 31

B　調査経過 …… 高沢 … 31

2　遺　跡 …… 33

A　層位と文化層 …… 常盤井 … 33

1）層　序 …… 33

2）文 化 層 …… 35
B 遺跡の概要 …… 望月 … 35
C 先土器時代遺物の出土状態 …… 望月 … 35
1）群の検出 …… 35
2）第 1 群 …… 39
3）第 2 群 …… 39
4）第 3 群 …… 43
5）第 4 群 …… 43
6）第 5 群 …… 43
7）第 6 群 …… 43
3 出土遺物 …… 望月 … 52
A 出土遺物の概要 …… 52
1）概 要 …… 52
2）石器形態 …… 52
B 出土遺物 …… 54
1）第1群出土石器 …… 54
2）第2群出土石器 …… 55
3）第3群出土石器 …… 55
4）第4群出土石器 …… 56
5）第5群出土石器 …… 56
6）第6群出土石器 …… 65
4 日焼遺跡の石器群について …… 望月・高橋 … 93
A 各群の石器組成について …… 93
B 日焼石器群の編年的位置について …… 97
C 飯山地方の先土器時代編年予察 …… 97
5 結 語 …… 高橋 … 101
付 編
1 日焼遺跡のテフラ分析 …… 群馬大学講師 早瀬賢二 日本考古学協会員 小島正巳 … 103
2 日焼遺跡の黒曜石の分析 …… 立教大学一般教育部 鈴木正男 立教大学原子力研究所 戸村健児 … 104
第Ⅳ章 南原遺跡の調査 …… 常盤井 … 107
1 遺跡の概要 …… 109
2 調査概要と経過 …… 111
3 遺 構 …… 112
4 遺 物 …… 112
第Ⅴ章 屋株遺跡の調査 …… 113
1 調査の概要と経過 …… 高沢 … 115
A 調査の方法 …… 115
B 屋株調査日誌 …… 116
C 概 要 …… 117

2　遺　構 …… 高沢 … 120
A　縄文時代の遺構 …… 120
B　平安時代の遺構 …… 120
1）竪穴住居 …… 120
2）焼 土 坑 …… 222
3）柱　穴 …… 122
3　遺　物 …… 124
A　先土器時代の遺物 …… 望月 … 124
1）先土器時代石器出土状態 …… 124
2）出土石器 …… 124
B　縄文時代前期の遺物 …… 高沢 … 130
1）縄文土器の出土状況 …… 130
2）出土土器 …… 130
3）石　器 …… 132
C　平安時代の遺物 …… 常盤井 … 132
1）竪穴住居・焼土拡出土遺物 …… 132
2）柱穴出土遺物 …… 133
3）小結・平安時代遺物の年代 …… 133
4　小　結 …… 高橋 … 138
第Ⅵ章　大倉崎館跡の調査 …… 141
1　位置と概要 …… 常盤井 … 143
A　位置と概要 …… 143
B　測量調査の成果 …… 143
2　調査経過と方法 …… 146
A　調査経過 …… 高沢 … 146
B　調査方法 …… 常盤井 … 147
3　遺　跡 …… 148
A　館跡の遺構 …… 常盤井 … 149
1）堀 …… 149
2）土　塁 …… 152
3）建　物 …… 152
4）集　石 …… 152
5）マウンド …… 152
B　館跡の遺物 …… 154
1）輸入磁器 …… 常盤井 … 154
2）国産磁器 …… 155
3）銭　貨 …… 高沢 … 160
4）鉄 製 品 …… 160
5）銅 製 品 …… 160
6）石 製 品 …… 160

C　その他の時代の遺構と遺物 …… 常盤井 … 171
1）先土器・縄文・古墳時代 …… 171
2）平安時代 …… 171
4　考　察 …… 常盤井 … 174
A　大倉崎館跡の性格と年代 …… 174
B　周辺館跡との比較 …… 177
5　結　語 …… 高橋 … 180

挿　図　目　次

第Ⅰ章　序　説 …… 1
図1　国道117号線小沼湯滝バイパス路線図 … 3
図2　作業工程図 …… 6
第Ⅱ章　遺跡群の位置と環境 …… 7
図1　遺跡群の位置 …… 10
図2　遺跡周辺の地形分類図 …… 11
図3　遺跡の範囲 …… 12
図4　日焼遺跡の既出資料(1) …… 13
図5　日焼遺跡の既出資料(2) …… 14
図6　飯山地方の先土器時代遺跡分布図 …… 16
図7　飯山地方の先土器時代遺跡石器実測図(1)・18
図8　飯山地方の先土器時代遺跡石器実測図(2)・19
図9　飯山地方の先土器時代石器(3) …… 20
図10　周辺遺跡分布図 …… 22
第Ⅲ章　日焼遺跡の調査 …… 29
図1　グリット設定図 …… 31
図2　周辺地形図 …… 32
図3　層序模式図 …… 33
図4　土層実測図 …… 34
図5　先土器時代遺物分布概念図 …… 36
図6　遺物分布図 …… 37
図7　第1群出土遺物分布図 …… 40
図8　第2群出土遺物分布図 …… 41
図9　第3群出土遺物分布図 …… 42
図10　第5群出土礫群分布図 …… 44
図11　第4群出土遺物分布図 …… 45
図12　第5群出土遺物分布図 …… 47
図13　第4群出土礫群分布図 …… 49
図14　第6群出土礫群分布図 …… 49
図15　第6群出土遺物分布図 …… 50
図16　石器形態分類図 …… 53
図17　第1群出土石器実測図(1) …… 57
図18　第1群出土石器実測図(2) …… 58
図19　第1群出土石器実測図(3) …… 59
図20　第1群出土石器実測図(4) …… 60
図21　第1群出土石器実測図(5) …… 61
図22　第2群出土石器実測図(1) …… 62
図23　第2群出土石器実測図(2) …… 63
図24　第2群出土石器実測図(3) …… 64
図25　第2群出土石器実測図(4) …… 65
図26　第3群出土石器実測図 …… 66
図27　第4群出土石器実測図(1) …… 67
図28　第4群出土石器実測図(2) …… 68
図29　第4群出土石器実測図(3) …… 69
図30　第4群出土石器実測図(4) …… 70
図31　第4群出土石器実測図(5) …… 71
図32　第4群出土石器実測図(6) …… 72
図33　第4群出土石器実測図(7) …… 73
図34　第4群出土石器実測図(8) …… 74
図35　第5群出土石器実測図(1) …… 75
図36　第5群出土石器実測図(2) …… 76
図37　第5群出土石器実測図(3) …… 77
図38　第5群出土石器実測図(4) …… 78
図39　第5群出土石器実測図(5) …… 79
図40　第5群出土石器実測図(6) …… 80
図41　第5群出土石器実測図(7) …… 81

図42　第６群出土石器実測図(1) …… 82
図43　第６群出土石器実測図(2) …… 83
図44　第６群出土石器実測図(3) …… 84
図45　第６群出土石器実測図(4) …… 85
図46　第６群出土石器実測図(5) …… 86
図47　第６群出土石器実測図(6) …… 87
図48　第６群出土石器実測図(7) …… 88
図49　各群出土石器組成一覧 …… 94
図50　搬入石材検合資料分布図 …… 96
図51　ナイフ形石器組み合わせ想定図 …… 96
図52　飯山地方における先土器時代編年試案 …… 99
付編１ …… 103
図１　資料採集地点の写真 …… 103
図２　資料採集地点の地質柱状図 …… 103
第Ⅳ章　南原遺跡の調査 …… 107
図１　南原遺跡既出石器 …… 109
図２　調査地全体図 …… 110
図３　土　　坑 …… 111
第Ⅴ章　屋株遺跡の調査 …… 113
図１　調査区設定図 …… 115
図２　土層概念図 …… 115
図３　調査地周辺地形図 …… 118
図４　調査地全体図 …… 119
図５　陥　　穴 …… 121
図６　焼土坑ＳＫ02 …… 122
図７　柱　　穴 …… 122
図８　竪穴住居ＳＩ01、焼土坑ＳＫ01 …… 123
図９　先土器時代遺物分布図 …… 125
図10　先土器時代の石器(1) …… 126
図11　先土器時代の石器(2) …… 127
図12　先土器時代の石器(3) …… 128
図13　縄文土器分布図 …… 129
図14　縄文時代の石器 …… 130
図15　縄文土器 …… 131
図16　竪穴住居ＳＬ01・焼土坑ＳＫ01遺物分布図 135
図17　平安時代の遺物(1) …… 136
図18　平安時代の遺物(2) …… 137
第Ⅵ章　大倉崎館跡の調査 …… 141
図１　館跡周辺地形図 …… 144
図２　大倉崎館跡現況測量図 …… 145
図３　調査区設定図 …… 147
図４　土層模式図 …… 148
図５　郭内の堀ＳＤ01土層図 …… 149
図６　調査地全体図 …… 150
図７　郭内堀ＳＤ01埋土段階想像図 …… 151
図８　外堀斜面のＳＤ01断面模式図 …… 151
図９　堀と土塁の関係 …… 152
図10　郭内主要部分図 …… 153
図11　館跡時代の土器(1)　白磁・青磁 …… 156
図12　館跡時代の土器(2) 青磁・陶器・瓦質土器‥ 157
図13　館跡時代の土器(3) 邦本・珠洲系・越前系‥ 159
図14　金属製品分布図 …… 162
図15　鉄　　釘 (1) …… 163
図16　鉄　　釘 (2) …… 164
図17　鉄製品・銅製品 …… 165
図18　石製品(1)　砥・砥石・軽石・茶臼 …… 166
図19　石製品(2)　石臼・石擂鉢 …… 167
図20　土　　坑 …… 172
図21　土製勾玉 …… 173
図22　平安時代の土器　黒色土器・灰釉陶器 ‥ 173
図23　周辺館跡の位置 …… 175
図24　周辺館跡実測図 …… 176

表　目　次

第Ⅲ章　日焼遺跡の調査 …… 29
表１　平面分布図表記一覧表 …… 39
表２　各群別組成一覧表 …… 52
表３　掲載石器計測表(1) …… 89
表４　掲載石器計測表(2) …… 90
表５　掲載石器計測表(3) …… 91
表６　掲載石器計測表(4) …… 92
表７　ナイフ形石器・掻器形態別組成表 …… 93

第Ⅴ章　屋株遺跡の調査 …… 113
表1　平安時代遺物集成表 …… 134
第Ⅵ章　大倉崎館跡の調査 …… 141
表1　銭貨一覧表 …… 168
表2　鉄製品　釘類一覧表 …… 169
表3　鉄製品　その他一覧表 …… 170
表4　銅製品一覧表 …… 170

PLEAT 目 次

PL 1　遺跡群航空写真
PL 2　日焼遺跡遠景
　　層　序
PL 3　調査区近景（東南より）
　　調査風景
PL 4　調査風景（第5群）
　　調査風景（第4群）
PL 5　遺物出土状況（第1群）
　　打製石斧出土状態（第1群）
　　掻器出土状態（第1群）
PL 6　黒曜石原石出土状態（第4群）
　　掻器出土状態（第4群）
　　掻器出土状態（第4群）
PL 7　ナイフ形石器出土状態（第6群）
　　削器出土状態（第6群）
　　敲石出土状態（第6群）
PL 8　調査に携わった人達
　　第6群出土礫器・敲石
PL 9　第1群出土石器 (1)
PL 10　第1群出土石器 (2)
PL 11　第2群出土石器 (1)
PL 12　第2群出土石器 (2)　第3群出土石器　搬入石材接合資料
PL 13　第4群出土石器 (1)
PL 14　第4群出土石器 (2)
PL 15　第4群出土石器 (3)
PL 16　第5群出土石器 (1)
PL 17　第5群出土石器 (2)
PL 18　第6群出土石器 (1)
PL 19　第6群出土石器 (2)
PL 20　掻器使用痕拡大写真
PL 21　石核パンチ痕拡大写真
PL 22　南原遺跡近景
　　表土はぎ終了
PL 23　柱　列
　　既出石器
PL 24　陥穴半掘り
　　溝状土坑
　　出土遺物・縄文時代の石片
PL 25　屋株遺跡遠景（千曲川西岸より）
　　重機による表土はぎ
　　調査開始
PL 26　調査風景
PL 27　竪穴住居址と焼土坑
　　P3（D8区）遺物出土状況
　　焼土坑の遺物出土状況
PL 28　P1土器出土状況
　　焼土坑土器出土状況
　　竪穴住居址の土器出土状況
　　陥穴の半掘り
　　住居址の南東角のカマド跡
　　陥穴　人の胸高の深さがある
PL 29　住居址の完形須恵器出土状況
　　陥穴完掘り
　　住居址完掘り
PL 30　遺構全体図
PL 31　先土器時代の石器
　　縄文時代の石器
　　縄文時代前期の土器
PL 32　平安時代の椀
　　縄文時代前期の土器
　　平安時代の甕（住居址出土）

PL 33	平安時代の甕（焼土坑出土）	PL 45	郭内堀の完掘り状況
	住居址出土の墨書杯「加」	PL 46	郭内の遺構
	（平安時代須恵器）	PL 47	火　炉
	同上墨書杯	PL 48	火　炉
PL 34	平安時代の遺物と住居址出土の石類(1)	PL 49	青　磁 (1)
PL 35	平安時代の遺物と住居址出土の石類(2)	PL 50	青　磁 (2)
PL 36	郭内の近景	PL 51	青磁と白磁
	堀の近景	PL 52	磁器文様
PL 37	開始式	PL 53	陶　器
	調査開始	PL 54	珠洲焼
PL 38	郭内堀の精査	PL 55	越前焼
PL 39	郭内堀の遺物出土状況	PL 56	銭　貨
PL 40	郭内の遺物出土状況	PL 57	鉄製品　釘類
PL 41	堀西側のマウンド	PL 58	その他の鉄製品と銅製品
PL 42	外堀の精査	PL 59	石製品
PL 43	平安時代の遺物と遺構	PL 60	館跡時代以外の遺物 (1)
PL 44	郭内堀と土塁の造営に示唆を与える	PL 61	館跡時代以外の遺物 (2)
	土層	PL 62	越前大湫復元

第I章　序　　説

1　調査に至る経過

一般国道117号線は、長野市を起点とし、千曲川から信濃川沿いに新潟県十日町市を経て小千谷市に至る総延長100.9㎞の国道である。この沿線には、11市町村が位置し、これらの地域の生活活動の大動脈として、また、長野県と新潟県を結ぶ幹線道路として産業・経済に重要な役割を果たしてきている。しかし、千曲川下流域の飯山市から新潟県十日町市にかけては、急峻な断崖や山地が続き、さらにその間にはＪＲ東日本（株）の飯山線と国道117号線が併行あるいは交差しながら続いている。また、この地域は全国的にも豪雪地帯で知られており、積雪期にはようやく片側通行が可能といった状態であった。こうしたことから建設省は、これらあい路を打開し加えて高速交通網へのアクセス道路として改良・整備することとなった。

この計画の一環として行われる小沼湯滝バイパスは、飯山建設事務所が昭和63年度より工事を着工することとなった。

しかし、設計段階より埋蔵文化財包蔵地については考慮されておらず、県の埋蔵文化財保護部局とも協議がなされてこなかった。県が決定したルートは、周知の埋蔵文化財包蔵地の日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡・上野遺跡・大倉崎遺跡の６遺跡を縦断する形で通っていた。

このことを飯山市教育委員会が承知したのは、昭和63年４月26日であった。すぐに県文化課と連絡を取り、翌27日、至急現地協議を行いたい旨の連絡を受けた。５月６日、県文化課・建設事務所・市文化財審議委員高橋桂氏・市教育委員会で現地協議を行う。その結果、上記６遺跡とも範囲内であることが再確認された。

建設計画は、昭和63年度は（仮）常盤大橋の橋台の建設を予定しており、そのため仮設道路を建設するが、そのままバイパスルートになるということであった。すなわち北の柏尾橋より工事を開始して日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡を通過して橋台の建設にかかり、一方南の大関橋より大倉崎遺跡・上野遺跡を通過し、大倉崎館跡内に橋台を建設しようというものであった。

このことにたいして県文化課は、調整

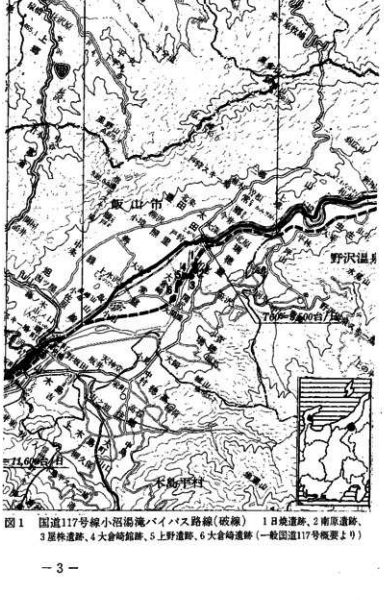


図１　国道117号線小沼湯滝バイパス路線（破線）　１日焼遺跡、２南原遺跡、３屋株遺跡、４大倉崎館跡、５上野遺跡、６大倉崎遺跡（一般国道117号概要より）

の中で飯山市教育委員会に事前の調査をお願いしたい旨の話があった。市教育委員会は、住民の悲願でもあるバイパス建設であることは充分に承知はしているが、単年度で6遺跡の調査は到底不可能であると回答した。結局、今後調整しながら詰めることとなった。

その後の調整のなかで、南の大関橋からの仮設道路は次年度に行い、常盤側の橋台建設のための仮設道路は堤防より敷設することとなった。このことにより、大倉崎遺跡・上野遺跡の調査は次年度に繰り越されることが出来た。

しかし、年度途中であり準備を一切行ってないこと、他にも大規模な調査が持ち上がっていること、調査専従者が不足していること等、市教育委員会が調査を受託する状況にはなかった。

5月末になり、住民要望の強いバイパス建設であるので是非事前調査を受託するようにと市長部局からの要望もあり、教育委員会としても住民感情を考慮して受託すべく準備を開始した。教育委員会は、このほかにも計画されている小泉遺跡の埋蔵文化財調査もあり、田村況城、高沢秀徳、常盤井智行の三氏に依頼し、田村況城氏を小泉遺跡の調査主任として、常盤井智行氏を国道117号線関係遺跡の調査主任に、高沢秀徳氏を同調査員にそれぞれ委嘱した。

6月10日付で建設事務所より埋蔵文化財発掘通知が提出される。

7月8日付で飯山建設事務所長より市教育委員会教育長あて発掘調査委託依頼があり、同日付で契約した。

なお、最終的な協議結果は以下のとおりである。

1　調査対象遺跡は、日焼遺跡、南原遺跡、屋株遺跡、大倉崎館跡の4遺跡とし、調査面積を4000m²以上とする。

2　大倉崎遺跡、上野遺跡は次年度の保護対象遺跡として改めて協議する。

3　橋台工事は11月中旬より開始となるので、現場における調査は、それまでに終了する。

4　調査は北側の日焼遺跡より順次行う。

2　調査と整理

A　発掘作業

日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡の発掘調査は、11月中旬には全て完了しなければならないために、きわめてハードなスケジュールとなった。6月末の市議会において、発掘調査に伴う補正予算が可決されると同時に発掘準備を開始した。各遺跡の調査・整理作業の実施状況は図2の通りである。

調査主体は飯山市教育委員会（教育長　浦野昌夫）で、別に組織した調査会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

国道117号線関係遺跡調査会名簿（昭和63年度）

顧　問	小野沢　静　夫	（飯山市長）
会　長	浦　野　昌　夫	（飯山市教育長）
副会長	佐　藤　　清	（飯山市教育次長）
委　員	高　橋　　桂	（飯山市文化財審議委員）
	阿　部　武　義	（飯山市議会議員）
	藤　沢　賢一郎	（飯山市議会議員）

委　員	川久保　広　良	（飯山市議会議員）
	丸　山　岩　夫	（柏尾区長）
	吉　越　吉　三	（関沢区長）
	小　出　幸一郎	（上野区長）
	鈴　木　　一	（大倉崎区長）
	佐　藤　　昭	（市公民館瑞穂分館長）
	岸　田　　正	（市公民館常盤分館長）
	村　田　　巌	（市建設課監理係長）
	西　川　允　久	（市建設課監理係主査）
事務局	清　水　　宏	（市教育委員会次長補佐　兼社会教育係長）10月1日転出
	渡　辺　　博	（市教育委員会社会教育係長）10月1日転入
	望　月　静　雄	（市教育委員会社会教育係）
	森　崎　ツギ子	（市教育委員会臨時職員）

調　査　団

団　長	高　橋　　桂	（飯山南高等学校教諭）
調査主任	常盤井　智　行	（市教育委員会埋蔵文化財調査員）
調査員	高　沢　秀　徳	（市教育委員会埋蔵文化財調査員）
	望　月　静　雄	（市教育委員会社会教育係）

発掘調査参加者

（日焼遺跡・南原遺跡）

○小林元造　丸山長治　小林みさを　望月てる　阿藤光友　小林勇　出沢吉重　出沢重忠　望月俊一　出沢利雄　鈴木清五郎　望月直吉　沼田真蔵　望月祐二　岸田今朝二　増山盛三　小林重治　山崎満枝　坂井昇　山本香　綿田茂実　鷲野吉太郎　鷲野家康　吉越古寿　小林とき

○岸田幸夫　岸田康夫　増山正直　丸山栄一　吉平周三　丸山信行　川久保茂樹　阿藤幹雄　丸山三男　山崎義雄　小林治　山崎幸雄　増山保範　丸山満　（以上柏尾地峰の会）

○新免悟　田沢春樹　川久保世念子　川久保安保　丸山英樹　丸山多津子　増山典子　服部由美子　小林義幸　岸田雅樹　小境啓之　（以上高校生）

○出沢俊明　（教委事務局職員）

（屋株遺跡）

○小林元造　小林みさを　阿藤光友　小林勇　出沢吉重　出沢重忠　出沢利雄　鈴木清五郎　岸田今朝二　望月祐二　増山盛三　鷲野家康　鷲野吉太郎　綿田茂実　小林とき　山崎満枝　坂井昇　小林重治

（大倉崎館跡）

○小林経雄　竹内大五郎　北条辰男　大森信衛　沼田多久治　鷲野吉太郎　梨元智年　小坂ハツエ　鈴木ため　丸山信隆　太田勇　万場昇一　鈴木常男　丸山淳一　佐藤まさの　丸山さだお　鈴木はな江　小林一枝　丸山広士　小坂いさお　小坂三次　鈴木操　梨元スガ　中原博志　万場義秋　万場くに　万場はま　小出まさ子　万場きよの　徳永愛子　中原トヨ　万場とみ子　徳永よ志江　万場恭枝

なお、4遺跡の発掘作業中上記関係者のほか次の方々より御協力をいただいた。厚く御礼申し上げる。（五十音順）

日焼・南原遺跡　　黒岩隆　小林欣一　田沢工務店（田沢良夫社長）　望月邦男　山崎良典

屋株遺跡　　川久保善美　小林一人

大倉崎館跡　　小林稽一郎　鈴木元義　中原英吉　中原信　万場喜一　万場喜三郎　万場義秋

㊟　発掘作業の実際は、他に大規模な発掘調査（小泉遺跡）が併行して行われたため、調査主任常盤井・調査員高沢の二人制で行った。

B　整理作業と報告書の作成

11月中旬までの調査予定は、天候不順や作業員の安定確保に苦慮したにもかかわらず、ほぼ予定通り進捗した。なお、最後の調査地区となった大倉崎館跡については、当該時期における重要な遺構・遺物が検出され、この保存問題について11月下旬より協議を行うことになった。県文化課・飯山建設事務所・市教育委員会・調査団の四者会談が12月にかけて行われた。その結果、ルートの変更は無理であるが、遺構をなるべく破壊しない工法で行うこととし、さらに、破壊される土塁の部分については次年度詳細な調査を行うこととなった。

このこともあり、本格的な整理作業は12月中旬より開始された。３月末までに報告書を刊行するためには２月中にまとめる必要があり、実質２か月の整理期間であった。そのため、整理というよりも報告書作成のための作業となった。南原遺跡を除いた三遺跡についてそれぞれ分担して行うこととした。各遺跡の整理分担は以下のとおりである。

日焼遺跡　○望月静雄　柳孝子　綿田茂実　常盤井智行　山本香

屋株遺跡　○高沢秀徳　常盤井智行　中塚盛子　小林龍子　望月静雄

大倉崎館跡○常盤井智行　高沢秀徳　小林龍子　山本香

遺物復元・注記○田村況城　小林経雄　竹内大五郎　北条辰男　山崎満枝　小林みさを　北山けさえ　綿田茂実

写真撮影　　○田村況城　　（○印担当者）

しかし、実質40日の整理作業では到底無理があり、充分にまとめることができなかった。

本書の執筆分担は目次に記した。なお、編集については第Ⅰ章～Ⅲ章を望月、Ⅳ・Ⅴ章を高沢、Ⅵ章を常盤井が行い、高橋団長が統括した。

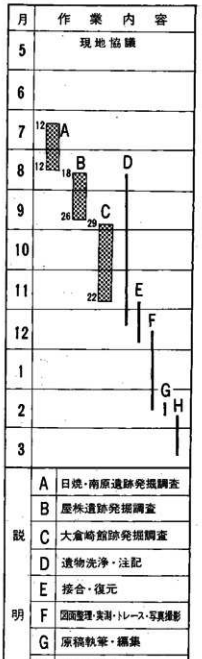


図２　作業工程図

第II章　遺跡群の位置と環境

1　遺跡群の位置と地理的環境

A　遺跡群の位置

日焼遺跡は、長野県飯山市大字瑞穂豊に所在する。小字名では、日焼・南原の二ヶ所にまたがっているが、最初の発見地点が日焼であったため両者を分離することなく、日焼遺跡とした。

日本有数の大河一千曲川が、長野県の最後に残す平が飯山盆地である。飯山盆地は、飯山市蓮にはじまり、北は飯山市瑞穂柏尾、飯山市太田今井に至る南北16㎞、東西６㎞の紡錘形の盆地である。この盆地の北半部には、木島平・常盤平・外様平と呼称される肥沃な沖積地が展開し、北信濃の一大穀倉地帯を形成する。

千曲川は、柏尾をすぎて信越国境に近い山岳地帯に入ると断層線に沿って嵌入蛇行しつつ、Ｖ字形の深い渓谷をつくっている。左岸には比較的小規模、右岸には比較的大規模な段丘を形成し新潟県の十日町・小千谷方面へと流れ去っている。この渓谷を縫うようにして左岸の狭い平地を飯山線が走っている。

遺跡は、この信越国境へと至る渓谷がつくられる直前の右岸の低位段丘面に存在する。遺跡の所在する飯山市瑞穂地区は、毛無山（1649.7ｍ）より数本の尾根が西方へのびている。この尾根と尾根との間に埋積谷が存在し、尾根末端面に集落が存在する。尾根末端面は急傾斜で平地に接している。地質的には、毛無山に連続する山地と柏尾峰・太子林・宮中丘陵へと続く洪積層よりなる丘陵、千曲川の形成した沖積地に三区分される。太子林・宮中丘陵は、すでに触れているように先土器時代の遺跡が南北に並んでいる所である。

本遺跡は、太子林・宮中丘陵より一段低い段丘面にある。対岸の大倉崎段丘面は、かつては太子林・宮中丘陵と地続きであった。それが千曲川の下刻浸食作用により分離されたとされている。

さて、遺跡は、5000㎡以上の広範囲におよんでいる。したがって、私達はＡ～Ｇの７地点に区分している。今回、調査した地点はＧ地点であり、遺跡確認調査では最も散布遺物の稀薄な地点であった。Ｇ地点は遺跡の中では最も高位にあり、ゆるやかに西側に傾斜を示すものの、平坦に近い。北側は、千曲川の沖積地であり、水田地帯となっている。西側は、ゆるやかに傾斜し、千曲川に接する部位で５ｍほどの急崖となっている。更に南西に向って次第に傾斜を増し境の沢の谷地、及び千曲川に接する。表面採集で遺物が殺も多く採集されるのは、この南西の斜面である。この南西斜面の先端には往時、渡船場があり、関田山脈の平丸峠を越えて来た越後人が野沢温泉へ行くためによく利用したという。

屋株遺跡は、飯山市大字瑞穂屋株に所在する。境の沢の谷地をはさみ日焼遺跡の南東に位置する。遺跡は、西側に傾斜する屋株の台地上にある。遺跡の東方には、関沢新田村として知られる屋株部落がある。遺跡の南側は、浅い沢状の地形を呈しており、北側は急崖をもって境の沢の谷地にいたっている。本遺跡は、分布調査の段階では、先土器時代の遺跡として、把握されていたが、今回の調査をとおして、先土器時代ばかりでなく、縄文前期・平安時代中半期にまたがる複合遺跡であることが確認されたのである。

大倉崎館址は、飯山市常盤上野に所在する。日焼遺跡対岸の大倉崎丘陵の北端に位置している。大倉崎の丘陵は、すでに触れているように地質学的には対岸の太子林・宮中丘陵と続いており、千曲川の下刻・浸食作用によって分離した。従って成因は同じであるという。この丘陵南端の瀬付には、往時渡船場があり、千曲川をはさんでの東西交流の重要な拠点であった。また中世には、小菅神社の一の鳥居が、瀬付の西方にあったともいう。瀬付は、当地方の先土器文化究明の端緒をなした所でもある。更に縄文前期文化の大倉崎遺跡もこれに近い所にある。さて、大倉崎丘陵は、南北に約1.4㎞、東西0.3㎞の細長い残丘状を呈

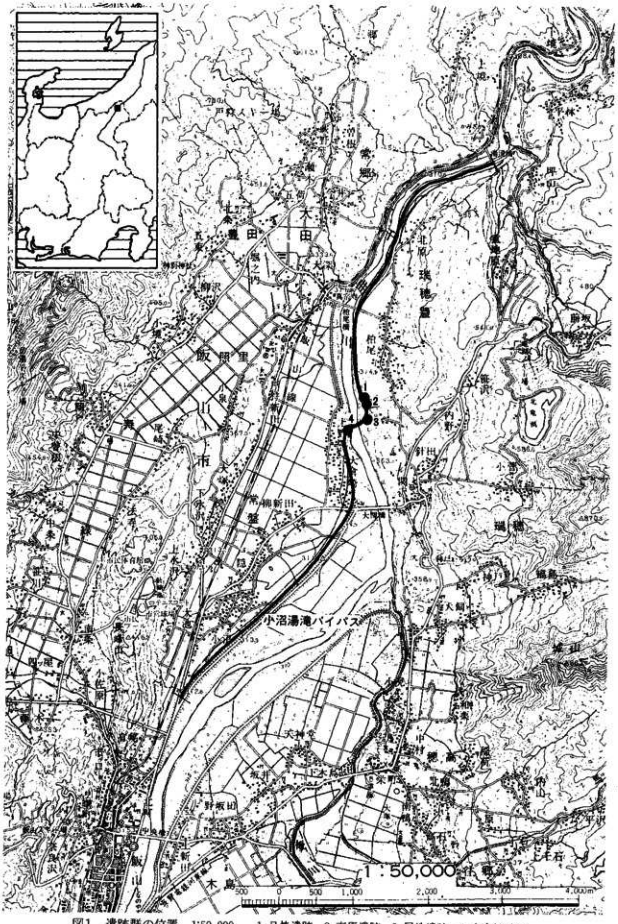


図1　遺跡群の位置　1:50,000　1.日焼遺跡　2.南原遺跡　3.屋株遺跡　4.大倉崎館跡

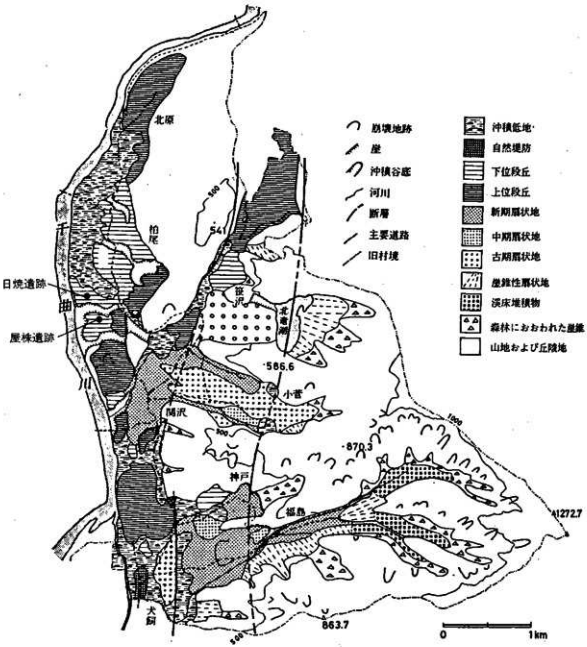


図２　遺跡周辺の地形分類図（小泉1979）

する丘陵である。丘陵東部は、南半部は比較的ゆるやかな傾斜で千曲川にいたっているが、北半部は急崖でもって千曲川に接している。これは、丘陵北半部は千曲川の攻撃斜面にあたっており、浸食作用が甚しく断崖となっている。丘陵西側は、緩傾斜で常盤平の低湿地に接続している。この緩傾斜面に大倉崎・上野部落が存在し、畑地として利用されている。低湿地帯はいうまでもなく、水田地帯となっている。なお蛇足ではあるが、館址の北方は、いうまでもなくかつて渡船場の存在した場所である。

B　遺跡群の範囲と現況

1）　日焼遺跡

日焼遺跡は、昭和46年に確認されたが大部分が畑地で良好に保存されていた。当初、最も密に分布する

箇所は段丘先端部の崖線部で(図３)、この付近の地字名が日焼であり本遺跡名としたのである。今までの採集時には、各畑の地割・地形を考慮してＡ～Ｆ地点とし、今回の調査区は 100 m ほど北に離れた地点であり、Ｇ地点と呼称していた。Ａ～Ｃ地点は、黒色土層が薄いためか今まで 100 点以上の石器が出土している(図４・５)。今回の調査によって出土した石器群とは、使用石材・石器形態が相違し、時期に差があると考えられる。おそらく、既出資料出土地点の方が若干古いと思われる。また、Ｆ地点では拳大の黒曜石石刃石核が出土している。

Ｇ地点は、昭和34年の千曲川洪水による堤防決壊のため、その補修のために土取りを行った場所である。３ｍ程の崖より黒曜石砕片等が採集されていた。なお、昭和55年刊行の新編瑞穂村誌においても本地点について触れられている(高橋1980)。

このＧ地点とＡ地点との間は最も平坦な部分であるが、黒色土が厚く堆積しており今まで採集はされていない。ただし、今回の調査結果を考慮すれば当然遺跡は広がっているものと考えられる。

今後日焼遺跡においてこれらの地点を呼ぶ場合、今回の調査地点をＡ地点（旧Ｇ地点）、Ａ～Ｅ地点をＢ地点、Ｆ地点をＣ地点とする。

註　参考文献は第Ⅲ章に一括掲載

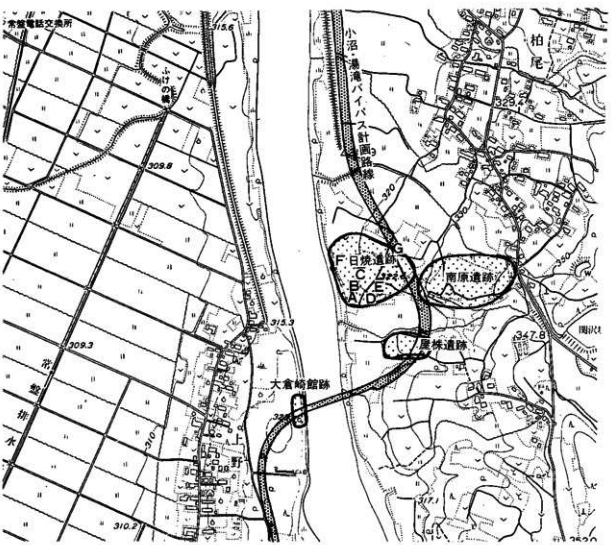


図３　遺跡の範囲　1:10,000

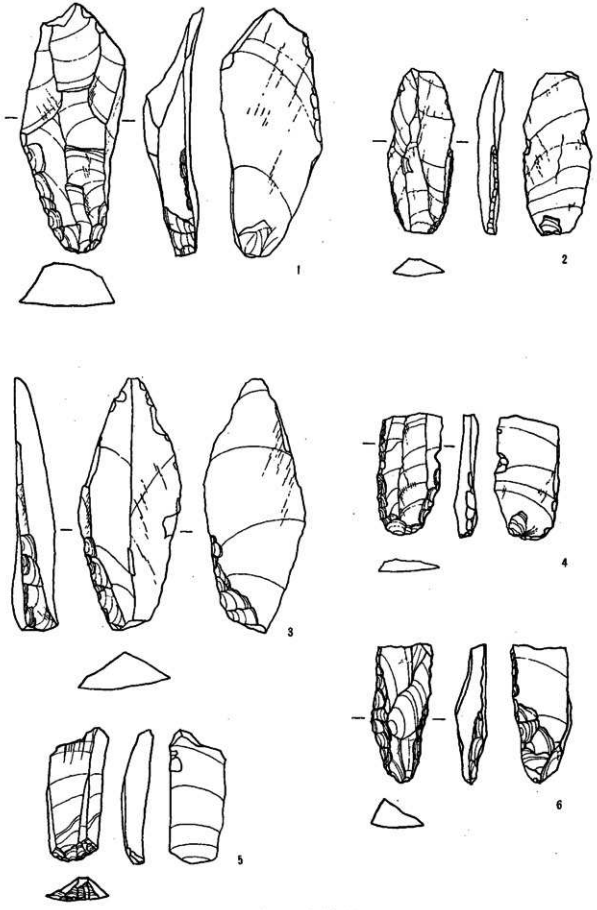


図4　日焼遺跡の既出資料(1)　4：5

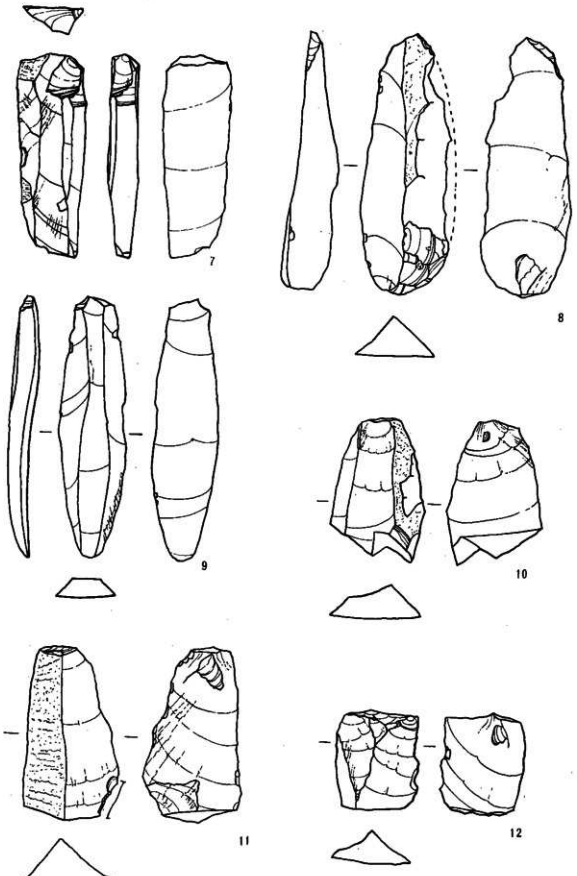


図5　日焼遺跡の既出資料(2)　4：5

2） 南原遺跡

南原遺跡は、柏尾集落南端の真西に当る。「瑞穂豊南原1199他」が所在地で約4500㎡の広さに及ぶ。南原遺跡は、西に傾斜する段丘の中央部に展開しており、その千曲川寄りの段丘先端部分には日焼遺跡が存在する。南原地籍は従来リンゴ畑が多くあった。地元の人たちによると、「リンゴの移植時に、敷石らしきものが認められた」といっていることからも、30～70㎝の深さにはかなりの遺物類があるものと思われる。現在もアスパラなどを主とした畑として耕作されており、比較的良好に保存されているといえよう。

南原遺跡からは縄文の前期・中期・後期に当たるそれぞれの土器・打製石斧・磨製石斧・多頭石斧・凹石・石皿・石簇、それと弥生の後期箱清水式土器・太形蛤刃石斧などがこれまで出土している。今回、発掘調査を実施したのは、遺跡の西端部分に当たる小高い畑から西へ傾斜して水田に続く場所である。調査地の南は斜面をへて、谷地の水田に至るが、斜面と谷底の接点に当たる所には、良質の清水が湧き（今も飲用に使用）、すぐれた住環境をそなえている場所である。

今回の調査地区は、南原遺跡の西南端と考えられる。したがって、遺跡の主体は段丘上面の平坦部にあると考えられ、今後の保護策が望まれるところである。

3） 屋株遺跡

屋株遺跡は、北側にある南原遺跡と谷状地を隔てて、南北に並んでいる。屋株集落の西端で低位の段丘になり、千曲川の方へゆるやかな傾斜を示して沖積地に至る。屋株遺跡の存在する台地は約50ｍ幅の小規模な台地で、北側の開析低地、南側の小支谷にはさまれている。西に約 200 ｍで段丘崖となり水田地帯の沖積面に至る。

遺跡は主としてアスパラなどの畑地だったので、比較的保存状態は良いといえる。道路貫通部分は東よりの場所で、遺跡の中心部は台地の傾斜具合等からこれよりもう少し西に下った地点とみられる。当遺跡からは、これまで先土器時代の剥片と、縄文土器片が確認されているのみである。遺跡の規模自体についても立地する台地が小規模であることから、当市内の遺跡中でも狭い部類に属する。

2　周辺の考古学的環境

A　飯山地方の先土器時代

1） 研 究 史

飯山地方の先土器文化研究の端緒は、昭和29年芹沢長介・麻生優両氏によって故神田五六氏が通称安田神社（正式には木島神社）境内で採集された黒曜石製のマイクロコアを先土器文化の所産として指摘したことである。これと相前後して大倉崎瀬付でナイフブレイド様の石器が発見され、麻生優氏は「千曲川に接する位置にあることは、注意すべきではないか」と指摘している。[注1] 同じ頃、下水内郡豊田村瑞穂（はすぼ）においてもナイフブレイド様の石器が発見された。昭和30年、麻生優・樋口昇一両氏によって、北条幸作氏が採集された温井オリハンザの細石刃・ポイントが紹介された。

このような情勢の中で神田五六氏は、著しく先土器文化に関心をもたれ、鋭意飯山地方の該期文化の究明につとめられた。

しかしながら、当地方における先土器文化の本格的研究は栄村横倉遺跡の登場をまたねばならなかった

のである。昭和32年７月当時学生であった筆者は、夏休みを利用し飯山地方の資料探訪を試みた。その折栄村横倉の山岸庄英氏所蔵資料中に６点の尖頭器が存在することを知り、樋口昇一・桐原健両氏の指導で山岸氏所蔵資料中から更に20点余の尖頭器を検出した。同年10月、神田五六・永峯光一両氏の指導のもとに発掘調査が行われ、同時に同所出土の資料採集に努め、40点にものぼる完形の尖頭器が確認されたのである。横倉遺跡の調査は、飯山地方における先土器遺跡の最初の発掘調査であった。(註２)

横倉遺跡の調査中、地元小学校に勤務されていた半藤達朗氏が先土器文化所産の２点の石器を神田・永峯両氏に提示された。半藤氏によれば千曲川対岸の山中小坂地籍で採集されたとのことであった。そこで半藤氏の案内で小坂遺跡の踏査が行われ、翌昭和33年晩春、神田・永峯両氏によって発掘調査が行われ、小坂型彫器・ナイフ形石器・掻器・削器・尖頭器等の貴重な資料が得られた。(註３) 昭和50年７月道路拡幅工事に伴い緊急発掘調査を行った。(註４) 二度にわたる調査で得られた資料の他に遺跡に近接する大久保部落在住の阿部研氏が、採集された遺物があり望月静雄がその資料の紹介をしている。(註５)

以上のように昭和30年代は、飯山地方の先土器文化の曙の時代であった。昭和40年代に入ると、飯山地方では圃場整備事業が各地で相次いで行われ、貴重な遺跡が無残にも次々と破壊されていった。このような情勢の中で少しでも遺跡の破壊をくい止めるためには、詳細な遺跡分布図を作成することが大事であるとの認識のもとに、飯山北高等学校地歴部・同ＯＢ会が中心となり、飯山市教育委員会の援助を得て分布図作成の活動を開始した。作成にあたっては、知見の遺跡の再確認と未知の遺跡の発見を主要な課題とした。文字通り足で歩き、ききとり、調査確認する作業が開始されたのである。この調査の過程の中で今回調査の対象となった日焼遺跡や太子林・関沢・千苅・大塚・針湖・上野等多数の先土器遺跡が発見され

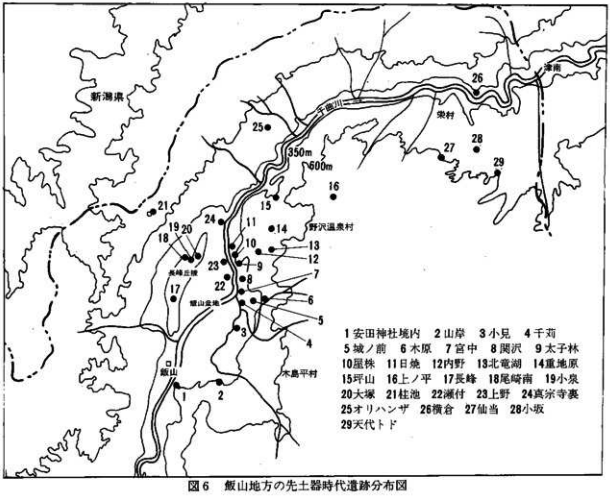


図６　飯山地方の先土器時代遺跡分布図

た（図6）。

日焼遺跡は、当時高校生であった望月静雄が発見した。望月は折をみては同地を踏査し、多量の石器類を採集するとともに遺跡が稀にみる大規模なものであることを確認したのである。広範囲にわたることから便宜的に7地点に遺跡を分けている。

千苅遺跡は、瑞穂地区戸部子在住の畔上直氏によって発見され田中清見・松沢芳宏両氏と筆者によって確認された。尖頭器を主体とする特異な遺跡であり、中島庄一氏によって紹介されている。[註6]

昭和50年代に入ると飯山地方でも開発が一段と顕著になった。そして、開発に伴う道路の敷設や改良工事が目立ってくる。県道飯山・野沢温泉線改良工事（関沢バイパス）が中野建設事務所によって行われることとなった。このバイパス工事予定地内に太子林・関沢両遺跡が存在するため、工事に先立って昭和55年夏両遺跡の緊急発掘調査を行った。太子林では局部磨製石斧・ナイフ形石器・彫器・錐、関沢では尖頭器・削器等内容豊かな石器を得た。[註7] 特に関沢では数少ない尖頭器のユニットを確認し、先土器文化の究明を大きく前進させた。[註8]

中島氏・望月は飯山地方における今までの成果を踏まえて、当地方の先土器文化の時間的序列を①小坂石器群→②関沢石器群→(細石器)→③千苅石器群→④横倉遺跡と想定している。[註9] そして、今回の日焼遺跡の調査によって飯山地方の先土器文化は、その内容を更に豊かにするとともに、さまざまな問題を提起しつつ次第に解明されてゆくであろう。

註1　信濃史料刊行会　信濃史料　第1巻下　1956

2　神田五六・永峯光一　奥信濃横倉遺跡　石器時代5　1958

3　高橋　桂　北信濃小坂遺跡の調査　考古学雑誌48-3　1962

4　栄村教育委員会　栄村小坂遺跡緊急発掘調査概報　1976

5　望月静雄　小坂先土器時代遺跡の新資料　長野県考古学会誌32号　1977

6　中島庄一　北信地域における尖頭器を伴出した石器群について　信濃34-4　1982

7　飯山市教育委員会　太子林・関沢遺跡　1981

8　望月静雄　北信濃関沢遺跡の石器群　信濃34-4　1982

2）　遺跡概略

太子林遺跡（図7・1～7）

昭和55年に発掘調査が行われた。出土遺物は、3か所の遺物集中地点が確認され、ナイフ形石器・掻器・彫器・錐・刃部磨製石斧・石核・ハンマーなど約600点が出土している。ナイフ形石器は黒曜石・頁岩を使用し、基部加工と二側縁加工の二形態が存在する。掻器は刃器状剥片の端部に雑な刃部を作出したエンド・スクレイパーのほかに不定形な剥片の周囲に刃部を作出した例も存在する。石核は、安山岩・頁岩が確認されており打面調整の施された長方体を呈する。これらの石器群について、野川編年（小林・小田1973）の第Ⅱ期に位置づけた（飯山市教育委員会1981）。

小坂遺跡（図7・8～18）

昭和33年に調査が行われている。出土遺物は、ナイフ形石器・掻器・彫器・石刃・尖頭器などが出土している。ナイフ形石器は二側縁加工を施し、裏面基部側にも加工を加えたものと基部側を中心とした部分加工を主体としたものがある。掻器は分厚い大形品が多い。彫器は、小坂型彫器と呼ばれる典型的な角形彫器である。これらの石器群についてナイフ形石器・掻器・彫器などの組み合わせ等により東山系の石器群（中島1982・a・b）と考えられているが、二側縁加工のいわゆる茂呂系のナイフ形石器も出土していることを考慮すれば、両系統の影響を受けた石器群と考えられよう。

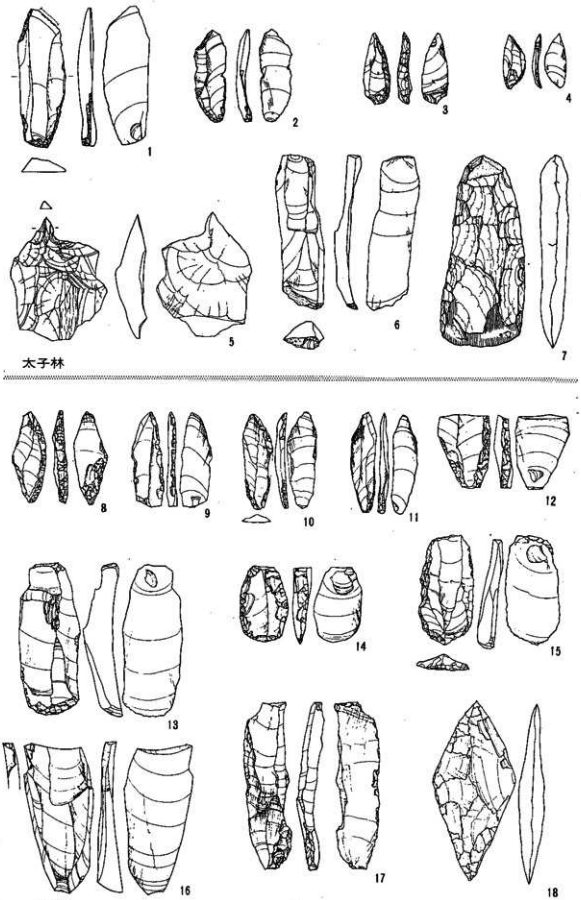


図7　飯山地方の先土器時代石器実測図 (1)　2：5

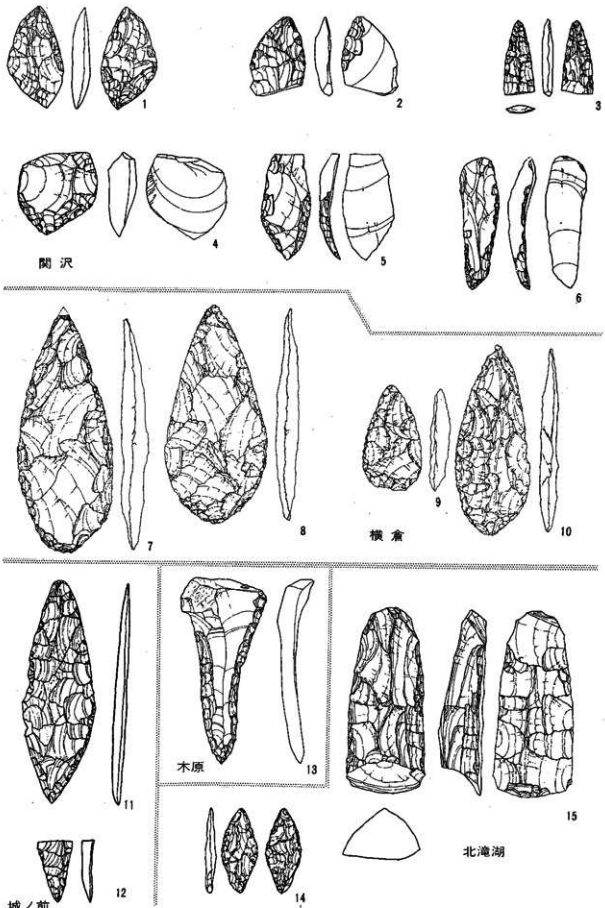


図8　飯山地方の先土器時代石器実測図 (2)　2：5

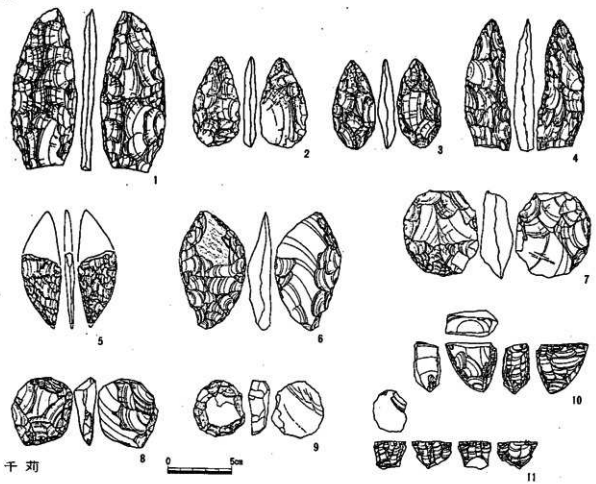


図9　飯山地方の先土器時代石器(3)　1：3

関沢遺跡（図8・1～6）

昭和55年に調査され、遺物集中部1か所を検出している。出土遺物は、尖頭器・掻器・尖頭削器等が出土している。尖頭器は、両面・半両面加工の両者があり、1点であるが柳葉形の尖頭器も出土している。本遺跡石器群を特長づけるのは尖頭状を呈する削器である。報文では、野川Ⅲ期とし、その後の検討のなかで山形県越中山、富山県立美遺跡出土石器群に比定した（望月1982)。

横倉遺跡（図8・7～10）

昭和32年に調査が行われた。5㎡未満の狭小な範囲から40点に達する尖頭器が出土した。尖頭器は、形態・材質・技術的にも極めて斉一性が強く横倉型尖頭器と呼ばれている。年代的には、土器出現寸前か出現期ぎりぎりの段階としてとらえられている（永峯1982)。

千苅遺跡（図9）

すべて採集品で300点以上出土している。遺物は、尖頭器・スクレイパー・細石核で、種々のバリエーションをもった尖頭器が特徴的である。年代的には、関沢石器群→(細石器)→千苅石器群→横倉遺跡とされている(中島1982)。

その他の遺跡

大塚遺跡（図6・20）は、長峰丘陵上に立地し、刃器状剥片が主体的に採集される地点と、細石核が採集される2地点ある。刃器状剥片は、打面調整の施された幅広で大形の剥片が存在する。石材は、安山岩を主体として頁岩も製品で存在する。城ノ前遺跡（図6・6）は、薄手の両面加工の尖頭器が6点採集さ

れている。先土器時代最終末期であろうと思われる。内野遺跡（図６・12）では黒曜石のエンド・スクレイパーが、山岸遺跡（図６・３）でやはり黒曜石の尖頭器・エンド・スクレイパーが採集されている。

なお、北竜湖遺跡（図６・８、図８・14～15）では尖頭器・丸ノミ形石斧が湖岸より採集されている（望月1980）。ただし、縄文草創期の遺物も採集されているため、土器出現以後に位置づけられる可能性も残されている。

以上、まとまっている石器群について概観してきた。図６でも分かるように、飯山地方の先土器時代石器群は千曲川と密接な関係を有していたことは疑いない。このことが生業において当該時期の石器群にどのように表われてくるのか、現段階ではまったく不明である。（参考文献は第Ⅲ章に一括掲載）

B　周辺の遺跡（図10）

この項は、飯山盆地北半の遺跡について記述する。飯山盆地の北半―木島平・常盤平・外様平は、千曲川・広井川両河川によって形成された肥沃な沖積地であり、北信濃の一大穀倉地帯となっている。と同時に世界有数の豪雪地帯でもある。豪雪地帯という悪条件にもかかわらず先土器時代以来、人類の足跡が随所に刻まれている。以下、時代ごとに飯山盆地北半の主要遺跡を平安時代まで追跡してみよう。なお、ここでとりあげる飯山盆地北半とは、旧行政区分に従えば、飯山町北端・木島村・往郷村北半・穂高村・瑞穂村・柳原村・外様村・太田村南半・常盤村である。更に記述の必要上、河東地方（千曲川東側）、河西地方（千曲川西側）という呼称を使用することを予めお断りしておきたい。

1）　先土器時代

河東地方では、瑞穂地区の宮中丘陵・関沢丘陵の洪積台地上に顕著に認められる。研究史の項で触れた千苅[注1]・関沢[注2]・太子林[注3]の三遺跡がそれであり、それぞれの遺跡の特徴と先土器文化の問題点を私達に提起している。この他に尖頭器を出土した城の前や観光地として知られている北竜湖周辺もこの時代の遺跡が存在する。他に内野・宮中・木原でも少量ではあるが石器が出土している。今回調査した日焼遺跡を含めてまさに瑞穂地区は千曲川下流域における先土器文化の宝庫といえるであろう。

河西地方では、長峰丘陵上の大塚・小泉・針湖、千曲川河畔の大倉崎瀬付・上野等があげられる。ただ規模的には河東地方よりも小さい。大倉崎瀬付[注4]は飯山地方で安田神社境内とともにいち早く発見された遺跡であり、千曲川に面している点から注目された遺跡である。長峰丘陵上は、未調査の部分が多く、調査の進行とともに該期遺跡発見の可能性が高い。いずれにしても飯山地方の先土器文化の遺跡は、現状でみる限り千曲川流域に集中しており、県内の他地域と著しく相異し、新潟県魚沼地方の立地と酷似する。この千曲川流域に集中して存在することは、当時の生業を考える上に重要な指針をあたえているといえよう。

2）　縄文時代

①草創期　飯山地方で草創期の遺跡として最初に注目されたのは、柳原小佐原[註5](5)である。昭和44年永峯光一氏によって調査された。当地方の該期の土器は表裏縄文土器である。小佐原遺跡では比較的まとまって出土しており、草創期末期の一指標となっている。同様な遺跡は、河東地方では木島平村三枚原に認められる。三枚原遺跡[註6](4)は、木島平村誌の資料採集のため昭和51年春に私達が調査した。該期のややまとまったものは、叙上の二遺跡だけであるが、断片的には針湖(9)、北竜湖(9)、木島平村大塚からも出土している。

②早期　飯山地方の早期を代表するのは、押型文土器である。北竜湖・三枚原で若干出土しているのみである。条痕文系の土器は、三枚原・北竜湖・笹沢道下(8)で出土しているのみである。河西地方では、ほ

●縄文時代　○弥生時代　△古墳時代　▲古墳　□奈良・平安時代

1.北町　2.有尾　3.有尾古墳群　4.須多ヶ峯　5.小佐原　6.鍛冶田　7.北原　8.別府原　9.針尾池　10.西長峰　11.法寺
12.下林　13.東長峰　14.小泉　15.大塚古墳群　16.山崎　17.柳町　18.茶臼山古墳群　19.照皿古墳群　20.照里
21.照丘　22.光明寺前　23.釜洲　24.頭戸道下　25.南木ノ下　26.北頭戸　27.小城押出　28.堀ノ内馬場　29.岡鉴
30.中山　31.割山　32.真宗寺裏　33.上野　34.大倉崎Ⅱ　35.大倉崎　36.上ノ原　37.道添　38.道下　39.北竜湖
40.向峰古墳群　41.太子林　42.宮中　43.飯綱権古墳　44.神戸古墳群　45.尾崎　46.和栗古墳　47.稲荷境　48.三枚原

図10　周辺遺跡分布図　1:50,000

とんど認められない。

③縄文前期

有尾遺跡(2)(註7)がまずあげられる。昭和27年秋、飯山町誌編纂事業の一環として神田五六氏によって調査された。円形住居址一軒と有尾式土器が出土した。千曲川と皿川に面した段丘面に立地する。有尾遺跡とならんで重要な遺跡は大倉崎である。昭和48年秋調査し、上原式土器と住居址二軒を検出した。(註8)大倉崎の南東

方 100 m 内外に瀬付がある。瀬付は古くから縄文前期の遺跡として知られ、千曲川に臨む所に立地する。須多峯(4)・北竜湖・三枚原・宮中(42)も該期の遺跡である。

④縄文中期

宮中遺跡が古くから知られている。中心は丘陵西斜面の苗圃内である。その他に上の原(36)がある。河東地方の比較的規模の大きい遺跡である。河西地方では、須多峯(4)がある。地点を異にして、中期初頭と中期中半から後半の土器が出土している。顔戸道下(24)は、昭和28年春森山茂夫氏によって調査され中期後半の土器と住居址が検出されている。この他に断片的に各所から該期の土器が出土している。

⑤縄文後・晩期

当地方の後・晩期の遺跡数はいたって少なく、規模も小さい。その中で宮中(42)は優れた遺跡である。[注9] 昭和54年調査し、石棺墓23基・葬礼用浅鉢・漆碗櫛・耳栓状耳飾等が出土した。縄文後期の信仰の一端を窺知する重要な遺跡である。その他に稲荷塚(47)[注10]・北竜湖 d 地点が目立つ存在である。晩期は、明らかに遺跡と認知できるのは外様南木の下(25)・北竜湖 d 地点の 2 遺跡である。他は数片が出土しているのみである。

以上、縄文時代について簡単に触れてきたが、飯山盆地北半は縄文時代の遺跡はいたって少なく、規模もそれほどでない。縄文時代人にとって沖積地を主体とする飯山盆地北半の地は、活動する舞台に適しなかったのであろうか。

3） 弥生時代

稲作をもった弥生文化が、当地方に入ってくると活動の舞台は、河西地方の長峰丘陵上に集中する。河東地方と河西地方を比較すると弥生式人の活動は、河西地方に圧倒的に多い。河東地方でも若干は認められるが、あまり目立った存在ではない。

関田山麓下に存在する堀ノ内馬場(28)・小境押出(27)・釜渕(23)等の遺跡は、いずれも湧水帯に位置し外様平を臨む場所である。長峰丘陵上の遺跡は、古くから学界に知られていた。戦後、神田五六・森山茂夫・桐原健諸氏によって調査が幾回となく行われた。そして10数軒の住居址を検出するとともに当地方の弥生式文化を考える上に重要な資料を提供した。

しかしながら、その調査の対象は東長峰(13)[注11]・山崎(16)・柳町(17)[注12]・照里(20)・照丘(21)[注13]だけであり丘陵全体に及ぶ調査ではなかった。その後の踏査により小泉(14)・西長峰(10)・下林(12)は保存状態もよく広範囲にわたる遺跡であることが確認された。それにしても稲作農耕文化と規定される弥生式文化期の遺跡が、水田地帯から離れた比較的高所の長峰丘陵上に立地するのはどういう訳であろうか。更に弥生式時代にこれほど大規模な遺跡が存在するのに古墳時代に入るとほとんどその姿を消してしまう。より水稲耕作に都合のよい地点を求めて低湿地に進出したのであろうか。今後究明してゆかねばならない大きな課題といえるだろう。

4） 古墳時代

弥生式時代に華々しく展開した文化も古墳時代に入ると急激に姿を消してゆく。河東地方では、圃場整備で破壊されつくしてしまったのか、明らかに古墳時代の集落と認定できる遺跡はない。河西地方でもいたってすくない。須多峯・柳町・有尾・上野(33)等が代表的なものである。須多峯[注14]・柳町[注15]は古墳時代初期五領期の遺跡であり、有尾[注16]は中半の鬼高期の遺跡である。この 3 遺跡は、調査されている。

古墳は、河東地方で山麓・扇状地上に大部分立地している。ただ、向峰古墳群は丘頂上にあって河東地方古墳の北端となっている。

河西地方では、古墳はいずれも長峰丘陵上に存在し、丘陵北端に近い部分に集中している。飯山地方では、古墳の正式な発掘調査が今の所行われていないので厳密な時代を判定する訳にはいかないが、有尾 1

号古墳(3)を除けば、大部分が古墳時代後期のものと考えられている。古墳が存在するのに庶民の生活の痕跡がほとんど検出できないのはどういう訳であろうか。

5） 奈良・平安時代

飯山盆地北半では、現在までの所明確に奈良時代のものと認定できる遺跡はない。平安時代に入ると認められるようになる。換言すれば、平安時代に入って再び開拓が進められたといえよう。河東地方では尾崎を除いてはあまり明確でない。河西地方では、鍛冶田(6)・北原(7)(註17)・大倉崎II(34)(註18)・上野・釜渕等が代表的なものである。今後の調査ではまだまだ増加しよう。(註19)

それにしても奈良時代において、活動の痕跡が認められないのは何故であろうか。大きな問題である。いずれにしても平安時代以後再び人々の活動が、豪雪地帯に展開されるにいたった。このことが中世へと引き継がれ、常岩の牧・小菅庄の成立へといたったのであろう。

註1　中島庄一　北信地域における尖頭器を伴出した石器群について　信濃34-4　1982
2　飯山市教育委員会　太子林・関沢遺跡　1981
望月静雄　太子林遺跡・関沢遺跡—長野県史考資料編全1巻(2)主要遺跡　北・東信　所有 長野県史刊行会　1982
3　註2と同じ
4　信濃史料刊行会　信濃史料　第1巻上下　1956
5　広瀬昭弘　北信濃小佐原遺跡出土の表裏縄文土器について　信濃33-4　1981
6　木島平村教育委員会　三枚原遺跡　1977
7　神田五六　長野県下水内郡飯山町有尾遺跡調査概報　信濃5-8　1953
飯山公民館　飯山町誌　1954
8　高橋桂・中島庄一・金井正三　北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告　信濃28-4　1976
9　高橋　桂　宮中遺跡発掘調査—石棺状遺構を中心として　高井53　1980
10　森山茂夫　外様村尾崎東長峰発掘調査報告(一)　下水内郡遺跡発掘調査報告書　1950
11　清水　享　外様村尾崎東長峰発掘調査報告(二)　下水内郡遺跡発掘調査報告書　1950
12　桐原　健　北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報　信濃9-12　1957
13　高橋　桂　飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について　信濃14-11　1962.11
14　高橋　桂・太田文雄　北信須多ヶ峯遺跡第二次発掘調査報告　信濃29-4　1977
15　註12と同じ
16　飯山南高校考古学クラブ　長野県飯山市有尾遺跡調査概報　信濃13-12　1961
17　飯山市教育委員会　鍛冶田　1980
18　飯山市教育委員会　北原遺跡調査報告書　1980
19　飯山市教育委員会　釜渕・北頭戸遺跡　1988

C　周辺の歴史的環境

本稿では、今回調査した大倉崎館跡が、当地方の中世の解明に重要な位置を占めると考えられるので、周辺に所在する同時代のものと思量される「館跡」を紹介しつつ、同時に小菅山の動きについて触れてみよう。

当地方の中世については、市河文書以外の史料がとぼしいので果たしてどのような在地の土豪が活躍したのか漠然としたところが多い。従って、今回調査した「大倉崎館」の領主が、誰であるか今のところ特定できない。

小菅山は、飯綱・戸隠と並んで北信濃の三大霊場として知られ中世には山岳仏教の一大修験場であった。伝説によれば小菅山は、役小角によって開かれたという。また、平安初期に坂上田村麻呂が、蝦夷征討の帰路立寄り、戦勝報告とともに多大の寄進をして、山容を整えたという。

時は流れて、源平争乱の時代に突入するとまず、木曽義仲が平氏追討の挙兵をし、北信濃から越後へと歩を進めた。当然、当地の在地土豪はその争いの渦にまきこまれてゆく。やがて鎌倉幕府が成立し、北信濃の地頭職に任命された何人かの名前が、歴史上に登場する。そして、建武の親政、中先代の乱、観応の擾乱へと再び北信濃の地は騒然とした状態を呈するにいたる。この時期から室町時代中半にかけて当地方に重要な役割を演じたと思われる館址が、いくつか存在する。詳細については第Ⅵ章の「考察」の項にゆずるが、以下代表的館跡をあげておこう。

犬飼館跡　（大字瑞穂・城之腰）
柏尾館跡　（大字瑞穂豊・山口）
北原館跡　（大字瑞穂豊・北原）
今井館跡　（大字常郷・下今井）
顔戸館跡　（大字寿・たてのうち）
尾崎館跡　（大字寿・五反田）

これらの館跡は、いずれも小高い丘陵の斜面を利用した造りとなっていることが共通している。以下に大倉崎館址を中心にして、小菅山・瑞穂・常盤の中世の変遷を、時代順に表で追ってみよう。

	小菅庄と瑞穂・常盤の主な動き	全国の主な動き
	▶680年（天武９）小菅山役小角の開山と伝えられる。	
		▶701年(大宝１）大宝律令完成
		▶708年(和銅１）和同開珎を鋳造
奈良		▶710年(和銅３）平城京に遷都
		▶712年(和銅５）古事記成る
		▶720年(養老４）日本書紀成る
		▶794年(延暦13）山城平安京に遷都
平安	▶800年代(大同年間）小菅山坂上田村麻呂の寄進により山容整うとされる。	
		▶888年(仁和４）信濃国大地震山崩れ洪水等高井・水内・更埴大被害
		▶927年(延長５）延喜式完成
	▶1180年（治承４）木曽義仲挙兵高梨・井上・村山・村上各氏かけつける。	▶1180年（治承４）源頼朝挙兵
		▶1185年（文治１）壇の浦で平氏滅亡源頼朝守護・地頭を設置
鎌倉	▶1221年（承久３）承久の変犬甘・毛見・木島・笠原・中野氏は北陸道軍に参戦した。	▶1221年（承久３）承久の乱
	▶1329年（嘉暦４）諏訪上社御射山御頭に犬飼南条（中村）と犬飼の名称が初めてみえる。	▶1297年（永仁５）永仁の徳政令
		▶1333年（元弘３）鎌倉幕府滅亡
	▶1335年（建武２）市河氏善光寺に出陣、常岩氏北条城に立てこもるが市河氏によって城郭を破却さる。	▶1335年（建武２）足利尊氏挙兵
	▶1336年（建武３）牧城攻撃時の市河氏軍忠状にみえる部将名①犬甘四郎、毛見源太(岳北）②植野左衛門次郎(水内郡上野の部将）③高梨氏(小布施山田)。	
		▶1338年（延元３）尊氏幕府開く

室町	▶1341年（興国２）小菅山大進阿闍利が醍醐寺から三宝院流の灌頂法則と道具目録書写与えらる。〔当時〕尊氏党小笠原、須田、高梨各氏　直義党諏訪、夜交、磯津、香坂、市河各氏。	
		▶1349年（正平４）足利直義と高師直対立はじまる
	▶1365年（正平11）小菅山高梨氏と市河氏の争いで戦乱にあう。	
	▶1370年（建徳１）幕府岳北に兵糧料所を設け市河氏に預ける（常岩南条内五ヶ村）。	
	▶同年高梨朝高高井郡安田郷と水内郡大倉郷を宛行わる。	
	▶1386年（元中３）市河氏小菅社別当菜を改補。	
	▶1387年（元中４）小笠原氏が村上、高梨・島津氏等と守護所を襲い塩田原の戦となり、この時市河氏は水内郡の高梨党と小菅山別当らを大境、青倉氏らとともに破った。	
	▶同年高井郡大甘北条と大甘中村の兵糧料所を市河氏が預かる。	
	▶1392年（明徳３）高梨氏の所領注文書高井郡と水内郡（大蔵崎―柏尾館主高梨高行、小境―高梨備前入道、戸狩―輩下木島左衛門太郎朝末、中条―輩下柳沢蔵人太夫高朝）。	▶1392年（明徳３）南北朝合一
	▶1400年（応永７）大塔合戦、守護小笠原氏を村上、高梨、井上各氏が連合して四宮河原に破る。市河氏は守護側として塩崎城に篭城（大境氏は討死）。毛見、木島は高梨氏に属し、大甘氏は市河氏についた。	
		▶1401年（応永８）明との勘合貿易開始
	▶1405年（応永12）小菅山の復興、三十三身板絵とともに本尊の木造馬頭観音安置。	
	▶1421年（応永28）小菅庄が若王子社の庄園に。	
		▶1423年（応永30）関東管領足利持氏の反乱
	▶1429年（永享１）小笠原持長泉領に侵入、泉持重と戦って敗れ、千曲川を渡り、小菅山に入り宮社院坊を焼却す。	
	▶1438年（永享10）結城合戦岳北諸氏高梨氏に合力？	
	▶1463年（寛正４）高擾の合戦、高梨政高が上杉房定の将右馬頭を敗死さす。	
		▶1467年（応仁１）応仁の乱起る
	▶1477～1573年（室町後期）高梨氏出身の善覚師が独立して本家より小境の地へ寺領を賜わり寺字を建立（善覚寺寺伝）。	
戦国	▶1484年（文明16）高梨政盛は岳北の毛見、木島氏を従え、中村、犬飼、小菅、柏尾に勢力を広げた。犬飼の浅野氏知行地を重臣草間氏に与える。柏尾館に高梨備中守を配置。	
		▶1488年（長享２）加賀一向一揆守護富樫氏を倒す
	▶1508年（永正５）小菅山大聖院澄坪、奥院の三社頭を造立。	
	▶1509年（永正６）長尾、高梨連合軍に上杉関東管領戦死。	

	▶1513年（永正10）夜交氏小島氏等草間氏に破れる。	
		▶1542年（天文11）武田信玄諏訪氏を攻める
		▶1543年（天文12）鉄砲伝来
	▶1545年（天文14）小菅奥社盧の脇立新調。	
	▶1548年（天文17）村上義清上田原の戦で武田信玄を破る。	
		▶1553年（天文22）川中島の戦い（１回目）
	▶1561年（永録４）小菅山武田軍による焼打ち。	
		▶1573年（天正１）室町幕府滅亡
		▶1574年（天正２）石山本願寺光佐挙兵
	▶1591年（天正19）小菅山上杉景勝領へ。奥社本殿と宮殿を再興。	
	▶1598年（慶長３）小菅山上杉氏会津移封のため復興頓座。	▶1598年（慶長３）豊臣秀吉没

参考文献

江口善次　1954　「太田村史」　太田村史刊行会

江口善次　1957　「外様村史」

金井喜久一郎　1968　「村史ときわ」第1章2～5　常盤村史刊行委員会

金井喜久一郎　1980　「新編瑞穂村誌」　新編瑞穂村誌刊行会

笠松宏至ほか　1988　「歴史の読み方⑤ 文献史料を読む・中世」　朝日新聞社

栗岩英治　1913　「下水内郡誌」　下水内教育会

福山壽久　1922　「下高井郡誌」　長野県下高井郡役所

奈良本辰也ほか　1989　「戦乱南北朝」　学習研究社

第Ⅲ章　日焼遺跡の調査

1　調査の概要と経過

A　調査方法

1）　調査方法

本来ならば、事前に試掘調査を行うべきであるが、今回は、日焼遺跡の従来の知見に基づいて、遺物包含層上面までバックホーで耕作土等を除去した。

まず、日焼遺跡と南原遺跡との間にある小さな谷に遺構があるかどうかを確かめ、ないことがわかったのでそこを捨て場とし、南原遺跡からバイパス路線内全面の表土除去を行った。

日焼遺跡の方は遺物包含層である淡茶褐色粘質土層上面まで除去することとしたが、南部においてはやや深く掘り過ぎてしまった。

その後調査区を設定し、精査を行い、調査区北半部で石器群が検出され始めたので、群ごとに精査・検出・写真・測量・取り上げを無遺物層まで数度にわたってくり返し掘り下げた。

日焼遺跡の発掘面積は約1700m²となった。

なお、遺物の取り上げは、当初通しナンバーをつけて行っていたが、点数が多く番号が大きくなるため、後にグリット毎にナンバーをつけて取り上げたが、点数が多いのとあわせ繁雑となり、整理段階で同じナンバーのものが2点あったりして、充分な考察を行えなかったのは失敗であった。

日焼遺跡のテフラ分析については、新潟県新井市在住の群馬大学非常勤講師早津賢二・日本考古学協会員小島正巳両氏にお願いした。

2）　調査区の設定（図1）

調査区の設定は、道路センター杭No.58＋20を基準に、縦軸を道路センター杭に合わせ5m方眼を組み、北から1・2・3……、横軸は東からA・B・C……と番号を付した。

基準レベルは、建設事務所作成の1/1000道路周辺図に示されたBM 320.761mを使用した。

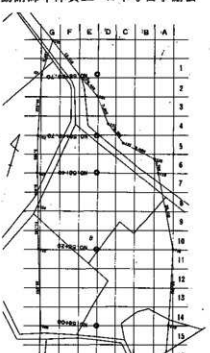


図1　グリット設定図（1:1000）

B　調査経過

日焼遺跡の調査は7月12日から8月12日まで実施している。緊急要請によって開始された、国道117号バイパス関係の遺跡調査は、最初に日焼遺跡（南原遺跡を含む）から開始することになった。事前の準備を、6月27日から7月5日にかけて、並行調査することになっていた小泉遺跡関係をあわせて行った。とにかく雪の降る前に日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡と四ヵ所を終了させるという強行日程のため、表土除去はすべて重機によって行わざるをえなかった。7月6日から調査のため器材の点検等具体的作業に入った。

7月11日には、屋株遺跡の表土除去を行った。遺構・土器類が早くも出土した。翌12日の表土除去は、約1時間程で中断した。その理由

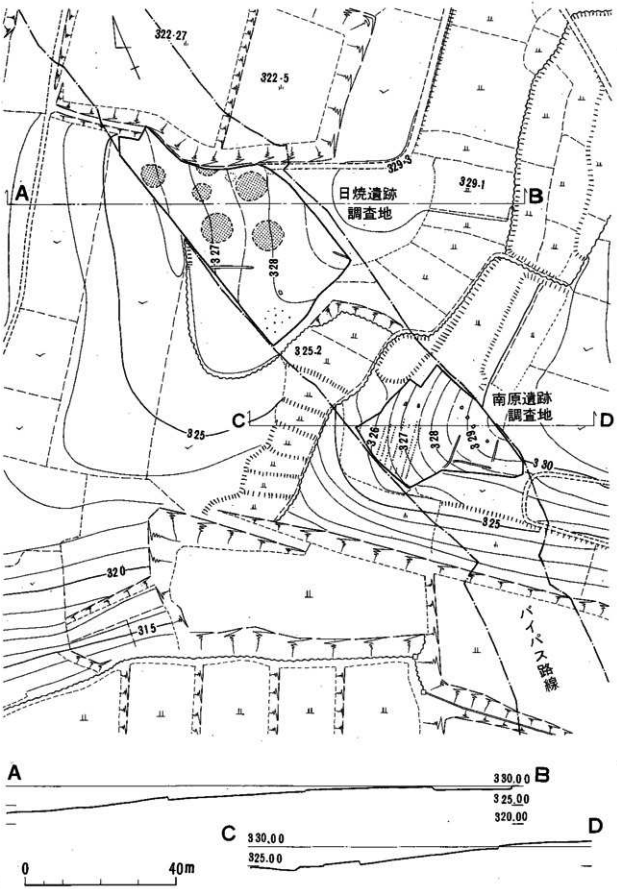


図2　周辺地形図（1:1000）

は、一部土地交渉の遅れによって、排土置き場が計画どおりにできなかったためである。発掘調査用資材やテント等の搬入は、表土除去と並行して実施した。7月12日には、日焼の現場において調査開始式を行って、安全を祈願した後、作業の進め方等の説明を行った。同日午後には、調査北端の道路部分の表土はぎと、ともに、基準杭打ちなどを済ませる。この日の作業員の皆さんは計11名である。テント設営地の隣接地主に同地立入りの了解をとる。

翌13日には、前日に引き続いての道路部分の表土除去、精査を行う。黒色土中より黒曜石をはじめとした先土器時代剥片が多数出土して、作業員の皆さんの志気を大いに高めた。

7月14日、北端部で半月形の尖頭器出土、撮影等を行う。7月16日、E・F—10～14地区のジョレンがけ等精査し、遺構のチェック、ロームマウンドを発見した。「かわら版日焼」第1号を発行し、発掘の状況を地域の皆さんに、アッピールする。7月18日、B・C—6・7地区精査。黄色粘土層上面より剥片など続々出土する。テントを増設して、耐暑対策等休憩施設を整備した。7月19日、本日より柏尾地区に加え、関沢地区の作業員さんが、4名程参加していただく。21日、D—9とF—8地区において石器が集中的に出土する。翌22日には、F—7・8地区の黒色・黄色粘土質層を中心に石器が大量出土し、一大集中群となる。

7月23日、河内八郎茨城大教授来跡、指導を受ける。25日には北端の崖面を地層観察のために削り、撮影する。7月27日、F・G—2・3地区の実測を始める。本日より高校生の参加あり。7月29日、精査一応終了するとともに、実測図作成を引き続き行う。南原地区のグリット杭打ちを行う。30日、全景写真撮影と各群毎の撮影、そして南原遺跡の精査を開始する。この日新井市の小島氏に来跡いただき、テフラ層の分析を行う。翌31日、小島氏は土壌サンプルをもち帰る。8月1日、南原の精査終了。日焼はレベル測量及び平面実測を引続き行う。2日、南原地区において7列の杭列が発見されるなど、現場全体にその解釈をめぐって興味をもり上げた。3日、第1群（D・E—3・4・5）精査、遺物ナンバーをチェックし全部取りあげる。

4日も前日同様の作業を続行する。8月5日、E・F—7・8そしてD—9・10またC・D—6・7について精査、黄土中から黒曜石石器類が続々出土した。ロームマウンド掘り下げを開始する。6日、遺物分布図実測（第1群）。8月8日、第2・第4・第5群を掘り下げるが、乾燥しすぎてジョレンの歯がたたないため、水を散布しながら進める。9日には第4・第5群の写真撮影を行う。第2・第4群の実測開始する。南原の平面図実測開始へ。8月10日、群の実測続行、土層断面図作成のためトレンチ掘りと、南原の平面図作成続行する。

"かわら版。3号配布。

11日、12日両日とも最終仕上げのため精力的に図面実測を行い終了にこぎつけた。

2 遺　　跡

A 層位と文化層

1） 層　序

日焼遺跡の基本的な層序は図3に示したとおりである。

I層　暗灰色土層　　耕作土。層厚15～30cm。

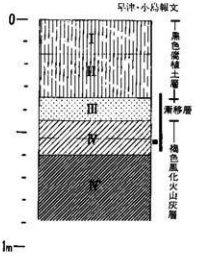


図3　層序模式図

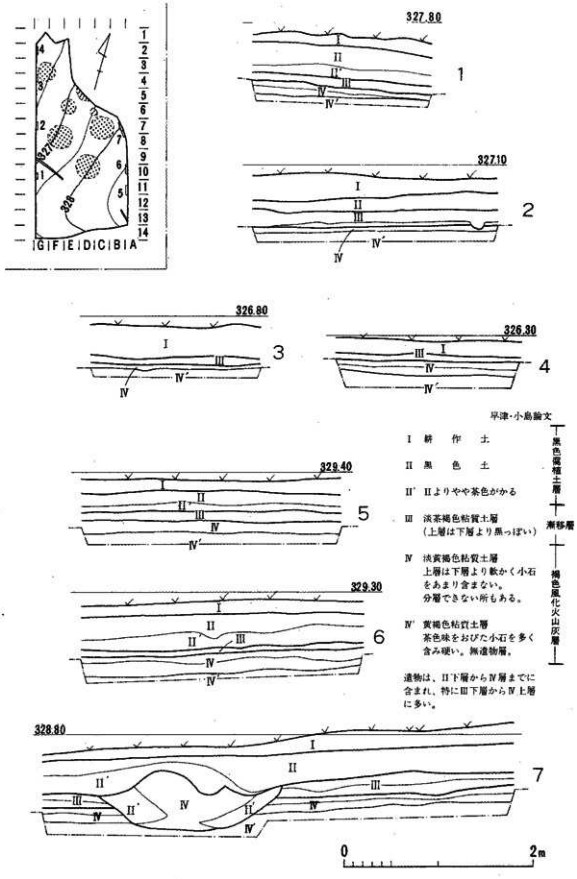

327.80
327.10
326.80
326.30
329.40
329.30
328.80
1
2
3
4
5
6
7
I
II
II'
III
IV
IV'
0
2m
早津・小島論文
I 耕 作 土
II 黒 色 土
II' IIよりやや茶色がかる
III 淡茶褐色粘質土層
(上層は下層より黒っぽい)
IV 淡黄褐色粘質土層
上層は下層より軟かく小石をあまり含まない。
分層できない所もある。
IV' 黄褐色粘質土層
茶色味をおびた小石を多く含み硬い。無遺物層。
遺物は、II'下層からIV層までに含まれ、特にIII下層からIV上層に多い。
黒色腐植土層
漸移層
褐色風化火山灰層

図4　土層実測図（1:40）

Ⅱ層	黒色土層	一般的にはクロボク土と呼ばれる均一なシルト質土層であり、層厚20～40cm。ローム マウンドの上にかぶっている。
Ⅲ層	淡茶褐色粘質土層	層厚約10cm前後で後述の早津・小島報文の漸移層にあたる。
Ⅳ層	淡黄褐色粘質土層	この層からは、当地方では普通「地山」と認識されている土層である。色が淡く軟質であまり小石を含まない上層と、上層に比べ黄色味が強くやや硬く、小石を含む下層とに分層される。この層の上面が調査地の遺構検出面である。この層より下が早津・小島報文の褐色火山灰層にあたる。
Ⅳ'層	黄褐色粘質土層	ジョレンで削ると茶褐色の指頭大の小石粒がガリッとあたる、スコリアを含む層である。石器群の検出された所で最終的に掘り下げた面が、この層の上面にあたる。

なお、図示しなかったが、調査地北端の崖面の観察によれば、Ⅳ・Ⅳ'層と基本的に同様と考えられる褐色火山灰層が約80cmほどあり、その下に黄白色粘質土層が約1m続き、その下に青白色粘土層がある。

2） 文化層

先土器時代石器は、Ⅱ層下部から出土しはじめ、Ⅲ層およびⅣ層中部に集中しており、わずかであるがⅣ層下部にも認められた。その下のⅣ'層からは出土していない。

したがって本遺跡の文化層はⅣ層下部上面ないしⅣ層中部と考えられる。

なお、石器群の分析によれば、当遺跡の石器群は第1群が不確定なのをのぞけば、他は単一時期に残されたものと考えられる。

また、後述の早津・小島報文によれば、A・Tの降下層準はⅣ'層ないしその下位にあるとされているので、本遺跡の石器群はA・Tの降灰（2.1～2.2万年前）以降に位置づけられることは間違いない。

B 遺跡の概要

日焼遺跡は、字南原・日焼に所在し、従来より先土器時代の単純遺跡として把握されてきている。小支谷を隔てた上方（東）は、縄文前期～後期、(弥生時代）の遺跡として知られる南原遺跡が存在しており、これら遺跡の範囲は重複することなく分離されている。

今回の調査でも、日焼遺跡はⅣ層を中心として先土器時代遺物の集中地点が6箇所検出されている。そのほか、調査区南側で平安期と考えられる土壙1基を確認したが、この時期の広がりについてはとらえることができなかった。

さて、1700m²の調査によって約2100点の先土器時代の石器・礫が出土した。6か所の群にまとまりをもって出土したが、ほぼ同時期の生活址と考えられる。出土遺物は、小形化したナイフ形石器・先刃掻器・円形掻器・削器・尖頭器・打製石斧・石核などがある。石材は安山岩と黒曜石で99%以上を占める。

こうした内容は、ナイフ形石器終末期に位置付けられると考えられ、飯山地方に新しい石器文化の一群を加えることができた。

C 先土器時代遺物の出土状態

1） 群の検出（図5）

当該時期における遺物の出土状態は、遺構などがはっきりしないものの「まとまり」をもって出土するのが一般的である。この最小の単位を「ブロック」と呼び、さらにブロック間の有意な形で集まっている

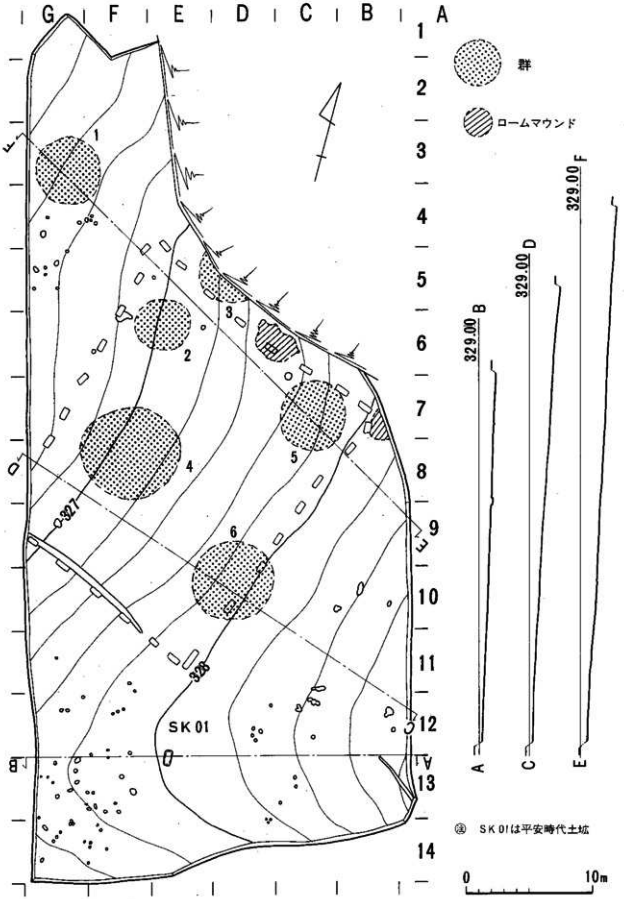


図5　先土器時代遺物分布概念図（1:300）

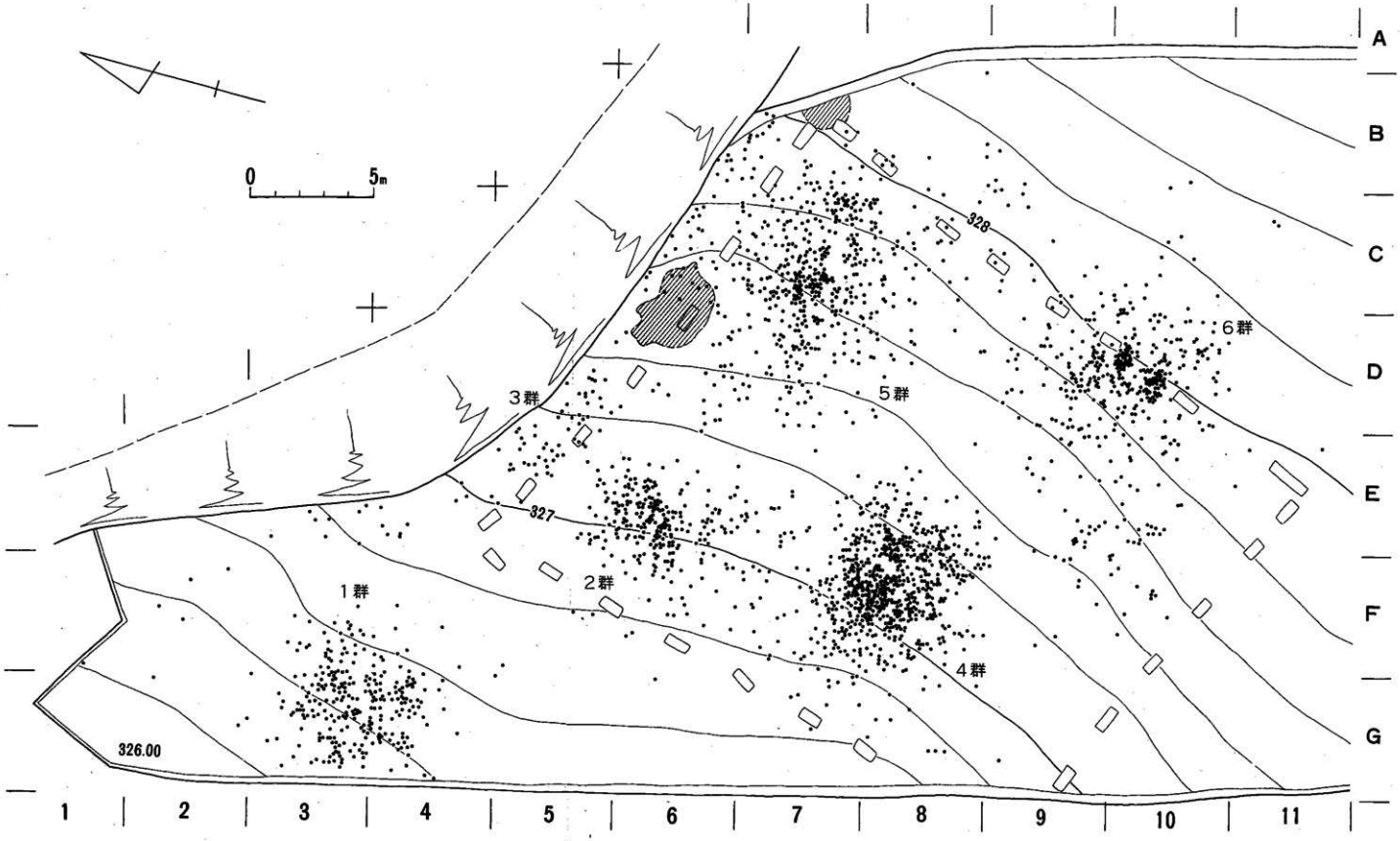


図6 遺物分布図 (1:50)

状態を「ユニット」と呼称してアプローチする方法が一般的に行われている。

今報告では、「まとまり」の認定を充分に行っていないために分割される可能性もあり、最小単位のブロックと呼称できないために「群 CLUSTER」と仮称することにした。これは空間における現象的な疎密を集まりとして任意にまとめたもので、厳密に検討して認識したわけではない。したがって、ある群はブロックと呼べるであろうし、ある群は2つ以上のブロックを包括している場合もありうる。また、各群内及び群間の母岩別分類・接合作業等は時間の関係で実施出来ていない。

さて、調査区内において6か所の群を検出した。比較的平坦な地区であるが西へ約3.5度の傾斜を持っている。約1700㎡の調査区で900㎡の範囲において計6群約2100点の石器・礫が出土している。

なお遺物分布図の表示において、第1群の分布図以外は下記の通り示した。

	安山岩	黒曜石	その他
ナイフ形石器	――	★	――
掻器・削器・錐	△	▲	――
尖頭器	⊛	――	――
石核	□	■	
剥片・砕片	○	●	◓
礫	形を記載		

表1　平面分布図表記一覧表

細部加工剥片（Uフレイク）は、剥片・砕片に含めた。

2）第1群（図7）

調査地区の西端、E・F―3・4区を中心に位置している。ほぼ全容を調査したものと考えられる。分布形態は、長軸9m、短軸7m程の楕円形を呈すが、密度の濃い部分は径約5mの範囲である。本群は他の群とは若干距離をおいて位置し、また分布も明瞭に別れている。

出土層位は、II層の黒色土からIV層にかけて出土し、最下部はIV層の中位でレベル幅は20cmである。群を構成する総点数は301点。石器組成は、尖頭器・掻器・剥片・石核等から成る。石材別の分布では、安山岩・黒曜石がほとんど総てを占め、その比率は安山岩が若干多い。黒曜石の石核・砕片が出土していることから、石器製作が行われたと考えられる。また、G―3区において扁平な台石状の配石1点が出土しているが、レベルが上位のため本群に伴うものかはっきりしない。

3）第2群（図8）

E・F―5・6区に位置する。分布形態は、長軸6.5m、短軸4.8m程の楕円形を呈する。北側に第3群が隣接し、南側は第4群に隣接している。第3群とは空白部によってほぼ明確に分離されるが、第4群にはまばらに分布しながら接続している。出土層位は、第III層の漸移層及び第IV層から出土しているが、中心部分は第IV層中位にある。

群を構成する総点数は265点。石器組成は、ナイフ形石器・掻器・削器・細部調整剥片・石核等より成る。石材別分布では安山岩・黒曜石で占める。比率では安山岩50%、黒曜石48%である。石材による分布区域の差は認められない。製品は、黒曜石製が圧倒的に多く、安山岩は比較的大形の剥片で占めている。また、黒曜石の石核・砕片が出土しており、1群同様石器製作が行われている。

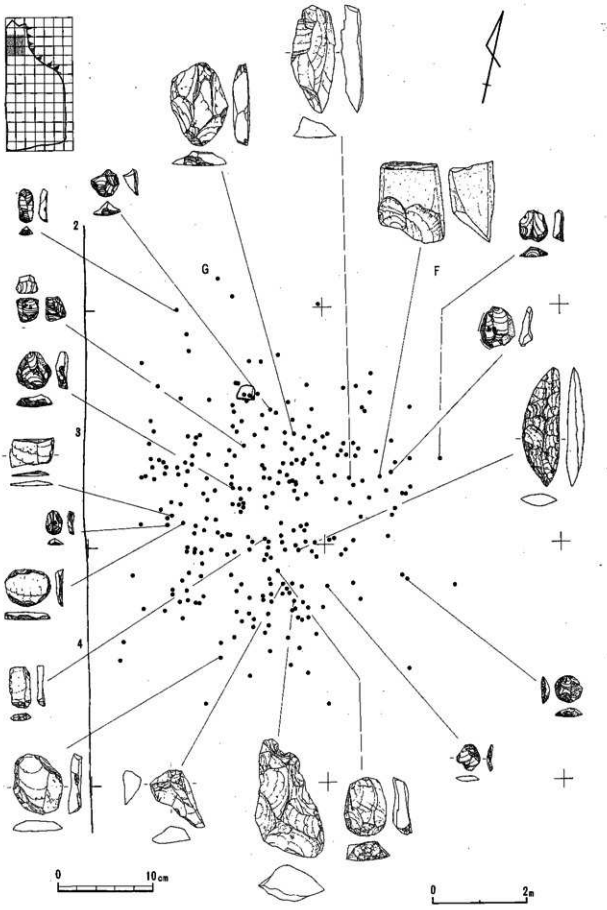


図7　第1群出土遺物分布図（1:80）

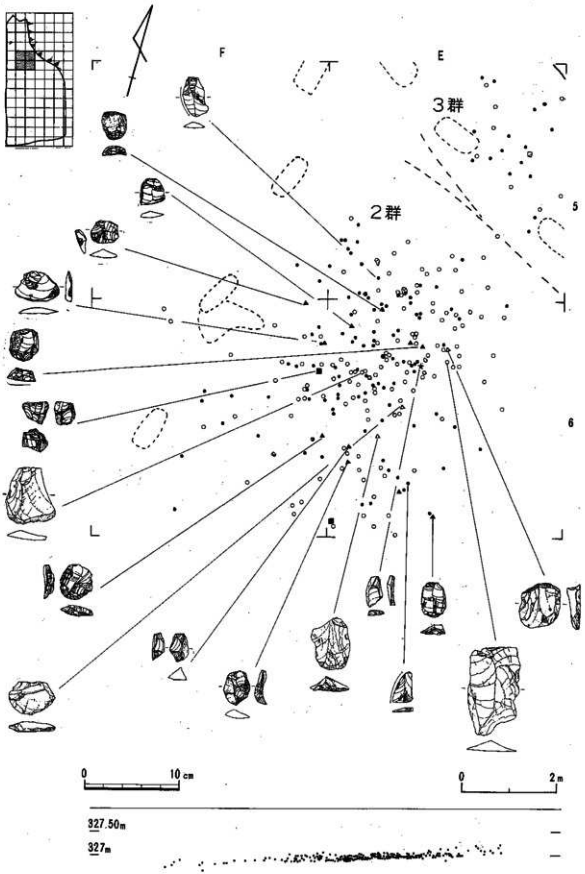


図8　第2群出土遺物分布図（1:80）

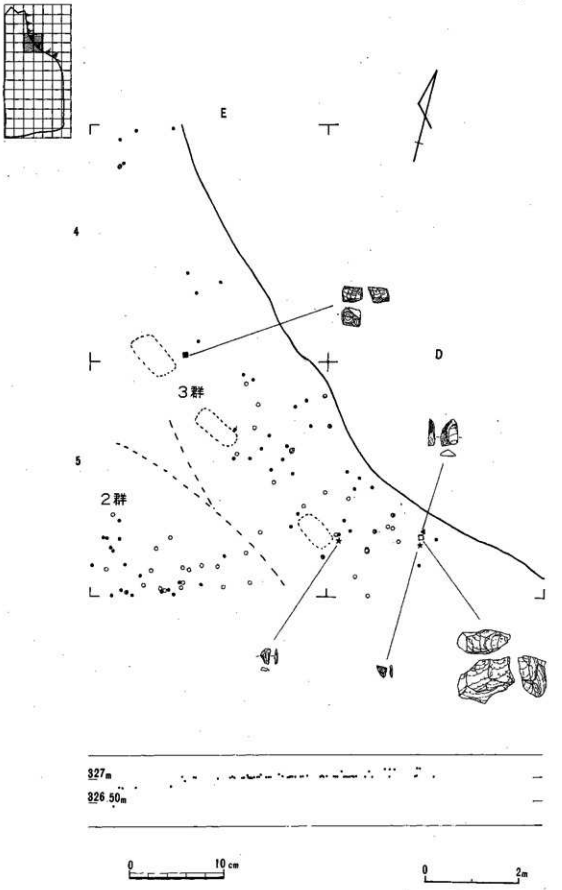


図9　第3群出土遺物分布図（1:80）

4） 第 3 群（図9）

D・E—4・5区に位置する。本群は農道の下位に包含されていたこと、攪乱坑があること、北側が土取りにより失われていることにより一部を検出したにすぎない。おそらく北側に延びていたものと思われる。検出した平面形態は、長軸8m、短軸2.8mであるが、前述した通り本来は径8m程の規模を持っていたものと考えられる。

出土層位は、Ⅰ・Ⅱ層が失われていたがⅢ～Ⅳ層にかけて出土している。

群を構成する総点数は56点で、黒曜石67%、安山岩30%の比率で占めている。石器組成は、ナイフ形石器・石核等で、安山岩製の石核は、今回の調査では珍しい。

5） 第 4 群（図10）

E・F—7・8区を中心にして出土している。最も密集している群で、Ⅲ層からⅣ層下部にかけて出土している。平面形態は、長軸9.5m、短軸6mであるが、密集部分は6.5×5.5mである。1点の頁岩を除き安山岩・黒曜石で総点数616点で、黒曜石が529点と圧倒的に多い。出土遺物は、ナイフ形石器・掻器・細部加工剥片・石核で、黒曜石の剥片・砕片が多量に出土している。ナイフ形石器は、5点出土しているが、二側縁加工の非対称形態が主体である。石核は原石を含み、集中地区中心部で11点出土しており、二形態が存在している。全て黒曜石で周縁部より多量の剥片・砕片が出土している。掻器・削器類は44点で、中心部・外郭地帯より万遍なく出土しており、いわゆるエンド・スクレイパー、ラウンド・スクレイパー等の形態がある。なお、製品・剥片類の多くが火熱を受けて白色化しており、製作時におけるものと、使用時によるものの両者があるようである。

礫群　E—8区において、礫群と呼べるほどの密集はしていないが礫のまとまりがあった（図13)。拳大の破損礫で、5点がまとまり他はまばらに出土している。明確に火熱を受けて赤化したものは認められない。群内における位置は、南側外郭地帯にある。

6） 第 5 群（図12）

C・D—6・7・8区に位置する。北側部分に農道があったため多少攪乱を受けている。出土層位はⅡ層から出土しているが、中心部分はⅣ層にある。平面形態は、長軸12m、短軸9mと大きいが、密集部分は径4mくらいの範囲と考えられる。石材は、他と同様安山岩と黒曜石で占められ、本群では安山岩の占める割合が58%と大きい。

出土遺物では総数392点で、ナイフ形石器(3点)・掻器・削器類(35点)・細部加工剥片・石核(6点)等が出土している。物に掻器は、典型的なエンド・スクレイパー、ラウンド・スクレイパーの両者が存在している。

礫群　D—7・8区において乳児頭大から小礫を含めて約40点の礫が出土した（図10)。全体的にはまばらに出土しているが、大きい礫はD—7区にややまとまりを見せている。多くは赤化した破損礫である。群のなかでは、中心部西側を構成している。

7） 第 6 群（図14）

C・D・E・F—9・10区に位置する群である。集中部分は、長軸4m、短軸3mであるが、周縁部からも製品が多く出土している。西側の30点ほどのまとまりや、C—9区北側の削器等は、D—9・10区の集中部とは分割すべきと考えるが、本稿では一括して報告することにする。出土層準はⅣ層である。

出土遺物は総数362点、ナイフ形石器(7点)・掻器・削器類(20点)・錐・細部加工剥片・石核(5点)等

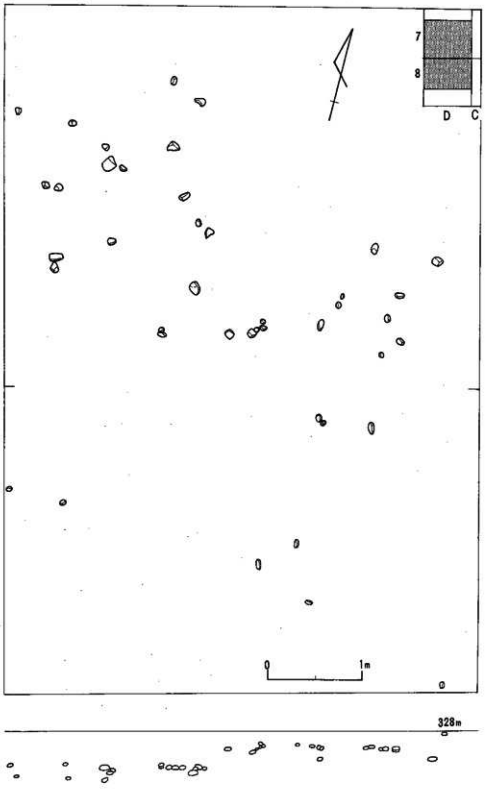


図10　第５群出土礫群分布図（1:40）

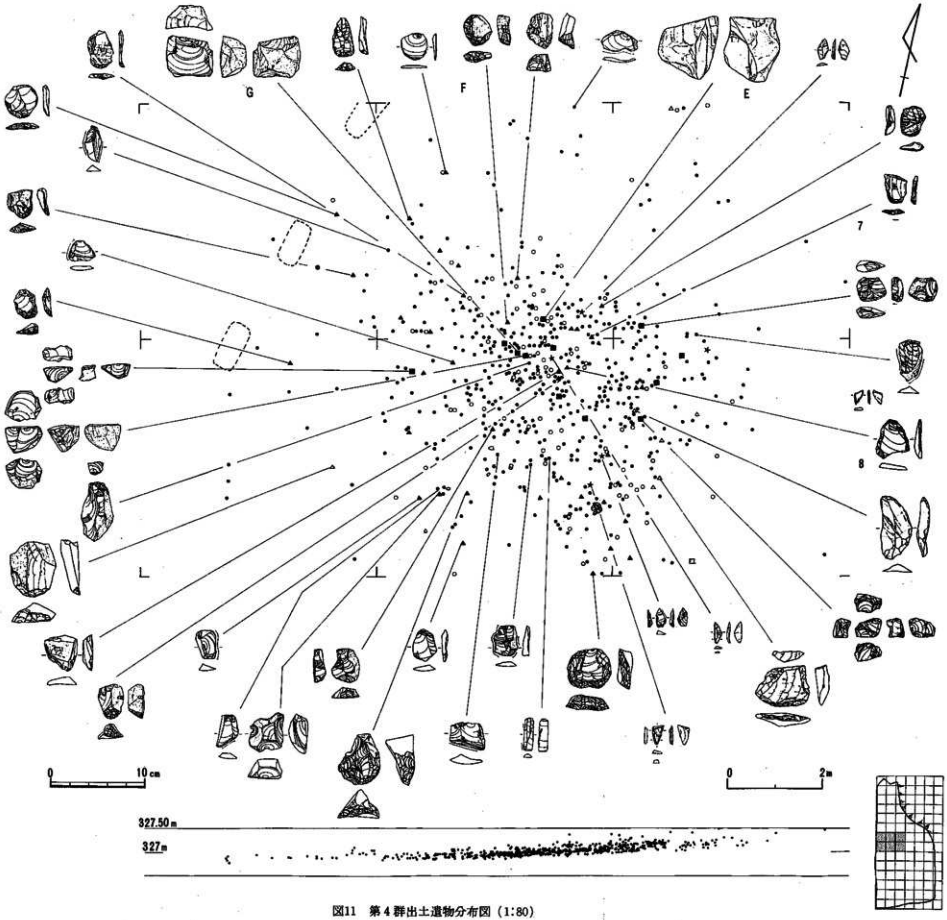


図11　第4群出土遺物分布図（1:80）

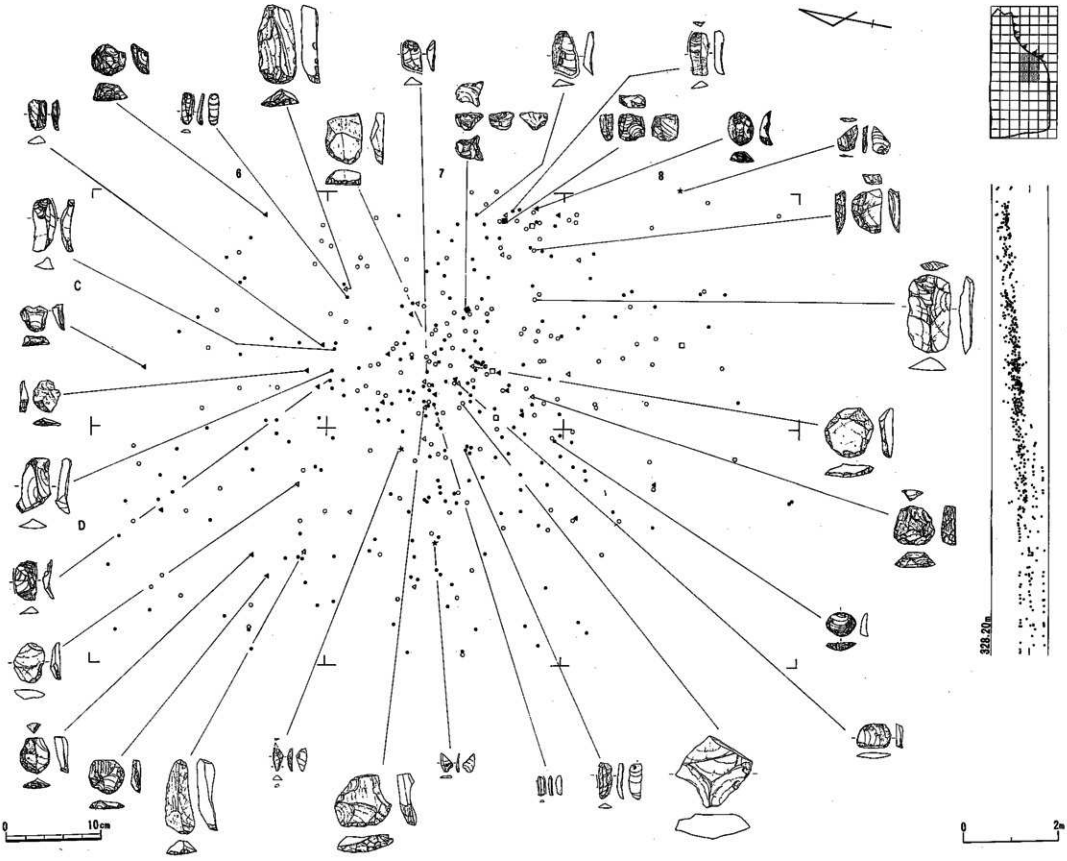


図12　第5群出土遺物分布図（1:80）

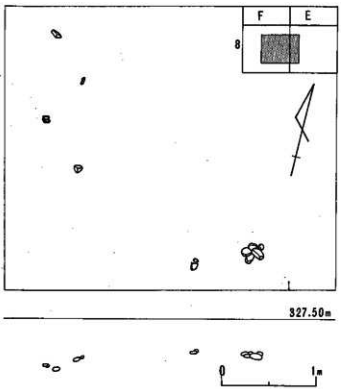


図13　第4群出土礫群分布図(1:40)

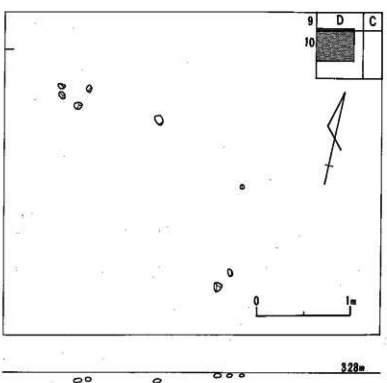


図14　第6群出土礫群分布図 (1:40)

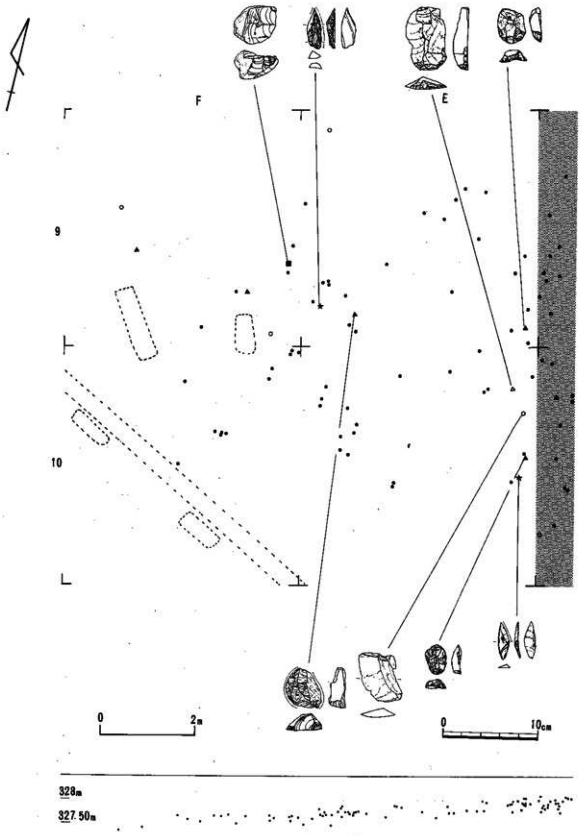
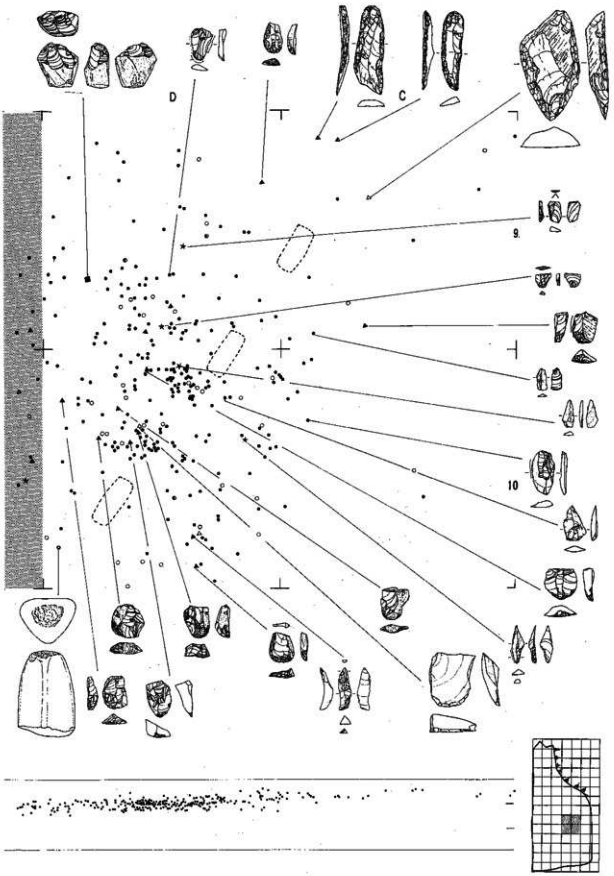


図15　第６群出土遺物分布図（1:80）


D
C
9
1
10

がある。石材は黒曜石が86%と圧倒的に多くを占める。

礫群　群を形成しているとは認められないが、集中部南半D—10区で礫が8点出土している。いずれも拳大で、赤化等は認められない。

以上群別にみてきたが、群別の組成は以下のとおりである。

群	ナイフ形石器		掻器・削器		尖頭器		石核		剥片・砕片			計
	安山岩	黒曜石	安山岩	黒曜石	安山岩	黒曜石	安山岩	黒曜石	安山岩	黒曜石	その他	
1			7	8	1			1		284		301
2		1	3	11				2	130	114	4	265
3		3							16	35	2	56
4		5	6	38			1	11	79	475	1	616
5		3	17	18			4	2	207	138	3	392
6		7	4	16				3	37	291	4	362
計	0	19	37	91	1	0	5	19	469	1337	14	
	19		128		1		24		1820			1992

表2　各群別組成一覧表

3　出土遺物

A　出土遺物の概要

1）　概　要

本遺跡から出土した遺物は、石器約2000点、礫100点の総計2100点である。これらは前述したとおり6か所の遺物集中地点を中心として、約900㎡の範囲から出土したものである。出土層位はⅡ層からⅣ層にかけて出土したものであるが、大部分はⅣ層に包含されており、各群ともⅣ層下部～中部を一つの文化層と考えられる。したがって層位的には各群とも同一時期の石器群として考えられる。また石材については、安山岩・黒曜石で99%以上を占める。飯山地方で黒曜石が多量に出土したのは、今回の日焼遺跡が最初である。安山岩については、約2.5㎞西北の今井丘陵が供給源と考えられ、いわば地元の石材と言える。なお、石材別に母岩別分類、接合作業については、時間の関係からほとんど行っていない。

2）　石器形態（図16）

出土した石器には、ナイフ形石器・掻器・削器・錐・尖頭器・礫器・敲石・細部加工剥片・砕片・剥片・砕片・石核がある。

ナイフ形石器

ブランティング加工によって素材を調整加工したものである。今回の調査では全て黒曜石で19点出土している。一つひとつの形態は異なるが、正面形態・加工部位により以下のように分類する。

A　長軸の一端に接する部分に素材の縁辺を残し、他は急斜な調整剥離が行われるいわゆる二側縁加工のもの。平面形態から、鋭い先端部・基部をもつものをA_1、基部側が幅広いものをA_2、切り出し状・台形状のものをA_3とする。

B　素材の一部にのみ調整剥離が行われるもので、素材の形状を大きく変えないものである。小形で、

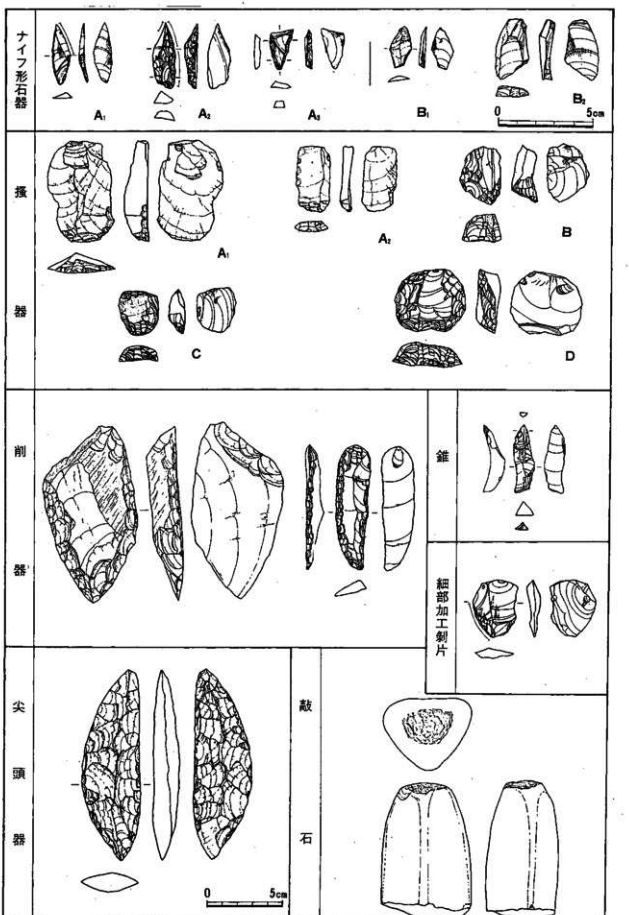


図16　石器形態分類図

正面形態上A類に似るB_1と、やや大形で鋭い先端部を意識的に持たないB_2がある。

掻　器

基本的には、長軸上の端部に急斜度調整で刃部を設けた石器（エンド・スクレイパー）をいうが、ラウンド・スクレイパー等も一括して掻器として報告する。形態から以下のように分類した。

A　縦長剥片の端部に刃部を設けたエンド・スクレイパーをA形態とする。5㎝以上の大形のA_1類と5㎝以下の小形のA_2類に分類する。

B　A形態と同様に端部に刃部をもつが、尖刃となるものを本形態とする。

C　両端に刃部をもつ複刃掻器を本形態とする。数量的には少ない。

D　円形・長円形の器体のほぼ全周乃至半周以上に急斜度調整による刃部を設けた石器で、ラウンド・スクレイパーと呼称されるものも一括した。

削　器

素材の一側縁または両縁辺に調整を施して刃部としているもので、サイドスクレイパーと呼称されるものである。形態的・調整加工別には、先頭状のもの・平縁のもの・両縁加工のもの・片縁加工のもの等に分類されるが、本稿では一括した。

尖頭器

今回の調査では、第1群より1点出土したのみである。両面調整が施された半月形尖頭器である。

錐

両縁部からの調整で錐状の突出した刃部を作出したものである。2点出土している。

細部加工剥片

素材の一部に細部調整が施されたものをいう。本稿では、明確に調整加工が行われたものは削器とし、使用痕と考えられる加工痕をもつ剥片（Uフレーク）を本石器とした。

敲　石

礫の端部に潰れ痕をもつもので、ハンマーと考えられるものである。

以上出土した石器の種類と分類について触れてきたが、この他に剥片を作出した石核等がある。詳細については石器説明の項で触れることとする。

B　出土遺物

出土した石器は2000点を数え、そのうち細部加工剥片を除いたtoolは155点を数える。出土石器には、ナイフ形石器・掻器・削器・尖頭器・錐・細部加工剥片・礫器・敲器・石核等がある。本稿では整理途中でもあり、全てを掲載できないが176点の石器について説明を加えていくこととする。

なお、整理途中でもあるので一括して提出することは混乱を招く恐れもあり、各群別に報告することとした。

1）　第1群出土石器（図17～20）

尖頭器（図17・1）

今回の調査において唯一出土したものである。片側の縁辺がほぼ直線状となり、もう一方の縁辺が弧状となるいわゆる左右非対象の半月形尖頭器と呼称されるものである。

裏面基部側一部に第一次剥離面が残っており、素材は横長剥片であることが理解される。

掻　器（図17・2～7　図18・8～11）

10点出土している。6～9は、安山岩・黒曜石の両方が使用されている。8は分厚い大形のエンド・ス

クレイパーで(A_1類)、先端部に円形の刃部を作出している。6・7・9は同様にエンド・スクレイパーであるが、5cm以下の小形品である(A_2類)。2～5・10は寸詰まりの剥片を素材として円形乃至撥指状の形態を呈する(D類)。4のみ安山岩であるが他は黒曜石を用いている。黒曜石は打面調整の施された石核より作出されているが、5の例のように石核調整段階の剥片と思われる素材も使用されている。11は大形品で両端部が尖頭状の刃部を作出し、複刃掻器としている(C類)。

削　器(図18・12・13　図19)

5点出土している。13は片側の縁辺に急斜な加工が施され、下端部まで続き掻器のようであるが、第一次剥離面の下端は節理面で割れており当初よりの形態であったことを考慮して削器とした。14は安山岩の大形品であるが、裏面一側縁の中程より先端部にかけて加工が施されている。

細部加工剥片(図20・17～19)

17は安山岩の不定形な剥片であるが、一部に調整加工が認められる。18は細石刃状の剥片である。19は両縁辺に微細な使用痕が認められる。

礫　器(図20・20)

扁平な礫の一端に二枚の剥離面によって刃部を作出したもので、片刃の礫器である。

打製石斧(図21・21)

正面側は比較的急斜な角度で剥ぎ、裏面は平坦な剥離を行っている。尖頭器の未製品ではないかと指導を受けたが、先端部の刃部と考えられる箇所に使用痕が認められることを考慮して本稿では石斧とした。安山岩製である。

石　核(図21・22)　1点であるが、細石刃核状の石核が出土している。

2)　第2群出土石器(図22～図25)

ナイフ形石器(図22・23)

1点のみ出土している。黒曜石製の縦長剥片を素材として基部側の一側縁を斜めに断ち切るように細部加工を施している(B_2類)。他の縁辺は無加工で、原石の表皮も取り除かれていない。

掻　器(図22・24～28　図23・29～32)

基本的には、24～27の円形を呈する一群(D類)と、29・30のエンド・スクレイパー(A類)の二種類がある。28は円形に近い類であるが、両端部に刃部を作出しており、複刃掻器とされるものである(C類)。また32は、端部と側縁に細部調整を施しており、削器に分類されるべきかもしれない。

削　器(図23・33～36)

4点の出土であるが、定型的なものはない。いずれも一側縁に細部調整を施して刃部を作出している。35は先端部を尖頭状にし、36は横長剥片の側縁に急斜な細部調整を行っており、あるいは掻器としているのかもしれない。

細部加工剥片・剥片(図24・図25・41)

37・38は黒曜石の使用痕の認められる剥片である。39～41は安山岩の比較的大形の剥片である。

石　核(図25・42)

1点出土している。第1群出土石核と同様、打面転移を繰り返しながら作出している。剥離面の観察では細石刃状の剥片しか作出できないように思われる。

3)　第3群出土石器(図26)

本群出土遺物は、一部の範囲の調査に終っていることもあり、製品は少ない。

ナイフ形石器（図26・43～45）

3点出土している。43はナイフに含めてよいかどうか疑問の残る石器である。44は折損品であるが、残存部の基部側は二側縁加工が行われ、先鋭な基部となっている（A_1類）。45も二側縁加工が行われ、先端部の部分は鋭い縁辺をそのまま残し、いわゆる切り出し状の形態を呈している（A_3類）。

石　核（図26・46・47）

46は小さな原石を用いて、二側面に作出痕を残す。46は安山岩製の石核である。全面に加工が加えられているが、作出面はほぼ正面に限られ、他は石核調整と考えられる。

4）　第4群出土石器（図27～図34）

ナイフ形石器（図27・48～52）

5点出土している。47は、先端部側一側縁に鋭い縁辺を残し他は全面に調整剥離が加えられている。形態的には、一側縁がほぼ直線的で、左右非対称となっている（A_1類）。49は基部側のみであるが、二側縁加工を行い鋭い基部を形成している（A_1類）。50は基部側一側縁のみに細かい加工を施しているが、形状は先頭状を呈す（B_1類）。51は調整加工において47と同様であるが、基部側は尖頭状にはならず幅広い基部を作っている（A_2類）。52は、横長の剥片を用いて二側縁に調整加工を施したもので、鋭い縁辺と二側縁の角度は大きい。形状は台形状を呈す（A_6類）。

掻　器（図27・53～図29）

19点図示した。黒曜石・安山岩の両方が用いられているが、黒曜石が圧倒的に多い。53～58は、縦長の剥片を用いて端部に刃部を作出したエンド・スクレイパーである（A類）。ただし53例のように分厚い刃部のものと、55例のようにきわめて薄い刃部をもつものの二者が存在している。60・62～71は素材の半周以上に細部調整加工を施したもので、掃指状及び円形掻器とされるものである（D類）。63・66・68は、裏面にも加工が施される。なお、59は尖頭状の掻器（B類）、61は複刃掻器（C類）で、両端にそれぞれ表裏から刃部を作出している。

削　器（図30・72～76）

剥片の縁辺に細部調整を施したもので、5点図示した。74は裏面の両縁辺に加工が施されている。76は第1次剥離面基部側に細部調整が施されるが、端部の調整加工は掻器の可能性もある。

細部加工剥片・ノッチ・石核調整剥片（図31・77～図32・90）

77は翼状の剥片で、基部側と一側縁に使用痕と思われる剥離痕が認められる。79は、ノッチ状の加工痕がある。80～89はそれぞれ不定形な剥片の縁辺に使用痕と思われる剥離痕を有するもので、87は細石刃状の形態を示す。90は石核調整剥片と思われるものである。

原石・石核（図32・91～図33）

91は拳大の黒曜石原石である。加工は全く行われていない。石核は7点図示した。92は上下両端に打面が用意されている。一面より打面を変えながら剥片を作出したものであろう。93・94は単設打面で円錐形を呈する石核である。93は一方向より、94は多方向より剥片剥離が行われている。95・96は打面を頻繁に転移しながら作出したものであろう。97は扁平な形態で、上下両端より作出されている。98は単設打面で、一方向より順次剥離されている。

5）　第5群石器（図35～図41）

ナイフ形石器（図35・99～101）

3点出土している。99は二側縁を調整加工し、鋭い縁辺とのなす角度が小さい先鋭な形態を呈す（A_1類）。

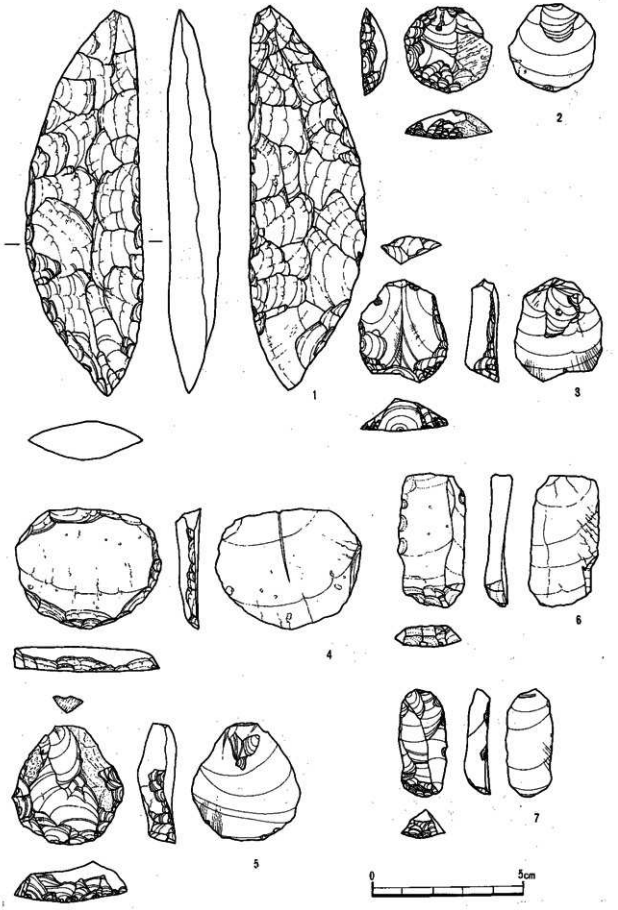


図17　第１群出土石器実測図 (1) 4：5

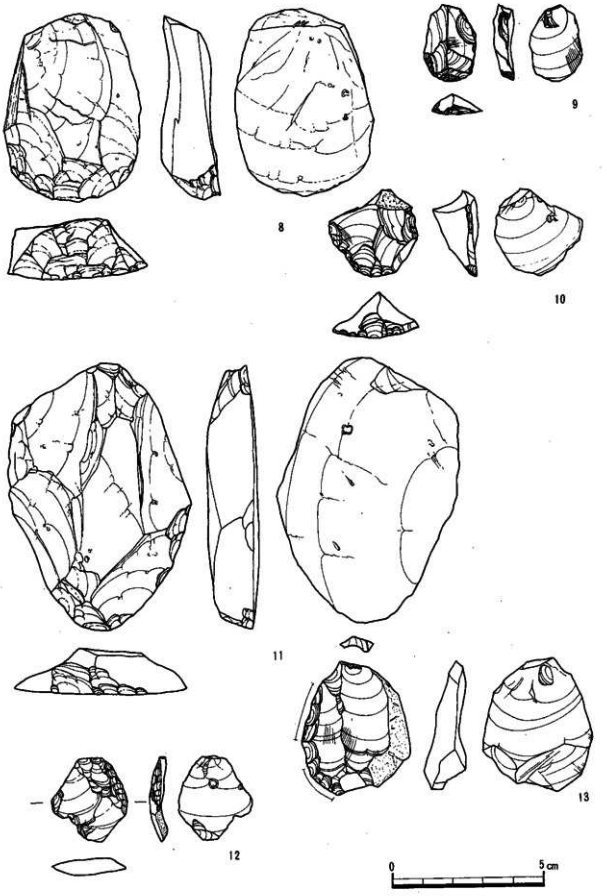


図18　第1群出土石器実測図 (2) 4：5

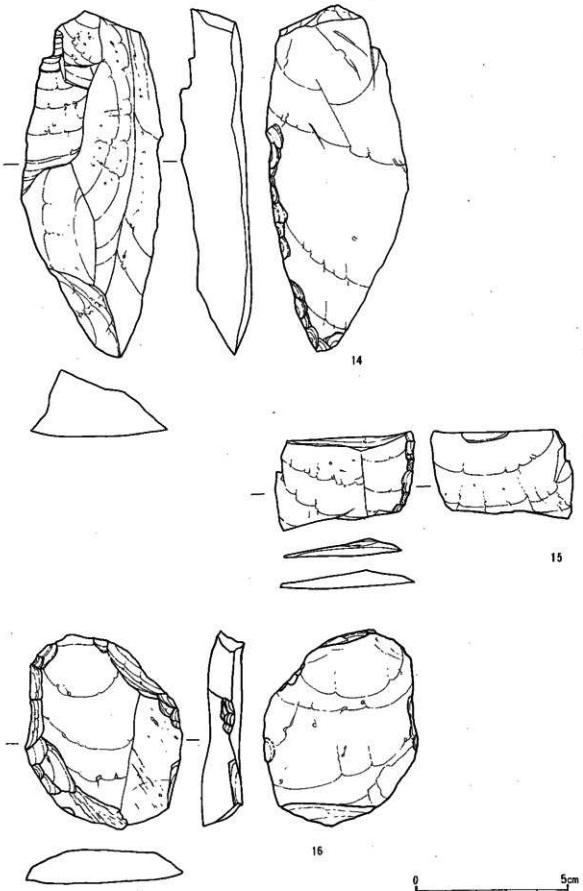


図19　第１群出土石器実測図 (3)　4：5

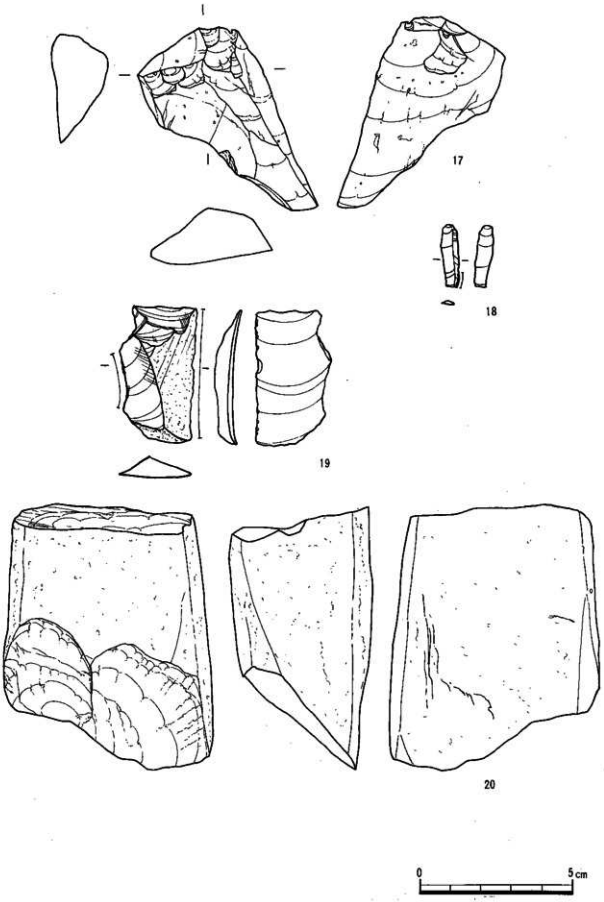


図20　第１群出土石器実測図 (4) 4：5

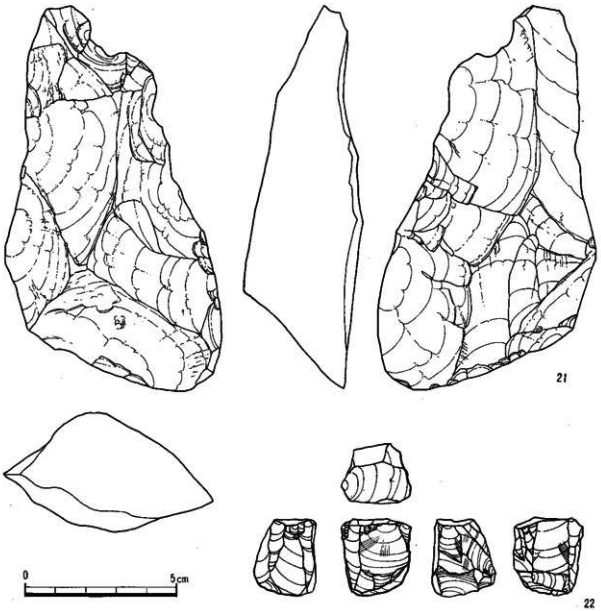


図21　第1群出土石器実測図 (5)　4：5

100も欠損品で全体の形状は不明であるが、基部側に調整加工が施されている。101は縦長の剝片を素材とし、基部側に調整加工を施したものである（B_2類）。打面調整はなされていない。

掻　器（図35・102～図37・116・図38・173・174）

縦長剝片の端部に刃部を作出したエンド・スクレイパー（102・103・105）は、全て安山岩を用いている（A類）。また、109・111・112・114は、黒曜石製のラウンド・スクレイパーである（D類）。113・115・116・174は安山岩製のそれであって、いずれも典型的なものといえる。108は両端に刃部を設けた複刃掻器である（C類）。これら各形態は、素材差により分厚い刃部をもつものと薄い刃部を形成するものとがある。

削　器（図37・117・118）

2点とも二側縁に調整加工を施したもので、石材は黒曜石を用いている。

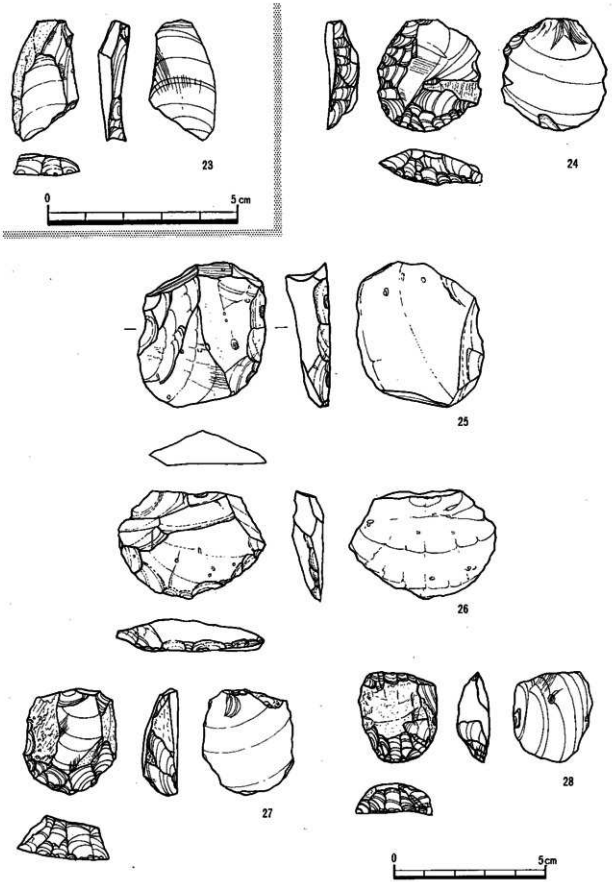


図22　第２群出土石器実測図 (1)　1：1　4：5

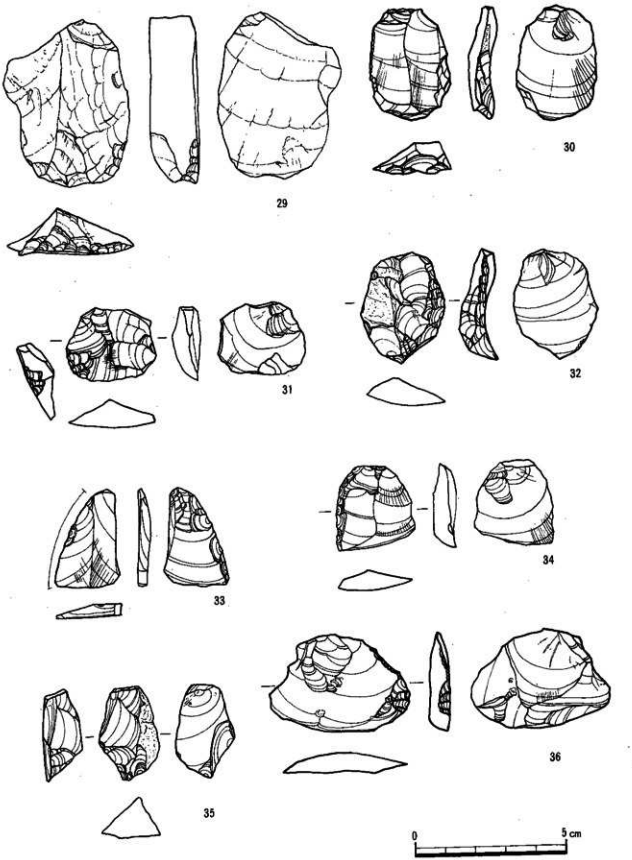
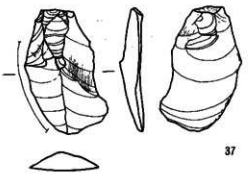
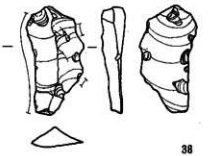
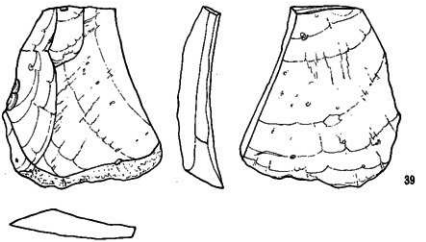


図23　第２群出土石器実測図 (2)　４：５







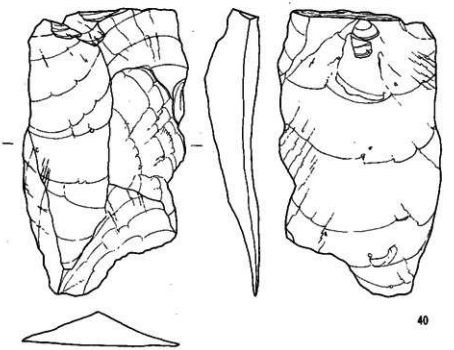


図24　第２群出土石器実測図 (3)　4：5

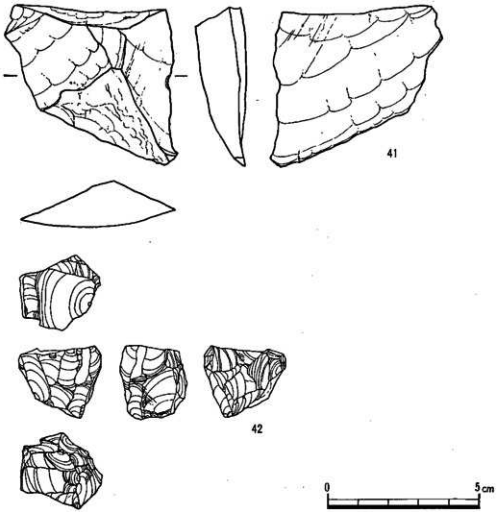


図25　第２群出土石器実測図 (4)　４：５

錐（図39・119）

１点出土している。安山岩の縦長剥片を用い、端部に両側より簡単な加工を施して錐状の刃部を作出している。基部側は、正面側より２回の加撃により素材を折取っている。

細部加工剥片・剥片（図39・120～図40・図38・175・176）

黒曜石製の剥片の縁辺に使用痕と思われる剥離痕をもつもの（120～126・130・131・175・176）である。多くは縦長の剥片であるが、細石刃状のもの（130・131）や翼状の剥片（176）もある。また、火熱を受けたと思われる剥片が多く、特に131はトロトロしている。127～129は安山岩の大形剥片である。正面側は多方向からの剥離が行われている。

石　核（図41・132・133）

132は、下端部・裏面に自然面を残す。打面は、大きな剥離によって平坦な面が形成されている。全体の形状は円錐状を呈す。133は上下に打面をもつ扁平な残核である。

６）　第６群出土石器（図42～図48）

ナイフ形石器（図42・134～140）

７点出土している。134～136は鋭い先端と基部をもち、長軸の一端に接する部分に鋭い縁辺を残すもの

である（A_1類）。137は火熱を受けたものと思われ、トロトロであるため細部加工は判然としないが、基部側の一側縁のみ加工が施されているものと思われる（B_1類）。138は136等と同様な調整加工が加えられるが、基部側は鋭い端部とはならずにやや幅広な面が形成されている（A_2類）。139・140は折損品のため全体の形状は不明であるが、加工は基部側一側縁に限られるようである。

掻　器（図42・141～図44・154）

エンド・スクレイパー（141）のほかに、寸詰まりの剥片の一部に刃部を作出したものが多い。短形掻器・掻指状掻器と呼ばれるものであろう。

削　器（図44・155～図45・160）

160は大形の横長の剥片を素材として、ほぼ全周に調整加工を施して刃部としたもので、尖頭状の形態を呈す。自然面を残しているところから、角礫の石核調整時のものと思われる。157は剥片の一部に加工

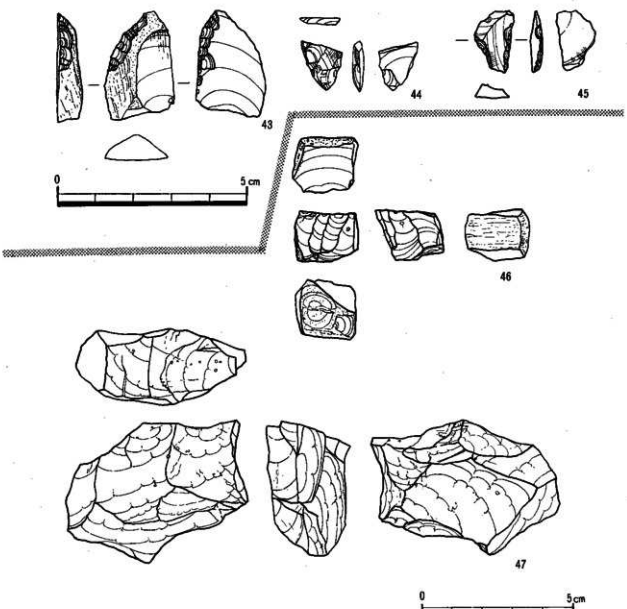


図26　第3群出土石器実測図　1：1　4：5

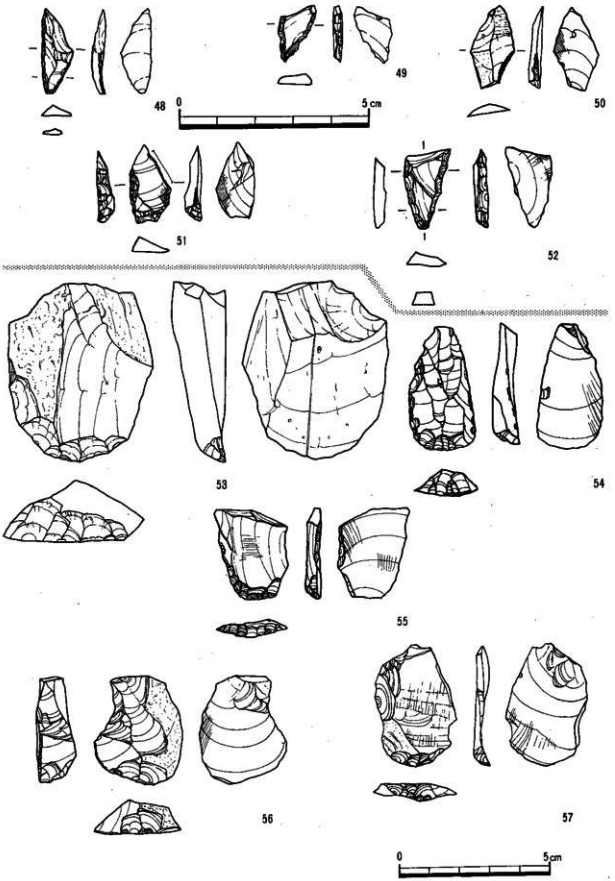


図27　第４群出土石器実測図 (1)　1：1　4：5

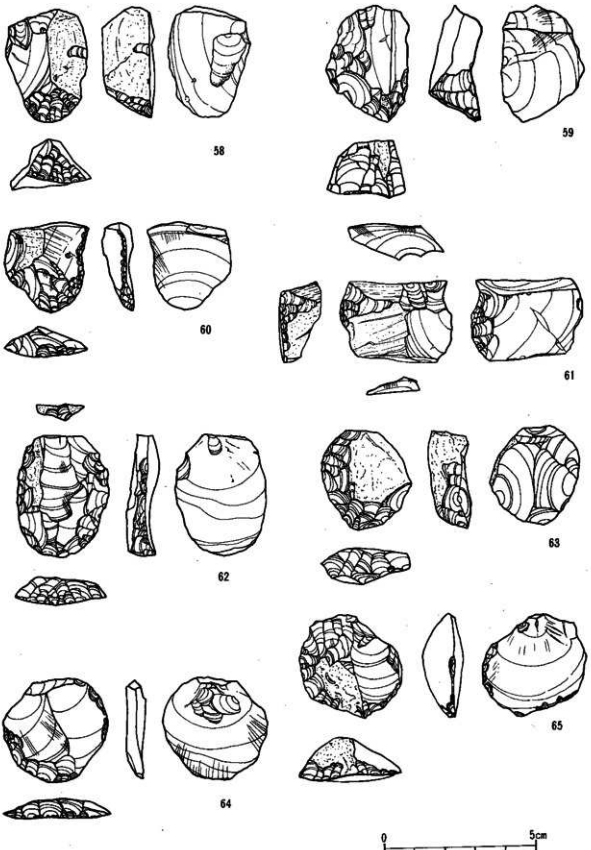


図28　第4群出土石器実測図 (2)　4：5

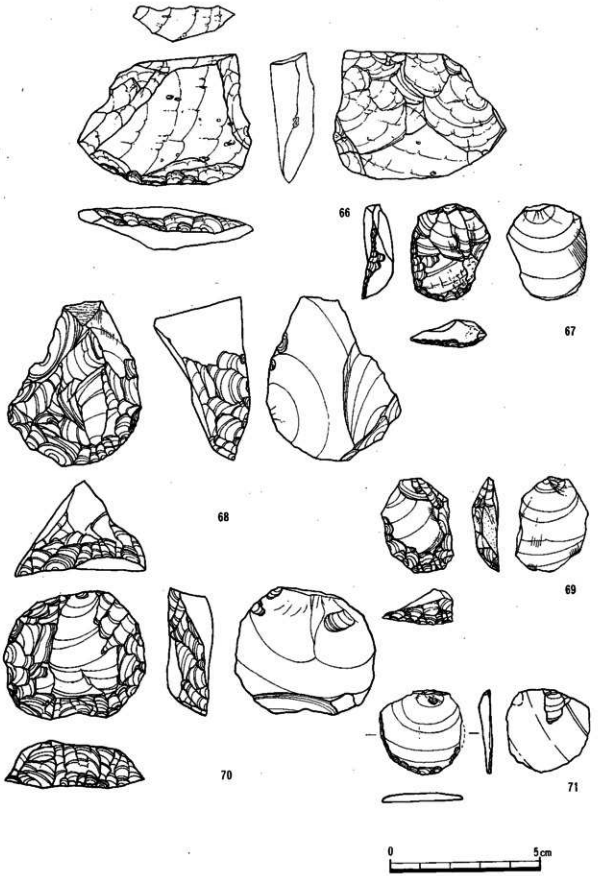


図29　第4群出土石器実測図 (3)　4：5

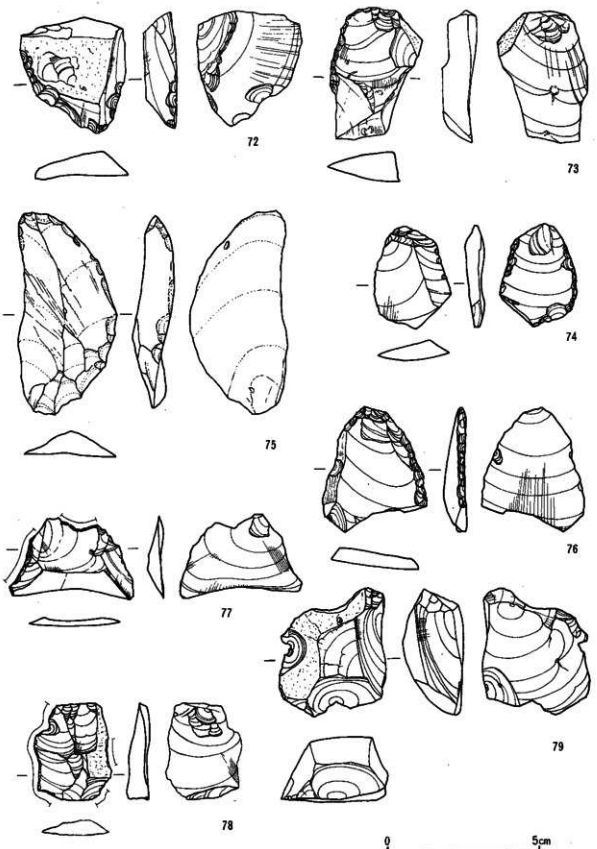


図30　第4群出土石器実測図 (4)　4：5

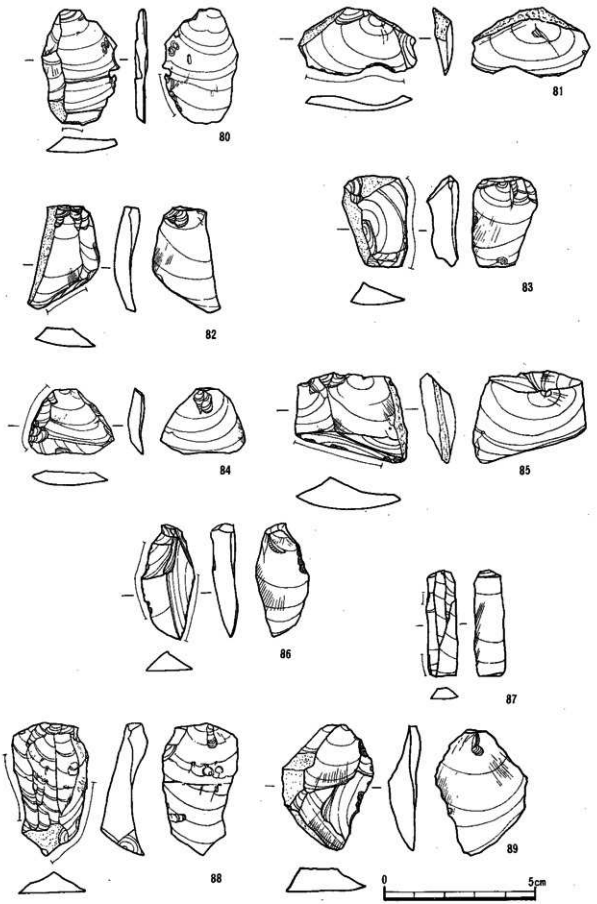


図31　第4群出土石器実測図 (5)　4：5

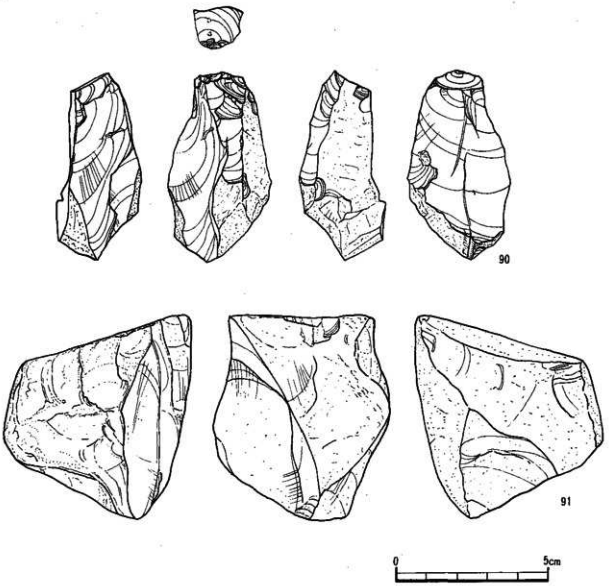


図32　第4群出土石器実測図 (6)　4：5

を施しており、形状はノッチ状を呈している。

159・160は頁岩製であり、今回の調査区で本石材の製品はこの2点のみである。第6群の集中部より若干距離をおいての出土のため、本群石器の組成に加えることは石材の差もあり検討を要しよう。2点とも縦長の刃器状剥片を素材とし、縁辺の全周に調整加工が加えられている。

錐（図45・161）

1点の出土であるが、形態等は第5群出土例（119）に似る。本例は黒曜石製である。

細部加工剥片・剥片（図45・162・図46・167）

縦長剥片の縁辺に使用痕状の剥離が認められるものである。166・167は細石刃状の剥片である。

石　核（図47）

小さな黒曜石の原石を用いている。168は下端・裏面に自然面を残し、ほぼ一面より縦長状の剥片を作出している。169は打面を正面・裏面交互に剥離しており、形状は両刃礫器状を呈する。170は裏面に自

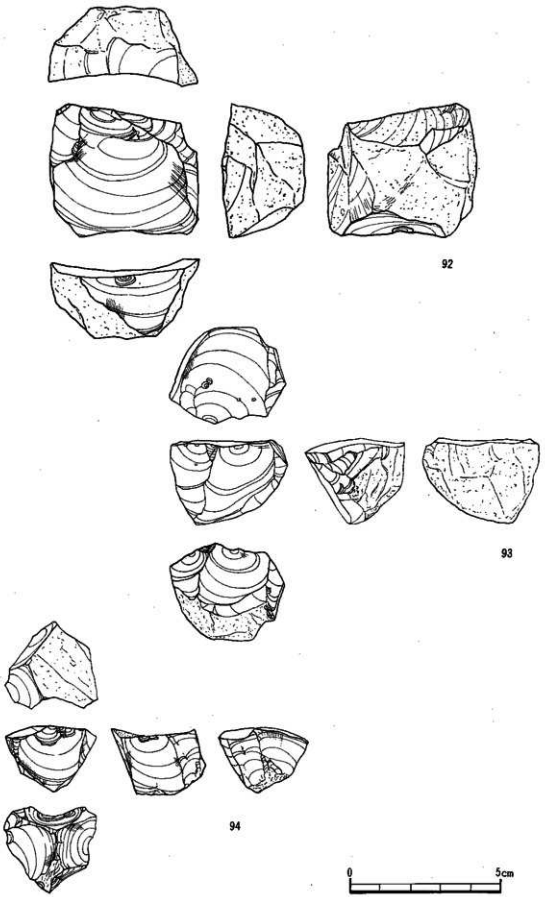


図33　第４群出土石器実測図 (7)　４：５

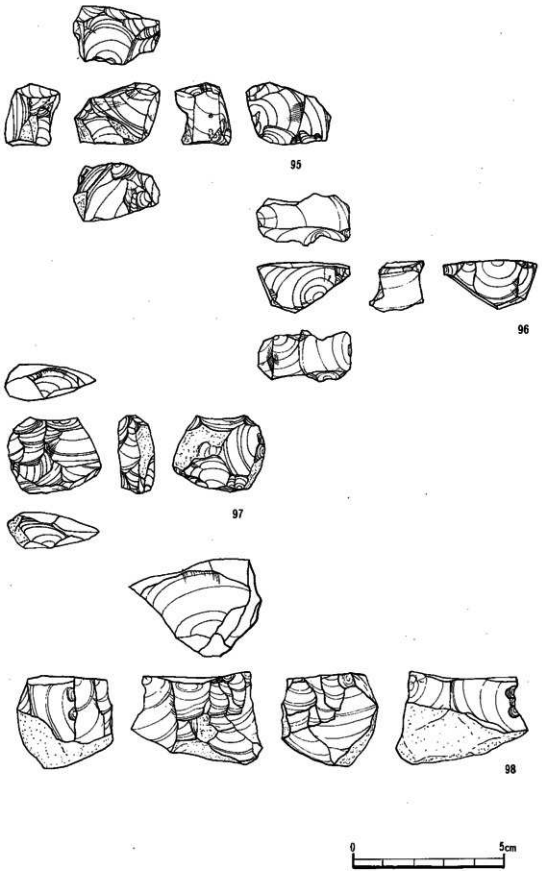
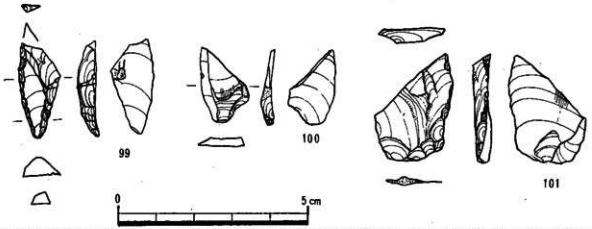


図34　第4群出土石器実測図 (8)　4：5



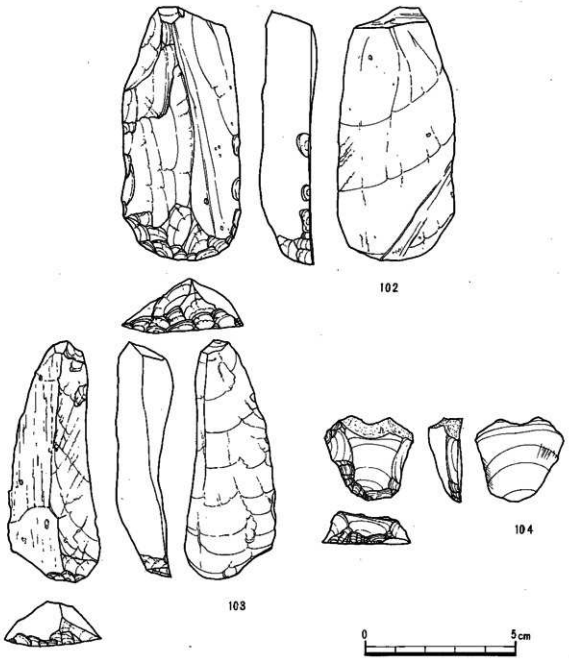


図35　第５群出土石器実測図 (1)　1：1　4：5

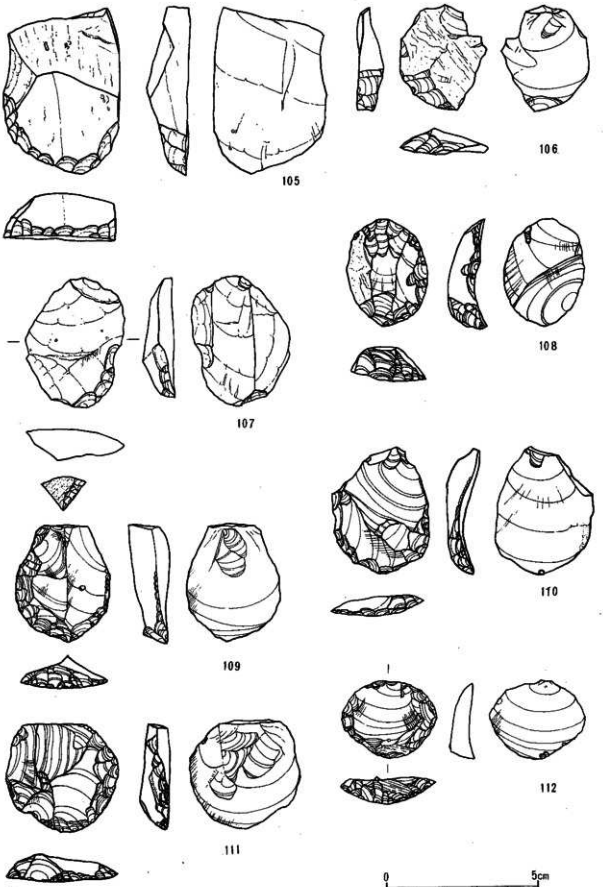


図36　第5群出土石器実測図 (2)　4：5

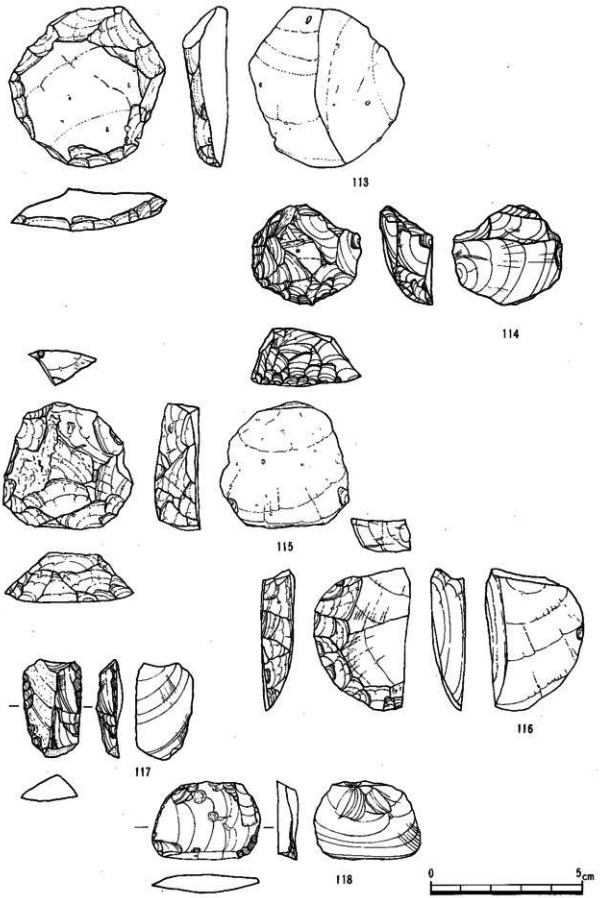


図37　第５群出土石器実測図 (3)　４：５

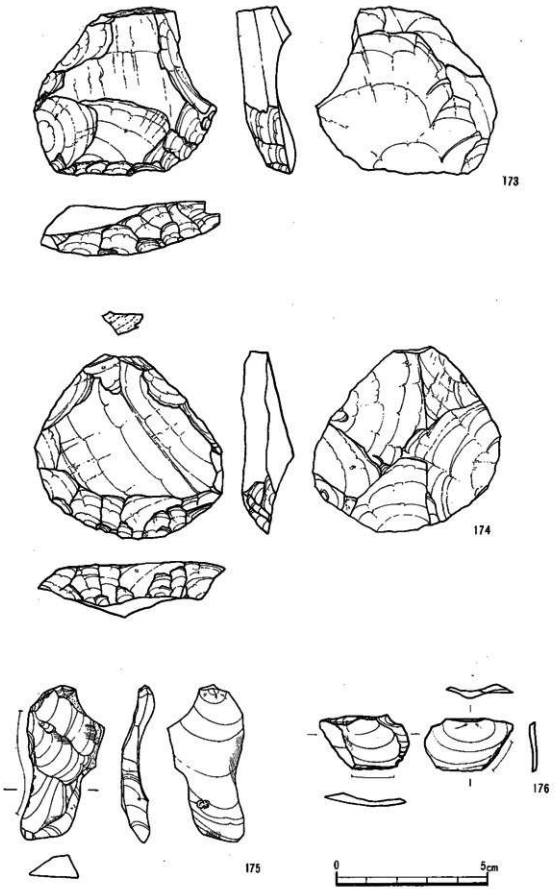


図38　第5群出土石器実測図 (4)　4：5

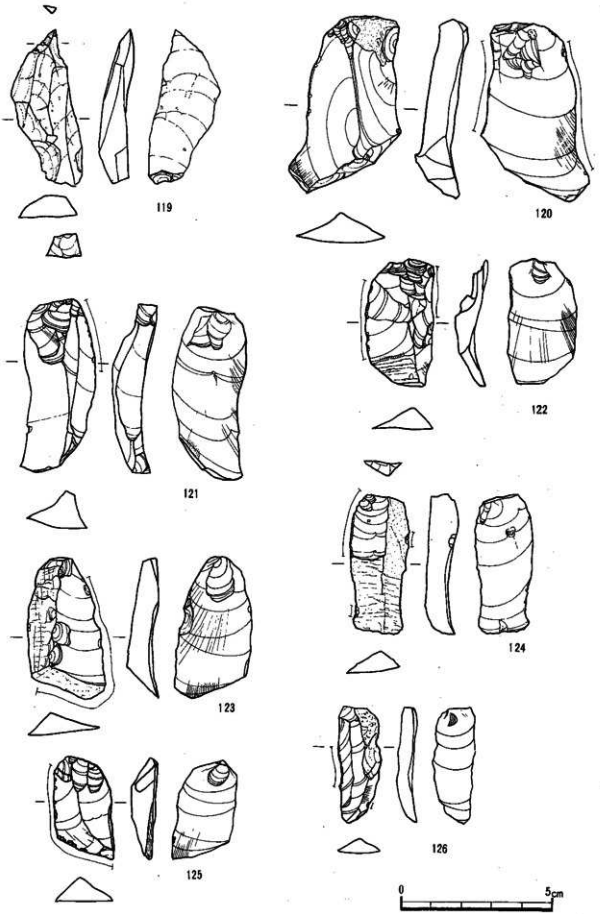


図39　第５群出土石器実測図 (5)　４：５

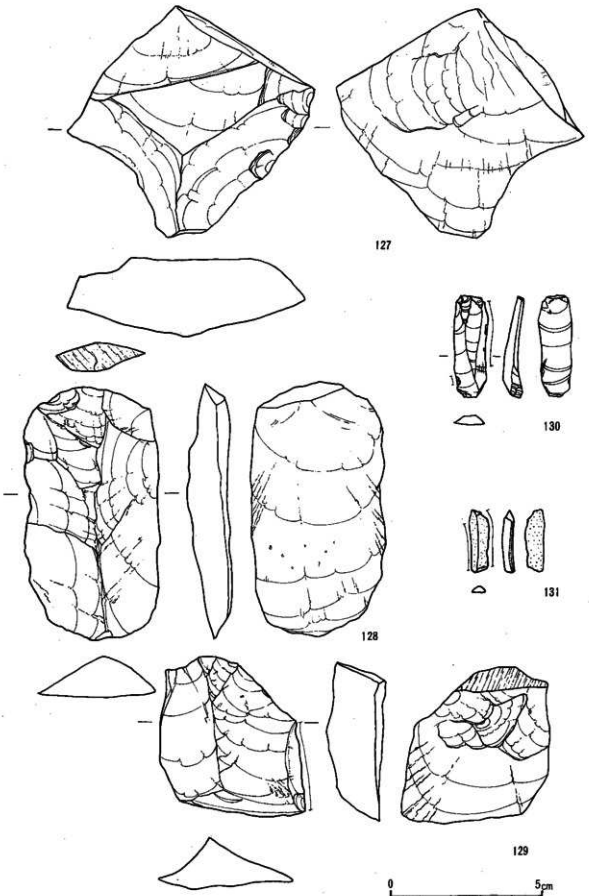


図40　第5群出土石器実測図 (6)　4：5

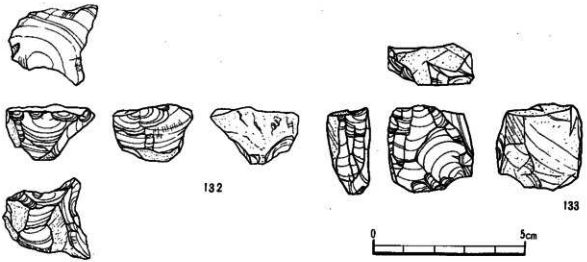


図41　第５群出土石器実測図 (7)　４：５

然面を残し、一面より石核調整を行いながら順次横長の剥片を作出している。

敲石・礫器（図48・171・172）

171は断面が三角形を呈する敲石である。端部に潰れ痕を有し、もう一方の端部は、ほぼ水平に割取っている。172は片刃状の礫器と考えた石器で、礫を一方からの加撃で分割している。刃部は、明瞭ではないが細部加工を施していると思われる。

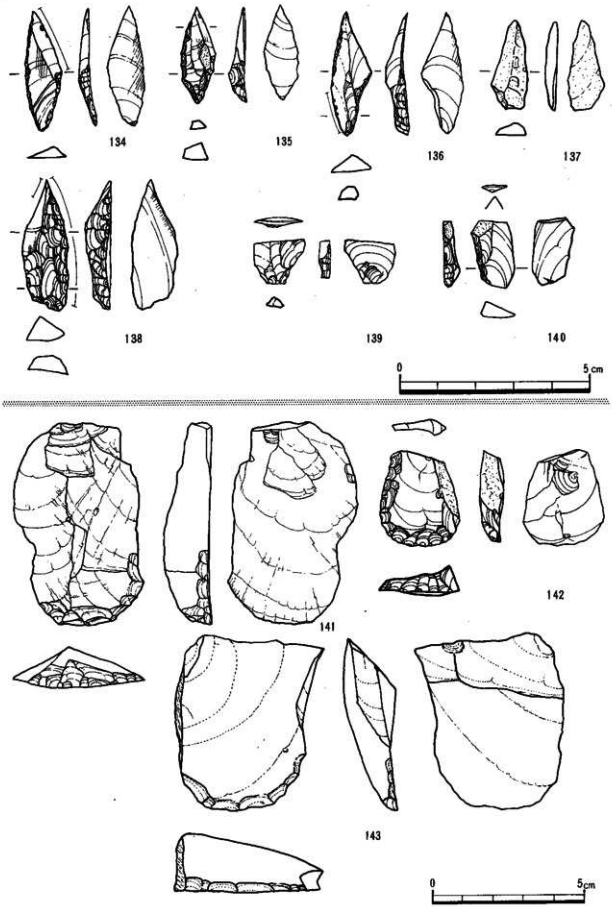


図42　第6群出土石器実測図 (1)　1：1　4：5

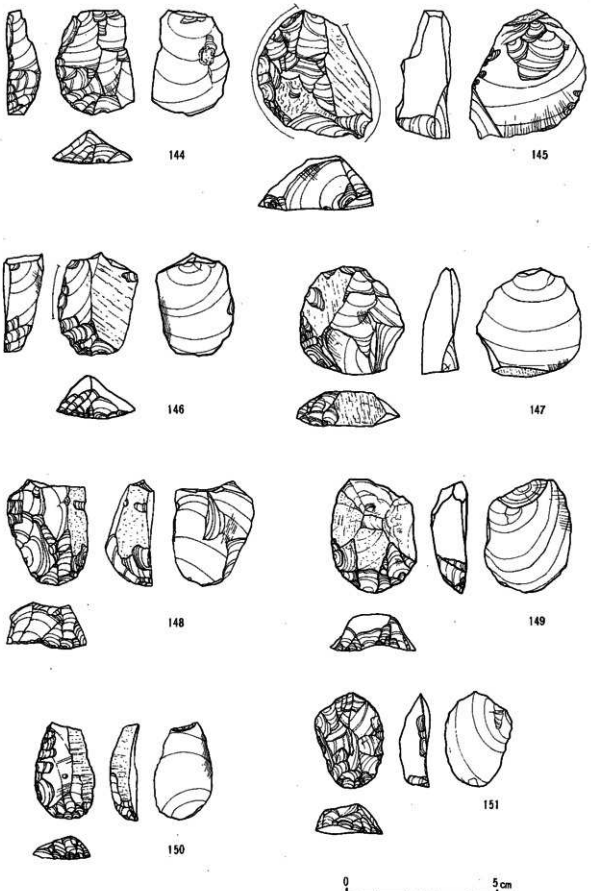


図43　第6群出土石器実測図 (2)　4：5

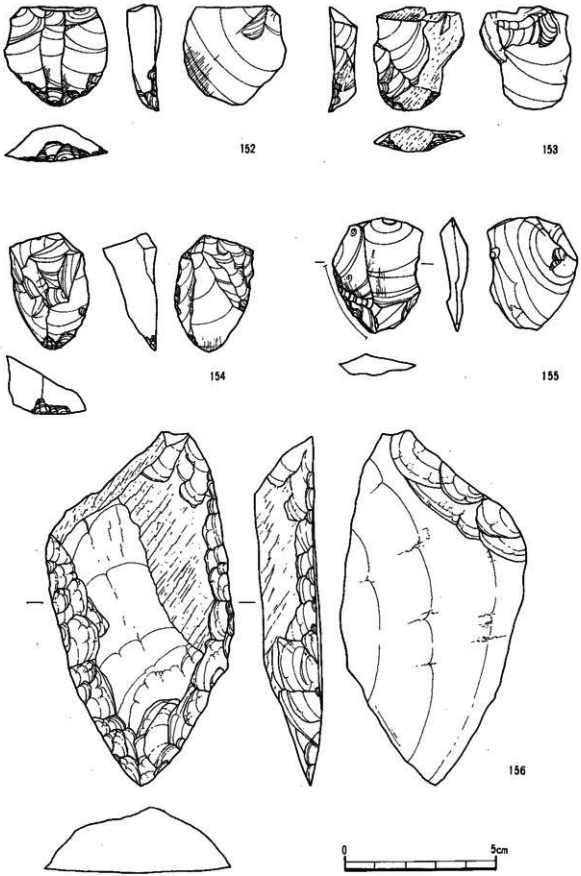


図44　第6群出土石器実測図 (3)　4：5

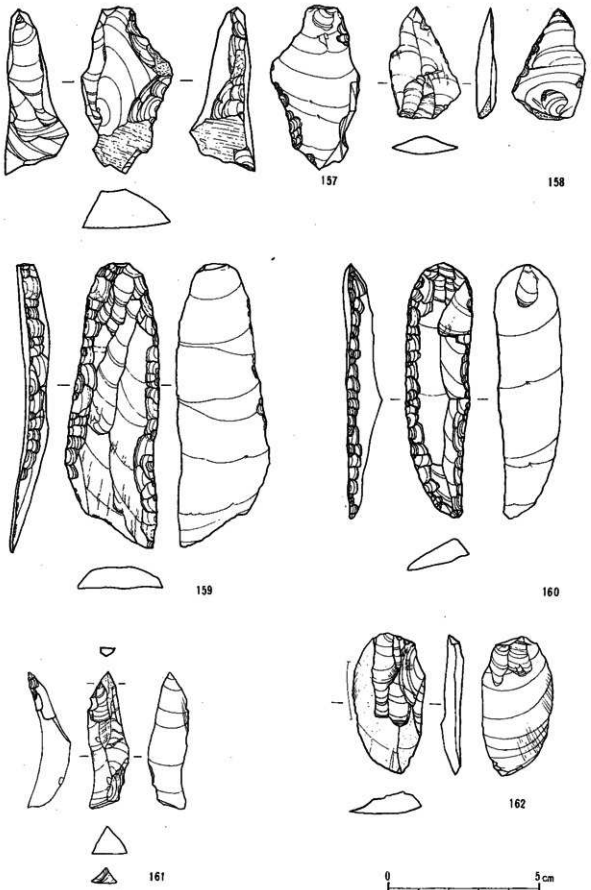


図45　第６群出土石器実測図 (4)　４：５

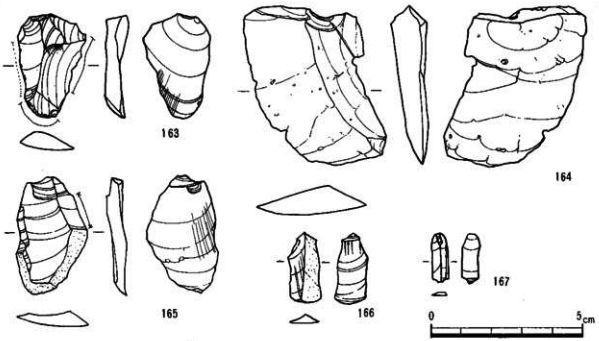


図46　第6群出土石器実測図 (5)　4：5

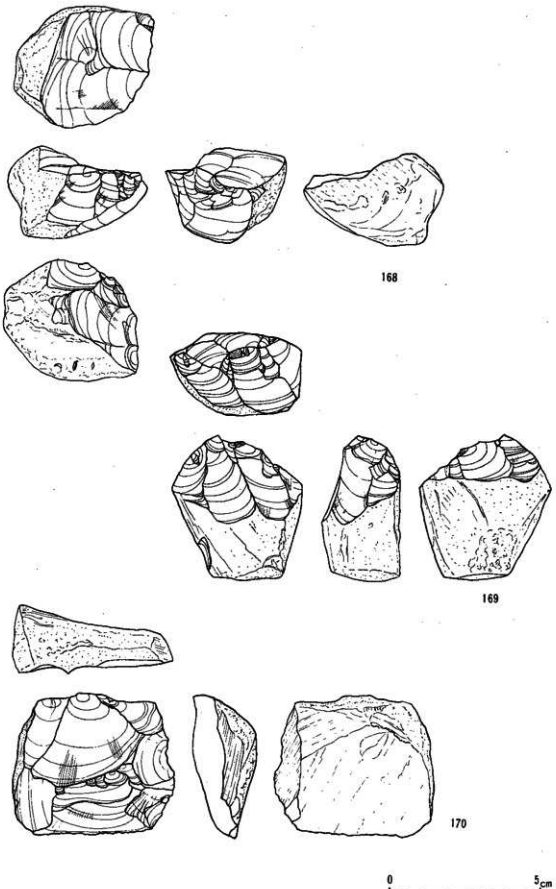


図47　第６群出土石器実測図 (6)　4：5

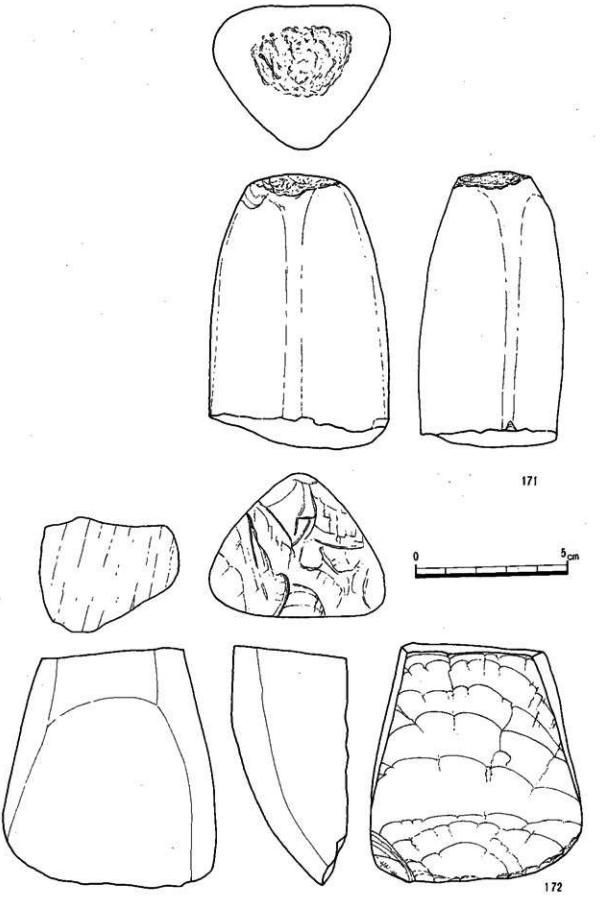


図48　第6群出土石器実測図 (7)　4：5

番号	群	石器名	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	標高m	備考	石器固体番号
1	1	尖頭器	安山岩	12.7	3.9	1.8	68.0		326.575		150
2	1	掻器	黒曜石	2.8	2.9	0.9	0.5		——		F4—1
3	1	掻器	黒曜石	3.4	2.9	1.1	9.3		326.723		144
4	1	掻器	安山岩	4.0	4.8	0.9	19.0		——		G3—2
5	1	掻器	黒曜石	3.9	3.7	1.3	16.2		326.443		128
6	1	掻器	安山岩	4.4	2.3	0.8	8.5		326.528		152
7	1	掻器	黒曜石	3.5	1.6	1.0	4.2		326.283		104
8	1	掻器	安山岩	6.1	4.6	1.9	63.5		327.925		164
9	1	掻器	黒曜石	2.6	1.8	0.8	2.1		——		G3—56
10	1	掻器	黒曜石	2.8	2.9	1.5	0.2		326.495		112
11	1	掻器	安山岩	8.8	6.1	1.6	85.2		326.503		113
12	1	削器	黒曜石	2.8	2.6	0.6	2.6		——		F4—6
13	1	掻器	黒曜石	4.3	3.6	1.5	18.2		326.627		141
14	1	削器	安山岩	11.4	4.7	2.3	106.8		326.628		139
15	1	削器	安山岩	3.0	4.3	0.5	11.4	○	——		G3—54
16	1	剥片	安山岩	6.6	5.2	1.4	56.0		326.538		175
17	1	剥片	安山岩	6.0	5.9	4.1	36.4		——		G4—10
18	1	剥片	黒曜石	2.1	0.6	0.3	2.9		——	使用痕	G4—12
19	1	剥片	黒曜石	4.5	2.5	0.9	7.7	○	——	使用痕	G4—29
20	1	礫器		8.7	7.0	4.7	398.4	○	326.628		140
21	1	打製石斧	安山岩	12.6	7.2	4.0	250.7		——		G4—5
22	1	石核	黒曜石	2.5	2.3	2.3	13.7		——		G3—15
23	2	ナイフ形石器	黒曜石	3.2	1.9	0.8	3.6		326.975		E6—44
24	2	掻器	黒曜石	3.7	3.5	1.1	12.5		326.991		329
25	2	掻器	安山岩	4.7	4.2	1.5	30.5		327.015		E6—38
26	2	掻器	安山岩	3.5	4.9	1.1	19.3		327.022		301
27	2	掻器	黒曜石	3.5	3.1	1.2	15.6		326.985		E6—101
28	2	掻器	黒曜石	3.0	2.7	1.2	7.3		326.970		E6—84
29	2	掻器	安山岩	5.5	4.1	1.6	34.9	○	326.983		335
30	2	掻器	黒曜石	3.7	2.7	1.1	8.5		327.114		341
31	2	掻器	黒曜石	2.4	3.0	1.0	4.6		326.976		242
32	2	削器	黒曜石	3.6	2.8	1.4	7.7		326.910		E6—18
33	2	削器	黒曜石	3.2	2.2	0.6	6.1		326.970	使用痕	E6—9
34	2	削器	黒曜石	2.8	2.7	0.9	4.8		326.940		E6—79
35	2	削器	黒曜石	3.0	2.0	1.3	17.8		327.029		331
36	2	削器	黒曜石	3.2	4.5	0.7	10.5		326.979		283
37	2	剥片	黒曜石	4.1	2.7	0.8	5.1		326.975	使用痕	248
38	2	剥片	黒曜石	3.6	1.9	0.8	2.7		326.895	使用痕	240
39	2	剥片	安山岩	6.0	5.3	1.5	30.7	○	326.960		E6—65
40	2	剥片	安山岩	9.7	5.5	2.0	70.1		327.050		E6—36
41	2	剥片	安山岩	5.3	5.7	1.8	34.9	○	327.039		273
42	2	石核	黒曜石	2.4	2.2	2.5	13.1		326.955		311
43	3	ナイフ形石器	黒曜石	2.8	1.9	0.7	3.2		327.240		D5—7
44	3	ナイフ形石器	黒曜石	1.3	1.1	0.3	0.3	○	327.155		D5—3

表3　掲載石器計測表 (1)

番号	群	石器名	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	標高m	備考	石器固体番号
45	3	ナイフ形石器	黒曜石	1.1	1.0	0.4	0.4		327.263		260
46	3	石核	黒曜石	2.0	2.1	2.2	8.5		327.020		196
47	3	石核	安山岩	4.8	6.0	2.8	68.7		327.245		D5—8
48	4	ナイフ形石器	黒曜石	2.3	0.9	0.5	0.5		327.010	火熱	F8—32
49	4	ナイフ形石器	黒曜石	1.5	1.0	0.3	0.4	○	327.080		E8—21
50	4	ナイフ形石器	黒曜石	2.2	1.2	0.4	0.6	○	326.990		F7—13
51	4	ナイフ形石器	黒曜石	2.1	1.1	0.6	0.8		327.107		F8—177
52	4	ナイフ形石器	黒曜石	2.1	1.3	0.4	0.9		327.050		F8—241
53	4	掻器	安山岩	5.9	4.8	2.1	53.6		327.198		521
54	4	掻器	黒曜石	4.0	2.2	0.9	6.1		326.785		F7—96
55	4	掻器	黒曜石	3.0	2.6	0.7	4.0		327.005		F7—4
56	4	掻器	黒曜石	3.5	2.9	1.3	10.7		327.988		561
57	4	掻器	黒曜石	4.0	2.8	0.6	6.0		326.835		F7—61
58	4	掻器	黒曜石	3.7	2.7	1.8	14.0		327.010		F8—43
59	4	掻器	黒曜石	4.1	2.2	1.9	13.1		326.910		F7—81
60	4	掻器	黒曜石	3.0	2.7	1.0	7.1		326.883		637
61	4	掻器	黒曜石	2.7	3.7	1.5	12.4		326.863		456
62	4	掻器	黒曜石	4.1	3.1	1.1	18.5		—		F7
63	4	掻器	黒曜石	3.2	3.0	1.4	13.3		326.928		466
64	4	掻器	黒曜石	3.9	3.4	0.6	9.1		326.773		640B
65	4	掻器	黒曜石	3.4	3.4	1.5	13.8		327.060		89
66	4	掻器	安山岩	4.3	5.7	1.4	35.2		327.185		E8—57
67	4	掻器	黒曜石	3.2	2.7	3.1	6.6		327.158		419
68	4	掻器	黒曜石	5.4	4.4	3.1	45.6		326.950		F8—220
69	4	掻器	黒曜石	31	2.4	0.1	68		326.748		629
70	4	掻器	黒曜石	4.2	4.7	1.6	30.6		327.278		612
71	4	掻器	黒曜石	2.8	2.8	0.5	3.1		326.918		396
72	4	削器	黒曜石	3.8	3.5	1.1	11.1		326.935		F8—41
73	4	削器	黒曜石	4.3	3.0	1.2	12.5		327.015		F8—238
74	4	削器	黒曜石	3.4	2.5	0.7	4.7		327.033		615
75	4	削器	安山岩	6.6	3.3	1.4	20.0		327.085		E8—41
76	4	削器	黒曜石	4.1	3.5	0.8	7.2		326.933		F8—16
77	4	剥片	黒曜石	2.7	4.1	0.5	3.6		326.950	使用痕	F8—139
78	4	剥片	黒曜石	3.2	2.5	0.8	5.1		326.078	使用痕	583
79	4	ノッチ	黒曜石	4.1	3.7	2.0	26.0		326.953		594
80	4	剥片	黒曜石	3.9	2.7	0.5	6.2		—	使用痕	—
81	4	剥片	黒曜石	2.2	4.0	0.7	5.6		326.961	使用痕	389
82	4	剥片	黒曜石	3.5	2.3	0.8	4.2		326.953	使用痕	594
83	4	剥片	黒曜石	3.0	2.1	1.0	5.1		326.958	使用痕	596
84	4	剥片	黒曜石	2.2	2.9	0.6	2.7		326.913	使用痕	542
85	4	剥片	黒曜石	3.0	3.8	1.2	8.8		326.993	使用痕	586
86	4	剥片	黒曜石	3.8	1.7	0.8	3.0		326.913	使用痕	443
87	4	剥片	黒曜石	3.5	1.1	0.6	1.3		327.065	使用痕	F8—193
88	4	剥片	黒曜石	4.4	2.4	1.5	9.0		327.163	使用痕	408

表4　掲載石器計測表 (2)

番号	群	石器名	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	標高m	備考	石器固体番号
89	4	剝片	黒曜石	3.2	2.4	0.6	8.6		326.980	使用痕	——
90	4	剝片	黒曜石	6.4	3.4	2.9	49.6		326.925		F8—35
91	4	原石	黒曜石	6.7	6.2	6.0	246.6		326.928		472
92	4	石核	黒曜石	4.9	4.5	2.8	52.2		326.920		F8—56
93	4	石核	黒曜石	2.9	3.9	3.3	30.6		326.990		F8—27
94	4	石核	黒曜石	2.1	3.0	3.2	13.3		327.040		E8—13
95	4	石核	黒曜石	2.0	2.9	1.9	10.4		327.075		E8—39
96	4	石核	黒曜石	1.6	3.1	1.8	7.7		326.873		548
97	4	石核	黒曜石	2.9	2.9	1.4	12.9		327.828		698
98	4	石核	黒曜石	3.2	4.4	3.2	35.5		——		——
99	5	ナイフ形石器	黒曜石	3.1	1.9	0.7	1.1	○	327.435		D7—45
100	5	ナイフ形石器	黒曜石	2.1	1.2	0.4	0.6	○	327.443	火熱	483
101	5	ナイフ形石器	黒曜石	2.9	2.0	0.6	2.2	○	328.003		767
102	5	掻器	安山岩	8.4	4.0	1.8	73.7		327.698		653
103	5	掻器	安山岩	7.9	3.1	1.5	37.0		327.165		86
104	5	掻器	黒曜石	2.7	3.0	1.2	6.4		327.595		40
105	5	掻器	安山岩	5.5	3.8	1.3	34.6	○	327.683		681
106	5	掻器	黒曜石	3.5	2.9	1.0	6.9		327.588		643
107	5	掻器	安山岩	4.4	3.2	1.1	14.1		327.442		365
108	5	掻器	黒曜石	3.5	2.7	1.3	8.5		327.853		737
109	5	掻器	黒曜石	3.8	3.1	1.1	12.2		327.342		358
110	5	掻器	黒曜石	4.6	3.6	0.7	9.4		327.878		655
111	5	掻器	黒曜石	3.6	3.7	0.9	14.6		327.344		359
112	5	掻器	黒曜石	2.5	3.2	1.0	7.7		327.550		D7—2
113	5	掻器	安山岩	5.3	5.1	1.6	32.9		327.728		711
114	5	掻器	黒曜石	3.3	3.2	1.8	18.5		327.890		18
115	5	掻器	安山岩	4.2	4.3	1.5	32.8		327.645		C7—21
116	5	掻器	黒曜石	4.8	3.2	1.2	20.9	○	327.740		29
117	5	削器	安山岩	3.2	2.0	0.9	4.9		327.690		C7—9
118	5	削器	黒曜石	2.6	3.6	0.8	7.5		327.575		C7—88
119	5	錐	安山岩	5.1	2.4	1.1	7.8		327.998		662B
120	5	剝片	黒曜石	6.0	3.6	1.6	0.9		327.533		645
121	5	剝片	黒曜石	5.7	2.9	1.3	15.1		327.530		C7—131
122	5	剝片	黒曜石	4.1	2.3	0.7	6.7		327.518	使用痕	644
123	5	剝片	黒曜石	4.7	2.6	1.0	9.1		327.853	使用痕	700
124	5	剝片	黒曜石	4.6	2.0	1.0	6.9		327.828	使用痕	696
125	5	剝片	黒曜石	3.3	2.1	0.8	4.2		327.610	使用痕	C7—84
126	5	剝片	黒曜石	3.8	1.5	0.7	3.1		327.528	使用痕	487
127	5	剝片	安山岩	7.5	8.2	3.1	111.8		327.530	使用痕	C7—94
128	5	剝片	安山岩	8.3	4.6	1.5	60.4		327.808		726
129	5	剝片	安山岩	5.2	4.9	1.9	38.5		328.238		765
130	5	剝片	黒曜石	3.4	1.7	0.8	1.8		327.790	使用痕	HY27
131	5	剝片	黒曜石	2.0	0.7	0.4	1.5	○	327.525	使用痕・火熱	C7—105
132	5	石核	黒曜石	1.9	3.0	2.6	60.0		327.693		708

表5　掲載石器計測図 (3)

番号	群	石器名	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	標高m	備考	石器固体番号
133	5	石核	黒曜石	2.9	2.9	1.4	12.9		327.828		698
134	6	ナイフ形石器	黒曜石	3.2	1.0	0.4	0.7		327.888		998
135	6	ナイフ形石器	黒曜石	3.2	1.2	0.7	0.6		327.690		D9—7
136	6	ナイフ形石器	黒曜石	3.2	1.1	0.7	1.0		327.960		D10—77
137	6	ナイフ形石器	黒曜石	2.4	1.0	0.4	0.6		327.885	火熱	D10—33
138	6	ナイフ形石器	黒曜石	4.3	1.6	0.9	2.2		327.828		703
139	6	ナイフ形石器	黒曜石	1.1	1.4	0.4	0.5	○	327.840		D9—34
140	6	ナイフ形石器	黒曜石	1.7	1.2	0.5	0.7	○	327.790		D9—10
141	6	掻器	安山岩	6.6	4.3	1.4	33.4		327.808		916
142	6	掻器	黒曜石	3.4	2.9	0.1	6.8		328.108		1028
143	6	掻器	安山岩	5.9	4.9	1.8	48.4		327.963		964
144	6	掻器	黒曜石	3.5	2.6	1.7	6.8		327.828		920
145	6	掻器	黒曜石	4.2	3.8	1.8	21.9		327.563		900
146	6	掻器	黒曜石	3.4	2.6	1.4	9.7		328.048		799
147	6	掻器	黒曜石	3.5	3.4	1.1	14.2		327.900		D10—50
148	6	掻器	黒曜石	3.4	2.7	1.6	14.1		327.968		967
149	6	掻器	黒曜石	3.7	2.9	1.3	13.2		327.818		859
150	6	掻器	黒曜石	3.2	2.0	1.0	4.2		327.843		835
151	6	掻器	黒曜石	3.1	2.3	1.1	5.6		327.933		999
152	6	掻器	黒曜石	3.5	3.4	1.2	10.9		327.855		D10—41
153	6	掻器	黒曜石	3.4	3.0	1.0	7.2		327.928		979
154	6	掻器	黒曜石	3.8	2.6	1.8	9.9		327.938		969
155	6	削器	黒曜石	3.7	3.0	0.8	7.9		327.928		931
156	6	削器	安山岩	11.6	6.2	2.3	150.8		328.098		792
157	6	削器	黒曜石	5.5	3.0	2.2	18.3		327.933		888
158	6	削器	黒曜石	3.7	2.4	0.7	3.9		327.910		D10—22
159	6	削器	頁岩	9.3	3.2	1.3	26.9		327.968		780
160	6	削器	頁岩	8.9	2.1	1.1	15.1		328.038		781
161	6	錐	黒曜石	4.5	1.4	0.9	3.8		328.020		D10—105
162	6	剝片	黒曜石	4.7	2.4	0.8	6.2		328.113	使用痕	810
163	6	剝片	黒曜石	3.4	2.3	0.8	3.2		327.858	使用痕	878
164	6	剝片	安山岩	5.3	4.7	1.2	21.1		327.838		984
165	6	剝片	黒曜石	4.0	2.4	0.6	3.5		327.718	使用痕	858
166	6	剝片	黒曜石	2.4	1.1	0.4	0.8	○	328.023		797
167	6	剝片	黒曜石	1.6	0.6	0.2	0.2	○	328.298		789
168	6	石核	黒曜石	3.1	4.5	4.0	44.8		327.438		848B
169	6	石核	黒曜石	4.8	4.4	2.7	58.4		327.853		861
170	6	石核	黒曜石	4.7	5.4	2.1	49.2		327.545		F10—9
171	6	敲石	——	9.1	6.0	4.8	392.4		327.933		1023
172	6	礫器	——	8.1	7.2	3.7	281.6		328.218		783B
173	5	掻器	安山岩	5.5	6.0	1.9	58.3		327.475		C7—103
174	5	掻器	安山岩	6.1	6.2	1.8	62.3		327.278		346
175	5	剝片	黒曜石	5.2	2.8	1.2	6.9		327.443		C7—111B
176	5	剝片	黒曜石	1.8	3.0	0.5	1.5		327.858		691

表6　掲載石器計測表 (4)

4　日焼遺跡の石器群について

A　各群の石器組成について

1～6群の石器組成については 図49 にまとめた。まず各群別の特徴を掲げ、次に石器形態の相違について触れて行くこととする。

第1群の石器組成の特徴は、1点のみであるが尖頭器を組成としていることにある。両面を丁寧に仕上げた半月形を呈している。これに掻器A・C・D、削器・石核などが加わる点は他の群と同様である。ただし、打製石斧と思われる石器も出土している。第2群は、B_2形態のナイフ形石器に掻器A・B・D、削器・石核が伴う。第3群は、ナイフ形石器A_1・A_3・B_2、及び石核が伴う。第4群はナイフ形石器A_1・A_2・A_3・B_1、掻器A・B・C・D、削器・石核等を組成とする。第5群は、ナイフ形石器A_1・B_1・B_2、掻器A・C・D、削器・石核等を伴う。第6群は、ナイフ形石器A_1・A_2・B_1、掻器A・D、削器・石核等を組成とする。

以上、各群の組成について触れてきた。各群間で大きな相違を見せている点は、第1群出土の尖頭器と打製石斧である。掻器等は他の群出土石器との相違は認められない。尖頭器・打製石斧を伴うことは、同時期における組成差なのか、あるいは時期差なのか出土状態からは判断できない。

第2群～第6群出土石器については、各群内の一器種内においても形状にバラエティがあるものの、それは各群において共通に組成しており、むしろこれらの群が同時期である積極的な証拠として考えられる。

例えば、一群内より多種多様な石核が出土し、それらが単一な剥片剥離技術でないことも、各形態を作り出すための重要な技術基盤であったと考えられるし、逆にそれが各種形態を製作することを可能にし得たのであろう。

したがって層位的にも石器組成の相似性からも、第2群～第6群については同一時期に空間を占拠していたと考えられる。なお、接合作業はまだ行っていないが、数少ない搬入石材数点の接合のみ行った。石質はチャートが多いが計4個体別資料がある（図50)。それによれば、①3群＋4群＋6群、②4群内、③4群＋6群、④5群＋1群付近となっている。今後の接合作業でより動きが判明していくと思われる。また使用石材については、第1～6群とも1・2点の頁岩等を除けば安山岩と黒曜石で占められる。その比率も；黒曜石の石器製作を盛んに行ったと考えられる第4・6群以外は極端な差は認められない。日焼遺跡石器群は、二側縁加工を主体としたナイフ形石器、エンド・スクレイパーやラウンド・スクレイパーが共伴する掻器類、削器、錐、多種類の石核、敲石等を組成とする一時期の石器群として把握される。

なお、ナイフ形石器・掻器の形態別の出土状況は表7のとおりである。

形態 / 群	ナイフ形石器					掻器				
	A_1	A_2	A_3	B_1	B_2	A_1	A_2	B	C	D
1	0	0	0	0	0	1	3	0	1	5
2	0	0	0	0	1	1	2	1	1	4
3	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
4	2	1	1	1	0	1	5	2	1	10
5	1	0	0	1	1	3	3	0	1	8
6	3	1	0	3	0	2	1	1	1	9
計	7	2	2	5	3	8	14	4	5	36

表7　ナイフ形石器・掻器形態別組成表（掲載石器）

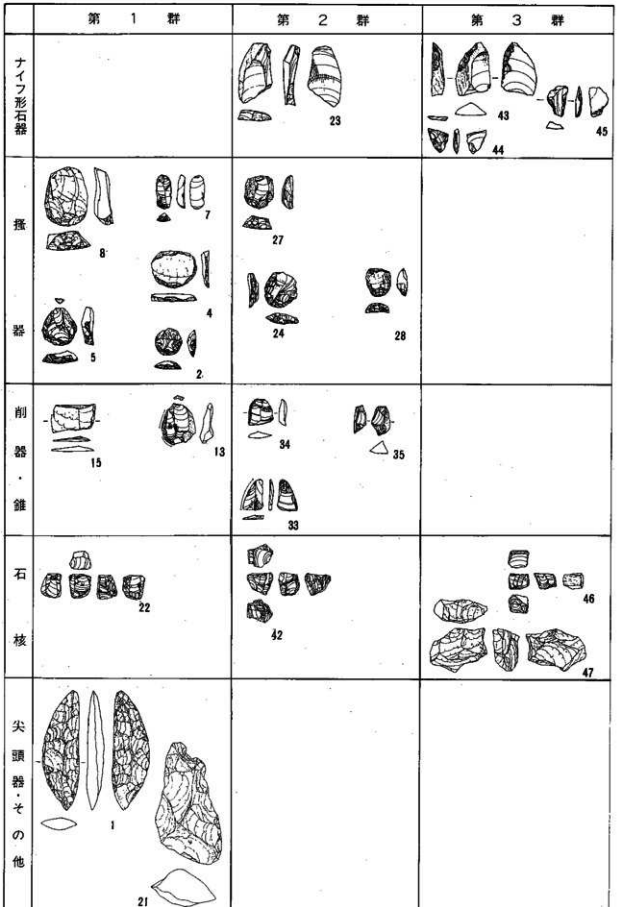
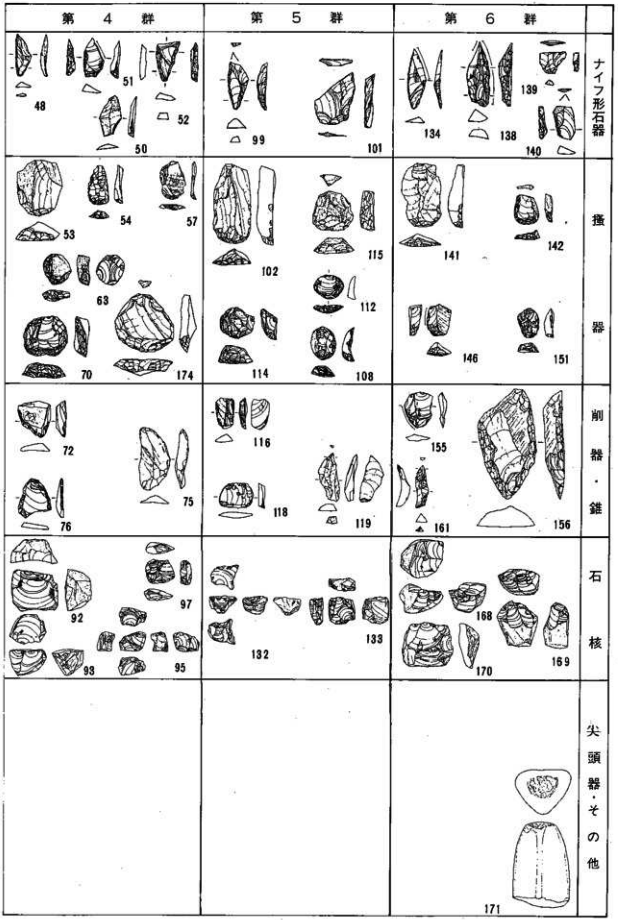


図49　各群出土石器組成一覧


第 4 群
第 5 群
第 6 群
ナイフ形石器
48
51
52
50
99
101
134
138
139
140
掻器
53
54
57
63
70
174
102
115
112
114
108
141
142
146
151
削器・錐
72
75
76
116
118
119
155
161
156
石核
92
97
93
95
132
133
168
169
170
尖頭器・その他
171

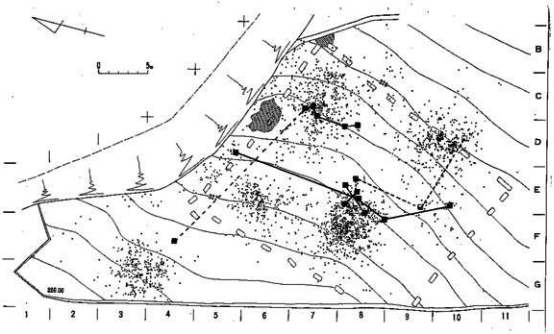


図50　搬入石材接合資料分布図（実線は接合・破線は同一母岩）

次にナイフ形石器と掻器の形態について触れることにする。

ナイフ形石器

第2群～第6群まで計19点出土していることは先に触れた。そして形態は二側縁加工が主体的であった。こうした形態を示すナイフ形石器は、いわゆる「茂呂型」・「茂呂系」と認識されてきている。完形品の長さは3.5㎝～2.1㎝と茂呂系のナイフ形石器でも小形の部類に入る。ナイフ形石器は、より新しい段階は大形から小形へ（小林1962ほか）、あるいは量的に増加する（織笠1980）とされ、本石器群がナイフ形石器を主体とする時期においてもより新しい終末期石器群であると考えられる。

また、こうした小形のナイフ形石器については「組み合わせ道具」としての機能が推定されている（白石1978）。こうした見解は「細石器化した茂呂系」(安蒜1979）等にもみられる。本遺跡の2㎝～4㎝の小形ナイフ形石器は、やはり単独で使用したとは考えられず、出土点数は少ないもののこうした組み合わせ道具のパーツとしての機能を考えたい（図51）。

掻　器

掻器は、エンド・スクレイパー、ラウンド・スクレイパーをはじめA・B・C・D類と様々な形態が出土しているが、形態的にはA・D類を基本とし、他はそのバラエティのなかでおさえられる。一遺跡において削器を含め113点と多量に掻器類が出土した遺跡は、ほとんど無いのではあるまいか。石材別では、A_1類とした大形のエンド・スクレイパーは全て安山岩を用いている。逆にA_2類や他の形態には、圧倒的に黒曜石が多く用いられている。これは、素材として安山岩は、より大きな剥片を作出し、黒曜石は母岩にも規制されて小さな剥片しか作出できなかったからと思われる。

図51　ナイフ形石器組み合わせ想定図

小さくて貴重な黒曜石に期待できない範囲は、ふんだんに手に入る安山岩でカバーしたのであろう。その意味で日焼遺跡石器群は、本来的には黒曜石石器群であるといっても間違いではないであろう。

B　日焼石器群の編年的位置について

ナイフ形石器の項でも若干触れたが、本石器群の編年的位置について考えてみたい。

本石器群の組成をみると、第１群の尖頭器を除き、直接的な生産用具と考えられるのはナイフ形石器のみである。出土している石核から考えると、その剥片剥離技術は、小さな原石を多方向から剥離して作出しているものと思われ、素材には縦長・横長のあらゆる剥片が使用されたものと考えられる。石刃あるいは刃器状剥片と呼べるものは殆ど出土していない。事実ナイフ形石器は様々な形態の剥片を素材としている。そして、前述したように多くのナイフ形石器が小形化していることは、茂呂系石器群のなかでもより新しいナイフ形石器終末期石器群と考えることができる。また、組成として円形掻器・拇指状掻器等を伴っており、武蔵野台地の第Ⅱ文化期後半(小田1980)に比定されうる。これは、小島・早津両氏によるテフラ分析においても、広域火山灰のＡＴ（姶良Tn火山灰）の上位にあり、おそらくAs－ＹＰＫ（浅間草津軽石層）の直下に位置付けられるという見解に合う。

本石器群と対比される石器群としては、近辺では伊勢見山Ⅱ（小林1982）、南関東武蔵野台地では第Ⅳ層中～上層出土石器群に認める事ができる。

いずれにしても、日焼石器群はナイフ形石器終末期で、さらには細石器の時期とも近いものと考えられる。

なお、１群出土の尖頭器についてもう少し触れておかなければならない。発掘所見では、第１群出土石器を他の群と時期的に分離する積極的な証拠は見出せなかった。当該時期において尖頭器の伴出は、南関東においても広く認められている（小田1988ほか)。ただしそれは小形の尖頭器とされ、本遺跡出土例のように大形で半月形を呈する尖頭器は、先土器時代末から縄文時代草創期に出土している。現在までのところ当該時期と思われる出土例は知らない。したがって、本報告では提示するにとどめ評価は今後に待ちたい。

C　飯山地方の先土器時代編年予察

信濃川中流域における先土器時代遺跡の概要については、第Ⅱ章の項で触れてきた。

本稿ではそれらの編年的位置付けを、研究史をふまえながら行い、日焼遺跡のあり方をその変遷のなかで明らかにしておきたい。なお、本稿で用いる飯山地方とは、飯山盆地を中心とする地域で、行政区画では飯山市・下高井郡木島平村・同野沢温泉村・下水内郡栄村の範囲を指す。

当地方で当該期の発掘調査が行われた遺跡には、横倉遺跡（神田・永峯1958）、小坂（高橋1962・高橋ほか1976）、太子林(飯山市教委1981)、関沢(飯山市教委1981)等がある。また、多量の遺物が採集された遺跡に千苅遺跡がある（中島1982)。各遺跡の概要については第Ⅱ章を参照していただきたい。これら各遺跡の編年的位置についてはそれぞれの報告のなかで記載されているし、それについての評価も多くなされてきた。

これらの石器群が飯山地方のなかでどのように変遷したかについては、まず太子林・関沢遺跡の報告書によって触れた。出土石器群の組成差から汎日本的な編年序列の変遷が認められることにより、太子林遺跡を南関東野川編年（小林・小田1973）の野川Ⅱ期、関沢遺跡を野川Ⅲ期に位置付け、全国的な流れのなかで理解しようとした。さらに、太子林遺跡では刃部磨製石斧の形態からPhase Ⅱb 期に位置付けられる可能性を示した。また、中島氏は千苅石器群の位置付けを検討するなかで、小坂石器群→関沢石器群→（細石器）→横倉遺跡と変遷を示された（中島1982)。これらは大局的にはその指標としてナイフ形石器→尖頭器・細石器→尖頭器の流れのなかで押えられるのであるが、その細分は地域的にも複雑さを増しており、

一概に汎日本的に一律となるものではないであろう。

またテフラ層の研究において、広域テフラ層である姶良 Tn 火山層が本地域にも普遍的に分布することが明らかとなり（早津・新井1981・1982）、層位関係からも対比が可能となった（早津ほか1983）。ここで関係する遺跡については、ＡＴとの関係から直上付近に包含層をおく小坂石器群→かなり上位におく関沢石器群の変遷が明らかとなった。これは、「遺物包含層と示標テフラ層、特にＡＴとの層位関係を検討」し「石器型式を加味した編年については……いずれ稿を改めてのべられる予定」とされ、あくまでも地質学的所見として触れられたのである。しかしながら、全国の先土器時代石器群とＡＴを介して対比が可能となったことは、テフラ層の薄い当地域においてさえＡＴの上位か下位か、距離をおいているのかいないのかといった問題において極めて大きな成果であった。

さて、以上の成果を踏まえながら飯山地方における先土器時代の編年試案を示すことにする。

飯山Ⅰ期

現在のところ地質学的所見からも明確にＡＴ以下の石器群は検出されていない。武蔵野 Phase Ⅰの時期である。当地方で今後検出される可能性も考え設定する。

飯山Ⅱ期

ＡＴ以降の時期で、武蔵野 Phase Ⅱの時期に相当する。石刃技法を基盤として製作されるナイフ形石器を主体とし、掻器・彫器・削器等を組成とする。刃部磨製石斧を伴う場合もある。ただし後半～終末になり、主体的な石刃技法に変り新しい製作技術によって石器製作が行われるようである。本時期は、４段階に細分されるものと考えている。頁岩製の太子林・小坂石器群の中にいわゆる茂呂系の黒曜石製ナイフ形石器が存在しており、これらの形態は Phase Ⅱb 期に含められると考えられる。また、今回の日焼石器群は茂呂系ナイフ形石器を伴う石器群であるが、石刃技法を持たないより終末の石器群であろう。

PhaseⅡa 前半期に相当する石器群は、未報告資料であるが大塚遺跡の石刃石器群が該当すると考えられる。本稿では、明確に分離することはできないが、（大塚）→ 太子林（→）小坂→日焼と変遷を考えておきたい。この変遷は、石刃技法によって規格的に作出された石刃（素材）から各種の石器形態を生み出す段階（大塚）→石刃技法によるが、目的により素材差が現われてくる段階（太子林・小坂）→ 石刃技法とは呼べず、目的にあったあらゆる形態の素材を作出する段階（日焼）というように剝片剝離技術からも何える。なお、太子林→小坂の変遷は、彫器・掻器が小坂ではより発達を遂げている事を理由としている。ただし、各遺跡が持つ系統差もあり、順次一連の動態の中で変遷したというのではない。日焼遺跡の時期には、明らかに茂呂系石器群の強い影響下におかれたと考えられる。なお、南関東の同時期の編年に対比させれば、この時期の後半以降には尖頭器が伴う。

飯山地方においては、ナイフ形石器と尖頭器が出土した例としては、前記の小坂遺跡そして今回の日焼遺跡の二遺跡である。両者とも共伴関係が明確でないが、上ヶ屋遺跡（森島1982）においても類例がある。これらの三遺跡に共通して認められる事は、すでに完成された特徴的な尖頭器である点にある。いわゆる東山系石器群における尖頭器の出現については十分に把握していないが、関東地方とは異なるように思える。この点については今後の課題としておきたい。

飯山Ⅲ期

現在のところⅡ期の終末をどこで区切るか明確でない。現時点では尖頭器が主体的な石器組成となる時期をⅡ期とⅢ期の画期としておく。関沢石器群が代表とされよう。ただし、この時期に細石器が登場するものと思われるが、当地方では明確となっていない。おそらくこの期に併行するものと思われる。

飯山Ⅳ期

横倉・千苅石器群に代表される大形の尖頭器石器群である。この時期に土器が登場していることも予想

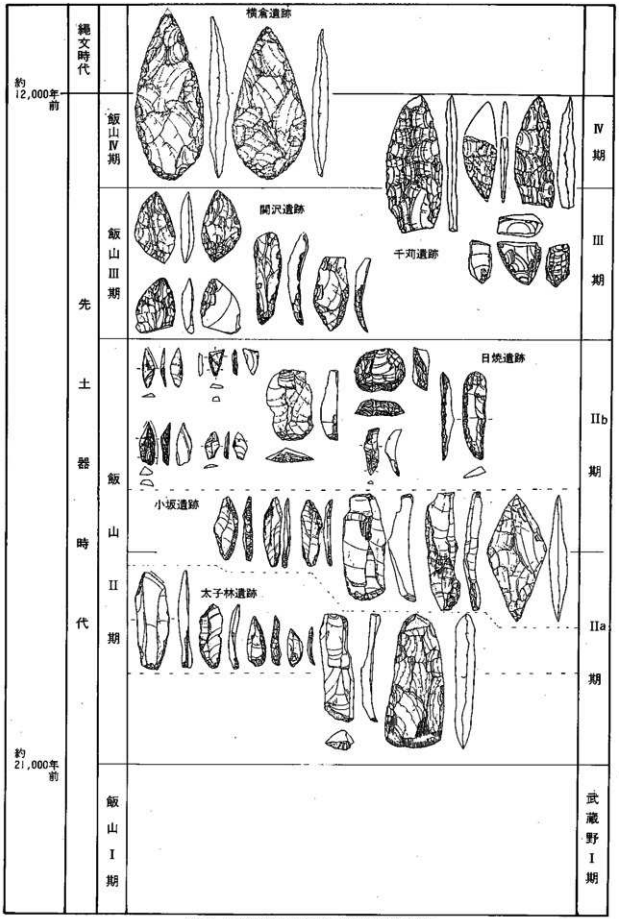


図52　飯山地方における先土器時代編年試案

される。また、細石器については、相模野台地の寺尾遺跡（鈴木・1980）第Ⅰ文化層・上野遺跡第１地点（相田ほか・1986）等で土器を共伴している事実から、Ⅲ期に登場する細石器がそのまま土器をともなって先土器時代の終焉を迎えることもあり得る。したがって、Ⅲ～Ⅳ期には様々で複雑な石器組成の石器群が存在するものと思われ、それらの系譜も今後の大きな問題として残されている。

いずれにしても、日焼遺跡石器群はナイフ形石器とそれ以降の石器群の間にあって、地域的な文化圏の変化を含め大きな問題を提起している。

〔引用参考文献〕

相田　薫ほか　1986「月見野遺跡群上野遺跡第一地点」

安蒜政男　1979「石器の形態と機能」日本考古学を学ぶ (2)

飯山市教育委員会　1981　太子林・関沢遺跡

小田静夫　1971「台形石器について」物質文化18　１－13頁

小田静夫・C.T.キーリー　1975「日本先土器時代の編年」国際基督教大学考古学研究センター　Occasional Papers 2

小田静夫・伊藤富治夫・C.T.キーリー編　1976「前原遺跡」国際基督教大学考古学研究センター Occasional Papers 3

小田静夫・伊藤富治夫・C.T.キーリー・重住豊編　1977「高井戸遺跡」

小田静夫　1980「武蔵野台地における先土器文化」神奈川考古８号

織笠　昭　1979「ナイフ形石器と切出形石器－東京都における武蔵野台地第Ⅳ層の例から－」神奈川考古７

神田五六・永峯光一　1958「奥信濃横倉遺跡」石器時代５

小泉武栄　1980「瑞穂の地形分類」新編瑞穂村誌所有　瑞穂村誌刊行会

小林達雄　1962「無土器文化から縄文文化の確立まで」創立80周年若木祭展示目録

小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男　1971「野川先土器時代遺跡研究」第四紀研究10－４

小林達雄　1982「伊勢見山遺跡」長野県史考古資料編全１巻(2)　主要遺跡　北・東信所有

鈴木次郎・白石浩之　1980「寺尾遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告18集

白石浩之　1973「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」　物質文化　第21号

高橋　桂　1962「北信濃小坂遺跡の調査」　考古学雑誌48－３

高橋桂ほか　1976「栄村小坂遺跡緊急発掘調査報告書」栄村教育委員会

高橋桂・大原正義編　1977「遺跡分布調査報告Ⅰ」　飯山北高等学校地歴部ＯＢ会

高橋　桂　1980「瑞穂のあけぼの」　新編瑞穂村誌所有　瑞穂村誌刊行会

早津賢二・新井房夫　1981「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地質学雑誌』87

早津賢二・新井房夫・小島正巳・望月静雄　1983「信濃川流域における先土器時代遺物包含層と示標テフラ層との層位関係」『信濃』35－10

早津賢二・新井房夫　1985「妙高火山新テフラ地域のテフラ層」

早津賢二　1985「妙高火山群」第一法規出版

早津賢二　1988「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー－ＡＴにまつわる議論に関係して－」『考古学研究』34 (4)

E.D.Bono　1977「An Illustrated Dictionary of Vital Words」European Services Ltd.

中島庄一　1982「小坂遺跡」長野県史考古資料編全１巻 (2) 主要遺跡　北・東信所有

中島庄一　1982　北信地域における尖頭器を伴出した石器群について　信濃34－４

望月静雄　1980　飯山市北竜湖採集の片刃石斧　高井51

望月静雄　1982　太子林遺跡・関沢遺跡－長野県史考古資料編全１巻 (2) 主要遺跡　北・東信所有　長野県史刊行会

望月静雄　1982　北信濃関沢遺跡の石器群　信濃34－４

望月静雄　1986　飯山地方における新発見の先土器時代遺跡および資料　高井74

森島　稔　1982「上ケ屋遺跡」長野県史考古資料編全１巻 (2) 主要遺跡　北・東信所有

5 結　語

麻生優氏が、大倉崎瀬付出土の先土器時代所産の石器について「千曲川に接する位置にあることは、注意すべきではないか」とかつて述べたことがあった。飯山地方の先土器時代の遺跡の立地は、ほとんどが、千曲川の低位段丘面か、それほど距離をおかないで存在することに大きな特徴をもっているといえよう。千曲川上流域、中・南信の先土器文化のあり方と相異する。

日焼は、発見の当初から5,000㎡以上の大規模なものであることが確認されていた。そして、遺物の量も豊富であった。何回となく踏査を行なったが、そのたびごとに両手でもちきれないほどの採集品があった。特に遺物の豊富な地点は、千曲川と境の沢に面する傾斜面であり、今回調査した地点ではあまり採集できなかったのである。踏査の繰返しの中で望月は、中山晋平が若かりし頃教鞭をとった柏尾小学校で千曲川に面した地点から出土したというコアーを発見している。蛇足であるが、同校には、中山晋平の愛用したと伝えられるオルガンがあったが、閉校となり現在は教育委員会に保管されている。

発掘調査の北端には、曲りくねりながら東西に農道が走っており、その北側は、千曲川の築堤のために土砂が採取され、3ｍほどの急崖となっている。農道では、融雪期の春先に若干の黒曜石の細片を採集したことがあった。しかし、量的には、僅小であり分布の末端として把握してきたのである。

調査が開始されるや私達の考えていたことがいかに甘いものであったかを知らされたのである。調査の進行に伴い続々として出土する石器。地下に埋蔵されている先土器時代の素顔は大きく、豊富で果てしないものであることを調査に従事する私達に知らしめたのである。改めて、埋蔵文化財は調査してみない内は軽々しく判断すべきでないという教訓をあたえたのであった。

調査の結果については、すでに第Ⅲ章の各項で述べているが、若干触れてみたい。

今回の調査で石器の出土状態は、6群にわたって存在することが確認された。そして、それらの石器群は、一部を除けば斉一性をもっていることが判明した。ただ1群の中に半月形の尖頭器があり、これが果して同時代の所産とするか否か大きな疑問である。

石器素材の面でも注目すべきことがあった。即ち、大形のスクレイパーは安山岩を使用し、小形の同種器具には、黒耀石を使用していることである。これについては、第Ⅲ章4の「日焼遺跡の石器群について」で詳細に述べてきたところである。

本遺跡の特徴は、スクレイパーが大量に出土したことである。総点数で113点にのぼる。スクレイパーの多さは、調査中から注目したことであったが、整理して改めてその多さに驚きを禁じ得ないのである。まさに日焼はスクレイパーを主体とした文化であったといえると同時に特異な文化相をもっている訳である。小型のナイフ形石器が出土したことから判断して、出土した石器群はナイフ形石器の終末に位置付けられることも判明した。

いずれにしても調査期日が限定された苦しい調査ではあったが、大きな成果をあげ当地方の先土器文化の究明に大きく寄与したのである。昭和50年代以降、開発に伴なって当地方では先土器時代の貴重な調査がいくつかあった。調査を通じてそのたびごとに多大な成果があった。ただ、これが開発に伴う調査であることに種々の疑点は残されている。

研究史の末尾で中島氏、望月が当地方の先土器文化の序列化について、試案を示していることを述べた。今回の調査で、更にその間隙を埋める資料が得られたのである。そして、スクレイパーを多量にもつ文化をどのように位置づけてゆくのかという問題も同時に提起した。

昭和63年は全くの異常気象であった。酷暑が続くと思えば、冷気がおとずれる。日焼遺跡の調査中は、

酷暑の連続であった。今静かに想い起せば、額に顔に溢れでる汗をぬぐおうともせず、調査に全力を傾倒して頂いた作業員の皆さんの姿が浮かんでくる。ほとんどが地元の人達だ。地元に存在する文化財を大切にしようという熱意がひしひしと伝わってきた。更に地元の「地蜂の会」の皆さんには、一日をさいて奉仕して頂き、更に激励会、慰労会までして頂いた。感激一入であった。

多くの方々の協力、援助があったればこそ調査が順調に進み、大きな成果をあげることができたのである。末尾ながら地質について玉稿を賜った小島正巳、早津賢二両先生、黒耀石の科学分析をして下さった鈴木正男先生、種々と教示をたまわった県史刊行会の宮下健司氏、物心両面にわたって御援助を頂いた阿部武義、川久保広良両市会議員さん、作業員の皆さんに心より感謝申し上げる次第である。

付編１

日焼遺跡のテフラ分析

早津賢二・小島正巳

日焼遺跡の地質は、上位より、黒色腐植土層・褐色風化火山灰層・段丘堆積物から構成されており、先史時代の石器出土層準は、褐色風化火山灰層の上部にある。発掘グリッドでは、肉眼で観察できるような示標テフラ層は認められなかったので、遺物出土層準を含みその上下位の褐色テフラ層を５cm幅で連続採取し、顕微鏡下で示標テフラの検出を試みた。

試料採取地点では、黒色腐植土層（35cm）・漸移層（10cm）・褐色風化火山灰層（30cm＜）が観察され、遺物は、褐色風化火山灰層の上限から５～15cmの間に集中して出土する（図１、図２）。

分析の結果褐色風化火山灰層と漸移層のすべての試料（図２）から、姶良Tn火山灰（AT、2.1－2.2万年前）を特徴づけるヴァブルーウォール型火山ガラスが検出された。屈折率の測定はおこなっていないが、周辺のテフラの産状（早津・新井 1981 1985など、早津ほか 1983）からみて、この火山ガラスは、ATのもとと断定できる。ATガラスは、遺物出土層準下位の試料⑬と⑭に最も多く含まれており、上位にむかって減少する。したがって、ATの降下層準は試料⑬ないしその下位にあると考えられる。

AT以外の示標テフラの検出は、今回はなされなかった。遺物層準と浅間草津軽石層（As-YPK、1.0－1.1万年前）との関係も、直接つかむことができなかったが、信濃川テフラ層におけるAs-YPKの一般的産状（早津・新井 1985）から判断すると、As-YPKの降下層準は、日焼遺跡では試料⑩～⑨の層準に対応するのではないかと考えられる。つまり、石器群の出土層準は、As-YPKより下位にある可能性が高い。

以上、まとめると、日焼遺跡の石器群の出土層準は、ATの上位にあることは確実である。また、おそらくAs-YPKの直下にくるものと推定される。

〔参考文献〕

早津賢二・新井房夫（1981）「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地質学雑誌』87 P791～805

早津賢二・新井房夫・小島正巳・望月静雄（1983）「信濃川流域における先土器時代遺物包含層と示標テフラ層との層位関係」『信濃』35 P813～822

早津賢二・新井房夫（1985）「妙高火山新テフラ地域のテフラ層」
早津賢二著「妙高火山群」第一法規出版 P253～305

早津賢二（1988）「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー－ATにまつわる議論に関係して－」『考古学研究』34 (4) P18～32

町田 洋（1987）「火山・テフラ・巨大崩壊」『日本第四紀前会編 日本第四紀地図解説』P11～16

図１ 試料採取地点の写真
（数字は試料番号）

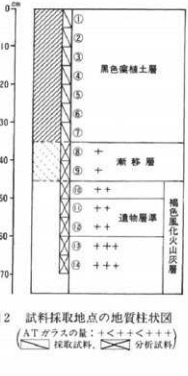


図２ 試料採取地点の地質柱状図
（ATガラスの量：＋＜＋＋＜＋＋＋ 採取試料、分析試料）

付編 2

日焼遺跡の黒曜石の分析

立教大学一般教育部　鈴　木　正　男
立教大学原子力研究所　戸　村　健　児

〔はじめに〕

日焼遺跡から出土した26点（焼けたもの12点を含む）の黒曜石について、黒曜石分析を行なった。その結果をここに報告する。

黒曜石は、SiO_2に富む溶岩が急冷して生じる天然ガラスであり、その産出地は限られている。黒曜石は先史時代に石器製作のための石材として運搬され交易された。

黒曜石分析は、黒曜石の産地推定と水和層年代測定からなる。すなわち考古学的黒曜石の多様な属性のうちの二つ、運搬あるいは交易による移動の方向と距離（空間系）とそれが行われた年代（時間系）を同時に明らかにする。

遺跡出土黒曜石の原産地は、熱中性子放射化分析法、蛍光X線分析法、フィッショントラック年代測定法などを用いて原産地と遺跡出土の黒曜石の化学成分や噴出年代を測定し比較することによって推定される。ここでは原産地を熱中性子放射化分析と判別分析（Suzuki and Tomura, 1983; Suzuki et al., 1985a, b）によって推定し、その年代を黒曜石水和層年代測定法およびフィッショントラック年代測定法（焼けた黒曜石）によって測定した。

〔熱中性子放射化分析〕

種々の核種に熱中性子を照射するとそれぞれの核種は放射化され、それぞれの核種に固有のエネルギーのγ線を放出する。放射化された核種はそれぞれに固有の半減期で壊変する。したがって、冷却期間を調節することによって、産地の判別分析に有効な核種のγ線を選択して測定することができる。

試料の各元素の含有量は、①試料とともに多種類の元素の含有量が知られている標準試料に熱中性子を照射し、②γ線を計数し、③試料と標準試料のγ線のカウント数比、重量比、測定開始時間の差に起因する変動を補正することによって計算される。

実際の操作は、以下のとおりである。まず、ダイヤモンドカッターを用いて、黒曜石試料の小片を切り出し、その重量を化学天秤で測り、ポリ袋に封入する。これを標準試料とともに照射キャプセルに入れ、立教大学原子力研究所ＴＲＩＧＡⅡ型原子炉の回転試料棚（ＲＳＲ）の位置に挿入して、出力100KWで12時間熱中性子を照射する。対照する標準試料はＮＢＳ 278（Obsidian Rock）である。

約10日間冷却した後、γ線スペクトルを1000～3000秒計数して、標準試料との比較から、サマリウム（Sm）、ウラン（U）、トリウム（Th）、ハフニウム（Hf）、スカンジウム（Sc）、鉄（Fe）、ランタン（La）の７元素の含有量を測定した。

日焼遺跡出土黒曜石試料26点の分析結果を表1に示した。日焼遺跡の黒曜石は、すべて和田峠産であった。

〔黒曜石水和層年代〕

黒曜石の水和層の厚さ（THL: μm）と、経過した年代（A: a）との間には、次の関係がある。

$$A = 1000 \cdot (THL^2/k)$$

ここに、ｋは効果水和温度（ＥＨＴ）が一様と見なしうる地域で設定され、かつ適用される水和速度（μm^2/(1000a)）である。水和速度については、すでに野川遺跡など東京周辺の遺跡を基準にして、次のように設定されている（Suzuki, 1973）。

産地・露頭	水和速度
W0	7.89
H2, O4, Y0	5.13
K3	2.69
T0	1.11*
K1	0.98
H0	0.28

効果水和温度の異なる地域では水和速度の補正値（相対水和速度：Kr）を用いる。東京周辺の遺跡の水和速度を1とした時の相対水和速度は次式で計算される。

$$Kr = \frac{\exp(-3.877(10^4/{}^{\circ}K)+13.83)}{\exp(-3.877(10^4/{}^{\circ}K_T)+13.83)}$$

ここに°K_T、°Kはそれぞれ絶対温度による東京、当該遺跡の効果水和温度である。そして効果水和温度は、年平均気温で代用することができる。理科年表1989年版によれば、東京と長野（36°40′N, 138°12′E, 418.2m）の年平均気温（1988.1.1現在）はそれぞれ15.3、11.4℃であるから、日焼遺跡（36°54′N, 138°23′E, 327m）の気温を長野の値で代用すれば、日焼遺跡の補正値（効果水和温度）は0.65となる。

実際の試料の調整は、黒曜石の剥離面に直交して切り出した小片平均約10個を、エポフォーム試料枠に入れ、エポキシ系樹脂エポフィックスと硬化剤を容積比8：1に混合した。硬化完了後、通常の手順にしたがって、厚さ約30μm程度の薄片に仕上げた。

これを、光学顕微鏡約1,000倍で透過光観察し、その水和層の厚さをビデオプリンターのプリント上で計測した。

〔黒曜石水和層年代測定結果〕

黒曜石水和層年代の測定結果は以下のとおりである。全26点中12点は焼けているので水和層厚の測定はできなかった。

産　　地	点数	水和層厚	黒曜石水和層年代
W0：Wadatoge	1	6.6	8,500
W0：Wadatoge	2	7.1	9,800
W0：Wadatoge	10	7.86±0.13	12,000±400
W0：Wadatoge	1	9.7	18,300

〔フィッショントラック法による年代測定〕（焼けた黒曜石）

^{238}Uの自発核分裂壊変を用いたフィッショントラック年代測定法は、トラック(核分裂の飛跡)が加熱によって消失することを利用して焼けた黒曜石などの最終加熱の時期を測定することができる（焼けていない場合は、噴出年代が測定される）。

No.3、6の2点の試料について測定した結果を表2に示した。11,500±1,400および11,900±700 a.B.P.である。

〔結果の解釈〕

遺跡の時代観を与えるデータには土器や石器の型式・形式、発掘の層位がある。これらに放射性炭素年代（C—14、熱ルミネッセンス年代（TL）、フィッショントラック年代（FT）や黒曜石水和層年代（OBH）が加えられる。

日焼遺跡で出土した石器の形式から、この遺跡の時期は先土器時代ナイフ形石器終末期に位置づけられている。先土器時代終末期から縄文時代早期にかけての年代測定の結果は以下のとおりである。

	T　L*	F　T	O　B　H
泉福寺	11,840±740	10,800±400	
休　場		11,100±700	11,300±500
日　焼		11,900±700	12,000±400

*奈良教育大学測定

これらの結果は統計的には有意な差はない。例えば泉福寺洞窟のTLおよびFT年代の95%信頼限界はそれぞれ10,360～13,320、10,000～11,600a.B.P.であり、たがいに重複しているからである。

一般に異なる測定法による測定結果は必ずしも一致しないものである。それはそれぞれの方法が立脚している理論、前提条件などが異なっているからである。したがってまず最初に検討すべきことはそれぞれ

の方法内での結果の整合性であり、その意味では日焼遺跡のフィッションントラック年代は十分に整合的である。

またフィッションントラック年代と黒曜石水和層年代がきわめてよく一致している。これはもともと水和速度の設定がフィッションントラック年代に基づいているのできわめて当然の結果である。

参考文献

Suzuki, M., 1973: Chronology of prehistoric human activity in Kanto Japan-Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthropology), Vol. IV, 241-318.

Suzuki M. and Tomura, K., 1983: Basic data for identifying the geologic source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant analysis. St. Paul's Review of Science, 4, 99-110.

Suzuki, M., Kanayama, Y., Aoki, Y., and Tomura, K., 1984a: Intrasite obsidian analysis of the Hashimoto site, Sagamihara-shi, Kanagawa-ken, Japan. St. Paul's Review of Science, 4, 121-129.

Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura, K., 1984b: Obsidian analysis: 1974-1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131-140.

表1　日焼遺跡黒曜石分析結果一覧

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	DA	TOHL
1	8.880	8.650	30.500	5.150	5.770	0.490	25.200	WO	
2	8.600	8.230	31.100	5.310	5.770	0.491	25.400	WO	7.8
3	9.150	9.180	32.800	4.680	5.690	0.574	25.600	WO	
4	8.720	8.810	31.000	5.010	5.690	0.467	27.100	WO	7.9
5	8.550	7.160	30.200	5.060	5.470	0.555	25.000	WO	
6	8.720	9.100	31.600	5.190	5.930	0.509	27.300	WO	
7	8.670	8.250	32.100	4.710	5.620	0.580	26.500	WO	7.9
8	9.110	9.040	32.500	4.440	5.970	0.524	25.300	WO	
9	9.320	9.510	33.300	5.880	5.980	0.537	26.200	WO	
10	8.700	9.070	30.300	4.350	5.790	0.494	26.600	WO	
11	8.970	8.340	31.900	4.840	5.770	0.487	26.500	WO	
12	8.900	8.580	31.900	5.820	5.890	0.529	26.000	WO	
13	8.580	6.980	31.200	4.160	5.450	0.508	25.000	WO	7.9
14	8.290	8.310	28.700	4.870	5.330	0.524	24.300	WO	
15	8.210	6.770	24.700	3.890	4.620	0.604	25.800	WO	
16	8.880	8.780	31.400	5.120	5.880	0.510	24.700	WO	
17	7.760	7.420	33.400	4.610	6.040	0.533	27.300	WO	7.7
18	7.160	9.880	31.800	4.330	5.780	0.515	24.800	WO	8.0
19	8.030	9.880	28.800	4.580	5.530	0.511	23.400	WO	7.1
20	8.120	8.460	26.900	4.490	5.330	0.501	24.200	WO	9.7
21	8.010	11.300	32.600	4.570	6.200	0.521	24.300	WO	7.9
22	7.600	9.810	30.400	4.260	5.660	0.535	24.700	WO	6.6
23	7.760	11.200	28.700	4.060	5.700	0.523	25.100	WO	7.9
24	7.580	9.810	29.900	4.620	5.630	0.517	26.800	WO	7.6
25	8.490	11.200	33.000	5.300	6.200	0.526	26.600	WO	8.0
26	8.150	11.300	32.600	4.330	6.030	0.546	25.500	WO	7.1

表2　日焼遺跡のフィッションントラック年代

	STD	STN	ITD	ITN	DTD	DTN	ζ	AGE-Ma	$\pm 1\sigma$
No. 3	0.000302	74	0.634	872	8.310	2,992	29.1	0.0115	0.0014
No. 6	0.000314	450	0.638	1,196	8.310	2,992	29.1	0.0119	0.0007

第Ⅳ章　南原遺跡の調査

陥穴の掘込み作業

1　遺跡の概要

南原遺跡[注1]は、日焼遺跡と小さな谷を隔てて南接する遺跡で、千曲川に向って西走する河岸段丘上に位置している。現在は、畑地となっているが、もとはリンゴ畑であったという。

今回の発掘調査地はその西端にあたる。

南原遺跡は、古くより遺物が採集されており、縄文時代前期末、中期・後期の土器とともに、全国的にも珍らしい多頭石斧を始めとする石器がある。今回ここに図示している。

また、弥生時代後期の土器および太型蛤刃石斧も出土しており、遺跡南側の斜面からは、陸田造成の際に中世陶器と思われる壺等が出土したと伝えられている。

なお、縄文後期の遺跡は瑞穂地区においては当南原と北竜湖周辺、宮中に認められるにすぎず、当遺跡の重要性がうかがえる。

南原遺跡採集石器（図１）　図示した石器は、古く南原遺跡から採集され、旧柏尾小学校で保管されていたもので、今は市埋文センターに保管されている。

１は多頭石斧で４ヶ所の突起をもつ。表面は全面研磨されている。淡緑灰色の安山岩か。

２～４は定角式石斧で、断面形は稜の立った長方形を呈し、全面が研磨されている。２は特に、刃部の使用擦痕が明瞭に残っている。

５は小型石斧で、偏平なものである。刃部の先端を少し欠く。

６は叩き石と思われるもので、両端に使用の剥離痕がある。

これらの石器は、縄文時代のものと考えられる。

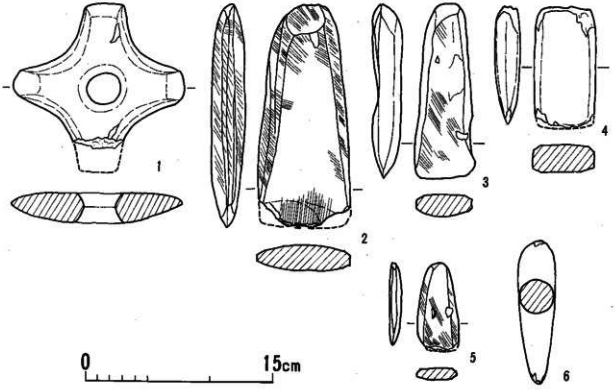


図１　南原遺跡既出石器　１：２

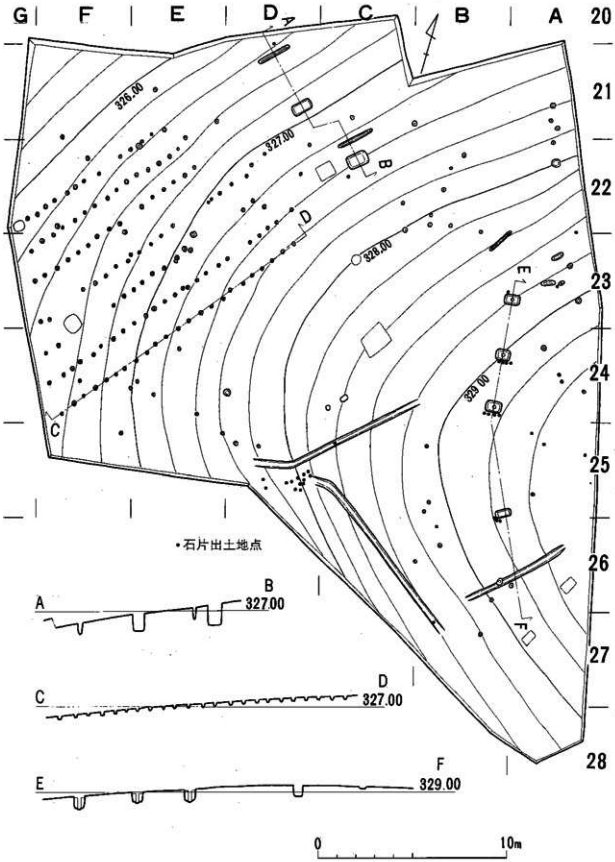


図2　調査地全体図　1：200

2　調査概要と経過

経過　発掘調査は、日焼遺跡と併行して行った。まず昭和63年７月６日にバックホーによる表土はぎを行い、日焼遺跡を基準にして調査区を設定した後、日焼遺跡の調査のあい間をぬって、７月30日より精査を開始し、８月１日には精査を完了。柱穴・陥穴・柱列などが検出された。８月２日には遺構の掘り下げを開始し、８月９日には1/100平板図を作成。８月10日にはすべての作業を終了した。最終的な発掘面積は約800 m²になる。

調査区の設定　南原遺跡の調査区は、日焼遺跡の調査区を南に延長する恰好で５ｍ方眼を設定し、北から20～28地区、東からＡ～Ｇ地区と命名した。

層序　南原遺跡の層序は、今回調査地が比較的急な斜面であるため、地山の黄褐色粘質土層の上は耕作土層であり、耕作土を20～30cm除去するとその直下が地山であった。遺構はすべてこの地山面で検出した。

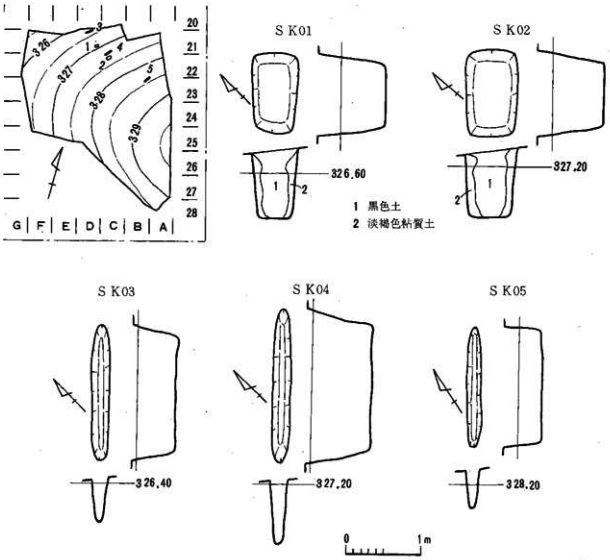


図３　土　坑　1：50

3 遺　構

今回の調査で検出された遺構として、柱穴・陥穴・溝状土坑・柱列・溝などがある。（図３）

柱穴　調査地東部の23・24Ａ地区で３ケ所が並んで検出された。いずれも柱掘形は0.8×0.6ｍの長方形を呈し、中央に直径15cmの柱痕跡が確認された。

柱間は、３ｍと2.7ｍである。建物としてまとまるかどうかは、東部が未調査のため確定できないが、柱穴から調査地東端までは4.5～5.0ｍもあり、今のところ柵のような施設と考えておきたい。

陥穴　確たる根拠はないが、ＳＫ01・ＳＫ02が、屋株遺跡で検出された陥穴と考えられる遺構とよく似ているため、陥穴として考えた。

ＳＫ01・02ともに約1.1ｍ×0.6ｍの方形プランで、深さは検出面から0.9ｍをはかる。作業員は逆さになって穴に入って掘り下げた。屋株遺跡例では坑底の中心に直径20cm程の柱を立てたと思われる小穴が確認されたが、当例は確認できていない。しかし確認されないのは、精査が不充分なためであり、形状・大きさ・埋土などの点での屋株遺跡例との類似性から、中心小穴はあった可能性が高い。

溝状土坑　ＳＫ03～05の３基が検出されている。いずれも等高線に並行して主軸をおき、その３基もほぼ平行に６ｍ・７ｍの間隔をおいて並んでいる。

出土遺物もなく年代不明。

同様な溝状土坑は、今年調査の大倉崎館跡でも３基が並列して検出されている。

また、昭和62年発掘の有尾遺跡（注２）でも、陥穴と思われる土坑とともに、扇形に並列した溝状土坑が３列計11基検出されている。

柱列　調査地北西部の斜面で、直径約20cmの円形柱穴が、0.6～0.7ｍ間隔で10数個～20数個直列しているものが７列検出されている。列間の間隔は1.6～1.7ｍである。深さは約0.2ｍ。

出土遺物はなく年代は不明だが、埋土は暗灰色土の軟かい土で、感じとして新しそうである。

溝　調査地南部で、幅約0.3ｍ、断面逆台形で、深さ0.1～0.2ｍの溝が３本、コ字状に並んでいる。北および西の２本は斜面下方に向かって先端が屈曲している。年代は不明だが、柱列同様に、埋土からすると新しそうである。畑地の地界溝かもしれない。

4 遺　物

今回調査の出土遺物は、縄文期と思われるガラス質安山岩の石片十数点が、25Ｄ地区を中心に出土しているのと、自然石か叩き石か判断しかねる石と、須恵器片１片があるのみである。（ＰＬ24－７）

これは、今回調査地が、比較的急斜面にあたることと、南原遺跡の中心地からはずれた遺跡の東端にあたるためであろう。

注１　高橋桂　1980「瑞穂のあけぼの」『新編瑞穂村誌』瑞穂村史刊行会、長野県飯山北高等学校地歴部ＯＢ会　1977『遺跡分布調査報告１』

注２　昭和62年７・８月に、市農協本所建設に伴う発掘が行われた。報告は刊行予定。

第Ⅴ章　屋株遺跡の調査

屋株遺跡の主な出土品

1　調査の概要と経過

A　調査の方法

調査区の設定　屋株遺跡は、これまであまり破壊されていないという経緯がある。今回がはじめての大規模な現状変更といえる。117号バイパス線は、この遺跡の東よりの部分を南北に横断する形で設計されている。道路部分と両サイドの法面が相当幅をとるが、工事対象部分全面が遺跡内であり、全体にグリット設定をした。

設定は、道路中心杭No.55＋80を基準に、杭No.55＋70から10°東へ振ったラインを中心に5m方眼を設定。北から南へ1・2・3……、東から西へA・B・C……というように地区を設けた(図1)。

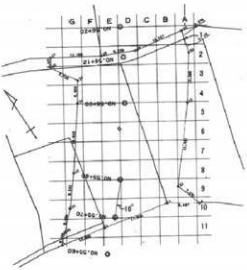


図1　調査区設定図　1：1000

▲ 瑞穂公民館の屋株遺跡見学会（9月18日）

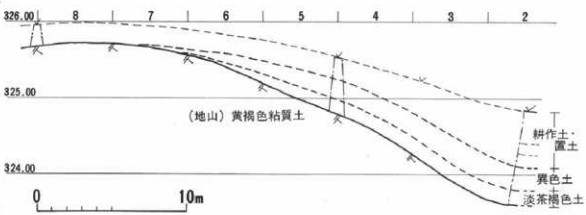


図2　土層概念図　1：250

B　屋株調査日誌

8月18日曇一時雨　日焼の現場より調査機材を搬入。テント設営、基準杭打ち、午後開始式。

8月19日曇一時雨　南端よりジョレンがけを開始。西端に方形竪穴住居跡検出、南隣りに焼土も発見。市建設課・西川氏来跡、排土について矢株商会（地主）と打合せ。

8月20日晴　引続きジョレンがけ。検出遺構を目印しとして5㎝程掘り下げる。住居跡の撮影のための足場組み立て、夕方撮影。乾燥がはげしいため土が非常に固い。矢株商会重機による土かたずけ。

8月22日晴　DEFG－10・9・8・7区の平面図取り。遺構探しを引続き行う。矢株商会土かたずけ。

8月23日晴後雨　D～G—10～7区の平面図完了。遺物とり上げ。北部ジョレンがけ。黒色土が予想以上に厚く、ジョレン作業手間どる。縄文土器が若干かたまって出土。北端は再び重機による土層はぎをする。

8月24日曇後雨　竪穴住居跡と焼土跡を掘り下げる。両方とも土器多数出土する。トレンチ西側の黒土層掘り下げ。黒曜石出土。電話入る。カワラ版「屋株」1号発行。

8月25日曇後雨　C～G—7～10区を二度目の精査、ピット多数みつかる。住居跡と焼土坑は掘り下げ続行。D8区のピットで黒色土器椀出土。

8月26日曇　北側のジョレンがけ。住居跡と焼土坑は精査続行。

8月29日晴　住居跡において完形の須恵器椀出土、墨書が認められる。C～G—7～10区精査、柱穴掘り下げ。B～D—4～5区土器とり上げ。

8月30日曇　住居跡の土器出土状態を撮影、終了して平面図にかかる。7区以南平面図にとりかかる。6区以北黒色土はずし。

8月31日曇　住居跡の土器類測量、とり上げ。B～C—5～6黒色土はぎ、遺構探し。C～F—7～10区の遺構測量と遺物測量。建設事務所員来跡（午後）。

9月1日晴　A～D－4～6区の黒色土はぎ。層が厚く、黄色土地山が予想外の急傾斜で北西におち込んでいる。

9月2日晴　前日に引続き同区のジョレンがけ。すでに表土より120㎝も掘り下げた。建設事務所長来跡。

9月3日晴　柏尾区の祭礼のため現場作業を休み、埋文センターで遺物の水洗いを行う。午後瑞穂分館長佐藤氏と現地見学会についての打合せ。

9月5日曇　北側の谷状地の黒色土はずしを継続。東端でロームマウンド2カ所、おとし穴(?)があるのみ。

9月6日雨　現場中止、埋文センターで遺物の水洗い。

9月7日曇一時雨　現場の足元状態が悪く埋文センターで遺物の水洗い。市議会議員 上村氏来訪、発掘の現状を説明。

9月8日晴　北側の作業継続、遺物の出土が少ない。B～E—3～5区の遺物とり上げと平面図をとる。

9月9日晴　北端の黒色土はぎ終了、西側の通路の表土はぎ開始。4時半頃よりプレハブ内でスライド映写会。

9月10日曇　西側の通路あとの精査、遺構多数あり。北側の黒土はぎ完了、北の壁で土層観察。竪穴住居の南東角の掘り下げを実施、遺物出土、相変わらず多い。

9月12日曇時々雨　午前中、北端で排水溝をつける。住居跡の排水中雨がひどくなって現場作業中断。午後、埋文センターで土器洗い。

9月13日雨　埋文センターで土器洗い。

9月14日曇時々晴　住居跡仕上げへ、撮影に続いて土器類取り上げ。東壁の整備と陥穴半掘りし撮影。北側を平面図とりはじめる。

9月16日曇　住居跡の引続き仕上げ精査と北側の遺構測量。ロームマウンドの撮影準備、陥穴6つの残土半分の削りとり。

9月17日小雨後曇　黒曜石の原石産地である和田峠への研修見学会。中途丸子町郷土博物館において丸子町の遺跡の現状や黒曜石の原石から石器への工程などの説明を受ける。

9月19日晴　住居跡十文字の畔のセクション図を作成し、畔はずし。陥穴を完掘りした結果、底に柱穴を認める。E―8・9区を5㎝程掘り下げて旧石器探しを試みる。

9月20日雨　埋文センターで土器洗い。市建設課と建設事務所と次の大倉崎館跡調査について打合せ。調査地の伐木と排土、プレハブ建設地など細部を検討する。

9月21日曇時々晴　調査地の全景撮影。次の調査地への引越し準備開始。

9月22日晴　竪穴住居の平面図など全般の図面とりほぼ完了。遺物とり上げ終わる。午後4時より作業終了式を行う。

9月24日雨　埋文センターで残務整理と上野の準備。

9月26日雨　大倉崎館跡調査の準備。

9月27日曇　プレハブ移転準備。

9月28日曇　プレハブ移設とテント設営。

9月29日晴　屋株、プレハブとテント跡の表土はぎを重機によって行う。ただちにジョレンで精査開始し、遺構チェックを実施。

9月30日曇後雨　前日に引続き精査、出土遺物なし。遺構のみ。平面図をとって測量関係も終了し、屋株についての調査は完了する。

C　概　　要

調査概要　調査は主として日程的な理由によって表土はぎを重機で行ない、できるだけ精査に時間をさけるようにした。当調査によって、南側の表土が30～40㎝だったものが、北へ行く程、表土および黒色土層が厚くなり、調査区の最北端部の深い所では130㎝位となった。基盤の地山が急速に北へ傾斜を強め、凹型を形成し、北側の谷地に向かって落ち込んでいることが分かった。

調査区は全体で1200㎡である。検出された遺構は、竪穴住居1棟、陥穴と考えられる土坑8ケ所、ロームマウンド3つ、焼土坑2つ、柱穴多数、などがある(図4)。出土遺物については縄文土器（前期）をはじめ、平安土器（ほぼ完形な椀3つ含む）多数、旧石器類多数、竪穴より出た焼けた石（カマド石？）5つが主なものである。珠洲系の陶器も若干出土したが復元に足りる点数ではなかった。その他、異常な高熱によって溶けて固まった炉壁と思われるものが数点（竪穴とC5区）検出した。組成物やコークスのように溶けた理由等不明のため現在専門の分析鑑定機関を探しているところである。

層序　第1層は表土耕作土層で約30㎝の厚さをもち、耕作等によって下層遺物が混じる黒褐色土である。南側は第2層として遺物包含層で約5～10㎝で茶褐色、石器類を含んでいる。北側においては第2層として縄文土器を含んだ暗褐色層で20～40㎝の厚さである。北側はさらに黒色土層が20～30㎝あって地山へと深度する。南側は第2層の下は地山になる(図2)。

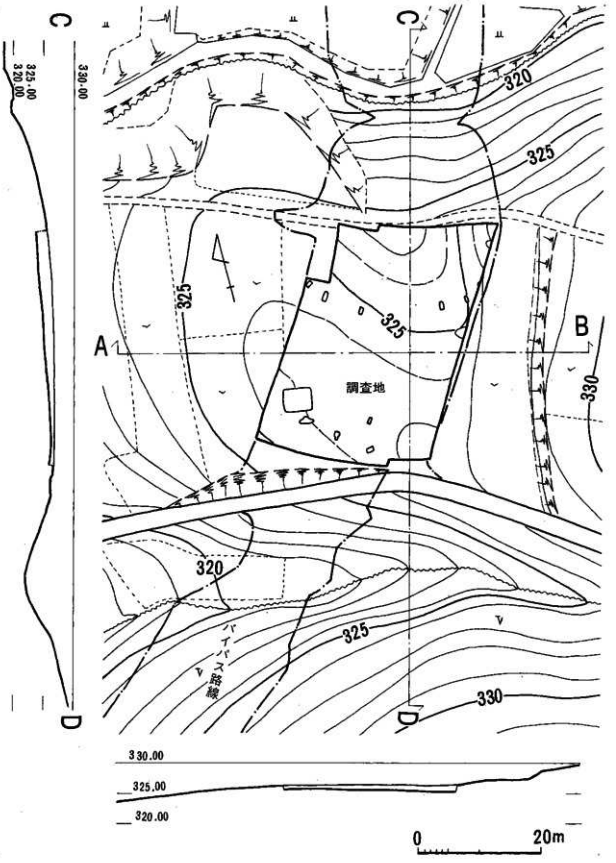


図3　調査地周辺地形図　1：625

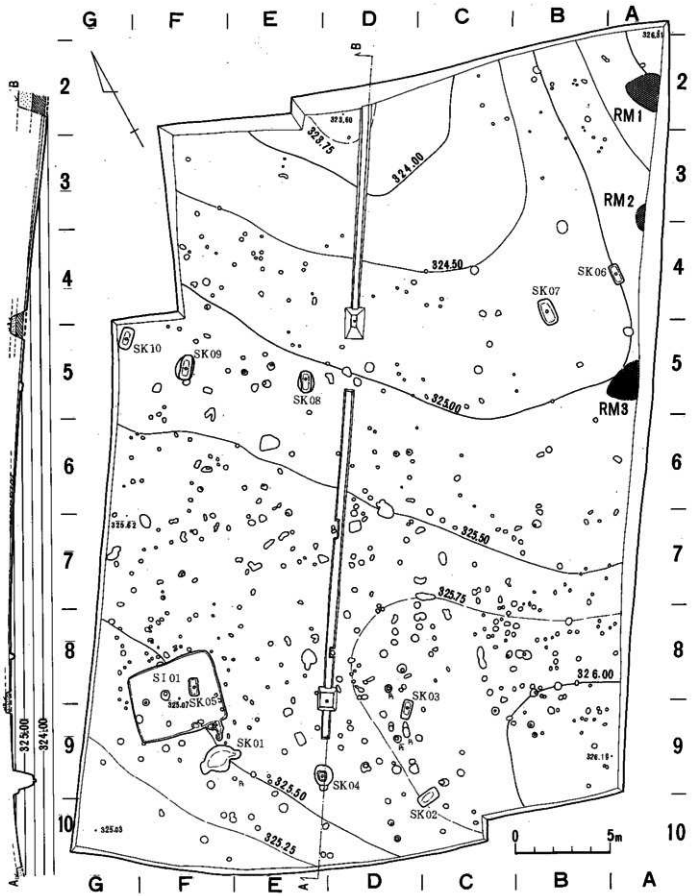


図4　調査地全体図　1：200　　RMはローム マウンド

2 遺　　構

A　縄文時代の遺構

屋株遺跡で検出された遺構・土坑の中で、特色的なのが陥穴とみられる同規模遺構が８つもあったことである。とくに北側の斜面向きに扇型に５つ配列されている点が目立つことである(SK06からSK10まで)。SK07とSK08の間がちょっとはなれてはいるが、ほぼ等間隔といえる配列だ。南側の４つについては、そうした規則性は認められないだけに注目できる点である。

１）　陥　　穴（図５）

ＳＫ03

Ｄ９区の東側に検出されている長さ１ｍの楕円形で底辺で長方形になり、中心部に直径10cmの深さ20cmのおち込みがある。

ＳＫ04

ＥＤ９区に位置する。口辺が１ｍ、70cm斜めに落ち込み、そこから40cm程の深さで垂直に落ちている。底部の中央には直径10cm強、深さ20cm弱の杭穴が認められる。

ＳＫ05

Ｆ８区に位置する。SK05は竪穴住居内にあるため、住居底からの深さは60cmとなっている。口辺部が100×50cmで、底部中央には直径10cm、深さ20cmの杭穴があり、前二者と同じ構造である。

ＳＫ06

４区に位置する。口辺で100×50cmの長方形を呈し深さは95cmである。底部中央には直径15cm、深さ20cmの杭穴がある。

ＳＫ07

Ｂ４区に位置する。口辺部は150×80cmのタマゴ形を呈し、深さ110cmである。底辺中央部に直径15cm深さ20cmの杭穴がある。

ＳＫ08

Ｅ５区に位置する。口辺部は115×80cmの楕円形を呈し、深さ110cmである。底部中央に直径10cm、深さ15cmの杭穴がある。

ＳＫ09

Ｆ５区に位置する。口辺部は125×100cmの楕円形で、直径15cm、深さ20cmの杭穴がある。

ＳＫ10

Ｇ５区に位置する。口辺部は120×65cmの長方形を呈し、深さ110cmである。底辺中央に直径15cm、深さ20cmの杭穴がある。

B　平安時代の遺構

１）　竪穴住居（図８）

ＦＧ―８・９区において検出された竪穴遺構である。屋株遺跡の調査対象地では、唯一の竪穴住居跡となった。当区は表土が比較的浅く、調査開始の翌日の精査１回目で竪穴住居跡と確認されたものである。

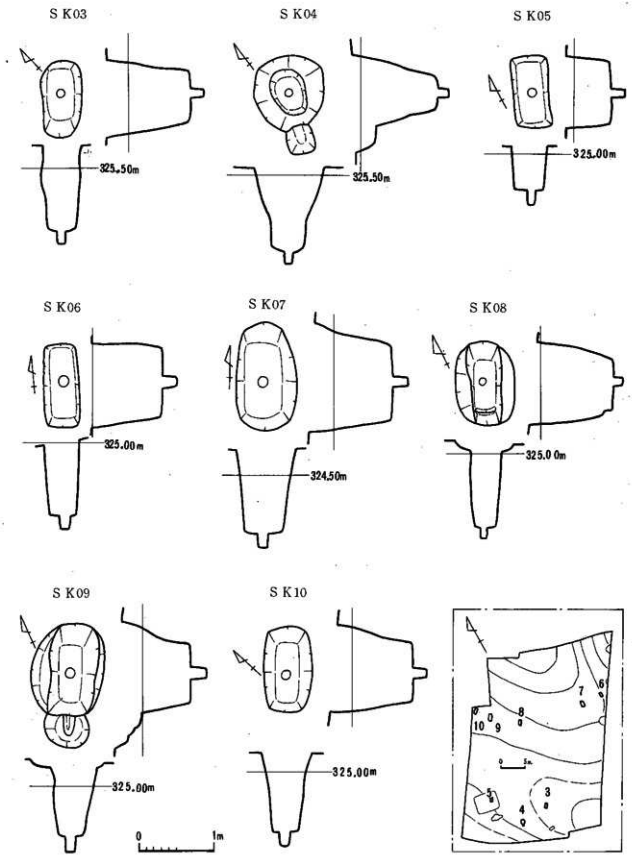

S K03
325.50m
S K04
325.50m
S K05
325.00m
S K06
325.00m
S K07
324.50m
S K08
325.0 0m
S K09
325.00m
0
1m
S K10
325.00m
7
6
8
10
9
5
3
4

図5　陥　穴　1：50

当遺構の規模をみると、東西に470㎝、南北に370㎝の変方形を呈している。壁の高さは、四方向とも異なる。東壁が40～38㎝、西壁が23～16㎝、北壁が37～25㎝、南壁が28～20㎝となっており、地山の傾斜と関係するのかも知れない。

竪穴内部の柱穴は８カ所認められた。この他に陥穴遺構が１カ所、南東角にはカマド跡と考えられる遺構が１カ所、それぞれ存在している。カマド前には、厚いところで12㎝の焼土が70×50㎝の範囲で検出された。ほかに３カ所の焼土があった（図８）。遺構内は黒色土がほとんどで、焼土４カ所とも底部に分布している。地山と黒色土の間には黄褐色粘土があり、突き固められた貼床かも知れない。非常にかたく、スコップでも容易にとおらなかった。

2） 焼土坑

ＳＫ01（図８）は竪穴住居跡の南隣（Ｆ９区）に位置する。赤変した焼土の中に比較的大きな炭のかたまりが６カ所あった。その層の厚さが10㎝あり、焼けた粘土の固まりもたくさんまじっていた。さらに下層には10㎝の厚さで焼粘土まじりの層が認められ、その下は地山になっている。この焼土坑から出土した土器はほとんどが小片ばかりであった。

ＳＫ02（図６）は、Ｃ10区に検出された。この焼土坑も上層には炭まじりの層があり、その下層には赤変した焼土層が拡がっているものの深さはあまりない。出土遺物は土器などまったくなかった。

3） 柱　穴

P_1（図７）は、Ｄ９区に検出された。直径40㎝の円形で深さ15㎝ある。中からは黒色土器椀４個分の土器片（図18）が出土した。

P_2（図７）はP_1と同じＤ９区で検出した。30×40㎝の変形円形。深さ20㎝あり、深さ12～14㎝のところから須恵器大甕片２片が出土している。

P_3（図７）はＤ８区で検出した。40㎝強のほぼ円形、深さ30㎝ある。上方より黒色土器椀１個分の土器片（図18）が出土した。

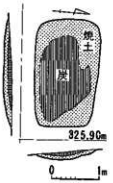
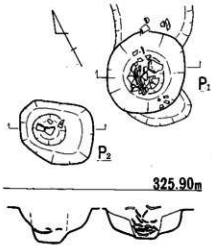


図６　焼土坑　ＳＫ02　１：80



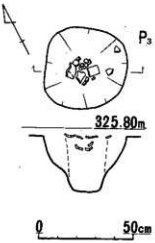
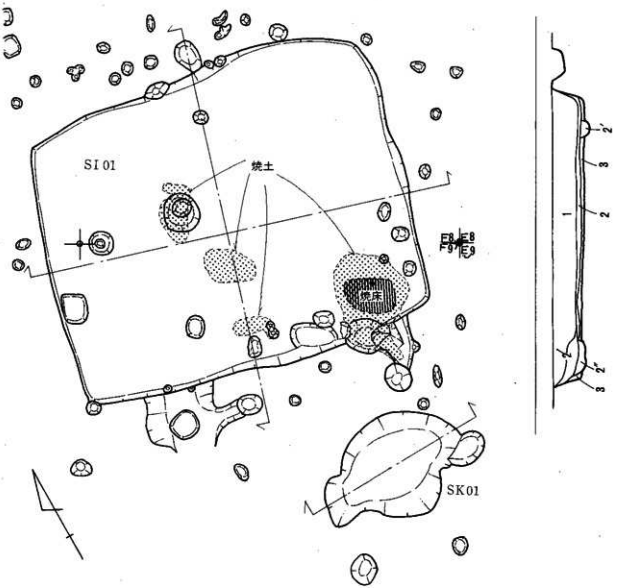
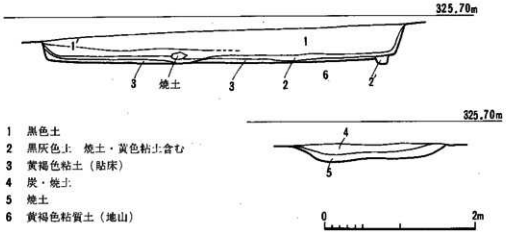


図７　柱　穴　１：20





1　黒色土
2　黒灰色土　焼土・黄色粘土含む
3　黄褐色粘土（貼床）
4　炭・焼土
5　焼土
6　黄褐色粘質土（地山）

図8　竪穴住居（SI 01），焼土坑（SK 01）　1：50

3 遺　　物

はじめに

本調査によって検出した遺物は、先土器時代、縄文時代、平安時代に属する、石器・土器類が出土している。量的には平安時代の出土品が最も多い。それも竪穴住居と焼土坑を中心にした南側（7・8・9区）から出土したものである。石器はE－8・9区から出土した。縄文土器は前二者と異なり北側（A・B・C・D・E－4・5・6区）の黒色土内から出土している。

以下、時代ごとの概要を説明する。

A　先土器時代の遺物

1）　先土器時代石器出土状態

調査区内において該期時代の石器は、E－8・9区を中心として約100点出土した。

出土層位は、一部縄文・平安期の遺構によって攪乱・破壊されているものの、4層の黄褐色土層最上部を中心として出土していることからこのレベルを1枚の文化層として捉えた。

さて、検出された石器集中部は約11×5mの範囲をもつ。地形的には、北側のノッチの湾曲部と南側の段丘崖に狭められながらも最も平坦な場所に立地している。

出土遺物は、尖頭器・細部調整剥片が僅かに出土したものの、他は横長剥片とチップ類がほとんどである。石質別では1点の頁岩製細部調整剥片以外はすべて安山岩で、ほとんど同一母岩であると考えられる。

このまとまりをもった集中個所は後世の構築物の間の地区にあり、さらに上層においても若干の遺構が存在していた。したがって、規模及び組成内容については当初の在り方のすべてを反映しているものとは考えにくい。

しかしながら、石器器種が極端に少いことを考慮すれば、短期間の占地であったと考えられる。ただし、同一母岩から作出されたと考えられる剥片が占めることから非日常的な石器製作場所であったと思われる。

2）　出土石器（図10～図12）

約90点の石器が出土したが、ほとんどが剥片であり、明確にトゥールと認定される石器は少い。以下にその概略を述べる。

a）尖頭器（図10－1・2）

2点出土している。1は完形品で長さ5.8cm、幅2.7cm、厚さ1.0cmを計る。胴下半部に最大幅をもちやや下ぶくれの形態を示す。二次加工は裏面に第一剥離面を残し、周縁部のみ加工が施されているいわゆる半両面加工尖頭器である。2は先端部を欠く。現存長6.0cm、幅3.0cm、厚さ1.1cmを計り1よりやや大形品であるが、横長剥片を素材とし、周縁部のみに二次加工を施した半両面加工尖頭器である点は1と同様である。いずれも風化の進んだ安山岩である。

1・2とも下水内郡栄村横倉遺跡出土尖頭器に似る。

b）細部加工剥片（図10－3・4）

小剥離痕を有する石器および明確な二次加工と認められない石器である。2点出土している。3は頁岩製の刃器状剥片である。現存長9.7cm、幅3.7cm、厚さ1.2cmを計る。基部側両縁辺に小剥離痕状のリタ

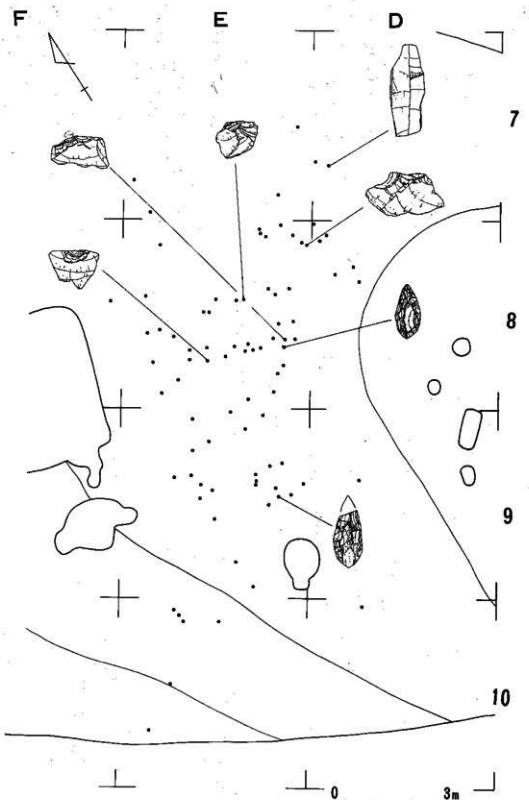


図9　先土器時代遺物分布図　1：100

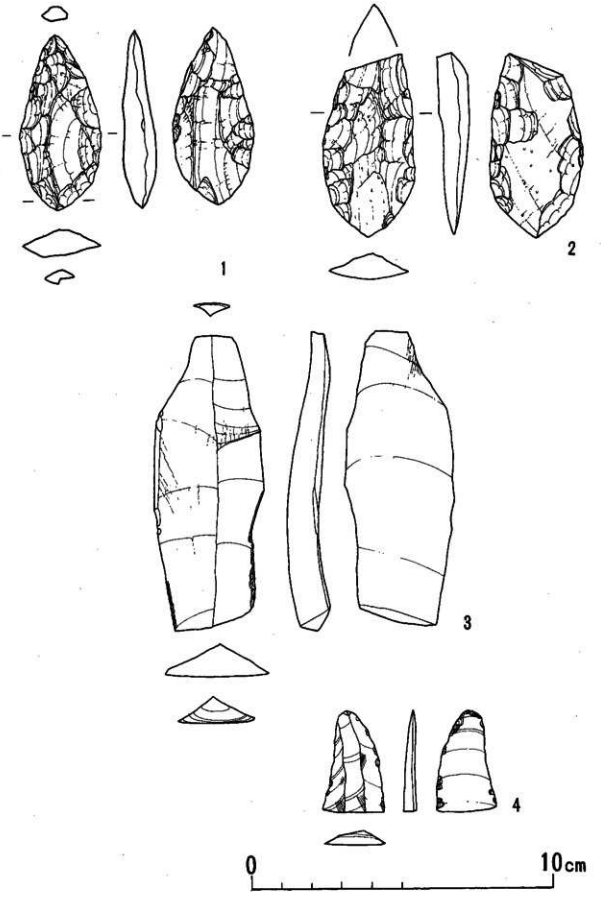


図10　先土器時代の石器 (1)　4：5

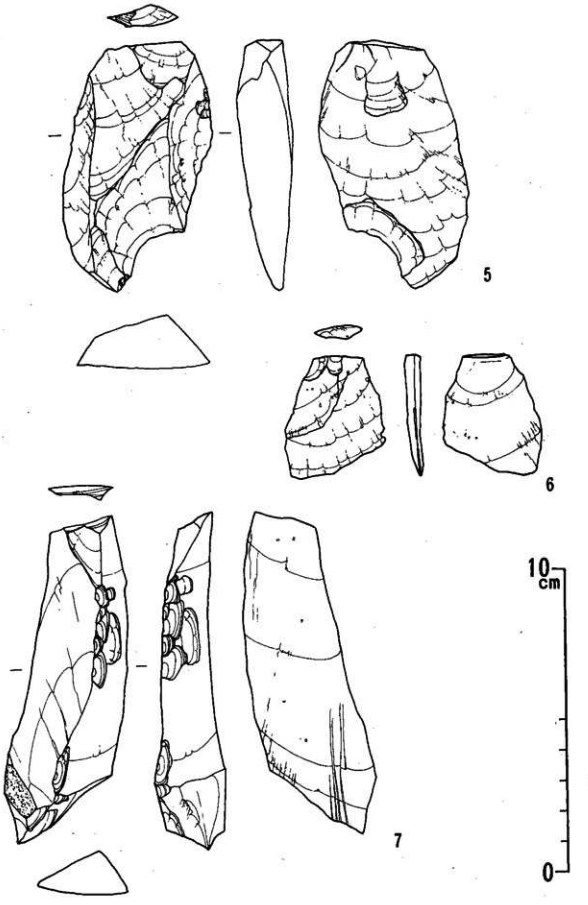


図11　先土器時代の石器 (2)　4：5

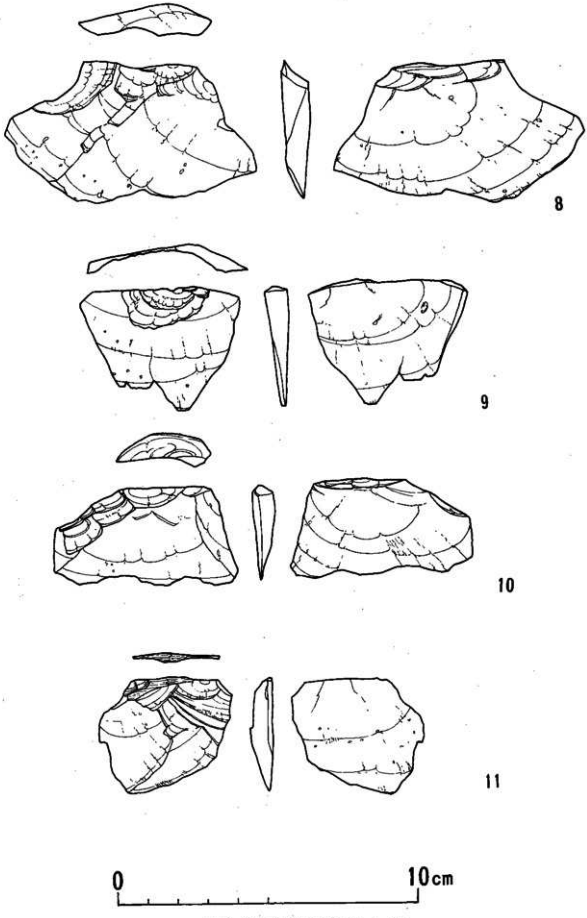


図12　先土器時代の石器 (3)　4：5

ッチが認められる。今回の調査区内において頁岩の出土は本例のみである。4は石器集中部より距離をおいたA－2区で単独出土したもので、先土器時代の所産であるかははっきりしない。基部側を欠損するが、刃器状剝片を素材とし先端部裏面を中心として細部加工が施されている。石質は黒曜石である。

c）剝　片（図11・12）

今回の調査で出土した先土器時代石器のほとんどが剝片である。このうち縦長剝片に分類されるものは図11の3点のみで、他はすべて図12に掲げたような横長剝片及びチップの類である。

縦長剝片　いずれも集中部以外の場所より出土したもので、集中部出土石器と同時期であるかどうかは不明である。5は平安時代の竪穴住居跡（ＳＩ01）覆土の出土で、打面調整の施された石核より作出されたものである。7は稜部に二次加工が認められるが、石核調整加工とは考えられない。いずれも安山岩であるが、5・7は他に出土した安山岩とは異なる。

横長剝片　集中部を中心にまとまって約90点出土した。いずれも安山岩で同一母岩と思われる。図示した8～11は打面が観察できた剝片であるが、すべて打面調整が施された石核よりほぼ同一方向より作出されている。剝離角から、打面を頂点として前後交互に作出する技法ではないかと思われる。おそらく図10－1・2の尖頭器の素材にもなったと考えられる。

なお、接合作業を行なっていないが、図示した以外にも各段階の剝片・砕片が出土している。

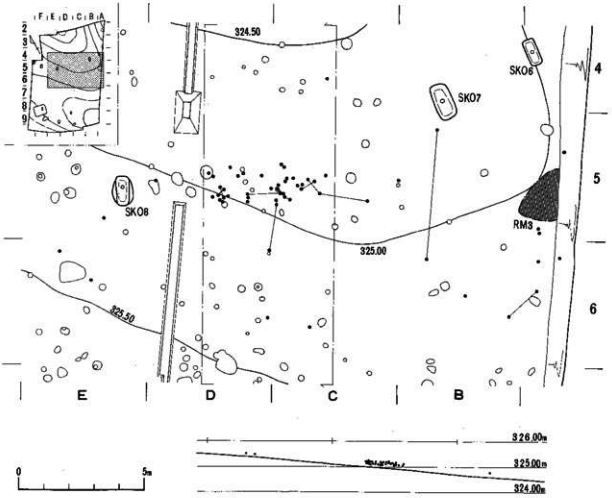


図13　縄文土器分布図　1：60

B　縄文時代前期の遺物

1）　縄文土器の出土状況

縄文時代前期の土器が出土したのは、A～E－4～6区からのみである(図13)。とくにまとまって出土したのがC・D－5区だ。検出総数は100点を越えたが、いずれも小片である。そのうち、表面文様が判読できないものが大半を占め、接合できたのも少ない。したがって器形や文様全体を復元・推定できなかった。

2）　出土土器

1類土器（図15－1･2･3 PL31－20）　半截竹管による爪形文をもつもの。胎土はいずれも石英などの小粒をかなり含んでいる。裏面仕上げは丁寧さが認められるがもろい。図15－1は口縁部で8つの小片を接合したもので、半截竹管状工具による爪形文を縁から5列を並行に刺突して施文している。6列目からは不明。色は薄茶色である。図15－2の口縁は、わずかだが波状のカーブがわかる。小片の接合体だが口縁の形等は推定できない。3は頸部の一部だが、施文の仕方は前二者と同様だ。色は薄茶、5片の接合体である。4・5・6は胎土・焼成・色具合ともに1～3と同様だが、施文仕方がやや異なる。頸部には半截竹管による爪形文を施し、胴部は縄文を施す。4と5はともに頸部の一部である。縄文は撚り紐を回転押捺して丁寧に施しているが、縄文文様が磨滅している。

2類土器（図15－7～11 PL32－21）斜縄文をもち、波状口縁のもの。7・8は裏面の仕上がりが粗い。胎土に小石などを含んでいることが表裏ともに認められる。ともに口縁部の一部で、波状口縁をうかがわせ、同一個体の可能性もある。8は右側に小孔をあけてある。施文はともに撚り紐を回転押捺している。4～6より表面の焼成がよいので文様の残りが良い。

9・10は焼成具合が良好で、胎土が同質に見える。同一個体かも知れない。10は口縁部の一部で中央に波頭？に当たる突起がある。2片とも表面の縄文は撚り紐を回転押捺して施文しているものの、7・8より文様が細かい。

11は、口縁部の一部、色は黒茶色で表面の保存状態が良く文様もはっきりしている。先のとがった棒状具のような工具で波状文を施文している。3類とすべきかもしれない。

小結　これらの縄文土器は、爪形文の盛行などの文様構成などから、大町市上原遺跡の諸磯b式併行期

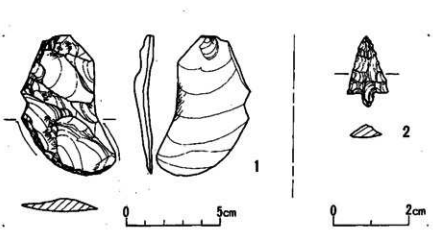


図14　縄文時代の石器　1－1：2，2－1：1

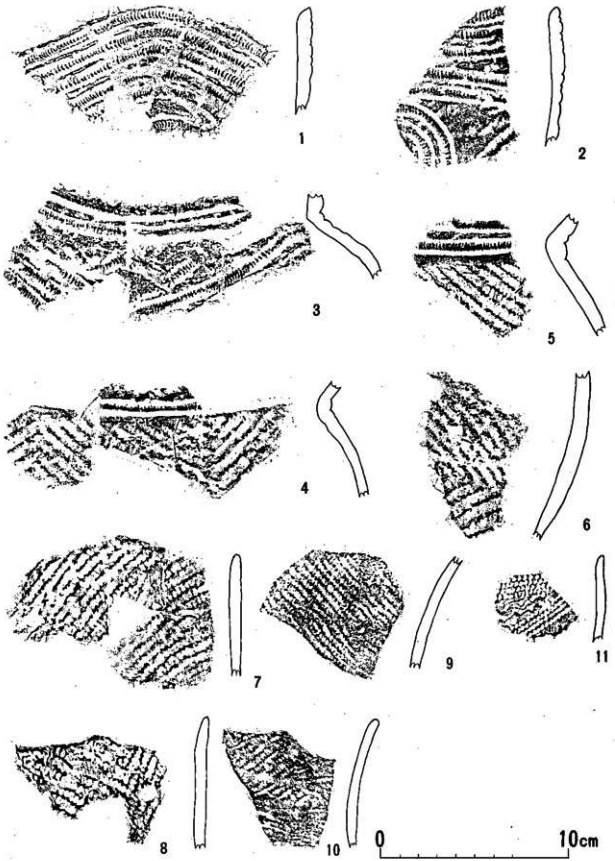


図15 縄文土器 1：2

の土器群[註1]に類似しており、縄文前期後葉に比定される。

3） 石　器

縄文時代前期の石器が2点出土している（図14)。1つはスクレイパーで石質がケイ質頁岩である。出土場所がC－4区で縄文土器出土区の北隣の地区である。もう1つは石鏃だが石質は不明、出土場所は竪穴住居（F9区）の南東角の表面に近いところである。重さは0.3g。

註1　樋口昇一　1988「上原遺跡」『長野県史』考古資料編全一巻(三)主要遺跡（中信）

C　平安時代の遺物（図17・18）

平安時代の遺物は主として竪穴住居SI01・焼土坑SK01から出土しており、他は柱穴などから少量出土しているにすぎない。

1） 竪穴住居SI01・焼土坑SK01出土遺物（図17・18－1～44）

SI01出土品とSK01出土品は接合関係があり、同時代に投棄されたものと考えられるので一括遺物としてあつかうこととする。

SI01およびSK01出土遺物には、土器の他に土製支脚・正体不明の焼成品・粘土塊などがある。灰釉・緑釉陶器はない。

なお、当遺構出土品の大きな特徴として、小破片がほとんどであることがあげられる。完形品ないし完形に近く復元されたのは、須恵器杯（29・30・32）・蓋（36）の4点のみで、他は接合しても全体の¼にもみたないものがほとんどである。出土状況もカマド周辺とかに集中していたわけではなく、埋土中にまんべんなく散らばっていた。

なお、完形品の須恵器杯（29・30・32）は竪穴住居SI01のカマドに西接して口を上にして重なって出土している。

a）土師器（1～28）

土師器には椀・蓋・鉢・甕がある。

椀（1～16）　内面に炭素を吸着させた所謂黒色土器[註1]（1～5）と、そうでないものがある。

黒色土器はいずれも体部が内湾する形態のものであり、口径16cmを越えるやや大型のものと、口径約14cmの小型のものがある。調整は内面はミガキ、外面はナデで、底部調整はロクロケズリないし手持ちヘラケズリである。

黒色土器でないものは、黒色土器に比べると形態はバラエティに富んでいる。体部が内湾するもの（6～8・12・13）と、体部が直線的なもの（9～11）があり、9・10は口縁端部をつまみ出し端面をつくっている。また、9・10は外面にもヘラミガキを施しており、胎土も精良で砂を含まない。内面の調整はヘラミガキが大半だが、11のみはロクロナデである。底部外面の調整は、確認できるもののうち糸切り痕を残すのは16を含めて2個あり、ロクロケズリのものは14・15を含めて3個ある。色調は赤橙色系のものがほとんどだが13は淡褐色で白っぽい。

蓋（17～20）　須恵器蓋の形態を模したものである。つまみだけの出土品が多い。

鉢（21～23）　体部が内湾し、口縁端部が肥厚して端面をなす形態のものである。全形はちょうど、僧侶が托鉢に用いる鉢に似たようなものであろうか。外面はロクロナデ、内面はロクロナデないし、ロクロによるハケを施す。

甕（24～28）　口径24cm前後の中型品（24～26）と、口径12cmの小型品（27）がある。

中型品・小型品とも「く」の字形に屈曲する短い口縁部をもつ。口縁端部は肥厚するもの（24・27）と上方につまみ上げるもの（25・26）がある。つまみ上げるものは越後型の甕（ほそ）と呼ばれるもので、飯山地方でもよく出土する。

24・25の調整は、外面は肩部以上をロクロナデし、肩部より下はロクロによるハケを施したのち上から下へのヘラケズリを施す。内面は口縁部（25）ないし肩部まで（24）をロクロナデし、以下はロクロによるハケを施す。25はさらに下半部に縦方向のハケを施す。

26・27は磨滅がはげしく調整不明。

28は外面に平行タタキを施す。

b）須恵器（29～38）

須恵器には、杯・蓋・大甕片がある。

杯（29～33）　杯はすべて高台をもたないものである。いずれも体部と底部の境は明瞭で、体部はやや内湾ぎみに立ちあがり、口縁部で外反する。底部はロクロ糸切り痕をそのまま残す。口径は13cm前後。器高は3.7cm前後である。焼成は33が青灰色で硬質だが、他は淡灰色で軟質である。31には火だすきがある。

また、29には「加」の墨書がある。

蓋（34～36）　蓋はつまみが付き口縁端部が屈曲するもの（34・35）と、つまみがなく口縁端が直線的なもの（36）がある。いずれも、天井部にロクロケズリを施す。34はいびつにゆがんでいる。焼成は、34・35が灰色で硬質。36は茶褐色を呈し堅緻である。

大甕（37・38）　37・38ともに大甕の体部片である。図示した2片の他も数片あるにすぎない。37・38ともに外面は平行タタキののちカキ目を施し、内面はロクロナデである。37は灰色で硬質、38は暗紫色で堅緻である。

c）その他（39～44）

土製支脚（39・40）　支脚は焼土坑ＳＫ01出土の4個体があり、いずれも同形態である。ただし、下端部は端面をなしているが、上端部は剥離面なので、何かの脚かもしれない。外面はヘラケズリ、下端面は調整されていない。

焼土塊（41）　土が焼かれているものである。すべてＳＫ01出土で、41のほかに2片ある。何なのかよくわからない。

正体不明品（42・43）　成分分析等をしてないので正確なところはよくわからないが、小石・砂・土とワラのような植物が、まんべんなく混ぜられたものが焼成されているもので、暗灰色をしており、所々ヒビ割れている。

表面と思われる所があり、そこは比較的たいらで、砂粒が多量に付いている。中にはその表面が黒曜色に熔変しているもの（42）もある。

主として竪穴住居ＳＩ01のカマド周辺から出土しているので、カマドの壁体かもしれない。

粘土塊（44）　焼土坑ＳＫ01より1点のみ出土。小豆大から指頭大の粘土塊のかたまりで、ちょうど掌の中でにぎられた大きさである。全面に指紋がついている。土師質で、重さ41ｇ。

2）　柱穴出土遺物（図18－45～50）

調査地南部の柱穴から、黒色土器などが出土している。量はごく少ない。

土師器（45～49）　45～48はP_1の柱抜きとり穴から重なり合ってつぶれた状態で出土している。49はP_2から口を上にしてつぶれた状態で出土している。いずれも黒色土器で、完形品に近く復元できた。もともと完形品ないしそれに近いものが、柱を抜きとった後に埋められたものであろう。

竪穴住居 S I 01

土師器

器形	図No.	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	5	14.0	4.6	6.5	ロクロケズリ	内黒
〃	6	18.0	—	—	———	内黒
〃	8	16.2	—	—	———	内黒
〃	1	17.6	—	—	———	内黒
〃	2	16.6	—	—	———	内黒
〃		18.0	—	—	———	内黒
〃		—	—	5.8	ヘラケズリ	内黒
〃		14.6	—	—	———	内黒
〃		—	—	6.0	ロクロケズリ	
〃	15	—	—	7.0	ロクロケズリ	
〃		13.6	—	—	———	
〃		15.4	—	—	———	
鉢	21	22.0	他5個体以上			
〃	23	23.0				
蓋	18 19	つまみ 須恵器的				
甕	24	24.0（一周） 外ハケ→ケズリ内ハケ 他4個以上でうち1個は平行タタキ				
小形甕	40	口径12.0				

須恵器

器形	図No.	口径	器高	底調整	備考
杯	30	13.1	3.9	ロクロ糸切り残	灰色 硬
〃	29	13.1	3.6	〃	灰色硬(加)
〃	31	13.2	3.7	〃	淡灰色 軟
〃	33	12.2	3.5	〃	灰色 硬
〃	32	13.4	3.9	〃	やや赤 軟
〃	—	13.0	—	———	やや赤
〃	—	13.6	—	———	やや赤 軟
蓋	34	15.2	3.6	———	つまみ有灰硬
〃	35	16.0	—	———	つまみ有灰硬
〃	—	—	—	———	軟 赤 変
甕	平行タタキ 青灰色，平行タタキ 紫色				

その他：正体不明品(43他) 1112g

焼土坑 S K01

土師器

器形	図No.	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	3	17.0	—	—	ロクロケズリ	内黒
〃	4	13.8	—	—	———	内黒
〃		13.6	—	—	———	内黒
〃	13	13.6	3.9	—	ロクロケズリ	
〃	7	18.0	—	—	———	
〃	9	14.8	—	—	———	
〃	11	18.8	—	—	———	
〃	10	14.4	—	—	———	
〃	14	—	—	4.6	ロクロケズリ	
〃	12	11.4	—	—	———	
〃	16	—	—	6.2	ロクロ糸切り	
〃	—	13.6	—	—	———	
〃	—	16.0	—	—	———	
〃	—	—	—	—	ロクロ糸切り	
蓋	17	17.2	—			須恵器的
〃	20	—	—			つまみ
鉢	2個体か					
甕	25 26	23.8 23.4	外ハケ→ケズリ 内ハケ マメツ 他口径22.01ケ			
小型甕	1ケ					

須恵器

器形	図No.	口径	器高	備考
蓋	36	17.0	2.1	つまみなし
〃	—	—	—	
甕	平行タタキ，紫色のS I 01と同じもの			

その他：須恵器片が熔着したもの
支脚（39・40他） 4個体
焼土塊（41他） 71.2g
正体不明品（42他） 40.4g
粘土塊（44） 1点

P2

器形	図No.	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	11	16.6	6.2	6.7	ロクロケズリ	内黒
〃	12	13.8	4.8	5.7	〃	〃
〃	13	16.8	5.3	6.8	〃	〃
〃	14	17.3	5.5	6.6	〃	〃
〃	—	内黒でないもの				

P3

椀	16	17.0	6.0	7.6	ロクロケズリ	内黒

表1 平安時代遺物集成表（表中数字 単位 cm）

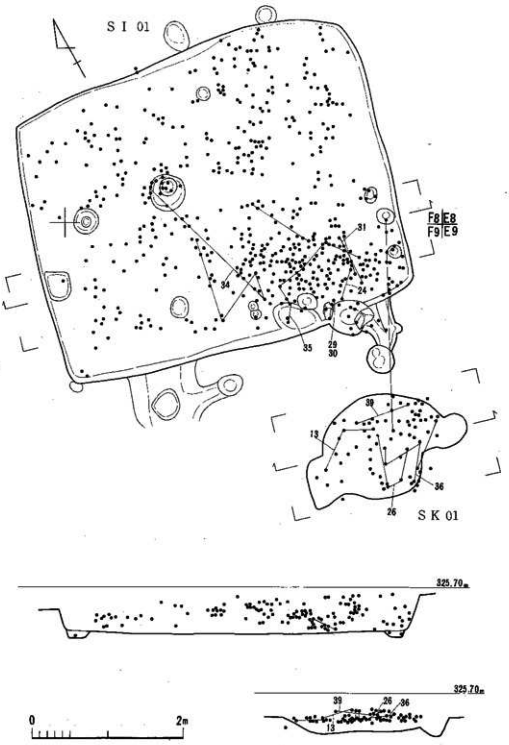
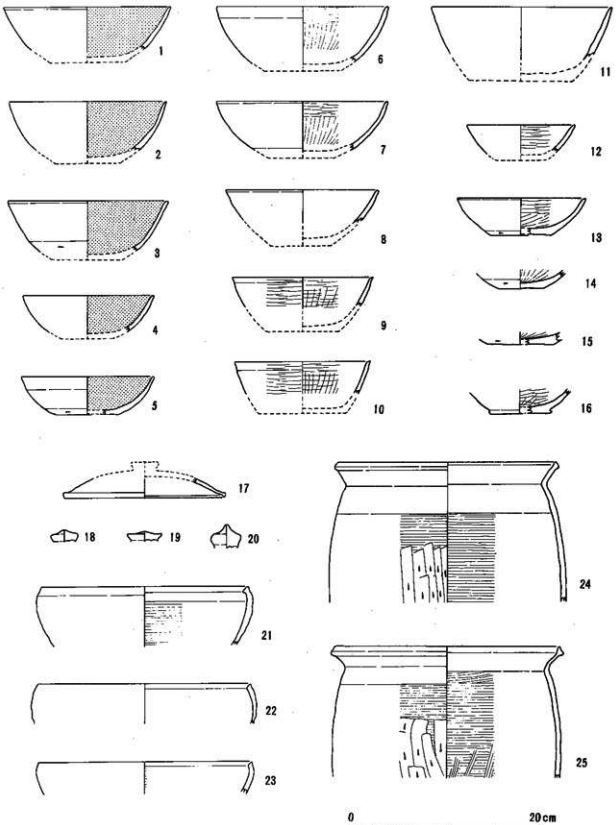
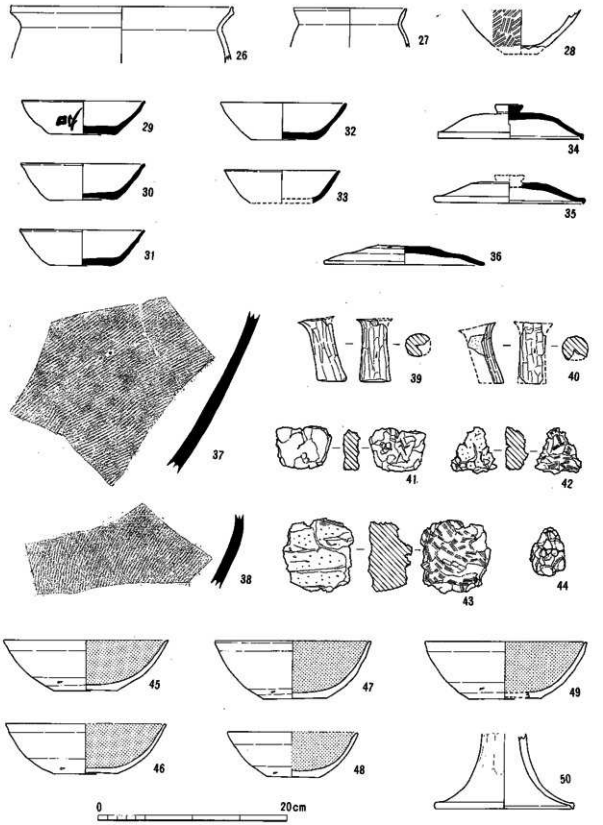


図16　竪穴住居SI01・焼土坑SK01 遺物分布図　1：50



SI 01　1・2・5・6・8・15・18・19・23・24
SK 01　他

図17　平安時代の遺物 (1)　1：4



SI 01　27・29～35・37・38・43
SK 01　26・28・36・39～42・44
P 1　45～48　　P 3　49　　P 4　50

図18　平安時代の遺物 (2)　1：4

形態および法量は、竪穴住居ＳＩ01および焼土坑ＳＫ01出土品に同じ。

底部の調整は、すべてロクロケズリである。

50はP_5出土。脚と思われる。外面の調整はロクロナデののち上半分をケズる。内面はロクロナデ。明るい橙色を呈する。

3） 小結・平安時代遺物の年代

当遺跡出土の平安時代土器群の特徴として

① 供膳形態に、黒色土器・土師器・須恵器の三者があり、灰釉などの施釉陶器を含まない。

② 黒色土器・土師器はすべてロクロ成形によるもので、底部調整はロクロケズリがほとんどで、糸切りを残すものは２点のみである。

③ 黒色土器・土師器椀の法量には大・小２種があり、大は口径17cm前後、小は口径14cm前後である。

④ 黒色土器・土師器椀の形態は、体部が内湾するものが主体である。

⑤ 黒色土器・土師器椀・須恵器杯ともに高台をもつものはない。

⑥ 須恵器蓋の形態を模倣した土師器蓋がある。

⑦ 土師器鉢は、飯山地方ではこれまで類のないもので、奈良時代的な感がある。

以上の特徴は、飯山地方の平安時代の土器編年(注3)にあてはめれば、北原遺跡期となる。

また、『長野県史』の編年観(注4)によれば、平安時代Ⅱ期ないしⅢ期となる。

北原遺跡の年代については、９世紀後半～10世紀前半の年代が与えられている。

なお、飯山地方では東濃産光ヶ丘１号窯式期（猿投黒笹90号窯式併行）から灰釉陶器が普通に出土するようになるが、その初現期の実年代については、『長野県史』の見解に従えば、９世紀末ないし10世紀初頭となる。

そうすると灰釉陶器をもたない当遺跡の土器群の年代は、それ以前ということになり、９世紀の中におさまる年代観が与えられる。

注１　従来の飯山の報告では、土師器の内面を黒色処理したものと呼んでいたが、「平安時代の食器の変遷は須恵器・黒色土器・灰釉陶器とロクロ成形の土師器の消長で示されるものであり、この変化こそが平安時代の土器の変遷でもある」（注2）という見解に従って、黒色土器と呼ぶこととした。

注２　笹沢浩「古代の土器」『長野県史』考古資料編１巻(4)　遺構・遺物　1988.3

注３　望月静雄・高橋桂　1985「平安時代の土器編年について」『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡Ⅳ』飯山市教育委員会

注４　注２に同じ

4 小　　結

日焼遺跡の対岸にある屋株は、従来の私達の調査では、先土器時代の遺跡として理解されていた。今回の調査を通して、先土器時代の遺物の検出は当然としても、縄文時代前期、そして平安時代にも生活が営まれていたことが判明した。先土器時代、日焼遺跡ほど明瞭でないのは、後世に攪乱されたためであろう。資料的には良好なものも出ており、当該地方の先土器時代研究の一資料となるであろう。

縄文前期についてみれば、遺構として多くの土坑が検出されている。これらの土坑は、推論の域を出ないが、小括で考察しているように陥穴と考えてよいであろう。このような遺構の存在等から考えると調査区域外に住居が存在する可能性が高い。出土した土器は全て破片である。縄文前期土器は、上原式土器である。昭和48年調査した対岸の大倉崎遺跡はこの時期の優れた遺跡である。私達は、大倉崎から出土した

上原式土器は、新旧二時期に区分できる見解を示した。今回出土した土器はその見解に従えば、上原式土器の旧い時期に属するものである。屋株は千曲川の段丘上にあり、千曲川下流域の当該時代の立地のあり方と一致している。千曲川の恩恵の大きさが容易に首肯されるのである。

平安時代中半の住居址・土師器を検出したことは、当地方に類例がすくないだけに貴重な資料というべきであろう。折に触れて飯山地方の遺跡の特徴について何回となく記述してきたが、敢えてここでも述べておこう。

古墳時代後半から平安時代前半にかけての遺跡は、私達の調査でみる限りほとんど認められない。弥生時代の遺跡が各所に認められるのとは対照的である。その理由が奈辺に存するのか今後究明してゆかねばならない課題である。平安時代中半以降になると再び人々の活動の展開が認められるにいたる。このことは荘園制の発達と深い関係を有していると思われる。そして、次第に開拓が進められてゆく中で、在地の小土豪層が出現するのであろう。

屋株の立地については、すでに第Ⅴ章で触れているとおりであるが、北側は急崖となって境ノ沢の谷地に接し、南側は小沢によって区切られている。この境ノ沢の北側にあたる南原の崖下から清水が豊富に湧出している。恐らく、屋株に居を構えた人々は、この清水を利用して谷地を水田化していったものと思われる。今回調査した範囲は、道路部分だけで段丘面全体ではない。恐らく段丘上には、該期の住居址がもっと営まれたものと推定される。

屋株に住居を構え、開拓に従事した人々は更によりよい耕地を求めて、開拓の範囲を広げ、やがて小菅庄の中に組みこまれていったのであろう。

〔参考文献〕

会田進ほか　1988「反目南遺跡」　上伊那地方事務所・駒ヶ根市教育委員会

江坂輝彌ほか　1973「縄文土器と貝塚」　講談社

塚田一成ほか　1985「長山遺跡発掘調査報告」　富山県八尾町教育委員会

友野良一ほか　1988「辻沢南遺跡」　駒ヶ根市土地開発公社・駒ヶ根市教育委員会

永峯光一ほか　1972「縄文時代」　河出書房新社

樋口昇一ほか　1988「長野県史」考古資料編全一巻(四)遺構遺物　㈶長野県史刊行会

望月静男ほか　1988「釜渕・北頭戸遺跡」　飯山市教育委員会

望月静男ほか　1985「北原遺跡Ⅳ」　飯山市教育委員会

和田　博　1988「浅川端遺跡」　長野市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター

第Ⅵ章　大倉崎館跡の調査

堀の深さと人を対照

1 位置と概要

A 位置と概要（図1）

大倉崎（おおくらざき）館跡は、常盤（ときわ）地区上野（うえの）の千曲川に面した山林中に位置する館跡である。

なお、当館跡を上野館跡とせずに、大倉崎館跡とするのは、『下水内郡誌』『村史ときわ』[注1]に大倉崎城址と記されていること、上野集落は江戸時代には大倉崎新田と呼ばれており[注2]、中世においては上野という地名があったかどうか不確実であること、『日本城郭大系』[注3]に大倉崎館と紹介されていることによっている[注4]。

大倉崎館跡の立地は、大倉崎から上野にまたがる丘陵の最高所にある。東は千曲川によって削られた断崖に接しており、千曲川を眼下に見おろすことができる。西は常盤平に向かってゆるく傾斜しており、今は山林となっているが、山林がなければ常盤平を一望できる。

また、地元上野の古老によれば、上野丘陵北端に「つい最近まで」渡し場があったといい、金井喜久一郎氏も「(瑞穂)古屋敷より千曲川を隔てた対岸上野部落には最近まで渡場が設けられており」と指摘している[注5]。対岸の瑞穂との関係もみのがせない。

これについては金井氏は、明徳3年（1392）の「高梨朝高及一族以下給人所領注文」の「高梨高行知行分常岩北条大蔵崎内柏尾分」との記事を、常岩北条の大倉崎内にある柏尾分の土地は高梨高行が知行している所とし、柏尾に本拠をもつ高梨氏が、対岸の上野に渡場の根拠地を有していたとされ、大倉崎館を渡場の警護に備えた城館であった可能性を指摘[注6]されている。

なお、『下水内郡誌』・『村史ときわ』に記されている、大倉崎館跡が竹内源内の居城であり、外様十人衆のころ武田方に属していたが、そこを追われた、との言い伝えについては、今のところ明らかでない。

注1　栗岩英治他　1913　『下水内郡誌』　下水内郡教育会　168ページ
　　宝月圭吾他　1968　『村史ときわ』　常盤村史刊行委員会　140ページ
注2　注1 138ページ
注3　『日本城郭大系』第8巻長野・山梨　1980　新人物往来社　城郭一覧表
注4　なお、『新編瑞穂村誌』によると、『市河家文書』の建武3年（1336）高井郡牧城の戦いにおける、「市河経助軍忠状」の中に、高梨五郎、大甘四郎、毛見源太に続いて殖野左衛門次郎という部将の名前が記されており、殖野左衛門次郎を下水内郡上野の部将と推定している。そうとすれば上野の地名も古くよりあった可能性があり上野館でも不都合はない。金井喜久一郎「中世」『新編瑞穂村誌』1980　新編瑞穂村史刊行会　195・196ページ
注5　注4 256ページ
注6　注4 256ページ

B 測量調査の成果（図2，付図）

発掘調査に併行して、㈲写真測図研究所に館跡全体の測量調査を依頼しているので、以下その成果にもとづいて、大倉崎館跡の全体像を述べることとする。

大倉崎館跡は東に千曲川の断崖（千曲川水面からの比高約20m）に接し、西・北・南に「コ」字状に外堀をめぐらす。外堀は千曲川に向かってやや傾斜しており、空堀であったと考えられる。

外堀の規模は西辺が約104m、北辺34m、南辺42mをはかり、幅は約10～12mをはかる雄大なものである。郭内の土塁状の高まりからの深さは、現況で北が約4m、西で約3m、南西隅で5m、南辺で4mを

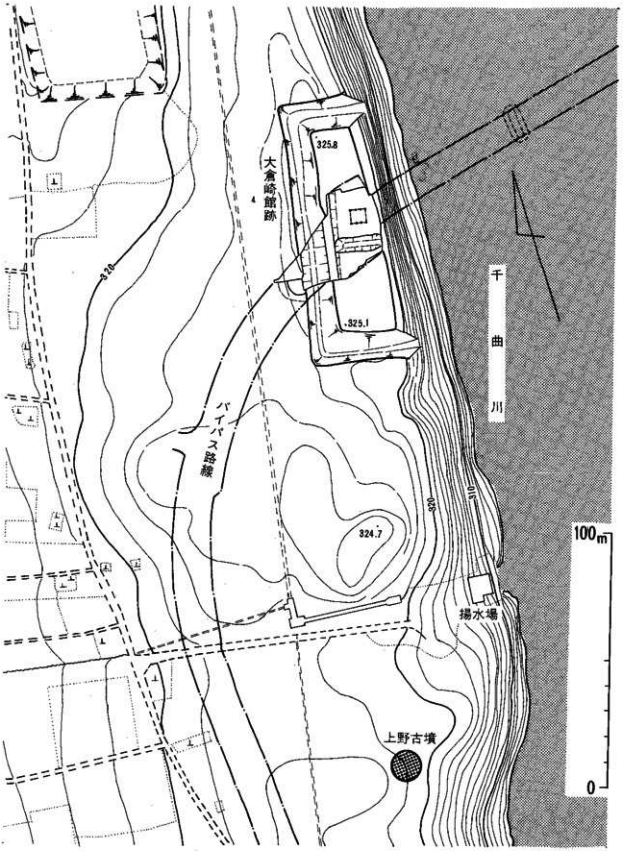


図1　館跡周辺地形図　1:1500

はかる。外堀外端からの深さは、西辺で約１ｍ、南・北辺では1.5～3.0ｍをはかる。なお、発掘の結果、西側では現地表下約２ｍの深さに堀底があった。

また、外堀西辺中央の、郭内へ登る道状の所は、戦時中に松根油をとるためにあけた道である（地主の小出幸一郎氏ご教示）。

外堀に囲まれた郭内は狭く、南北約81ｍ、東西は、南が広く北にゆくに従って狭くなり、南辺で24ｍ、北辺で16ｍである。従って郭内の面積は約1600㎡となる。

郭内の北・西・南辺には幅約５ｍの土塁状の高まりがめぐる。その高さは低く、高い所でも１ｍにみたない。

また、郭内北端は一段高くなっており、その広さは、東西15ｍ、南北10ｍをはかる。金井喜一郎氏は、川を監視する望楼のような施設があった所ではないか、と指摘している（発掘中に金井氏が来跡され指摘された）。

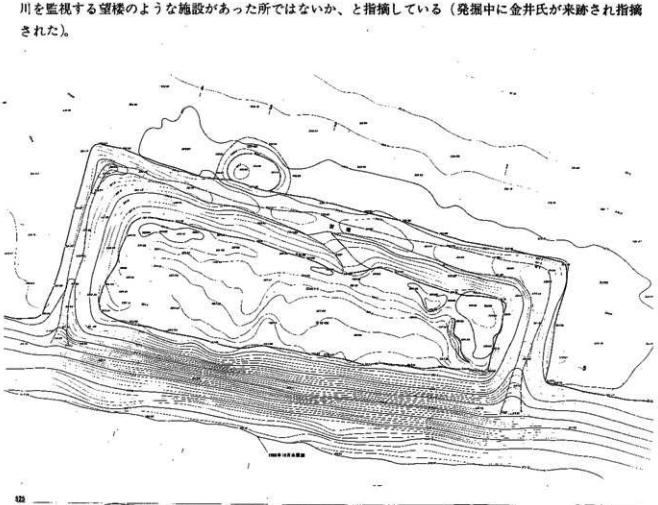


図２　大倉崎館跡現況測量図　　1：800

土塁状の高まりの内側（東側）は、西から東（千曲川側）へ向かってゆるやかに傾斜している。その中央やや南寄りの所には東西に溝状にわずかにへこんだ所があり、発掘の結果、郭内の堀となった。

外堀の外側には、現況では館跡に伴う施設は認められない。外堀西辺の中央に西接する古墳状のマウンドも、発掘の結果古墳とは認められず、また、館跡に伴う施設であるという確証も得られなかった。

以上述べてきたように、大倉崎館跡は、山林ないし植林であったためか、他の水田や畑となっている館跡に比べて、改変されている所はごく少なく、格段に良く原形をとどめている。残念ながら、その中央を117号線バイパスが通り、現状が変更されてしまうが、そのまま保存がなされれば、県内でも有数の残りの良い館跡として貴重な遺跡であったことはまちがいない。

2　調査経過と方法

A　調査経過

大倉崎館跡の調査は、9月28日から11月22日までの約2ヵ月にわたって実施した。当現場は雑木林中であるため、重機による表土はぎをやめ、人手によって腐葉土や木の根等をはがすことから始めた。調査対象地の南側から15～20cmの厚さの表土をはぎとっていったわけだが、2日目から青磁片や釘などが出土しはじめた。

10月1日には、茶臼片・天目茶碗片が発見され、かなりの財力をもっていたものの館跡であることをうかがわせた。本日カワラ版〝上野〟No.1を発行し、地元全戸に配布する。

館跡全体の緻密な地形図を、航写真測図に依頼して作ることにした。10月3日より、その地形測量を開始してもらう。翌4日には、地層観察などを目的に、南側において東西に深さ40～100cmで断ち割ってみた。灰色・黄色・黒色などの土層で盛土の特色を示している。盛土上には遺構が認められなかったが、黄色をベースとした下層遺構が認められた。

排土スペースが狭隘なため、対象地に隣接する地主に交渉して、スペースを確保することも大変だ。堀壁の確認のために、その傾斜等を掘ってみてもらったら、予想外に急勾配で堀底へ落ち込んでいる。手掘りでは限られた日数で調査完了にもっていけないと判断、重機による堀の表土はぎを決め、手配する。

10月5日には、館跡をほぼ南北に2分するように、中央部分に大規模な堀跡が発見される。それを埋めているのが灰褐色土である。

堀のすぐ西側にも古墳状の凸地があって、この表土はぎに続いて、十文字状に断ち割りを試みる。おおっている土は腐葉土が主、その下に黒色土があるが、全体がボコボコで手応えがなく、いまひとつ性格づけについて試論するが明確にならない。このマウンドの中央部は深さ88～110cm、周辺部で深さ23～45cmの南北に長い楕円を呈している。黄色の地山部分で、西側の部分において35cmの段差があったことが特徴ぐらいで、柱状遺構が2ヵ所認められたのみである。遺物も意外に少なく、残りは重機ではぎとることにした。

堀東壁の表土部分の厚さは、頭頂の土塁部ではうすく、中央部で40cm、底部近くでは70cm位になっている。この排土量もかなり多くなり、搬出に苦労した。

10月11日には、はじめて古銭の出土あり。SD01の内堀より北側について精査したところ、珠洲焼の大カメや集石群が出土してきた。翌12日に5mのメッシュ基準杭打ちを開始する。

10月13日は、雨のため現場作業を中止したが、周囲の毛無・万仏・高社・斑尾・鍋倉の山頂に降雪があって、冬が間近かにせまっていることを感じさせる。

翌14日にはＳＤ01の掘り下げを始める。埋土は灰茶褐色土で、古銭や磁器等多数出土している。火炉はＥ３とＦ３よりほぼ固まって出土した。また東端の千曲川に臨む崖面近くからは、スズリと越前の大ガメが出土している。とくに越前の大ガメの出土場所は炭まじりの黒色土が２ｍ程の拡がりと20cm程の厚みがあった。珠洲焼きや磁器類もその中から出土している。

ＳＤ01の北側の精査が進むにつれて、北から南へほぼ等間隔で集石群がみられたこと、炭のまじった黒色土と焼けて表面の変色した石が所々に発見されたことが特色である。集石群からはそれぞれ石臼の破片が出てきている。集石群の石は直径20～30cmのものが多い。

鉄製品については、主にＳＤ01より北側から出土した。10月24日時点で計29点となっている。

10月26日には、Ｂ２区東端において方形土坑から平安黒色椀２個を、完形で重なったかたちで発見している。翌27日にも前日の土坑の北側Ｂ２区で同様の方形土坑から、黒椀２個が出土した。北の方形土坑をＳＫ４、南側をＳＫ３とする。ＳＫ３出土椀に「真」の墨書があった。

10月29日、30日の両日、大荒れの天候（雪、ひょう降り等）の翌日は現場のぬかるるみがひどい。しかし雪の心配もあって作業を続ける。この日以降は冬間近かを思わせる天候が続き、測量等現場作業の足踏み状態になることしばしばあった。仕上げの写真撮影を、と現場の落葉などを除いても、風が一陣吹いただけで、元のもくあみとなってしまうなど何度もあった。

11月22日にようやく現地作業を終了した。

B　調査方法

1）　調査区の設定（図３）

調査区の設定は、道路センター杭№52＋00ポイントを基準として、館跡の方向に合うように主軸線を任意に設定し、５ｍ方眼を組み、東より１・２・３……、北よりＡ・Ｂ・Ｃ……と地区を命名した。

基準レベルは、建設事務所作成の１／1000道路周辺図の絶体高を用いた。

なお、最終的な発掘面積は約1000㎡となった。

2）　調査方法

発掘調査は、館跡の現況が山林であることや、礎石等があった場合を考慮して、重機等を入れず、人力による表土はぎを、郭内南端から始めた。

しかし、当初は郭内盛土と表土および土塁流土との境がよくわからず、館跡遺構面を特定できなかったので、Ｆ・Ｇ地区境界線上に郭内を横断する断ち割りトレンチを設定し、遺構面の検出を行った。その結果、表土下の黒色土層が遺構面であると考えた。

また、Ｆ・Ｅ地区で堀状の落ち込み（ＳＤ01）がみつかり、その掘り下げに時間がかかったことと、人力による表土はぎが、木根を抜き取るのが大変だったことに加え、調査期間も限定されているので、Ｅ地区以東はバックホーを導入し、Ｃ・Ｄ地区の境界ラインに幅約50cmの畔を残して表土はぎを行い、郭内の精査に移った。

外堀については、試掘の結果、予想以上に深く、とても人力では排土処理が困難であると考え、当初からバックホーを導入し、堀底近くまで埋土を除去し、後に人力で精査を行ったため、十分な調査はし得なかった。

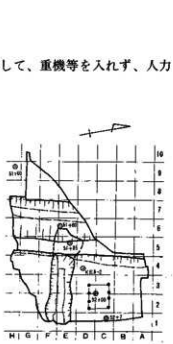


図3　調査区設定図　1:1000

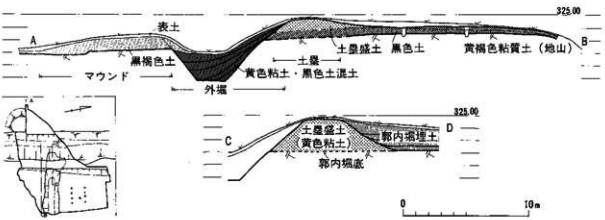


図4　土層模式図　1:300

遺物の取り上げは、基本的には1点ごとに位置およびレベルを計り取り上げたが、状況に応じて地区毎あるいは遺構毎に取り上げた。

写真撮影は適宜、足場（ビティ）等を用いて行ったが、天候が悪かったのと、秋の落葉の季節であったため難渋した。

発掘調査地の測量は、平面図は1／40平版図を作成、必要に応じて各遺構等の実測を行った。

なお、土塁等の断ち割り調査は、発掘調査途中で、館跡の保存問題が提起されたので、現状破壊となるため行わなかった。しかし、計画どおり道路が通ることはやむを得ないこととなったので、調査は来春に行う予定である。

3）層　序（図4）

館跡郭内の基本的な層序は、上から表土（厚15～40cm）、黒色土（厚20～40cm）、黄褐色粘質土（地山）となるが、郭内北東部のA～D―2・3地区では黒色土が10cm未満で、東にゆくに従ってうすくなり、東端部では黒色土はみとめられなかった。これは地山が東から西へ傾斜しているためで、郭内を平担に整地した結果、高い東端部が削平されたためであろう。

黒色土は、弥生・平安時代の土器を含み、その上面が館跡の遺構面である。館造成以前の表土層か。

ただし、D地区以北では黒色土層がうすかったため、遺構検出面は、黄褐色粘質土面となり、平安期の遺構と同一面で検出した。

盛土は、土塁とその東側にみとめられ、主に地山の黄褐色粘質土を積んだものと思われ、地山よりやや色のうすい黄色粘質土である。

堀の埋土・マウンドについては後述する。

3　遺　　跡

発掘調査で検出された遺構・遺物には、館跡に関わる中世のものと、それ以前のものがあり、ここではそれぞれ分けて説明することとする。

A　館跡の遺構

1）　堀

堀には、外堀と、郭内を東西に横断する堀がある。

a）外　堀　（SD02）

西側の一部を発掘した。幅は約10m、深さは土塁上端から約5m、外側（西側）からは約2.5mである。堀の斜面は直線的で底面との交点も鋭い。底面の幅は2.3m。

埋土は、表土が約30～50cmあり、その下は黒色土と黄色粘土との混土が、東から西（内側から外側）へ一気に落し込んだ状態であり、自然に時間をかけて埋まっていた状態ではない。

また、埋土や底面の状況から、常時水を湛えた痕跡は認められない。空堀であったことが知られる。

出土遺物は、重機で掘ったため何とも言えないが、重機での掘り下げを注意深くみていても、多量に土器等を棄てたらしきところはみあたらなかった。

b）郭内の堀（SD01）

郭内を東西に横断する堀は、調査地区内のE・F地区で検出され、外堀に直交する形である。大倉崎館全体の中での位置としては、郭の中央よりやや南にあたり、ほぼ郭を南北に二分する位置となる。

郭内の堀の断面形は二段になっている。上段は下段に比べゆるやかに傾斜し、下段上端との間にテラスがある所もある。下段は逆台形の断面形で、斜面は直線的である。

上段の幅は約6m、下段の幅は約4m、底面の幅2m、深さは、中央より西が一段深く約1.8m、東は1.6mをはかる。

千曲川の断崖に接する東端はやや広がり、土坑状に落ち込み、一段深くなっている。

また、底面および斜面からピットがいくつかみつかっているが、橋状にはまとまらなかった。

埋土（図5）　埋土は3層に分かれる。上層は灰色土で、その下面から石臼・土器・銭貨などの遺物が多く出土した。遺物は火をうけているものが多い。また、上層下面には炭・灰層が厚い所では約10cmにわたりみとめられた。堀の掘下げ当初、この面を底と誤認した。上段下面にも相当する。

中層は、基本的には黄色粘土層であり、黄色粘土層は一気に埋められた感がある。中層両端には暗灰色土層が帯状に入っている。中層は基本的に遺物を含まないが、E—3地区中層下面から、火炉（図12—42）1個体分と、天目花瓶（図12—35）のみが出土している。あたかも堀を埋めるにあたって投棄されたようであった。中層下面も堀底と誤認した。

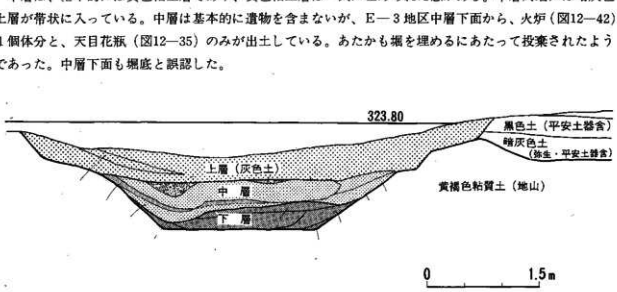


図5　郭内の堀SD01土層図　1:50

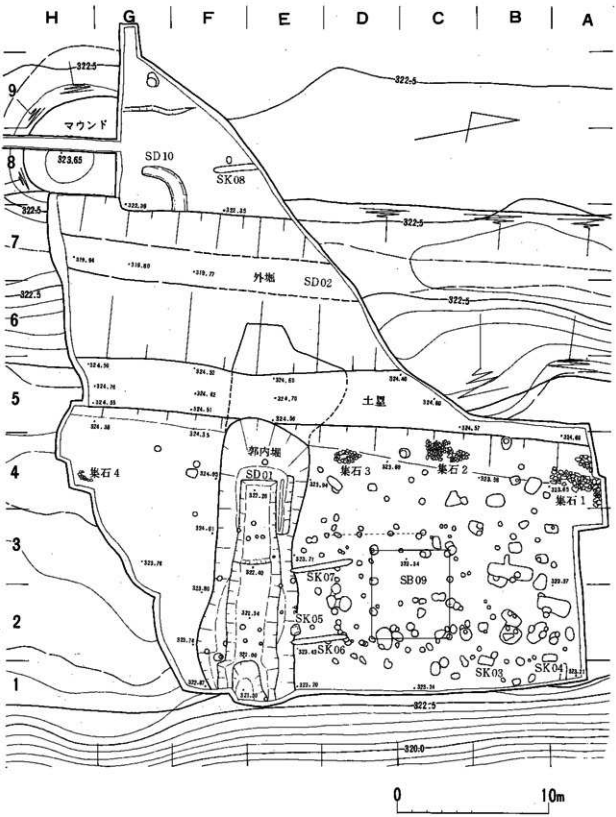


図6　調査地全体図　1:250

下層も、基本的には黄色粘土層であり、一気に埋められた感がある。また下層は、後述する土塁としての盛土と区別がつかなかった。出土遺物はない。したがって、郭内の堀が本来の底をみせて機能していた段階では、堀に物は棄てられず、下層を埋める時にも物は一切棄てられなかったといえる。

以上の埋土の状況を模式的に書くと次のようになる。（図７）。

1　堀が掘られる
2　下層が埋められる
3　下層が埋められた状態が一定期間続く
4　中層が埋められる（火炉が棄てられる）
5　中層が埋められた状態が一定期間続く
6　上層下面に炭や灰とともに物が棄てられ、後自然に上層が埋まる。

なお、郭内の堀東端のやや広がった土坑状の所は、基本的に上層と同一であり、越前系・珠洲系大甕や陶磁器などが、堀の北側から投棄されたような形で、多量に出土している。

土塁と郭内の堀との関係　大倉崎館跡の大きな特徴として、もともと郭内の堀は外堀までつきぬけていたことがあげられる。これは外堀東斜面に、くっきりと郭内の堀の断面形がみとめられていること（図８ PL44）から推定される。また、土塁として郭内の堀の西端が埋められた後も、郭内の堀は機能していたことが埋土から推察される。

このことを段階的に書くと以下のようになる（図９）。

1　郭内の堀が掘られる。このときに外堀が現況のような規模で掘られてあったのかは確かめられない。
2　土塁の一画が、郭内の堀の所で途切れていた段階（郭内の堀の西端が土塁全体の構築時に、同時に埋められたとすれば、郭内の堀の断面の上端は土塁上端までとどかないと思うが、検出されたものはとどいている。
3　郭内の堀の西端が埋められ、土塁となる。郭内の堀の下層が埋められる。しかし、郭内の堀は堀としての機能をはたしている。

なおこのことは、来年度の土塁の調査でよりくわしくわかるであろう。

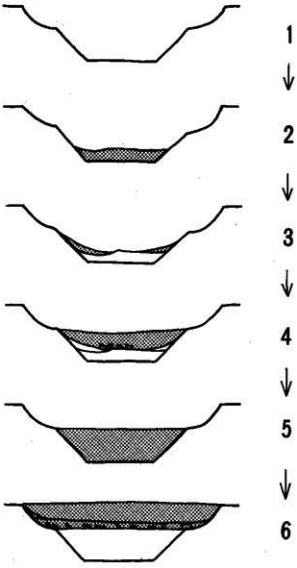


図７　郭内堀ＳＤ01埋土段階想定図

図８　外堀斜面のＳＤ01断面模式図

2） 土　塁

土塁は、調査地で郭内より高さ１ｍ未満であり、いわゆる防禦的な機能をもった土塁としては低すぎる感があり、また、断面形もなだらかなもので、土塁としてよいかどうか迷っている。後世、あるいは館時代に削平された可能性もある。幅は約３～４ｍと広い。

ただし、土塁部分は黄色粘質土の盛土からなっており、構築物であることはまちがいないので、土塁としておいた。

石組みや、土塁上の柵などの施設は検出されていない。

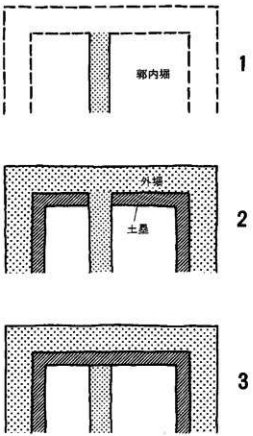


図９　堀と土塁の関係

3） 建　物（図10）

郭内で検出されたのは、掘立て柱の柱穴のみで、礎石はみつからなかった。

柱穴は、平面形が円形に近いものがほとんどで、方形のものはない。直径50cm未満のものが多く、大規模なものはない。しかし深さは、１ｍにもおよぶものがあり、しっかりした柱穴がめだった。

柱穴の数の多さから郭内には、何棟もの建物があったと推察されるが、なんとか建物としてまとめられたのは、ＳＢ09のみで、他は、一列に並ぶ柱列はあるものの、柱間寸法が不ぞろいであったり、平行してある柱列との間が、大きくはなれており、不確定要素が強い。

いずれにせよ、柱穴の規模から考えて、大型の建物があったことは考えにくい。

ＳＢ09は、東西３間×南北１間の、方位を郭にほぼ合せた東西棟の建物で、規模は、東西5.8ｍ、南北5.1ｍで、柱間寸法は、北側が西から2.0・1.6・2.2mで、南側が同2.0・2.0・1.8mとやや不ぞろいである。

4） 集　石

集石は郭内の西端に４ヵ所、土塁の裾に並んで検出された。拳大から人頭大の自然石が乱雑に集められた集石で、中には石臼片も含まれている。また、石の中には火をうけているものがある程度あった。出土層位は土塁上面より上位である。

何らかの理由で数ヵ所に集められたものであろう。

館廃棄後に集められたとすれば、中に礎石に用いられたものが混じっているのかもしれない。

5） マウンド

外堀の西辺中央に接してある、古墳状の高まりのことで、規模は、南北16ｍ、東西10ｍの楕円形で、高さは1.3ｍ。

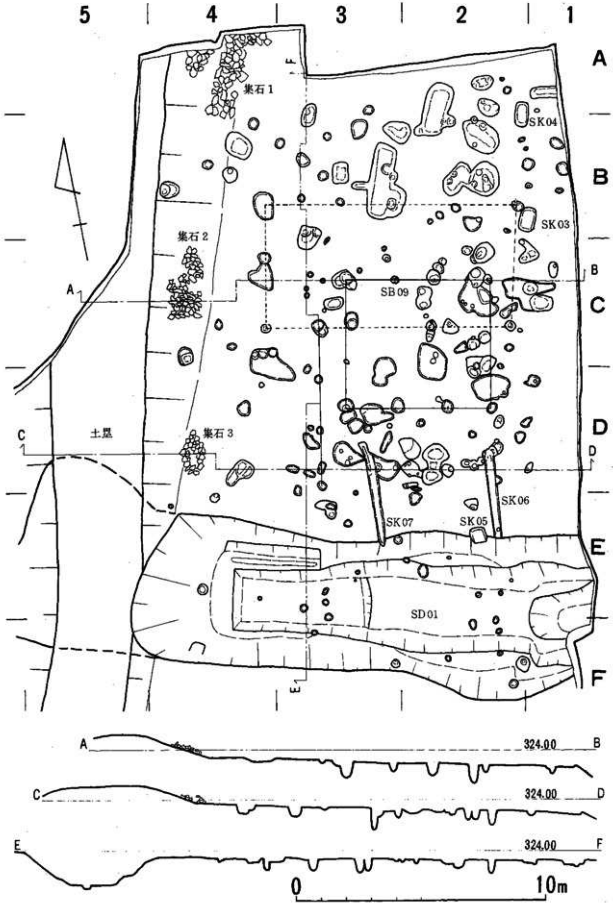


図10 郭内主要部分図 1:150

当初古墳を想定して、表土はぎののち精査を行った。精査時には、少量だが古墳時代の土器も出土したが、古墳墳丘と考えるには、あまりにも土がやわらかすぎるので、十字に断ち割ったところ、約1m下の黄褐色粘質土面（地山）まで、ボクボクとした黒褐色の腐植土であり、主体部等の痕跡はみつからなかった。また、黒褐色腐植土層中より、珠洲焼片が出土したため、古墳の可能性は消えた。

そして、土の様子から、館跡に伴なうものとする積極的な根拠もみとめられない。

B　館跡の遺物

館跡に伴う遺物には、多量の輸入磁器・国産陶器をはじめ、銭貨・鉄製品・銅製品・石臼を始めとする石製品などがある。

なお、食器としての土師器杯・皿類は出土していない。煮沸器の土師器甕は少量あるが小片のため図示していない。

これらの遺物は主として郭内の堀ＳＤ01上層下面から出土しており、それ以外のところからの出土は鉄製品をのぞいて、わずかである。

1）　輸入磁器（図11）

輸入磁器には、白磁と青磁がある。

a）白　磁（図11－1～7・23・26・29）

白磁は皿・八角坏・壺・小壺がある。

皿（1～7）　皿は小型のもので、図示した7点のほかにあと数点ある。二次的な火をうけて、もともとの少し青味がかった透明で光沢のある釉調から、変色して黄色味がかり光沢を失っているものの差があるほかは、すべて同形態・同巧・ほぼ同大である。

口径は10cm前後、器高は3cm前後で、内湾する体部と、小さく削り出した高台とをもつ。口縁端部は「コ」字状におさめる。地の色は灰白色である。

釉は内面全面と、体部外面上方3分の2までかかり、体部外面下半と高台にはかからない。2・5・6には貫入がある。

八角坏（26）　八角坏は1点のみ。口縁端部はするどく稜をなす。釉は白色透明の部分と、やや灰色味がかった部分とがあり、細かい貫入がある。胎色は灰白色。

壺（29）　壺口縁片は、短く外に折りまげた口縁端部をもつもので、1点のみである。四耳壺の口縁部かもしれない。釉は灰色味がかり、火をうけて泡出っている。胎色は灰色。口径12.4cm。

小壺（23）　小壺は、肩部に忍冬文をめぐらすもので、体部は稜をなす。1点のみ。釉は、やや青味がかっており、内面は口縁部をのぞいて釉はかかっていない。胎色は灰白色。

b）青磁（図11－8～22・24・25・27・28　図12－30・31）

青磁には、皿・椀・盤・香炉・壺がある。

皿（8～12）　皿は3種ある。8～10は短く外反する口縁部をもつ厚手の皿で、全部で8個体以上あるが、すべて同形態・同巧・ほぼ同大である。口径約12cm前後、器高3.5cm前後である。釉は淡緑色で、高台も全面に施釉され、底部外面中央にも直径1.5cm前後施釉されている。全面に施釉した後に、高台内側外周の釉をとりのぞいたのか。火をうけて釉が泡出ったものや、くすんだものが多い。細かい貫入のあるものもある。胎色は灰白色。

11は有段の口縁部をもつ薄手のもので、1点のみである。釉は淡青緑色で、胎色は灰白色。口径12.2cm。

12は見込みに沈線による花文を配した無高台の皿で、釉は淡灰緑色。底部外面は無釉。胎色は灰白色で

ある。

碗（13～22）　碗はほぼ全部図示した。

13～18は、口縁端部で外反する形態のもので、稜の立つ高台をもつ。いずれも同巧・ほぼ同大である。口径15cm前後、器高6.5cm前後。釉は灰緑色系で、14はやや褐色味をおび、17は灰緑色と淡白緑色のまんだらである。いずれも貫入がある。高台の畳付より内側には施釉されていない。胎色は灰色である。

19・20は底部片で、稜の立たない高台をもつ。釉は19が灰緑色、20が褐色味がかった緑色で、いずれも貫入がある。施釉は皿8～12に等しく、全面に施釉したのち、高台内側の外周の釉をとりのぞいている。胎色は淡灰色。

21・22は内面に凸線による花文をもつもので、同一個体の可能性が高い。釉は濃いめの灰緑色。胎色は灰色である。

盤（24・25）　口縁部が屈曲する盤で、断面三角形の低い高台がつく。24には体部内面に櫛描きの凹線文を施す。25は全面に火をうけ釉がくすみ不透明のため確認できないが、24と同じく凹線文があったと思われる。釉は24が灰緑色、25がくすんだ淡灰緑色。畳付および、底部外面には施釉されていない。胎色は両者とも淡灰色。24は口径24.8cm、器高5.3cm。25は口径24.2cm、器高6.1cm。いずれも貫入がある。

香炉（27・28）　27・28は同一個体かもしれない。27は内面下端・底部との境に一条の沈線がめぐる。28は受け口をもつもので、蓋の存在が予想される。28には外面に貼り付けの花文がある。釉は淡緑色で、28は火をうけて泡出ち、くすんでいる。胎色は両者とも灰白色。28は口径13.2cm。

壺（30・31）　30・31は同一個体かもしれない。釉はうすい白緑色で、薄く均一にかけられている。31は高台部および底部外面は釉が拭きとられている。

c）輸入磁器の年代

以上の輸入磁器の特色として、白磁小皿と青磁皿・椀において、同形態・同巧・ほぼ同大のものがセットで出土していることがあげられる。そして青磁の皿と椀は、いずれも無文で、厚手であり、体部がふくらみ、口縁部がやや外反するという共通点がみとめられる。また、施釉技法においても、高台内側の釉を中心を残してとりのぞく方法が、青磁の皿と椀にみとめられる。

口縁部の外反する青磁椀は、よく似た類例が長者清水遺跡[註31]で出土しており、14世紀後半～15世紀代に比定されている。

したがって当遺跡の輸入磁器の年代も、先に述べた共通性から、同年代を中心とした年代におかれよう。

白磁皿と八角坏はセットで出土する場合が多く、15世紀前半～16世紀の遺跡出土例が多いとされており、青森県尻八館[註32]では15世紀前半に比定されている。

2）　国産陶器

国産陶器には、瀬戸・美濃系、瓦質火炉、珠洲系、越前系がある。

a）瀬戸・美濃系（図12—32～41）

灰釉および鉄釉のかかった陶器を瀬戸・美濃系としておいた。

32は、灰釉の皿で、火をうけて内面の釉がとんでいる。外面には口縁部付近にしか釉はかかっていない。釉は黄緑色。胎色はやや黄色味をおびた灰白色。口径11.4cm。器高3.0cm。

33は灰釉の皿ないし鉢で、釉は淡灰緑色。内面底部近くにトチン痕がある。胎色は灰白色。

34は鉄釉の皿で、釉は茶褐色。胎色は灰色。

35は鉄釉の花瓶で、円板状の底部が貼り付けられたものである。釉は黒褐色。胎色はやや黄色味をおびた灰白色。底部外面にロクロ糸切り痕が残る。

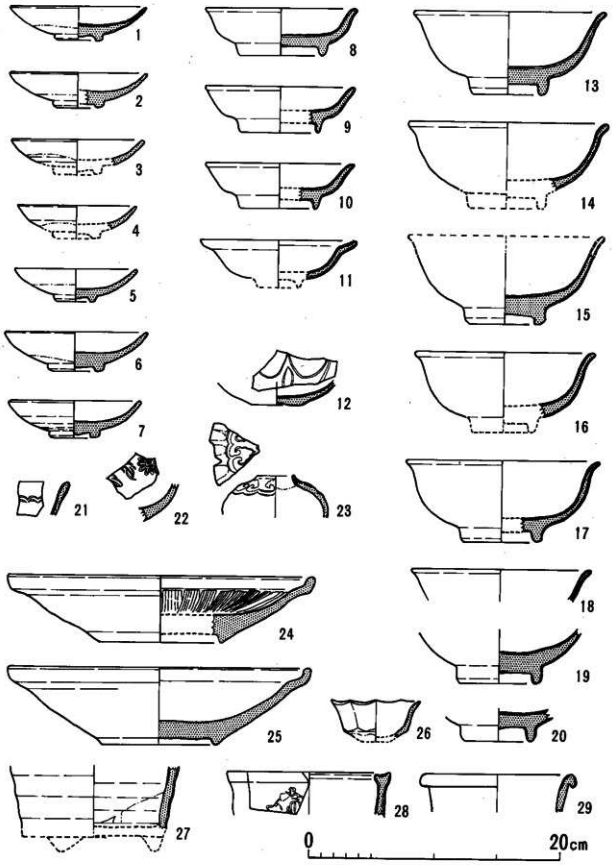


図11　館跡時代の土器 (1)　1：3　白磁 1 ～ 7 ・ 23 ・ 26 ・ 29　青磁 8 ～ 22 ・ 24 ・ 25 ・ 27 ・ 28

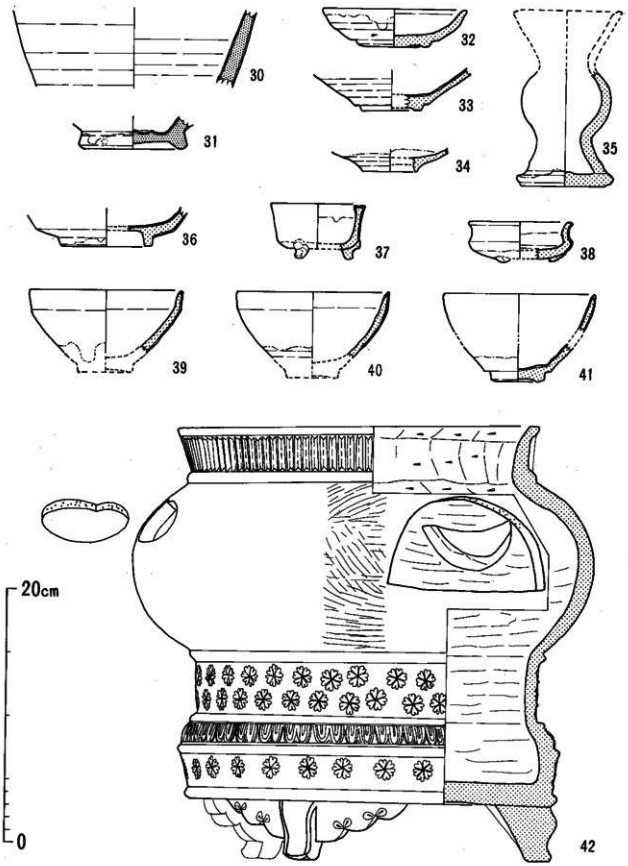


図12　館跡時代の土器 (2)　1：3　青磁30・31　陶器32～41　瓦質土器42

37は灰釉の香炉で、3ヶ所に獣脚をもつ。釉は淡緑色で、火をうけて泡出っている。胎色は淡褐色である。口径7.5cm。器高4.4cm。

36は鉄釉の盤で体部が稜をなす。釉は黒褐色および茶褐色で、胎色は暗灰色。底部内面にトチン痕が残る。

38は鉄釉の香炉で、小さく不恰好な足がつく。釉は黒褐色と茶色のまんだらで、胎色は淡灰色。口径8.3cm。器高3.2cm。

39～41は天目茶椀で、天目茶椀は他に数点ある。いずれも口縁部の稜は、わずかに屈曲する程度のものである。釉は39が茶灰色、40が黒褐色で、41だけは漆黒色とやや変っている。胎色は39・40が淡灰色、41は灰色である。高台は図示してないものを含めて、中央を浅く削りこんだもので、しっかりした断面「コ」字形の高台をもつものはない。口径はいずれも12.2cm。

以上の瀬戸・美濃系陶器の年代は、天目茶椀の形態・技法、香炉・花瓶の形態などから、小長曽・菊畑窯(注3)期を中心とした15世紀代と考えられる。

b）瓦質火炉（図12―42）

瓦質火炉は、ほぼ1個体分がまとまって、郭内の堀SD01中層下面より出土している。茶道に用いる風炉によく似た形で、三個の脚をもつ。

透し穴は、脚間に3ヶ所配され、1ヶ所は半月形で大きく、炭を出し入れした口であろう。他の2ヶ所は小さく、三ヵ月形とハート形である。いずれも上端に煤が付いている。

外面器壁はていねいにヘラミガキされ平滑である。内面は、口縁部がヘラケズリ、以下は粗いナデである。

文様は、口縁部外面に櫛歯文、胴下半に花文と蓮弁文をスタンプしている。蓮弁文は2葉で1単位のものを連続してめぐらす。

底部は作られた当初からと思われるひずみがある。

脚は雲形のものが三足貼り付けられている。雲形には二葉文を配しているが、一足だけ向って左側の二葉文をつけ忘れている。

胎土に砂を含み、色調は灰色。口径28.6cm。器高34.5cm。胴最大径36.6cm。

類例は、ほぼ完形品が青森県尻八館(注4)で出土しており、よく似た口縁部片が新潟県江上館跡(注5)から出土しており、同形の脚が石川県西川島遺跡(注6)で出土している。

c）珠洲系陶器（図13―43～50）

珠洲系陶器はコンテナ約3箱分の破片が出土している。

甕（43～47・49）　いずれも頸部をもたない短く屈曲する口縁部をもつもので、肩があまり張らないものである。肩部はふ厚く、胴部へ向かって薄くなる。44には「V」字のヘラ記号があり、45には「㊗」のスタンプが並んで2個押されている。

以上の甕は形態的には、珠洲編年(注7)Ⅳ期～Ⅴ期（14世紀～15世紀前半）でもⅤ期に近い特徴である。また、ヘラ記号・スタンプはⅣ期から普及し始める。当遺跡例の「㊗」は、「第Ⅳ期壺T・K種に散見するが㊗とともに第Ⅴ期の使用例は知られない(注8)」とされているが、当例は甕である。

擂鉢（48）　珠洲では片口鉢という。底部近くの小片だが、卸し目が間隔をおいて施条される古いタイプではなく、密に施条されるⅣ期以降のものである。

壺（50）　壺は図示した1点のみである。短くほぼ垂直に立ちあがる頸部と、するどく外反する口縁部をもつ。肩はあまり張らない。口径15.2cm。胴径27.6cm。推定器高36cm。珠洲編年Ⅲ期～Ⅳ期（13世紀後葉～14世紀）に比定される。

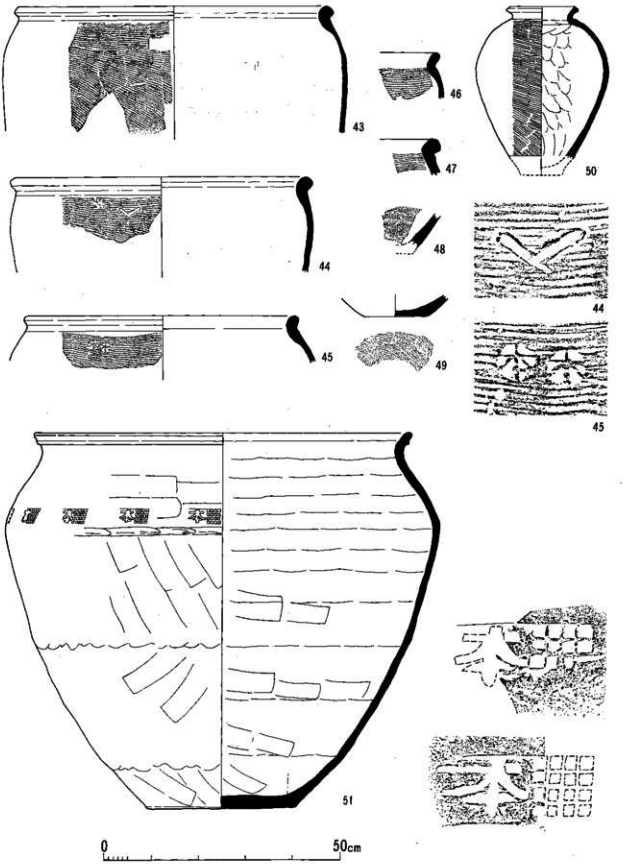


図13　館跡時代の土器 (3)　1：8　拓本は1：2　珠洲系43～50　越前系51

d）越前系陶器（図13—51）

約1／3個体分が、郭内の堀ＳＤ01東端から一括して出土している。口径約80cm、胴径約92cm、器高約80cmに図上復元される大型の甕で、肩部に、粗な井枠に「本」字を組み合わせた押印をめぐらしてある。これはⅣ期（室町中期・15世紀後半）に多い[注9]とされている。

口縁部の形態は、Ｎ字状の折り返しはなくなり、先端が丸みをもち、やや下に肥厚させ、内側に一条の凹線がめぐる。この特徴は、鎌倉後期～室町前期（14世紀後半～15世紀前半）の特徴[注10]である。

器表面の調整は、板状品によるナデが施されているのか。粘土帯積み上げ痕がよく残り、色調は黄灰色～灰褐色を呈し、一部赤褐色の所がある。

3） 銭 貨（表１ＰL56）

銭貨の出土は合計42点にのぼる。このうち判読できたのが15点程あり、その全部が渡来銭である。全般にきわめて保存状態が悪い。炭と緑錆が銭貨に強く付着していたり、腐蝕が進み土壌と同化する寸前のような状態のものもあって、指でとりあげる際に壊れたものもある。連銭になっているもののほとんどは、外部から高熱を受けた独特の色合いを呈し熔変している。熔けて固まった状態で枚数がどのくらいか不明のものもあった。銭貨の出土は郭内の西半分に偏っており、とくに郭内の堀の中から多く検出している。（図14）

4） 鉄製品

a）和釘類（表２図15・16）

出土釘は全部和釘で計74点あった。出土は図14に金属製品出土分布として示す。出土状態は赤サビとともに炭を強固に付着させていたものも少なくないのが特色といえる。

釘については断面が方形を呈すものを次のように分類してみた。

①類　頭部を薄く叩き直角に折り曲げたもので、頭部が「つ」の字状のもの（１～24）。

②類　頭部を薄くせず直角に折り曲げたもの（25～30）。

③類　頭部が三角状あるいは台形を示すもの（43～47・49・50）、頭部が曲げられたものと曲げられないものがある。

④類　頭部が方形のまま上から叩いたもの。

b）その他鉄製品（表３図17）

鎧の一部である小札（こざね）（図17—１・２）に酷似した小片が２点、冑の眉庇（まひさし）（図17—10）に酷似した重量感のある鉄片１点、短刀と思われるものが１点……など、合計12点出土している。これらの釘以外の鉄製品は、場所は郭内の堀の埋土の中から発見された。短刀（図17—９）は郭内の堀の東より（Ｅ２区）から出土した。

5） 銅製品（表４図17）

キセルのガン首と大型の鋲のような形のもの以外、用途不明のものが４点出土した。

キセルは首の曲がり部分が短かく、火皿も現在のに比べ容積がやや大きく、直すぐに上を向いている。

6） 石製品

a）硯（18—１）

Ｆ１区の郭内の堀の中央、グリット杭ぎわに出土した。石質はスレート、自然な形に墨壺を掘っただけ

のもの。14.5×10.5cmの大きさである。墨壺の形が栗形をしている。墨壺の中央部は摺り減っており、かなりの使用痕跡を認める。

b）石臼（図18・19―10～15）

集石群１と２、郭内の堀から出土した。茶臼上・下臼１対のほか大小破片は粉ひき臼とみられる。

茶臼は、臼目が六分画され、目の溝は周縁まで達する。目が周縁まで達するのは中世遺跡出土の茶臼一般にみられる特色とされている。(注11)

c）石鉢（図19―16・17）

２個体出土した。

d）砥石（図18―２～６）

計５個体で、いずれも相当使い込んである断面方形のものが３個と長方形様のものが１個と台形のものが１個、ともに別個体の一部である。

e）軽石（図18―８・９）

２個体出土した。１個は半分程割れている。もう１個は６×５cmの大きさで、人工的に開けた穴（直径５mm）が一つあいている。

f）不明石（図18―７）

幅７cm×厚さ1.5cmで、長方形となるだろうことも想像するが全体は不明。いずれの面も研磨されたようにすべすべしている。割れ口は、キラキラ光る。頭部は１×0.8cmの穴があけてある。一般に滑石製温石とされるが用途は不明。

注１　高橋桂・望月静雄・他　1985　『長者清水・水の沢遺跡』　飯山市教育委員会
注２　大槻康二　1981　「考古学的考察」『尻八館調査報告書』　尻八館調査委員会
注３　橋崎彰一・九厚常雄　1976　『日本陶磁全集』9 瀬戸・美濃　　中央公論社
注４　注２報告に同じ
注５　中条町教育委員会　1977　『江上館跡』
注６　西川島遺跡群発掘調査団　1987　「白山橋遺跡」『西川島―能登における中世村落の発掘調査』　穴水町教育委員会
注７　吉岡康暢　1983　「珠洲系陶器の暦年代基準資料」『北陸の考古学』第26号　石川考古学研究会々誌
　　吉岡康暢　1982　「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』第18号
注８　吉岡康暢　1982　「珠洲系陶器における加飾法の展開と特質」『東洋陶磁』第８号
注９　水野九右衛門　　1981「越前・若狭のやきもの」『日本やきもの集成』(4)北陸　　平凡社
注10　注９ 137ページ田中照久作編年図
注11　三輪茂雄　1978　『白』ものと人の文化史25　　鹿法政大学出版局

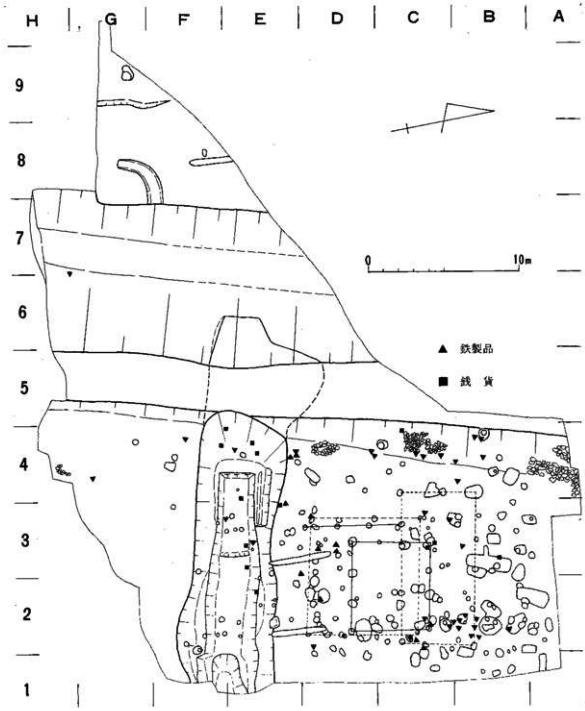


図14　金属製品分布図　1:250

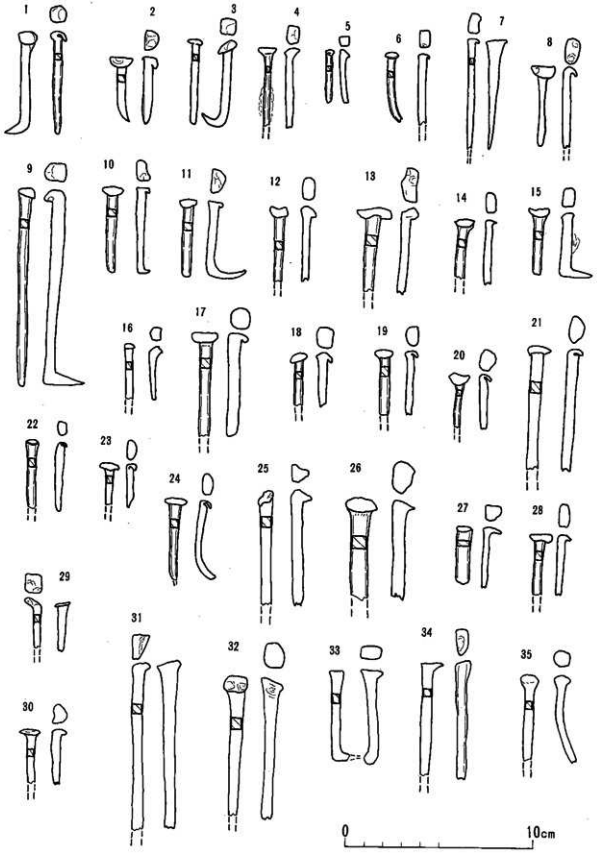

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm

図15 鉄 釘(1) 1:2

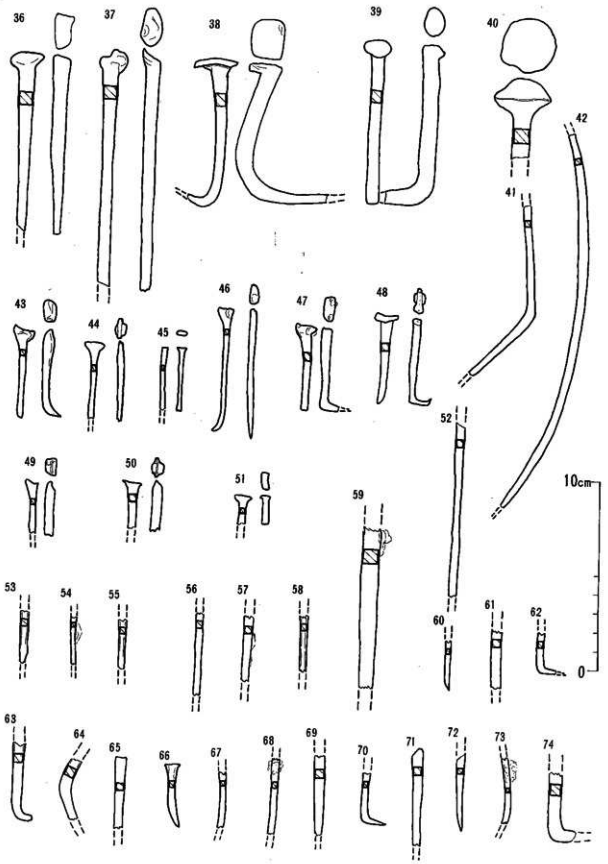
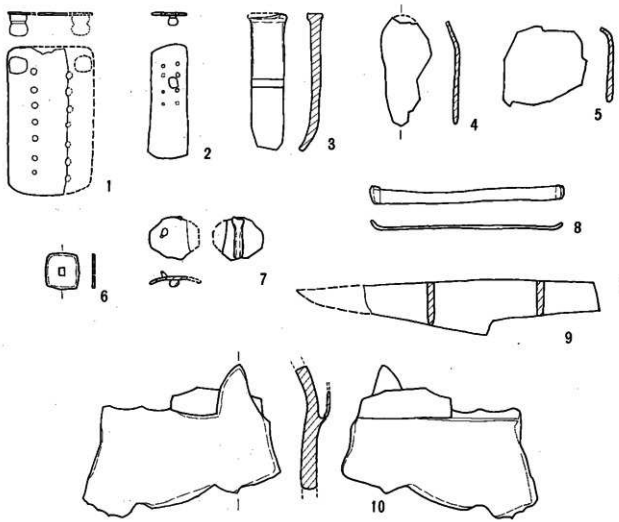

36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
10cm
0

図16 鉄 釘(2) 1:2

鉄製品



銅製品

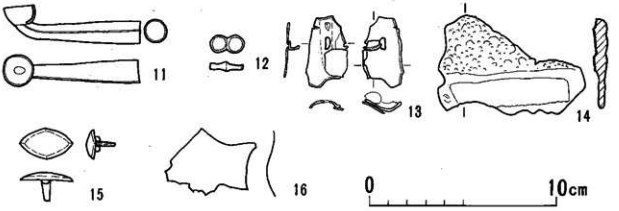


図17　鉄製品・銅製品　1：2

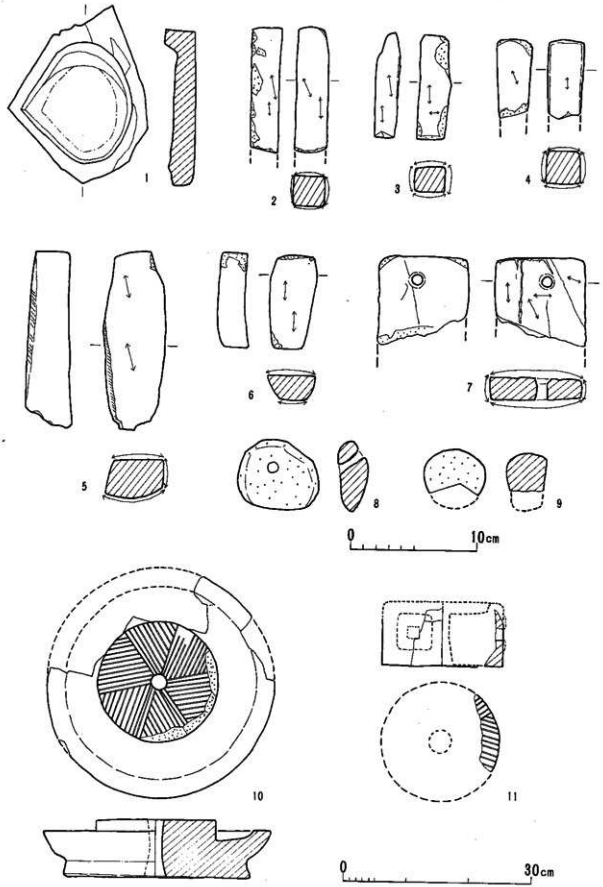


図18　石製品(1)　硯・砥石・軽石1：3　茶臼1：6

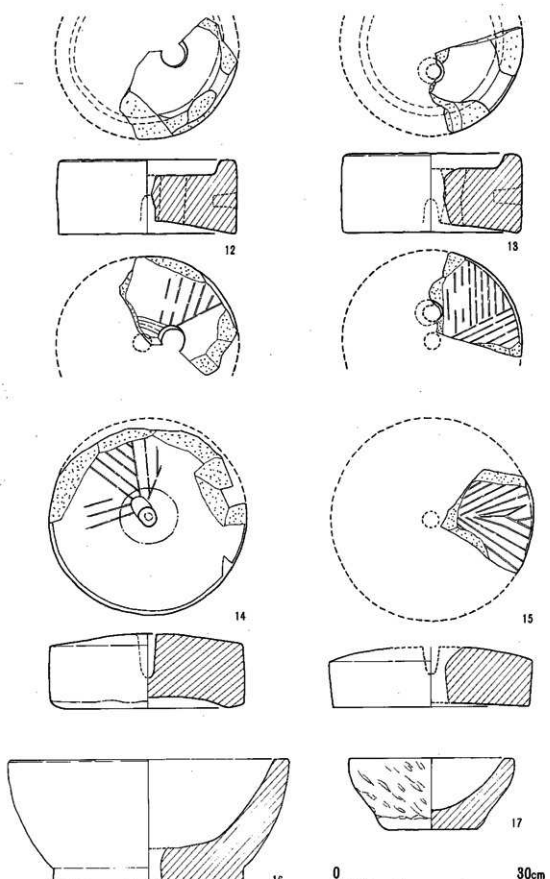


図19　石製品(2)　石臼・石擂鉢1：6

挿図番号	銭　名（書体）	初　鋳　年（西暦）	時　代	直径mm	重さg	出土遺構	備　　考
PL.—1	皇宋通寳（篆）	寳元２年（1039）	北　宋	23		E４	２連
2	至和元寳（篆）	至和元年（1054）	北　宋	25	1.6	SD01畔上層	
3	嘉祐通寳（楷）	嘉祐年間(1056～63)	北　宋	24	2.5	集石群２	腐蝕
4	治平元寳（篆）	治平元年（1064）	北　宋	23	1.9	E３上層	腐蝕
5	元豊通寳（篆）	元豊元年（1078）	北　宋	23	2.0	SD01畔上層	
6	元符通寳（篆）	元符元年（1098）	北　宋	24	2.2	集石群２	周囲腐蝕
7	聖宋元寳（篆）	建中靖国元年(1101)	北　宋	23	2.0	C４	
8	大観通寳（楷）	大観元年（1107）	北　宋	25		集石群３西	２連焼溶
9	洪武通寳（楷）	洪武年間(1368～98)	明	23	2.3	集石群２	完形出土
10	洪武通寳（楷）	〃	〃	23		C３	４連腐蝕
11	洪武通寳（楷）	〃	〃	23	2.3	集石群２東	完形出土
12	洪武通寳（楷）	〃	〃	23	2.5	D２	〃
13	洪武通寳（楷）	〃	〃	23	2.6	SD01畔含炭層	炭サビつく
14	永楽通寳（楷）	永楽６年（1408）	明	24	2.0	E３上層	右下欠落
15	永楽通寳（楷）	〃	〃	25	2.7	SD01畔上層	
16	—				1.2	SD01西端の北	１/２欠
17	—			23	1.6	G３	腐蝕激し
18	—					集石群３	焼溶片
19	—					D４	焼溶
20	—			24	1.5	C４	腐蝕激し
21	—			25	3.5	C４	腐蝕
22	—					集石群２	３連腐蝕
23	—					C３	焼溶変形３連
24	—			25		E３上層	１/５欠落腐蝕
25	—					B３	１/３片
26	—					E４上層	４連腐蝕
27	—					F４上層	４連焼溶変形
28	—					E４上層	２連腐蝕
29	—					F４上層	３連腐蝕
30	—					SD01畔中	１/５片
31	—					E４	焼溶変形
32	—			24		E４	周辺欠落
33	—					E４	１/２・２枚
34	—					SD01畔上層	３連焼溶半欠
35	—					SD01上層	19連焼溶変形
36	—					表土中	18連焼溶変形
37	—					E４	13連焼溶変形
38	—					E４	６連焼溶変形
39	—					E４	６連焼溶変形
40	—					E４	固まり状
41	—					表土中	10連焼溶変形
42	—					E３上層	13連焼溶変形

表1　銭貨一覧表

挿図番号	種　類	材質	長さmm	重さg	出土位置	挿図番号	種　類	材質	長さmm	重さg	出土位置
図15—1	角　釘	鉄	52	4.0	B　4	図16—38	角　釘	鉄	92	37.8	表　土
2	角　釘	鉄	34	3.5	B　4	39	角　釘	鉄	81	20.3	E　2
3	角　釘	鉄	46	3.8	C　2	40	角　釘	鉄	42	23.5	E　2
4	角　釘	鉄	41	4.6	E　2	41	角　釘	鉄	95	4.9	C　3
5	角　釘	鉄	26	1.3	E　2	42	角　釘	鉄	201	23.6	E　2
6	角　釘	鉄	37	2.9	G　4	43	角　釘	鉄	46	4.3	E　4
7	角　釘	鉄	57	4.1	C　2	44	角　釘	鉄	40	2.5	B　4
8	角　釘	鉄	41	3.7	C　2	45	角　釘	鉄	33	1.0	E　2
9	角　釘	鉄	101	10.4	E　1	46	角　釘	鉄	66	3.4	B　2
10	角　釘	鉄	44	3.0	B　4	47	角　釘	鉄	44	4.4	C　4
11	角　釘	鉄	41	3.6	B　4	48	角　釘	鉄	46	2.7	B　2
12	角　釘	鉄	37	3.8	D　4	49	角　釘	鉄	27	1.2	C　2
13	角　釘	鉄	44	5.1	C　4	50	角　釘	鉄	27	2.2	E　2
14	角　釘	鉄	32	2.5	表　土	51	角　釘	鉄	14	0.7	B　2
15	角　釘	鉄	36	3.8	B　3	52	角　釘	鉄	90	8.8	アゼ中
16	角　釘	鉄	28	1.3	D　2	53	角　釘	鉄	26	1.0	B　4
17	角　釘	鉄	52	7.3	D　2	54	角　釘	鉄	25	1.4	C　4
18	角　釘	鉄	29	2.5	E　2	55	角　釘	鉄	25	1.3	E　4
19	角　釘	鉄	34	2.6	SD01	56	角　釘	鉄	47	3.3	G　4
20	角　釘	鉄	27	2.0	D　2	57	角　釘	鉄	35	2.2	C　2
21	角　釘	鉄	65	11.6	B　2	58	角　釘	鉄	31	2.4	E　3
22	角　釘	鉄	34	2.3	E　4	59	角　釘	鉄	90	17.5	E　2
23	角　釘	鉄	22	1.7	D　3	60	角　釘	鉄	25	1.1	E　4
24	角　釘	鉄	42	4.4	H　7	61	角　釘	鉄	31	4.0	D　4
25	角　釘	鉄	59	10.9	B　2	62	角　釘	鉄	20	1.0	C　2
26	角　釘	鉄	53	13.5	C　2	63	角　釘	鉄	39	3.6	B　2
27	角　釘	鉄	30	2.5	E　4	64	角　釘	鉄	31	2.6	SD01
28	角　釘	鉄	31	1.8	B　2	65	角　釘	鉄	36	2.3	E　2
29	角　釘	鉄	29	2.2	C　2	66	角　釘	鉄	33	2.5	E　2
30	角　釘	鉄	27	1.4	B　2	67	角　釘	鉄	27	0.9	D　4
31	角　釘	鉄	88	14.0	C　2	68	角　釘	鉄	38	2.1	C　3
32	角　釘	鉄	71	11.7	C　2	69	角　釘	鉄	41	5.9	B　2
33	角　釘	鉄	49	5.2	E　4	70	角　釘	鉄	27	1.7	B　2
34	角　釘	鉄	60	9.2	F　1	71	角　釘	鉄	50	7.9	B　2
35	角　釘	鉄	45	2.5	D　2	72	角　釘	鉄	40	1.0	D　3
図16—36	角　釘	鉄	93	17.7	B　2	73	角　釘	鉄	34	4.6	B　2
37	角　釘	鉄	125	30.1	表　土	74	角　釘	鉄	37	5.2	F　4

表2　鉄製品—釘類一覧表

挿図番号	種　類	材　質	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	出土位置	備　　考
図17—1	板	鉄	76	33	2	15.1	集石群2	平行2列穴、小札？
—		鉄	52	38	6	66.6	B　4	L　型
5		鉄	54	42	2	19.3	B　2	
4	板	鉄	57	26	2	11.7	B　3	
—	板	鉄	51	20	4	10.7	B　2	先三角にとがる
3	板	鉄	70	19	5	29.5	SD01	先スキーの先のようにそる
9	短　刀	鉄	125	33	4	41.9	E　2	
10	兜？	鉄	105	64	8	148.1	SB01	ひさしの一部？
2	板	鉄	61	20	2	8.4	C　4	平行2列穴、小札？
6		鉄	18	17	1	1.2	E　2	中央に四角な穴
7	板	鉄	22	22	2	3.5	E　2	
8		鉄	101	5	1.5	5.1	F　4	

表3　鉄製品—その他一覧表

挿図番号	種　類	材　質	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	出土位置	備　　考
図17—11	キセル首	真　鍮	71	10	火皿の直径13	9.1	F　5	ガン首の中の胴部の竹残る
14		銅？	80	59	3～5	80.4	A　3	
16	板	銅	45	34	0.7	3.8	E　2	
13		銅	38	22	2	7.3	E　2	小突起・穴
12		銅	18	9	0.5	0.8	SD01	2連リング
15	飾　鋲	銅	27	18	3	2.0	E　1	

表4　銅製品一覧表

C　その他の時代の遺構と遺物

1）　先土器・縄文・弥生・古墳時代

a）遺　構（図20）

南原遺跡で検出している溝状土坑が郭内とマウンド下層から計3基検出されている（SK06～SK08）。館跡外堀によってSK06・07とSK08との間がぬけているが、扇状に並んでいる点は、南原遺跡例に等しい。規模は南原遺跡例より長大で、SK06が長さ約3.8m、SK07が約4.2m、SK08は2.4m分を確認し、調査地外へ続く。出土遺物はない。

b）遺　物（図21 PL61）

先土器・縄文・弥生・古墳時代の遺物は調査地全域より出土し、コンテナ約2箱分あるが、詳細な報告は次年度にゆずり、ここでは概要のみを報告する。

先土器時代は、硬質の頁岩製の剥片がある。

縄文時代は、竹管文および縄文を施す、前期の土器がある。

弥生時代には、縄文とヘラ描文を施した中期後半の壺、頸部に櫛描簾状文をもつ甕などがある。

古墳時代は、二重口縁壺、小壺などがある。

図21は土製勾玉で、長径2.3cm、幅1.0cm。D－1地区出土。弥生か古墳時代と思われる。

2）　平安時代（図20・22）

a）遺　構（図20）

土坑墓と思われる遺構が3基（SK03～SK05）郭内東端で直列して検出された。

いずれも長方形で、長さ約1m、幅0.5m前後の成人用としては小さなものである。土層から木棺痕跡等は確認できなかった。

いずれも1～2個の完形の黒色土器椀が、口を上にして出土している。

b）遺　物（図22）

平安時代の遺物は、黒色土器・土師器・灰釉陶器などが、コンテナ1箱分出土しているが、ここでは土坑墓出土品と灰釉陶器を報告する。なお、図示してないものはいずれも小片で、黒色土器は土拡墓出土例と同じものがほとんどである。

黒色土器（図22－1～5）　1・2がSK03出土。3がSK05出土。4・5がSK06出土。

4・5は、口縁端部が外反し体部が内湾する形態のもので、底部外面にはロクロ糸切り痕がそのまま残る。4は口径13.2cm、器高4.5cm、底径6.0cm。5は口径12.8cm、器高4.5cm、底径5.0cm。いずれも外面に「真」の墨書がある。極めて特徴的な字で、同一人物によって書かれたものと思われる。

3は4・5に比べやや低平になる。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はロクロ糸切りがそのまま残る。口径12.5cm、器高4.0cm、底径5.5cm。

2はさらに低平になり、体部も直線的となる。口縁部に強い横ナデを施す。底部外面にロクロ糸切り痕が残る。口径13.0cm、器高3.6cm、底径5.5cm。

1は体部が直線的になる。底部外面はロクロ糸切り痕が残る。口径12.6cm、器高4.0cm、底径5.2cm。

これらの椀は、4・5（SK04）→3（SK05）→1・2（SK03）の順に並べられる。

これを飯山編年[註1]にあてはめれば、4・5が鍛冶田A2号土坑墓例（10世紀後半～11世紀）にあたり、1・

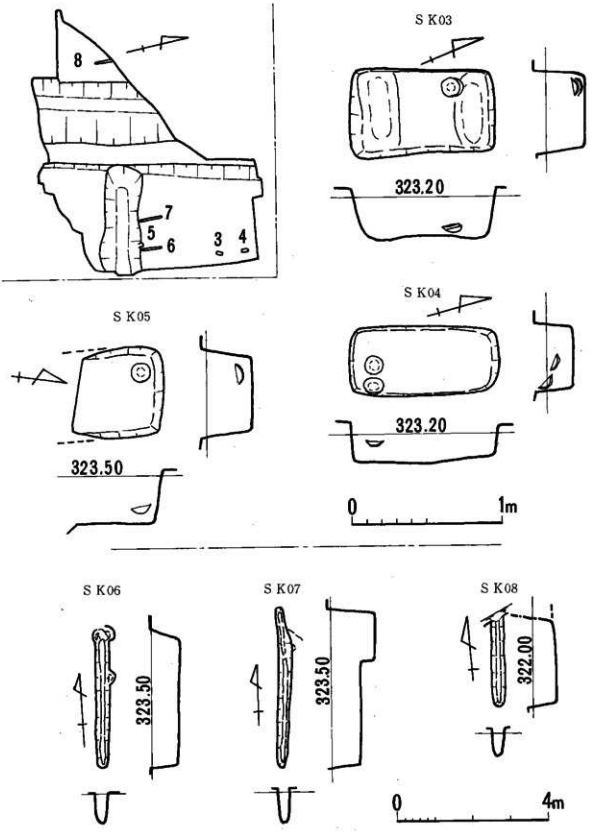


図20　土　坑　SK03～SK05 1:25　SK06～SK08 1:100

2が鍛冶田C2号土坑墓例（11世紀代）にあたり、3はその中間となる。

灰釉陶器（6～12）　6～8は壺で、6は台形の、7は屈曲した高台をもつ。8は口頸部である。

9は椀で、やや厚手である。口径14.8cm。

10～12は皿で、施釉方法は小片のため不明。11は三ヶ月形の低い高台をもち、12は直線的で長い高台をもつ。12がより古いものと思われる。いずれも概ね黒笹90号窯式期（10世紀代）頃のものと思われる。

注1　望月静雄・高橋桂　1985「平安時代の土器編年について」『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡Ⅳ』　飯山市教育委員会

図21　土製勾玉　1：2

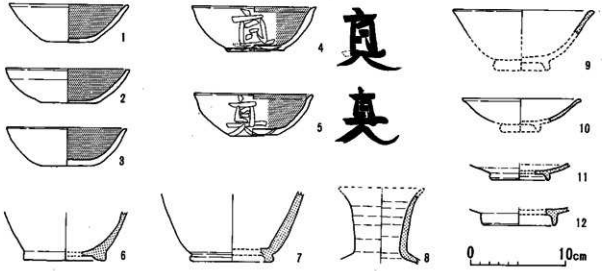


図22　平安時代の土器 1：4　1～5：黒色土器　6～12：灰釉陶器

4 考　察

A　大倉崎館跡の性格と年代

a）性　格

前節で述べてきた大倉崎館跡の出土遺物を機能別にまとめてみると次のようになる。

供膳具　椀：青磁（９）、皿：白磁小皿（７点以上）・青磁皿（10点以上）・瀬戸美濃系（２）、白磁八角小坏（１）、盤：青磁（２）・瀬戸美濃系（２）、壺：白磁四耳壺（１）・青磁（１）

貯蔵具　壺：珠洲系（１）、大甕：珠洲系（６点以上）・越前系（１）

嗜奢品　香炉：青磁（１）・瀬戸美濃系（２）、茶椀：瀬戸美濃系（４点以上）、花瓶：瀬戸美濃系（１）、瓦質火炉（１）、茶臼（２）

調理具　粉挽き臼（６点以上）、擂り鉢：珠洲系（２）・石製（２）、砥石（５）

筆記具　硯（１）

武　具　鎧：小札２片、兜片か（１）、短刀（１）

建築具　釘（74）

その他　銭貨（連銭を１と数えて40以上）、軽石（２）、銅製飾具（２）、他不明品

これらの遺物の組み合わせから、いくつかの特徴が指摘できる。

ひとつは、供膳具は輸入磁器が主体であり、国産陶器は、香炉・茶椀・花瓶などの嗜奢品としてもちいられていることであり、ふたつには、おそらく水甕として用いられたであろう大甕が、いずれも珠洲および越前系という北陸の製品を用いていることである。

また、小札をはじめとする武具の存在は、出土数が少ないながらも、当館跡の性格の一端を表わしている。

しかし、当館跡の出土品の組み合わせから想像される、高級磁器で食事をし、香を焚き、茶を喫し、粉を挽き、花を飾り（仏事か）、字を書くという姿は、当館跡が戦闘的・防禦的性格としての城という側面よりも、高級土豪層の日常的居館としての性格がより強いといえよう。

b）大倉崎館跡の存続年代

遺物の節で検討したそれぞれの年代をまとめると次のようになる。

輸入磁器　14Ｃ後～15Ｃ前半を中心とした15Ｃ代

瀬戸美濃系　15Ｃ代

珠洲系　14Ｃ～15Ｃ前半（15Ｃ前半が中心）

越前系　14Ｃ後半～15Ｃ（15Ｃ前半が中心）

銭　貨　北宋皇宗通宝（初鋳1039年）～明永楽通宝（初鋳1408年）

これらの年代観から、当館跡は、14世紀～15世紀に存続した館跡であるといえよう。時代でいえば鎌倉時代後半～室町時代ということになる。そして、出土遺物の大半が、館廃絶時に一括投棄されたと考えられる、郭内の堀ＳＤ01上層下面から出土していることは、当館跡の廃絶年代が15世紀の中におさまり、戦国期まで降らないといえる。また、ＳＤ01上層下面および、郭内から炭や灰が多量にみつかっており、遺物も火をうけたものが多いので、廃絶の要因は火災であった可能性も考えられる。

この時代は北信濃では、市河・小笠原・高梨・村上などの国人が、領地をめぐって時には反守護の兵をあげ、時には互いにせめぎあっていた時代である。

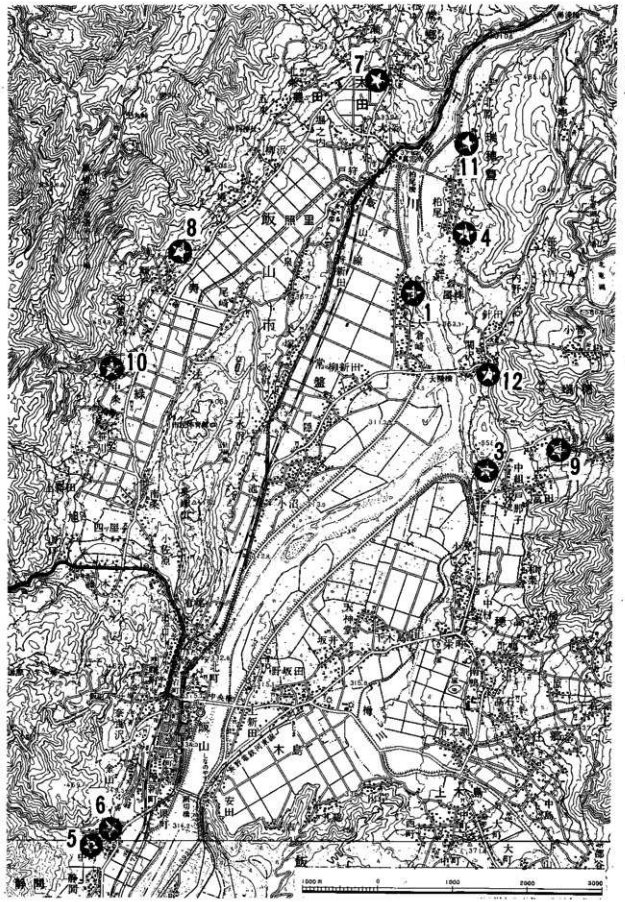
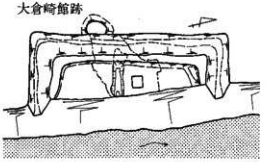


図23　周辺館跡の位置　1:50000（本文引用例のみ、2は図外）

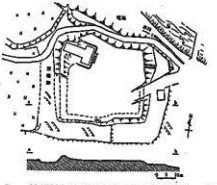
1　大倉崎館跡



2　長者清水遺跡（文献１　第５・７図を合成転載）

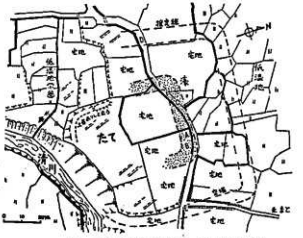
3　大飼城館跡実測図
（文献２　第55図転載）

5　静間神社館址実測図（文献３　第２図転載）

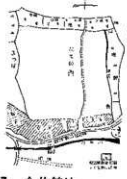


4　柏尾城館跡実測図
（文献２　第63図転載）

6　北畑館址（文献３　第３図転載）

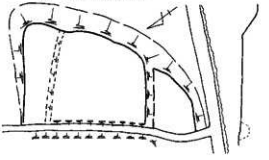


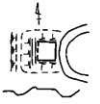
7



7　今井館址
（文献４　P763神図転載）

8　頗戸館跡略図





9　神戸砦略図

図24　周辺館跡実測図　約 1:1000

なお、出土品のなかに煙管の雁首があるが、タバコはポルトガル船による鉄砲伝来（1543年）以降に伝わったものであり、当館跡との関係は一応保留しておく。

また、遺物の年代も十分な検討がなされておらず、一応の年代は示したものの今後の課題として残されている。

B　周辺館跡との比較

発掘終了後、当館跡との比較資料として、市内のいくつかの館跡を踏査略測した。また、すでに測量図が示されている館跡も少なくないので、以下それらと比較しながら大倉崎館跡の構造的な特色をみてみることとする（図23・24参照）。

a）各館跡の概要

大倉崎館跡　あらためて概要を記せば、千曲川の断崖に接し、幅約10m、深さ約５mの堀を「コ」の字形に三方にめぐらし、郭内には土塁をもつ。郭内の堀がある。外堀は南北約 104 m 。北辺34m。南辺42m。郭内は南北約81m、北辺16m、南辺24mで、面積は約1600㎡となる。14～15世紀。

長者清水遺跡（文献１）　岡山地区温井(ぬくい)にある。旧十日町街道に南接し、北から南に延びる低台地南端に位置し、北・東・西に幅約４m、深さ0.8～1.4mの堀を「コ」字形にめぐらす。南側は比高２mの崖をなす。堀および崖で囲まれた部分は、東西約50m、南北約45mで、面積は約2200㎡である。郭内からは一辺1.4×1.8mの掘形をもつ、７間（17.5m）×２間（6.5m）の大形掘立柱建物をはじめとする数棟の建物が検出されている。輸入磁器・珠洲系陶器・鉄器・石臼等が出土し、14・15世紀代と考えられている。

犬飼城館跡（文献２）　瑞穂地区犬飼(いぬかい)に所在する。宮中(みやなか)丘陵南端の独立丘陵が犬飼城館跡である。館跡の北と西は、戸那子(となご)堤防築堤時に土取りをしたと伝えられるが、それ以前にも人為的に切断し、堀としたのかもしれない。

南北49m、東西39mの主郭（本郭）と、それをとりまく帯曲輪・二之郭からなり、全体は東西約90m、南北約 110 m をはかる。主郭は面積約1900㎡で、南端に土塁痕跡がある。全体の面積は約7500㎡となる。

明治34年岡本源内氏が館東黛の水田を開いた際に、埋木・稗実・籾・鉄片・土器片のほか、内耳土器・小皿20枚（素焼）・小柄刀・古硯２面・砥石・古銭（皇宋通宝・天禧通宝）が出土しているが、資料は同家火災のため現存しない。また二之郭井戸中から染付の小皿・湯釜が出土しており、石川謙次氏宅に所蔵されている。

内耳土器は概ね15世紀（室町時代）以降に出土するものであり、また染付小皿は江戸初期に比定されている。(注1)

柏尾城館跡（文献２）　瑞穂地区柏尾(かしお)に所在する館跡で、南から北へ延びる低丘陵北端に位置する。東は谷状地であり、現在は水田および道路となっているが、北・西・南に堀の痕跡がある。堀は幅約10m。郭内は東西約70m、南北約55mで、四方に土塁痕跡が残る。郭内の面積は約3800㎡となる。高梨氏の柏尾南館に比定されている。

静間神社館跡（文献３）　秋津地区中町(なかまち)に所在する館跡で、清川の断崖に南接し（比高差約７m）、南・西・東に幅約７～８mの空堀を「コ」字状にめぐらしていたものと推定されており、館跡東隅の道路壁面で「Ｖ」字形の黒色土の落ち込みが確認されている。

郭内は50m×45mの方形敷地をなし、南・西・東に郭内面より1.5～2.0mの比高をもつ土塁がめぐっていたと推定されている。郭内の面積は約2250㎡となる。

なお、中国産の青磁と思われるものが松沢氏によって採集されている。

北畑館跡（文献３）　秋津地区北畑(きたばた)に所在する。清川の断崖に北接し、北・東・西に二重の堀をめぐらす複濠複郭式構造をとるものと推定されている。

内堀は土層観察から上幅約７～８ｍ、下幅約５ｍ、深さは現地表面から2.3ｍあったとされ、水濠と推定されている。内堀に囲まれた内郭は約40ｍ×50ｍで、面積は約2000㎡となり、西側には土塁が存在したものと推定されている。外堀は、内堀の外約70ｍの所にあり、Ｄ地点およびＥ地点で幅が確認されており、Ｄ地点では約８ｍ、Ｅ地点では約６ｍである。外堀に囲まれた所は約90ｍ四方で、面積は8100㎡となる。

発見遺物として、灰釉陶器片・内耳土器・珠洲系片口鉢・瀬戸系灰釉皿片・五輪塔空風輪各１・伊万里焼の猪口・江戸初期の絵志野皿・白釉稜皿形陶器・石臼等があり、室町時代中頃には内堀が存在し、江戸時代前半には内堀が埋設したものとされている。

今井館跡（文献４）　太田地区今井(いまい)にある館跡で、慶安５年（1652年）の検地帳に「たての内」・「堀下」・「まつば」(的場）等の字がみえることから館跡に推定されている。

現在当地は畑地となっているが踏査したところ、文献４に記載された状況とさほど変っていない。

東を今井川の断崖に接し、南は丘陵端となっており比高約３ｍの段がつく。北には幅約８ｍの一段低い水田があり、堀と推定できる。西は幅約９ｍの水田がテラス状にある。堀があったかどうかは不明。郭内は現況で東西約45ｍ、南北約50ｍで、面積は約2250㎡となる。青磁・硯等を表採している。

頗戸館跡（文献５）　外様地区頗戸(ごおど)集落北方の字「館ノ内」(たてのうち）にある館跡である。図示したのは現在の耕地整理後の略測図であるが、文献５あるいは地元の人によれば、東北および西北に堀があったと言われる。南西は谷状地であり南東は比高約７ｍの崖をなしている。堀の推定地内の面積は現況から判断すると50ｍ四方で2500㎡となる。

その他　図24－９は神戸砦で参考資料として載せた。瑞穂地区神戸(ごうど)と富田(とみだ)の間を西走する尾根中腹にあり、東を道で切られているが、もともと東にも空堀があったらしい。西は土塁と空堀がある。平坦地は10ｍ四方で100㎡である。

また、図23－10～12は、各村史に記載があり実際に踏査したが、現状では堀等の痕跡がわからなかったので略図を省略した所である。今後の調査がまたれる。10は中条館跡で文献５によれば現在の火の見付近にあたり、元禄６年（1693年）の売渡し証に「屋敷たての内」と記されている。11・12は文献２に記されている北原館跡および関沢館跡である。北原館跡は丘陵南端にあたり、関沢館跡は独立丘陵頂部に位置している。

ｂ）大倉崎館跡の特色

市内各館跡に比べてまず第１にあげられるのは、第１節でもふれておいたが、大倉崎館跡は他に比べ極めて保存状態が良いということだ。千曲川に臨む景観良好の当地に現状保存がなされておれば、第一級の史跡としての価値があったことは疑いない。

構造的には、第１に、一方を川ないし丘陵端や谷地などに接し、他の三方を堀で囲む構造は、市内各館跡に共通した構造であり、大倉崎館跡も同様である。

第２には、他の各館跡は概ね正方形の敷地であるが、大倉崎館跡のみは南北に細長く、特異である。この点については、大倉崎館跡はもともとは幅広であったが、千曲川に侵食されて狭くなったとする考え方もある。たしかに居館としては郭内がせまく、郭内の最広所でも24ｍであり、土塁部分をのぞけば、最広所で18ｍ、最狭所では11ｍと狭すぎる感がある。また、堀の大きさや、出土品の豪華さに比べて、検出された柱穴が小さく、大規模な建物が想定できなかったことや、西辺の堀が104ｍで約１町にあたり、１町四方の敷地であった可能性を考えれば、侵食された疑いも十分にある。しかし、郭内の堀ＳＤ01東端に多量の遺物が一括投棄されていたことは、ここを東端として意識していたからかもしれない。いずれにして

も今後、千曲川の侵食速度等を考慮して検討すべき問題である。

第３は、面積の問題である。大倉崎館跡は郭内の面積約1600㎡で、大飼館跡が7500㎡、柏尾館跡が3800㎡、北畑館跡が8100㎡と大きく、他は大概2000～2500㎡であるのに比べてもやはり狭いようである。しかし参考とした神戸砦が100㎡であることを考えれば館跡として決して不都合ではない。この問題も第２の点を考慮すべきであろう。

第４には、他の館跡に比べ、堀の規模が大きいことがあげられる。発掘されたものが少なく何ともいえないが、発掘前でも大倉崎館跡の堀は幅10ｍ以上あり、深さも２～４ｍあり、他の館跡が広くても７～８ｍ幅であることと比べ雄大である。出土遺物にみられた日常的居館としての性格に反し、堀は他館跡に比べ十分に防禦的性格が強い。

以上４点の特色を示したが、中世館跡の調査はまだ緒についたばかりであり、大倉崎館跡も、中央の一部を発掘したにすぎない。今後の調査にまつところが大きい。

注１　名古屋大学教授橋崎彰一・東京五島美術館学芸課長竹内順一・丸子町教育委員会学芸員竹内一徳の各氏に、市教委で1985年に鑑定をお願いしたところ「伊万里色絵輪花皿で、江戸初期の古九谷様式で、従来は古九谷とされてきたタイプであるが、現在古九谷は、伊万里にて生産されたというのが通説で、それに従う」という見解が示されている。

文献１　『長者清水・水の沢遺跡』　1985　飯山市教育委員会

文献２　金井喜久一郎　1980　「中世」『新編瑞穂村誌』

文献３　松沢芳宏　1978　「飯山市静間の二つの館跡」『高井』40号

文献４　江口善次　1954　『太田村史』

文献５　江口善次　1957　『外様村史』

▲地元向け発掘だより（かわら版）

5 結　語

飯山盆地を貫流してきた千曲川が、狭い山間地にさしかかる直前の左岸に南北に細長く存在するのが、大倉崎丘陵である。この丘陵の北端に近い部分に大倉崎館址が構築されている。この館址については、戦国時代末期に竹内源内の居城であったという伝説がある以外に何等の解明の手懸りはない。

発掘の所見によれば、当地方における館址の中でも山林中に存在していたためか破壊の度合はいたって少なく、保存状態はきわめて良好であった。従って出土遺物も豊富でしかも貴重な品々が多く、該館址に居を構えた在地土豪の日常生活の富裕さを示しているといえよう。最近にいたり、飯山地方に今まで不足しがちであった中世の調査が増加してきた。そして、中世の貴重な遺物や遺構が私達の眼前に次第にその姿相をあらわしてきつつある。今まで出土した遺構・遺物は県内においても第一級の折紙をつけられるようなものが多い。今後も中世の調査が行われた場合に今まで以上の良好な遺構・遺物が出土する可能性がきわめて高い。換言すれば、開発が他地方に比較してそのテンポが遅かったためといえよう。同時にまたそれだけに文化財に対する認識の足りなさも指摘し得よう。調査をするたびごとに指摘してきたことであるが、埋蔵文化財は一度破壊されたら二度と私達にはもどってこないのである。調査は、私達に貴重な遺構・遺物を提供しその地方の歴史の解明に役立つことは事実であるが、同時に調査は破壊でもある。従ってやむを得ず調査をする場合には、充分な日数と綿密な計画のもとに行われなければならない。翻って飯山地方の発掘調査についてみれば、必ずしも綿密な計画と充分な日数をかけて行っているとはいいがたいのである。常に工事の日数と追いかけごっこで終了というパターンが多い。このことは、私達の祖先が残した貴重な財産を私達の手で自から葬り去っているといえるだろう。大倉崎館址の調査は当にその例といえるであろう。館址の存在する地点は、すでに触れているように江戸時代から知られていたところである。そして、また飯山市の埋蔵文化財分布図にも明確に示されてもいる。それが事前に打合わされることなく、私達に示されたのはルート決定後で、最早や変更でき得ないという時点に立ちいたってからであった。「考察」で触れているように館址内から出土した遺物は、貴重なものが多くそして館址を取りまく濠の規模も雄壮である。当地方にとっては稀にみる貴重なものである。調査中から何とか保存できないかとの声があがったのも当然といえよう。結果的には、館址をめぐる濠の部分は残されることとなったが、調査した館址内は橋台で完全に破壊ということに決定した。せめて濠だけでも残されたのが救いといえば救いといえようが、景観的には著しく損われることは否定できない。更に今回調査したのは、館址の三分の一位であり、他の残された地域の保存をどう考えるかということも重要である。館址の景観をこれ以上損わないためにも保存に対しては充分な検討を関係機関に強く望みたい。

大倉崎館址について、当地方の中世に精通しておられる金井喜久一郎先生は、瑞穂村誌の中で、高梨氏の渡船場の監視所であろうという見解を示されている。調査中指導に見えられた折にもそのような見解を持たれていたが、その後、濠の規模・構造の素晴らしいこと、出土遺物の豊富な内容等からして単なる監視所としては考えられないとの判断をもたれるにいたられたようである。従って、ここでは南北に細長く変則的な形状をとっているが、一般的な館址としての性格を有するものとしておく方が穏当であろう。

郭内には、東西に一本の濠が存在する。この濠はどのような性格を有するかは、今後の検討課題といえよう。郭内の濠から出土した遺物は、火をうけたものが多く火災によってこの館址は廃絶されたものと考えられている。単なる火災であれば廃絶ということは考えにくい。戦乱による廃絶と考えた方がよいであろう。とすれば、果して15世紀中半頃までにこの地域においてどのような戦乱が展開されたのであろうか。市河文書以外に中世の史料を欠く当地方にあっては、現状では解明の仕様がない。歴史的事象を物語る史

料不足は、中世の真の姿に私達を近付けてくれない。

大倉崎館址は、今日も千曲川を隠んでひっそりとたたずんでいる。対岸の瑞穂地区は野沢菜の栽培地である。春、館址から眺める絨毯を敷きつめたような菜の花畑は素晴らしい。末尾ながら、調査について指導頂いた金井喜久一郎・河内八郎両先生、県文化課小林秀夫・児玉卓文両指導主事、物心両面の援助を賜った市会議員藤沢賢一郎氏、上野区長小出幸一郎氏、大倉崎区長鈴木一氏、常盤分館長岸田正氏、寒暑の中調査に協力された地元作業員の皆さんに衰心より御礼申しあげる。

６３教文第７－１５号
平成元年３月　１日

茨城大学人文学部教授
河内八郎　先生

長野県教育委員会事務局文化課長

飯山市上野城館址の保護について（回　答）

日頃本県の埋蔵文化財保護につきまして御指導いただき誠にありがとうございます。

さて、ご指摘いただきました標記の上野城館址の保護については、建設省、長野県土木部他関係機関、飯山市教育委員会、高橋桂調査団長他調査員諸氏と文化課で数回にわたり協議を行い、下記のとおりの結果となりましたので御報告いたします。

記

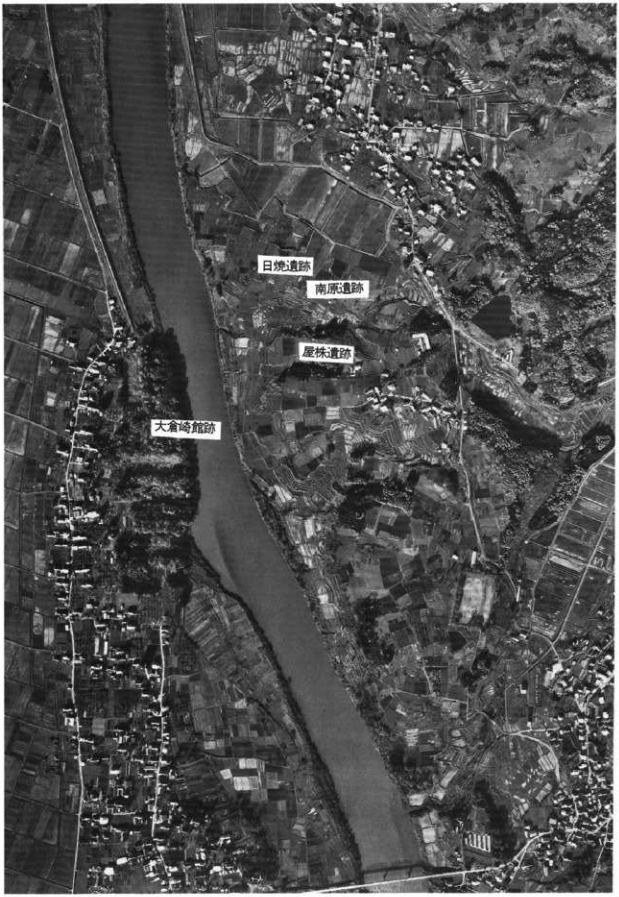
1　建設省が計画している千曲川の護岸工事を変更し現存している城館址の大半を保存する。（計画通り進行すると現存部分の 1/5ほどしか残存しない。）
2　県土木部が計画中の国道１１７号線バイパスの橋台は予定通りの位置とし、矢板等を用い堀削部分を最少限とするよう最大限の努力をする。
3　今回の調査で検出された土塁、堀は道路で削平するが、削平部分は工法を工夫して復元する。工法については、文化課、市教育委員会と協議する。
4　県土木部で再実施し堀削部分を最少限とするようにし、施行業者を含め現地で協議する。
5　城館址の残存部分の保存、公開、説明板の設置等を行う。
6　未調査部分調査の時期、予算については今後協議する。
7　県土木部飯山建設事務所は、今後企画段階から埋蔵文化財の保護について県文化課、市教育委員会と協議する。

尚、調査員諸先生からは、今回の発掘調査で検出された遺構を保存してほしい旨の要望があり、県土木部とも協議しましたが、地質構造の問題・橋脚構造の変更等があり断念せざるを得ませんでした。

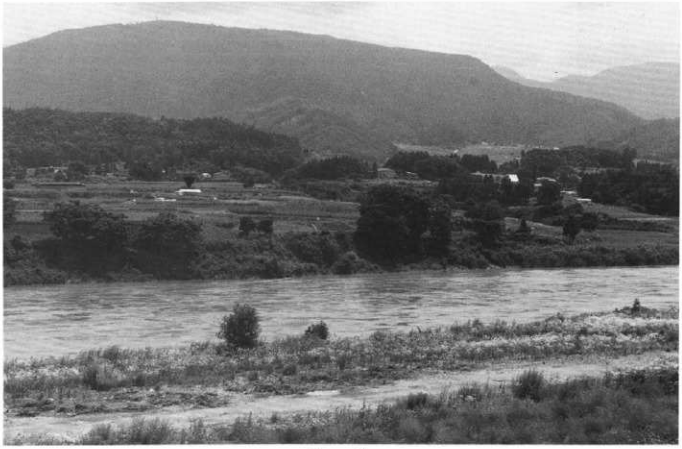
また、今回発掘済みの部分を残す（橋台を外堀側へ移動させる）案につきましては、文化課の判断で城館址全体の景観を保存した方がベターとしました。

以上のようにまとまりましたが、今回の反省を生かし埋蔵文化財の保護に万全の対策をとる所存でありますので、今後御指導よろしくお願い申し上げます。

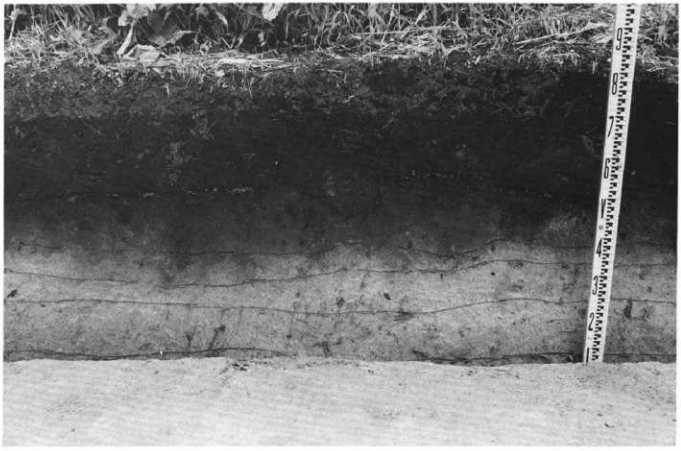
PLATE



遺 跡 群 航 空 写 真



遠　景



層　序

調査区近景（東南より）

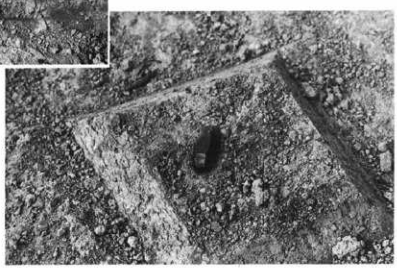
調 査 風 景

調査風景（第5群）

調査風景（第4群）

遺物出土状況（第1群）

打製石斧出土状態（第1群）



掻器出土状態（第1群）

黒曜石原石出土状態（第4群）

播器出土状態（第4群）

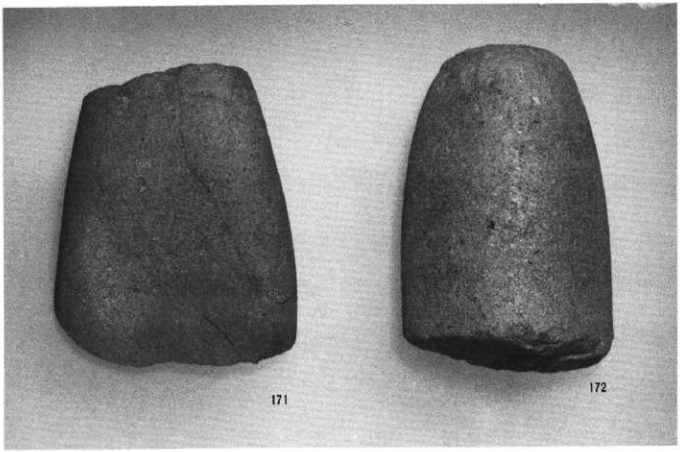
播器出土状態（第4群）

ナイフ形石器出土状態（第6群）

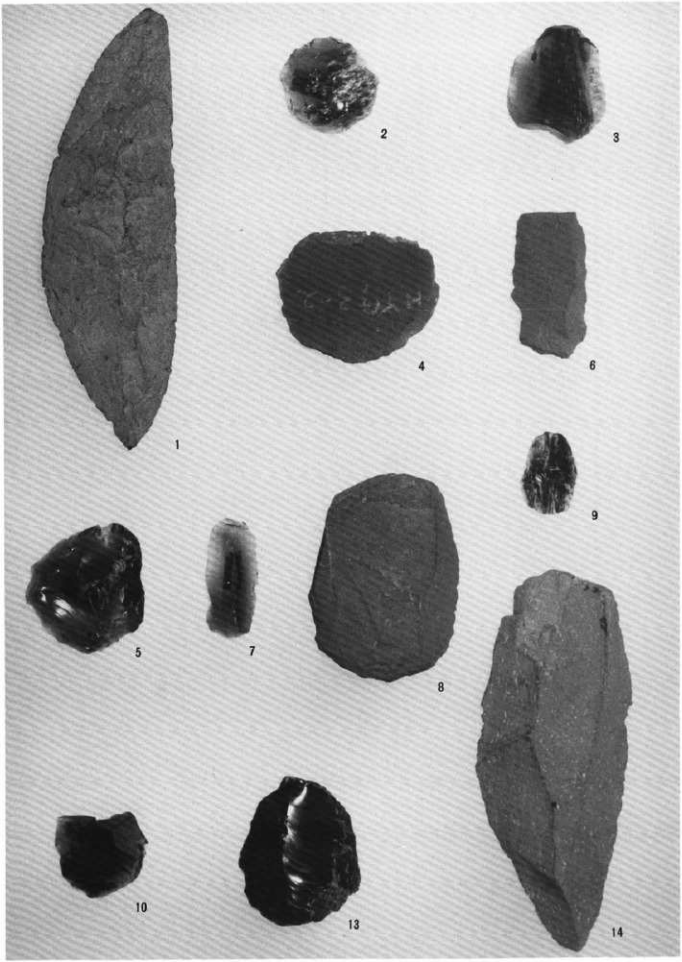
削器出土状態（第6群）

敲石出土状態（第6群）

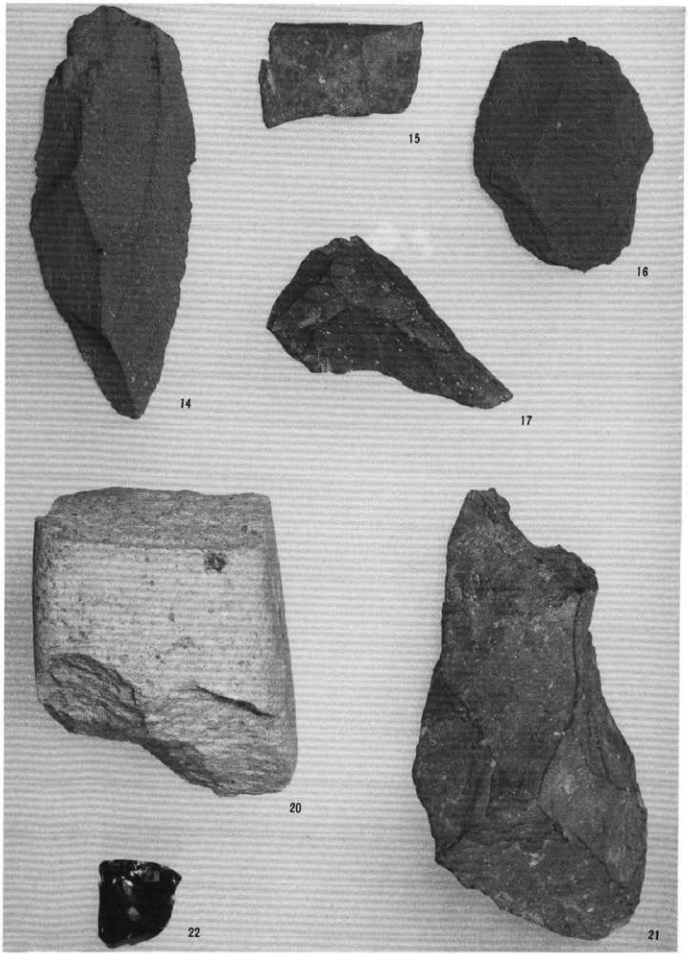
調査に携わった人達



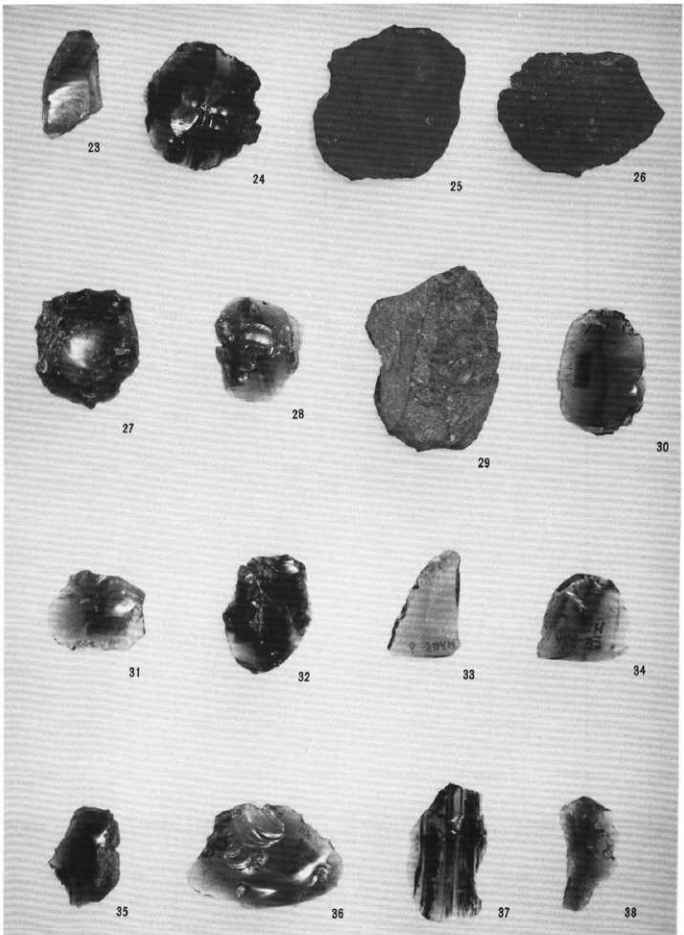
第6群出土　礫器・敲石



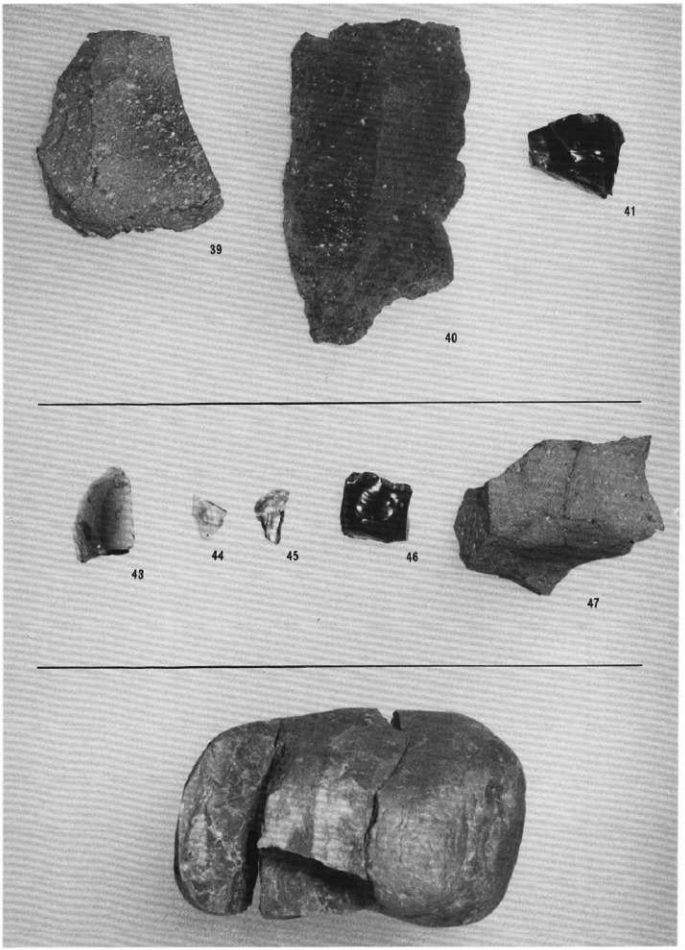
第1群出土石器(1)



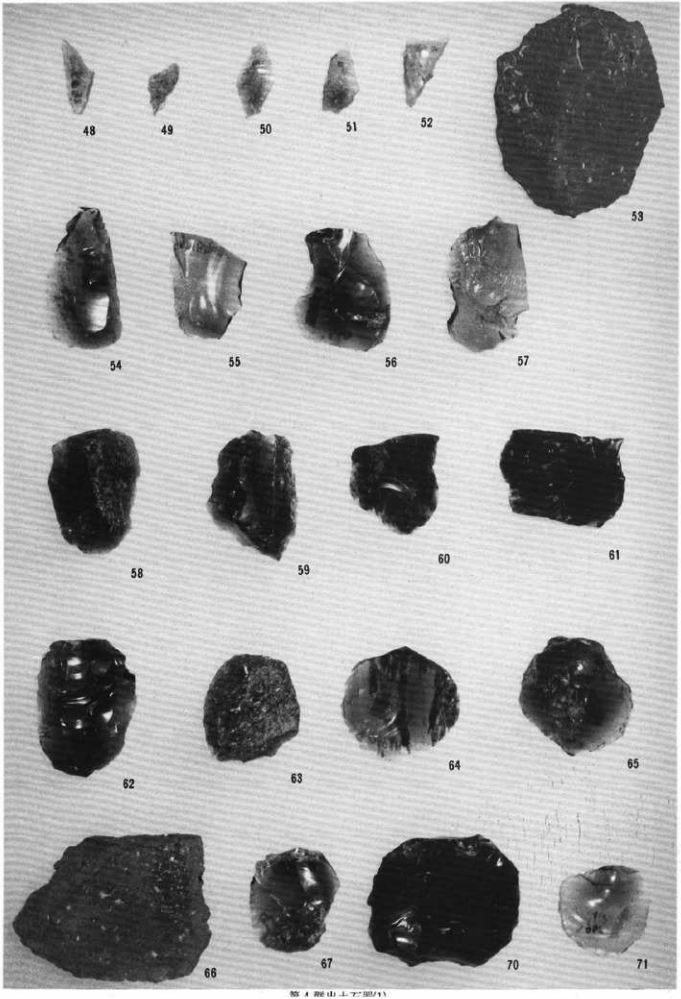
第1群出土石器(2)



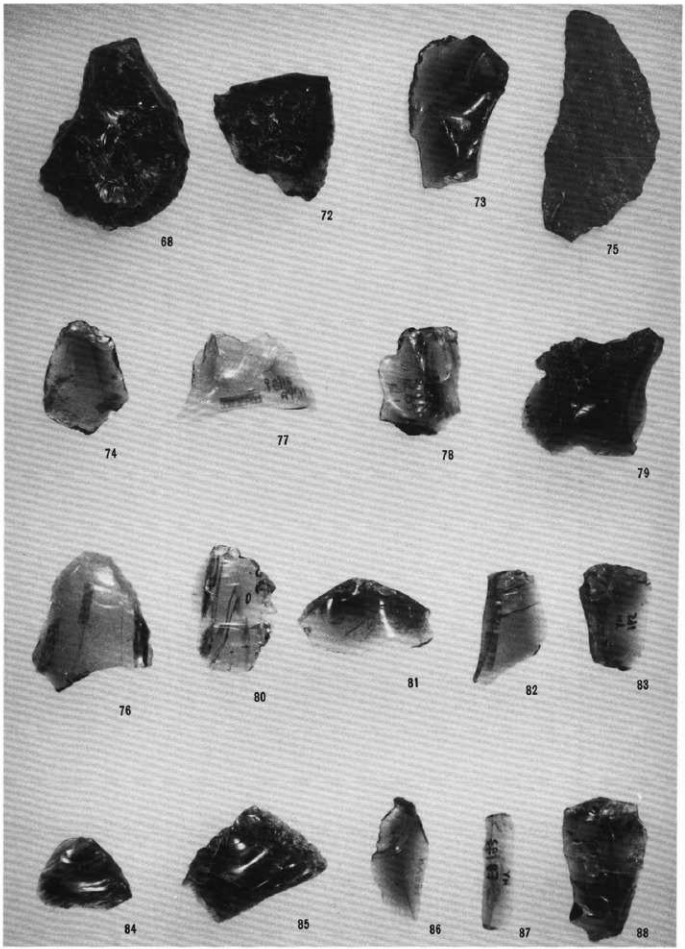
第2群出土石器(1)



第2群出土石器(2)　第3群出土石器　搬入石材接合資料



第4図 出土石器(1)



第4群出土石器(2)